

連載専門誌

対人援助学マガジン



vol. 15 No. 2

第58号

September 2024

対人援助学会

No.58 M O K U J I

目次		002-003
対人援助学会第16回大会のお知らせ	大会企画委員会	004-005
ハチドリの器	見野 大介	006
執筆者@短信	執筆者全員	007-017
付け加えることができる価値は何か？	千葉 晃央	018-023
臨床社会学の方法 (46)	中村 正	024-040
アソブロックに新卒がやって来た	団 遊	041-045
カウンセリングのお作法 (40)	中島 弘美	046-048
晩年D・A・N通信	団 士郎	049-071
幼稚園の現場から (58)	鶴谷 圭一	072-076
福祉系対人援助職養成の現場から (58)	西川 友理	077-083
ああ、相談業務 (18)	河岸 由里子	084-087
きもちはことばを探している	水野 スウ	088-097
路上生活者の個人史 (12)	竹中 尚文	098-099
スポーツおじいさんになりたい! (2)	國友 万裕	100-108
役場の対人援助論 (49)	岡崎 正明	109-112
臨床のきれはし (26)	浅田 英輔	113-114
発達検査と対人援助学 (17)	大谷 多加志	115-117
立場が変わると何かが見える (10)	坂口 伊都	118-123
周辺からの記憶 - 東日本大震災家族応援プロジェクト - (44)	村本 邦子	124-143
精神科医の思うこと (34)	松村 奈奈子	144-146
番外やぶにらみ日記・ニューヨーク編	柳 たかを	147-154
馬渡の眼	馬渡 徳子	155
心理コーディネーターになるために	山下 桂永子	156-158
そうだ、猫に聞いてみよう	小池 英梨子	159-164
先人の知恵から (46)	河岸 由里子	165-171
うたとかたりの対人援助学 (30)	鶴野 祐介	172-175
ああ結婚 (31)	黒田 長宏	176-178
接骨院に心理学を入れてみた (29)	寺田 弘志	179-189
現代社会を『関係性』という観点から考える (29)	三浦 恵子	190-196
保育と社会福祉を漫画で学ぶ (25)	迫 共	197-200
「余地」—相談業務を楽しむ方法— (28)	杉江 太朗	201-203

統合失調症を患う母とともに生きる子ども	松岡 園子	204-206
サイコロジ（6）	川畑 隆	207-211
応援、母ちゃん（18）	玉村 文	212-215
HITOKOMART（17）	篠原ユキオ	216-219
川下の風景（15）	米津 達也	220-221
こころ日記『ぼちぼち』PartⅢ	脇野 千恵	222-224
父が自分の身を呈して教えてくれたこと	高名 祐美	225-227
一語一絵（15）	畑中 美穂	228-230
対人援助をレポートするこの一冊（26）	渡辺 修宏	231-233
新・島根の中山間地から Work as Life（2）	野中 浩一	234-243
ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ！（10）	高木 久美子	244-250
こかげのにちじょう（9）	鳴海 明敏	251-252
私はここにいる -現象学としての書道-（9）	櫻井 育子	253-254
コソダテノシンリ（8）	中谷 陽輔	255-262
教室の窓から	來須 真紀	263-264
ある訪問看護師のアタマの中	山岸 若菜	265-268
人生は対応のバリエーション	宮井 研治	269-272
けふばあちゃんからの手紙	乾 京子	273-275
編集後記	編集長&編集員	276-277
PBLの風と土（30）	山口 洋典	278-283
講演会&ライブな日々（40）	古川 秀明	284-286
対人援助学会研究会のお知らせ		287

■ 対人援助学会 第16回年次大会 京都大会のお知らせ ■

テーマ：「やりがい、生きがいのある対人援助を次代につなぐ」

AJHS 対人援助学会
Japanese Association of Science for Human Services

戦後、対人援助の領域では法制度が整い、専門職資格の創設、国家資格化もされ、長年発達してきました。それが現在、その現場では、人材不足、スタッフの高齢化などが課題となっています。一方で、虐待などの事件をきっかけに、社会からは高いレベルでのヒューマンサービスを求める声はますます大きくなっています。しかし、予算増、人員増の目立った動きはなく、業務過多やバーンアウト等の問題なども継続して話題になっています。そこで、対人援助学会京都大会では、今働く私たちが「これからはたらしたい！」と思える環境を整え、そして次世代に魅力ある領域として訴えるにはどうすればよいのか？について、京都の長い歴史も視野に入れて考えます。継続ができて、やりがいを感じ、その実践がねづくためには、どんな価値や要素や知識が必要でしょうか？変化のための小さな一歩とは何か？について知恵を出し合いたいと思います。住民による支援の創出、利用者の立場を尊重した支援が定着してきた京都で、どんな価値を加え、取り組みがいかにこの土地に根ざしてきたのか？について考え、対話を深めていくことは、私たちの今後の実践にもつながる意義深いことと思われまます。学会がより社会に貢献する契機となるよう、創造的で、未来志向な大会にしたいと願っています。

日 程：2024年11月2日（土）～3日（日）

会 場：京都光華女子大学（京都市右京区西京極葛野町38）阪急京都線西京極駅徒歩7分

【プログラム2日間】（時間・内容は予定であり、変更することがあります）

●11月2日（土）●

- 12:00～12:30 大会受付
- 12:00～18:00 ポスターセッション・ポスター掲示開始

団士郎「木陰の物語」掛け軸漫画展



12:45～14:30 特別記念講演 「対人援助者を生きることとメンタライジング」

1970年に若手医師による開放医療を巡る病院改革。全国に先駆けて開放医療を進めて行った原動力とは何か、今も継続する実践で培われた対人援助のアイデンティティとは？『人が人として生きる』というあたりまえのことを実践するために、幾度となく流された、汗と涙。そして得られたのは、すべての苦勞を吹き飛ばすほどの喜びと笑顔（いわくら病院HPより）といういわくら病院の支援実践の歩みから学びます。



講師：崔炯仁（チェ・ヒョンイン）

いわくら病院院長、日本メンタライゼーション研究会会長

著書「メンタライゼーションでガイドする外傷的育ちの克服 - “心を見わたす心”と“自他境界の感覚”をはぐくむアプローチ -」（星和書店2016）他

14:40～16:20 **理事会企画Ⅰ「多様な学びの創造 一動機づけを生み出す仕掛けを探る」**

発表者：河村昌樹（京都府り溪少年自然の家）、山本昌平（大阪市総合教育センター）、
千葉晃央（京都光華女子大学）、大谷多加志（京都光華女子大学）

子どもたちが自主性をもって参加し、楽しみながら、学び、成長していくプログラムが各地で行われています。子どもを対象にした「忍者体験キャンプ」は30年以上継続しています。そこにある仕掛けは何なのか？どういったメカニズムがあるのでしょうか？そして、中学校でのプロジェクト学習へのe-スポーツの導入など、多様な学びに向けた取り組みを進め、不登校傾向の子どもに対する職業体験機会の確保や複数担任制の実施など、教職員も含めた持続可能な実践が行われています。これらは、本来あるプログラムの楽しみをさらに広げる活動といえます。現場にあるたくさん仕掛けから私たちは学びたいと思います。

16:30～18:00 **【公募企画ワークショップ1】** ※学会員から企画を公募して開催します。お楽しみに！

18:15～ **情報交流会** 参加者が交流し、各地、各所の情報を交換します！



●11月3日（日）●

9:00～15:00 **団士郎「木陰の物語」掛け軸漫画展**

9:00～10:30 **ポスターセッション 質疑応答**

10:40～12:10 **理事会企画Ⅱ 「支援者はいかに精神的健康を回復しているか」**

発表者 吉村拓美（京都府福知山児童相談所）、園 博伸（フリーランス、元滋賀県児童相談所）

対談者 坂口伊都（家族関係支援 相談援助 憩都いと）

対人援助職は、誰でもモチベーションを保つことが難しくなる時がある。対人援助現場では、支援関係の中で得られる「共感満足」など、支援者もエネルギーが得られる「代理レジリエンス」があり、また支援関係の中のジレンマである「共感性疲弊」もつきものです。「僕らの家族支援研究会（BKS）」の「僕らの」には、＜援助者として主体性を取り戻す共同体＞にできたらという希望が込められ、関西圏の児童相談所や近接領域の現場職員の有志が協力し合い研究会活動を安全な対話を重視しながら想いを共有し、活動しています。その実践を通して、援助者の意欲を高め、援助者支援に繋げていく可能性について考えます。

12:10～13:10 昼休憩

13:10～14:40 **【公募企画ワークショップ2】** ※学会員から企画を公募して開催します。

14:50～15:40 全体会（総会）

■参加申込方法■

- 対人援助学会 HP「参加申込フォーム」より、10月24日（木）までにお申込みください。
- 参加費：一般3000円 学会員2000円 学生・院生（社会人院生を除く）500円
- 参加費は2024年10月24日（木）までに、以下振込先へ納付願います。
- 振込先：ゆうちょ銀行 ○九九（ゼロキュウキュウ）店 当座：0311452 名義：対人援助学会

※詳細は<https://www.humanservices.jp/>



ハチドリの器 41

見野 大介

Mino Daisuke



左上：波紋皿、ゴブレット
花三方香物鉢、浅鉢

左下：蒼天釉角皿

右：波紋皿、カップ&ソーサー

第58号

執筆者 @短信

ψ
ψ
ψ
ψ
ψ
ψ
ψ

高名 祐美

毎日暑い。大量の汗をかき、一日の終わりにほぐったりしてしまう。そんな日々の中、元日の地震で珠洲市の自宅が全壊の被害を受けた友人と久しぶりに会った。友人宅では、通水はしたものの、自宅敷地内の水道配管が修復されておらず、いまだにお風呂もトイレも使えない状況だそう。暑い季節に、さぞかし不便だろうと心が痛む。友人は早々に珠洲市を離れ、親族が住む金沢市を生活拠点とした。現在は週3日ほど自宅へもどり、片付けなどしているとのこと。仕事も退職した彼女は、「今、オリンピックをやっているでしょう。4年後オリンピックのときにはどこで何をしたらと夫と話してるの」「これからどうしよう…」としみじみ語ってくれた。どうしているのだろうかずっと気になっていた。ようやく会うことができた時間はあっという間に過ぎた。人と会う。大切なことだ。会いたい人に会う。会って話を聞いていこう、そう思った友人との再会。

父が自分の身を呈して
教えてくれたことⅢ
P225～

水野スウ

真夏月がやっと最終日をむかえた日、ああ、どうにかこの夏を超えられた、と今年は本当にほっとしました。

年々、地球が暑くなり、金沢の隣町に位

置するわが家だって当然、その暑さは増して、8月はほぼ毎朝9時になると「熱中症警戒アラートうんぬん」の役場からのお知らせが聞こえてきた。いつのまにその音に慣れっこになって、私はどこか他人ごと聞いてたんでしょ。実際これまで、大きな窓を開ければ、向かいの雑木林や庭の木々をくぐり抜けたそれなりのいい風がはいてきて、エアコンはないけど扇風機をまわせばなんとかなる、お盆過ぎれば夜風は涼しく、二階の寝室の窓は開けっ放しだとむしろ明け方寒いくらい、っていう夏をずっと過ごしてきたものだから。



ただ今年はそのようにはいかなかった。8月なかば、夜の暑さにやられてだったろうけど、夫婦ともども、たぶん軽い熱中症になりました。二階にこもった暑くて湿った空気の中できもちわるくなって、朝食後、かわりばんこに吐いてしまった。以来、寝る前から寝室で扇風機を回し、空気をかき回しながら眠りにつくようにしたら、それだけのことで眠りの質が全然違ってきた。それまでいかにむわっと暑い空気のなかで浅い眠りを続けてたことか、「浅眠(あさねむ)疲労積立貯金」による胃腸の疲れ、からだの疲れがきつとそんな症状になって出たことだったんでしょ。念のため、二人とも血液検査、夫は腸カメラ、私は胃カメラで診てもらいましたが、異常なし、でした。

金沢は都会だけどうちは田舎だから大丈夫、っていう正常性バイアスの危うさ、夏をなめんじゃねー！って叱られた気分、おおいに反省しました。まだまだ残暑はつづきそう。みなさまもどうぞお気をつけて日々お過ごしくださいね。

今号のマガジン原稿は、愛知県豊田で農家民宿を営む友人、乳がんサバイバーであるけーちゃんこと鈴木桂子さんの、生きることと死ぬことをめぐる死生観のお話の

おすそわけ、誌上アーカイブです。

自身のがんのこと、お父さんの看取りのこと、けーちゃん夫婦のこと、ゴール設定をする生き方がかわってくる、家族との関係性、周りの人との関係性もかわる、などなど、重たくなりがちなテーマも含んでるけど、けーちゃんの話をお聞きしながらみんなでいっぱい笑った、気づきがたくさんのおはなし会でした。多くの人に、けーちゃんこんな話を生で聞いてもらえるといいな、と思いながら今号を書きました。末尾に、けーちゃんの経営する米ぬか発酵温浴に私がはじめてはいった時の体験記のおまけ付きです。

きもちは言葉をさがしている
P88～

馬渡 徳子

8月15日。震災から早や7ヶ月半経過した。石川県では、お盆は7月と8月とで地域によって異なる。7月の金沢地区でも、「今年は金沢らしい賑やかな吊るし飾りを控えた方が多かったよ」と知り合いのご住職から伺った。

7月にご実家の公費解体と同時に「墓じまい」をされ、石川中央地区にある系列のお寺の納骨堂に納めた友人から、夏休み休暇の最終日、帰宅後に電話をいただいた。お墓のあった場所の周辺は、6月3日の地震により更に崩壊したため、やむを得ない選択だったが、先祖代々のお骨を順に抱きしめながら、「2度目の大地震は傍にいないでごめんなさい。故郷を離れることとなり、ごめんなさい。一緒に移住してくださいね。」と声をかけながら、ご親戚でお経を唱えたとのことだった。

友人から、この日までの親戚間での葛藤の経緯と決断を伺ってきたことから、なんと言葉をかけたらいいか、とても見つからなかった。うんうんと頷きながら、電話口で私は涙が止まらなかった。

報道によると、友人のご実家のある地域は、「街ごと集団移転」選択のご意向を自治体に伝えたようだ。だが、そのご意向が現実となるのは、年内はまだ厳しいとの事だった。

就寝前に、団 士郎さんの『語り方』「木陰の物語」をとどけるプロジェクト2020年版」を拝読した。

はて、友人は将来どのように語るのだら

うか。私は、友人として傍らに居たいと思
った。

馬渡の眼 P155

乾 京子

この夏の猛暑の所為？公園の草抜き
作業日。ちょっと坂になっている花壇の上
から下へ、と…どうしたはずみかスッテ
ン！！鼻を擦り剥いて、右腕の肉離れ。
治るのに2週間かかって、治ったと思つた
ら、夏祭りでロープに足をとられて、また、
スッテーン！！今回は、幸い怪我もなく無
事でしたが、こんなことも。「NOTO, NOT
ALONE」のトートバックを愛用しています。
図書館に行くときも買い物にも、リュック型
のカバンを背負って、「NOTO, NOT
ALONE」を左肩に引っ掛けて出かけます。
お玄関までで、忘れ物に気が付いてキ
ッチンへ。「あれ、どこに置いたかなあ？ト
ートバック見なかった？」あちこち探して、
新聞を読んでいた夫に聞くと、「肩に下げ
ているのと違うんか？」…暑さの所為で
はなく、後期高齢者それなりの老化現象
だったのでしょうか？はて？

じゃりんこ文庫 P273~

山岸 若菜

ここのところ人間関係で悩んでいました。
人の気持ちはよくわからないなあと思うこ
とが多く、とても悲しい気持ちになることが
ありました。それであーでもない、こうでも
ないと、相手の気持ちを想像したりしても
みたのですが、結局のところ「わからない」
に落ち着きました。

そしてあまりそこにとらわれて自分がし
んどくなっている今の状況は良くないなあ
と思った時、思い出したのがあの人の言
葉です。

鬼滅の刃煉獄さんの「考えても仕方の
ない事は考えるな」、しびれるわ～

そうやったそやった、相手の気持ちなん
てなんぼ考えてもわからなくて当たり前。
なので考えるのはやめました。

って、止められるか！

考えるのはやめようと思ってても考えてし
まうのは仕方がない。だから時間が経つ
のを待とうと思います。

ある訪問看護師のあたまの中 P265~

宮井 研治

しかし、暑い。世間では、猛暑を通り越
して酷暑と言うらしい。時候の挨拶も、暑
い、暑いを繰り返すので、さらに暑苦しくな
っていけない。たぶん、この執筆者@短信
にも、酷暑を話題にされる執筆者も何人
かおられるだろう。対人援助学マガジンも
暑くなる。いや、熱くなるなら、かまわない
か。このフリは昭和だなと書いてて恥ずか
しくなった。昭和をことさら懐かしがるつも
り、自慢するつもりもないが、昭和生まれ
ど真ん中である。九州の田舎そだちである。
昨今のような酷暑ではなく、あのキリッ
として、カラッとするような礼儀をわきま
えた暑さはどこに行っただろう。暑さの後
には、きちんと夕立がきて、適量の雨をも
たらし、それが「涼」に続くような一連のお
約束はどこに行っちゃったのだろう。「ゲリ
ラ豪雨」や「扇状降水帯」なんて無粋で下
衆なネーミングからは、「涼」はひっくり返
っても湧いてこない。

これを読んで、あの失われし、屹立とし
た夏の入道雲を思い出していただきたく、
昔、少年、少女だった一定年齢以上の方
にご紹介したいのが、はたこうしろう作『な
つのいちにち』という絵本である。たまたま
TSUTAYA でみかけて、孫のためにジャケ
買いした一冊。以前は、孫のヘビロテだっ
たのには、秋野和子 再話/秋野玄左牟
画『とうもろこしおばあさん』にその座を奪
われているのは、じいじとしては、ちょっと
かなしい。でも『とうもろこしおばあさん』を
選ぶあたりは、さすがわが孫なるかな！



人生は対応のヴァリエーション P249~

中谷 陽輔

夏休みとされる時期が終わりながらも、
残暑が厳しすぎる今日この頃。子育てをし
ていると、「子どもたちの夏休み」イコール
「親が休めない夏」です。とにかかにも、
酷暑で夏バテしないよう、心身の調子を整
えることが目下の課題。

…でしたが、我が家はお盆前に見事
に夫婦ともにコロナ陽性となっていました。
幸い、子どもたちには感染しなかったの
ですが、元気の有り余る小1と3歳の子ども
との STAY HOME はなかなかでした。
STAY HOME の間は、テレビと家庭用ビニ
ールプール、あとは普段よりちょっと豪華
な食事(親が手抜きをして外注している
という噂も…)あたりで、何とか、本当に何と
か、乗り切りました(自分に拍手 笑)。コロ
ナが5類になる前は、もっと社会情勢的に
STAY HOME への圧が強かったでしょう
から、当時大変な思いをされた親御さんす
べてに、ホントお疲れさまでした！！と言
いたい気分になっています。

夏の思い出は、ひたすらプール、そして
コロナでしたが、秋はどのような思い出に
浸れるでしょうか。もう少しだけ、心身の負
担が少ないものを願わせてほしいです。

コソダテナンリ P235~

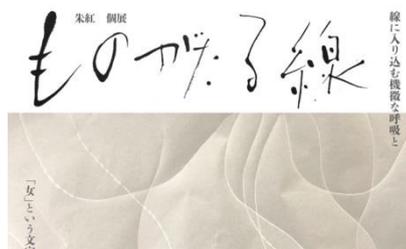
櫻井 育子

これまで「調子に乗れる書道塾」という
場を開きながら、たくさんの方々に、手本
がない、楽しい、これでいい、と「調子に乗
って」いただきました。「調子に乗る」とい
うのはとても素敵なことだし、大事なことで、
無理のない状態で自分が表現できる、非
常に良い言葉だな！と確信しています。

今回、東京と宮城で個展を開催するこ
とになり、文字通り「調子に乗って」いるな
あ、わたし。と感じています。以前であれ

ば、「いや、たまたまですよ」とか「皆さんののおかげですから、すみません、なんか」とちょっと遠慮したり、申し訳なくなったり、のような「過小評価」をしていたような気がします。

ところが、ここ最近では本当に心の底から「ほんとに嬉しくて仕方ありません」と、胸を張って調子に乗っていられるようになりました。わたしが、わたしを対等に扱っていなかったのだ、と思います。人生一度きりなので、やはり調子乗っていた方がいいな、と思っているとこです。



2024
9.10~9.16 AtIya 参宮橋
11:30~16:00
〒151-0053 東京都渋谷区代々木4丁目50-13 1F
9.29~10.6 本多工房
11:00~17:00 (10.5は20:00)
〒985-0003 宮城県塩竈市北浜1丁目40

「なまあそび」とは
だれかから教わっているのではなく、自分で遊びながら身につけていくもの。遊びを通して、自分自身と向き合い、自分自身を表現していく。遊びを通して、自分自身を表現していく。遊びを通して、自分自身を表現していく。

東京 AtIya 参宮橋
なまあそび&対談
9/16(日)
ゲスト 本多工房
宮城 本多工房
なまあそび&
対話型トークセッション
10/5(土)
11:00~16:00

朱紅 (shukou / 櫻井育子)
宮城県在住、書家、美画家、発達コーディネーター。一人の世界が好きな幼稚園中級士(記)研究のための心理学を学ぶ。発達の研究に夢中になり特別支援学校教諭へ。現在は生涯発達支援TANEを立ち上げ、分野横断の学びの場を研究。発達・発達理論・アートを思考で、自分を生きる表現活動へ。なまあそびを全国にひろげる仲間を揃やす旅を続けている。

生涯発達支援塾 TANE

代表 櫻井育子

080-1853-1731

shukou0122@gmail.com

<https://ikuko-sakurai.com>

わたしはここにいる

P233~

鳴海 明敏

県庁職員を定年退職した翌月に新規開設された、情緒障害児短期治療施設(現在は、児童心理治療施設)の園長を引き受けてから、15年目に入っています。

園長室には「こかげ」という名前がつけられています。ということで、サブタイトルは「こかげのにちじょう」とします。紹介す

る子どもたちについては、それなりのカモフラージュを施しています。

*

ねぶたが終わりお盆も過ぎて、来週からは子どもたちは二学期が始まります。夏休み中に家族のもとに帰省出来た子もいれば、出来なかった子もいるのは例年通りですが、こどもたちは、それぞれの現実を静かに受け止めているように思います。

夏休み中に、小学校卒業後の進路(施設の移し替え)を検討するために、措置児相の一時保護所に行っていた小6男児も帰園しました。8月26日月曜日からは2学期の始まりです。

世界情勢や日本の政治はいろいろありますが、学園で生活しているこどもたちが社会人になる頃には、「日本」はどんな状況になっているのでしょうか？

昭和生まれの私は、21世紀になれば、科学技術の進歩とともに生活が便利になり、世界の平和も達成されていると信じていました…

児童心理治療施設の園長室から

~こかげのにちじょう~

P251~

高木 久美子

やったー。投稿の連載が10回に！記念すべきこの節目に、などとうっとりしている場合ではなく、ここのところ投稿が締切日を越えてしまい、団編集長、編集委員の皆様、ご迷惑をおかけしております。本当に申し訳ありません。え、あ、そうなんです、ここのところって、まともに締切前に出したことがあるのか。す、すみません！

でも、とにかく必ず、絶対投稿しますので、11回、12回と塵を積もらせませんので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。当事者の方々の「わたしたちのおもいをかいてくれてありがとう」というお言葉。ご家族やご支援者からも「対人援助マガジンをお勧めしています。遷延性意識障害のことを知ってもらえるといいですね」とコメントに大いに励まされる日々です。やはり微力でも発信を続けていくことの大切さを楽しみ思っています。閉じ込め状態にある方々は何を思い、何を語っておられるのか。一緒に伝えていきます。外国語投稿にも挑戦したいなと思いつつ、思っては躊躇し、あきらめてはまた欲が出る…。その前に

まずは締切日厳守だ。しっかりしろ。

ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ！

P244~

野中 浩一

娘たちが2人も受験の年になった。大学受験と高校受験。

島根の片田舎に住んでいるため、塾に行くにも車で往復1時間、大学を見学に行くにも車で往復6時間。

娘たちを育ててくれた、田んぼや畑や平屋の民家が立ち並ぶ里山の風景から、人々が行き交うビルやコンクリートの繁華街へ移動。

娘10代、経験したことがない中で進路を判断することは難しいだろうと思う反面、私40代、だからこそ見えにくくなっていることもあるだろうとも思う。本人がよければどこでもいいと思う反面、どこでもいいということはないような気持ちになることもある。

あれこれ考えたうえで、結局は運転手程度の介入がいいのかもしれない。

「島根の中山間地から Work as Life」

P234~

畑中 美穂

なんと。庭に何か走り込んできたものがあると思ったらイノシシが。「うそやろ！」—いや、ほんと。

畑があるわけでもなく、木の根元辺りに積み上げた枯れた草を掘って何か探しているの虫の幼虫でも食べているのだろう。犬でもない、もちろん猫でもないケモノ感。それでいて臆病らしいから、うっかり鉢合わせして驚かせでもしたら突進してきて吹っ飛ばされそう。どうやら近所の人たちにも見つかったらどうかな、どうなんだろうな、いずれ捕まるのだろうか。これも何かの縁、またやって来たら、welcome と言わないが名前ぐらいはつけて、家のなかの安全なところから御姿を拝見することしよう。

一語一絵

P228~

渡辺 修宏

夏の暑さにヒイコラしている。夏ってもっと、生命の息吹きを感じる季節だったです

よね？青々とした草木をみて、雲を見て、海をみて、空をみて、「ああ、生きている、たくさんの生命がみえる」と感じるシーズンだった気がする。しかし今は、ゲリラ豪雨とか地震とかで怖さのほうをより大きく感じる。否、怖さを知って、命の尊さを感じたい。

対人援助実践をレポートする この一冊 P231～

米津 達也

ただただ書き連ねて 15 回目となった。毎回、何を書こうかと考え、時に言葉を捻り出しながら紡いでいる。敢えてそういう機会を作らなければ言葉は生まれぬ。情報も言葉も手元の端末で一瞬にして消費される。何を書くのか、と同時に、何を書かないのか。自問自答しながら紡ぐこれからの生き方を模索している。

川下の風景 P220～

玉村 文

災害級の猛暑が続いている 2024 年夏。0 才児を連れて上の子達の保育園の送り迎えをするだけで汗びっしょり。赤ちゃんもぐったり。上の子たちも外遊びができないため、室内で身体を使って遊べる場所を求めて、毎週末どこに行こうかと頭を悩ませています。娘は「滑り台がしたい」と言うのですが、鉄板は火傷するくらい暑くて暑くて…この夏はパリオリンピックを観て、娘はプールに通い始めました。長男も体操に興味を持っていますが、習い事として行けるかどうかは準備が必要そう。そう、習い事で発散してもらえないかと。「お母さん、ヒマー！」と言われて「公園でも行っておいでー」と返事ができる日はくるのでしょうか。

応援 母ちゃん！ P212～

川畑 隆

二度目のファイナルです。次号からどうするかは未定ですが、お世話になりました。この短信ではどこそこへ行って来たということばかり書いてきましたが、またそれで

冬に一泊して「次は春に来たい」と家族で言っていたところに、ゴールデンウィークにまた行ってきました。『神戸しあわせの村』です。昔から知っているところだったのですが、混んでるだろうと決めつけて敬遠…ところが意外に簡単に予約がとれました。

宇治の自宅からクルマで 1 時間ちょっと、「しあわせの村」という高速の出口があります。本館のグループルームという 4 ベットの部屋はホテルのようです。窓から見える芝生広場が「春にまた来たい」と思った理由。ちょうどフリーマーケットもやっていて、日焼けするぐらいに孫娘と遊びました。温泉大浴場は広くてきれいだし、屋内プールは 30 度以上の水温で過ごしやすい。朝食バイキングは豪華ではないけどいい感じです。夕食はどうしたかという、しあわせの村から JR 神戸まで路線バスに乗り、ハーバーランドの海鮮居酒屋へ。そしてモザイクから夜景を眺め、バスに乗って帰りました。

来年の春にもまた行こうかな。予約はまだちょっと早いかな…？

サイコロジー P207～

杉江 太郎

児童家庭福祉領域で働く杉江と言いますが、4 月に新しい支店がオープンしたのですが、オープンしてすぐの頃は、「どこにあるの？」とか、「連絡先は？」と聞かれることが多く、昔の〇〇の建物を改装したから、〇〇と検索したら出てくるよ～みたいな説明をしていました。いずれ新しい名称でも検索出来るようになるだろうと思っていたのですが、中々出来るようにならず、Google を見ていると、自分で登録できることに気づき、実際にやってみるともの数分で出来てしまい、すぐに検索出来るようになりました。世界的企業の Google の検索結果を、個人の指先で行えることに驚いたのと、登録してしばらく経った頃には、「1 万人の方が検索されました」というような連絡が Google 様から届き、さらに驚きました。私の一手が 1 万人の方の検索結果に影響を与えたのです。おそらく、関係者ばかりで、自分の検索回数も含まれていると思いますが、個人の力が集結する

と、Google のように巨大な情報を集約することに、社会システムの大きさと、その一員であることを感じました。

「余地」相談業務を楽しむ方法 P201～

浅田 英輔

コームインなので、今年からまた新しい部署に異動となっています。新しい関係機関の皆様とやりとりしていますが、「話しやすい人でよかった」と言われております。わかるうー！のですが、どんな要素なんだろうと考えたりする。ある程度本音で話すことが大事なんじゃないかなと思ってます。ちゃんと本音を言ったあとで、「でも県職員としては、ここはちょっと難しいんです」というと大体わかってもらえる。当然、その後の改善策はセットになるけど。本当に思っていることを、少し人に話すっていうのはコミュニケーションとして大事だよなあと思ったりします。もうちょっと建前を学ばないと！



臨床のきれはし P113～

三浦 恵子

平素利用している電車が駅を目前にして急ブレーキで停車した。人身事故によるものだというアナウンスと車内にトレインチャンネルによる周知がしばらく続き、私を含めた乗客がしばらく列車内で待機することになった。多くの乗客の方が、自身の目的地までの振り替えルートを検索されるなどしているなか、先頭車両部分のみのドアが開き、振替輸送のアナウンスが流れると同時に、どっと乗客の方々の動きが始まった。

ただ、ホームに降りてから改札までのルートが一部停滞していた。駆けつけた消防隊員の方々が、事故に遭われた方を担

架に乗せてホーム上に引き上げる場面を、スマートフォンで撮影されている乗客の方が複数名おられたためだった。その方々の年齢層は様々で、写真だけではなく動画なども撮っておられるようだった。

思い出せば、令和に入ってからすぐの頃、都内ターミナル駅での人身事故発生時、御遺体を覆うシートの中にスマートフォンを差入れて撮影する行為があり、駅員の方が「お客様のモラルに問います」という「異例」のアナウンスがなされたということをお出しした。

私が遭遇した事故に関しては原因などは報道されていない。ただ、こうした人身事故がいわゆる「飛び込み」等の自死であった場合、「最期ぐらい他人に迷惑をかけるな」といった辛辣なコメントがインターネット上で散見される。そして今回のように、必死で救護にあたる方々もおられ、少なからず混乱している現場で、人の死に関わる場面を自身のスマートフォンに収めることに必死になっている方が複数おられることについて、非常に複雑な思いを抱いたのだった。

更生保護官署職員

(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)

現代社会を『関係性』という

観点から考える

P190～

迫 共

卓球の早田ひな選手の発言などでも話題になっている映画、「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。」を見ました。現代の女子高生、百合がタイムスリップして特攻の兵士に出会って恋愛するという、SF 戦争ものみみたいな作品です。

百合は「日本は負けるんだよ」と憲兵にたて付き、逃げようとする特攻兵を責める仲間に「生き恥なんていうことはない、生きたいという人を責める権利は誰にもない」といいます。

ラスト直前まで芝居じみた設定だったので「演劇としてはアリなのか」と見ていました。そのラストでは現代に戻ってきた百合が、特攻博物館で自分に宛てられた特攻兵の手紙を見つけて号泣する場面があります。

ここで日常と非日常が交錯するため、「え？ この手紙は実在するの？」と思わ

せられてしまいました。私たちの日常と世の中が地続きな世界観で作られた作品を「セカイ系」と呼びますが(新海誠監督作品など)、この映画もまた「セカイ系」的な心情を喚起させる構造をもつ、その意味で危険な映画ではないかと考えました。

「権利」を主張する若者に「特攻で散った人たちがいるから、今の平和な日本があるんだ。みんな平和を願って死んでいったんだ…」と思わせる(百合と観客の心情を一致させる)ための芝居じみた設定だったのではないかと。



暑すぎた今年の 8 月、死者の軍事利用にも、死者の平和利用にも反対だと改めて感じた映画でした。

追メアド: sakotomoya@gmail.com

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

P197～

黒田 長宏

これを書いている時点では日本ハムファイターズ清宮幸太郎選手がようやく打ち始めてきたところ。これが載る頃はわからない。推しの清宮の父親が同い年だとは。人生は人によって違うもんだなあ。私はひたすら高齢者結婚難問題を訴え続けているだけだ。(パリオリンピック最中に記す)

<https://konnankyuujojtai.jimdofree.com/>

ああ結婚

P176～

松村 奈奈子

先日「システム・クラッシャー」というドイツの映画を見ました。8歳の主人公ベニーを演じる女の子の演技が見事でした。「システム・クラッシャー」というのは、養護施設や里親さんのところで、不適応を繰り返して、転々とする「子ども」の隠語だそうです。

いやー、日本ではそんな隠語は存在しないと思うのですが、攻撃的になったり、集団生活でトラブルを繰り返して、養護施

設や里親さんを転々として児相職員を悩ませる子ども達、もちろんいます。ドイツはどうやって対応してるのかな？と興味津々でしたが「んー、そうくるか」というオチでした。一緒にみていた旦那は「いかにもドイツらしい」と笑ってました。

確かに、ベニーのように母親や妹弟がいるのに、トラブルをきっかけに、その子ども独りだけ施設に入所となった時、「システム・クラッシャー」になってしまうケース多いよなあと思いました。

精神科医の思うこと

P144～

団 遊

高校時代の仲間のひとりが、50 歳にして上海転勤を命じられ、お別れ会を開催した。「子どもたちの学費の目処が立っていたら断ってた。わっはっは」と照れ隠していたが、50 歳での初海外転勤は、ちょっと羨ましい。

私の人生には、転勤がない。転属もない。大学を出てすぐからフリーランス。20代半ばで起業したので、誰かに雇われた経験がない。自分で自分を配置・転換するのだから当たり前なのだが、青天の霹靂的人事というものに、ちょっと憧れたりもする。

「団くん、来月からキミはフランス支社の社長として海を渡り、EU 全体を見てくれ」と言われたら、たぶん興奮する。

「団くん、来月からキミは南極の昭和基地にシェフとして渡り、調査員たちの食事をつつてくれ」と言われたら、早速大量のレシピ本を買いに行くとする。

お金を出せば、フランスに行くことも南極に行くこともできるが、決定的な違いは「どうなっても知～らんビ」「俺のせいじゃないもんね」「命じたのはそっちだもんね」と思えるかどうか。

責任感がないわけではなく、ゆるいリードを付けてもらった状態で「好きにやってこい！」と言われる感じは、ちょっと羨ましい。

団遊の脱線的経営言論

P 41～

村本 邦子

最近、災害予報がかしましい。南海トラ

フ警戒での自肅の次は、進路予測不能な過去最大級の台風である。ちょうど東北のプロジェクトと重なり、メンバーたちと事前打ち合わせで、情報をチェックしつつ、状況に合わせて工夫しながらできることをする、できないと判断したらあっさりあきらめるといふ基本原則と、状況を報告する連絡経路を確認した。だから、メンバーに混乱はなかったと思う。そして、今、予定通りプロジェクトを実施中である。まだ台風の行方はわからないところがあるが、世の中はちょっと騒ぎすぎなのではないか。人間は自然の一部である、災害とともに生きている。百パーセントの安全はない。過去に学び、自分の想定を拡げつつ、それぞれの判断でその都度決断していくしかないのである。まだ来ない未来の不安に振り回され過ぎず、今この時を大切に生きたいものだ。

周辺からの記憶

一東日本大震災家族応援プロジェクト—
P124~

國友 万裕



著書『インセル時代の男たち』が出てから1ヶ月以上がたちました。

その間、ある大学で小さな講演もやらせてもらいました。講演はそれなりに成功で、「新しい視点を与えてもらった」と言ってくれる人が多かったです。

とはいうものの、こういう反応が返ってくると僕は複雑な気持ちになるのです。僕はもう子供の頃からこの問題に囚われているのに、世間の男性たちは、こう言う問題について考えたことすらないから、「新鮮」と感じるわけで、「俺はマイノリティなのだ」と言う思いを新たにするのでした。

これからどうやって本を売っていくのか。

まだ今のところ、取材の依頼はありません。結構値段も高いですし、売るとなったら大変でしょう。

別に金儲けをしたいと思っていないわけではないです。ただ、少しでも僕のこれまでのトラウマを理解してくれる人を増やしたいんです。それだけが切なる思いです。

スポーツおじいさんになりたい！
P100~

西川 友理

大阪キリスト教短期大学で保育者養成をしています。それから、いくつかの養成校・養成施設で、社会福祉士の養成にも携わらせていただいています。

今回は「先生」について書きました。

気が付けば私も、いろんな所で「先生」と呼ばれる仕事をしてきました。

一時期私は、本当に「西川先生」といわれるのが苦痛でした。「先生」という言葉が出たことで、周囲の人が「先生」という対応をしてくることに、居心地悪さを感じていました。そしてそれは、学生に対してもそうでした。大したこと出来てないのに、我ながら先生って何やねん……とっていました。何かたまたまうまくいって「さすが先生」と言われると、先生だから出来たわけじゃないよ、とモヤっとしましたし、「先生なんですよ、もうちょっとしっかりして」と言われるとぐっとのどが詰まりました。

その時期に、あるユースワーカーの人からぼろっといわれた言葉があります。「どこまで行っても、どんな距離感でも、養成校というところにいるかぎり、学生にとって西川さんは“先生”なんだよ。その立場をまず受け止めていこう。それから、どうするか、ですよ。」

重く重く重く受け止めました。そうか、それはそうだよな。学生にとってみれば、どこまで行っても「先生」だ。学生から見たら、「最終的に学生に評価を下す人」だ。それはそれとしてどうするか、か。なるほど。

最近では、いい意味でどう呼ばれてもどうでもよくなってきました。何と呼ばれようが、私は私のやりたいことと

すべきことを、やりたいようにするだけなんだと思うと、誰に何と呼ばれようがやっと気にならなくなってきたように感じています。……単に年を取って鈍くなっただけ

かもしれませんかね。

福祉系対人援助職養成の
現場から
P77~

竹中 尚文

今年の七・八月はどうしようもなく暑い日々が続く。七月末にあるホームレスの方から連絡が入り、仲間がバタバタ倒れて搬送されていくと。この酷暑の中を、冷房のない所で過ごすのはきびしいものだ。同日、ある新聞社の方から電話があった。大阪のホームレスの様子を聞かせて欲しいと。伝聞であるが状況を話した。この暑さへの何か対策の活動をしないのですか？と尋ねられた。私たちが活動をするのを記事にしたいようだった。報道機関が直接、ホームレスに取材に行き、現況を伝えることを提案してみた。大都会の中で、どこかで一時的にも涼に触れることができる場所があると思う。そうしたときに、ホームレスだからといって排除しないほしい。そうした社会認知を得るには報道機関の力は大きい。◆1983年のパキスタンのペシャワールの町は騒然としていた。1979年のクリスマスにソ連軍がアフガニスタンに侵攻して戦争が始まった。ペシャワールの峠の向こうは戦場だった。町は戦場から逃れた難民であふれ、ソ連軍に対抗する各ゲリラ組織がこの町に集中してその兵士たちも闊歩していた。町で外国人が宿泊するホテルは1軒だった。宿泊者はジャーナリストと国連の関係者ばかりで、世界のマスメディアにこの町のこのホテルから発信されていることに驚いた。この時、特に日本の報道機関の社員には誰一人いなかった。すべてフリーランスのジャーナリストだった。そのわけを尋ねると、もっぱら戦場で大きな報道機関の社員が死亡すると問題になると聞かされた。誰かがその責任を問われることになるという。正社員が戦争の取材をしたのはベトナム戦争までのことだそう。そうか、現場からは伝えないのかと思った。◆災害の様子を伝えるテレビ画面で、罹災者は誰もヘルメットをかぶっていないけれど、マイクを持つ人だけがヘルメットをかぶっている光景を思い出した。

路上生活者の個人史
P98~

坂口 伊都

生まれて初めて「人間ドック」に行ってきました。ここ2年程、採血した後に肩こりがひどくなり、吐いてしまうことが続いたので、ゆったりとできる場所で採血をしようと思ったのがきっかけです。後、健康診断を受けると、必ず再検査が出てくる年齢になったので。

鼻からの胃カメラも初体験。「鼻から麻酔を入れますね」と流れてきた麻酔の不味さに驚きました。そして、喉が機能しなくなることの不快感。看護師さんに背中をさすられ「上手にできていますよ」と宥められ、チューブを引き抜きたい衝動に打ち勝ち、検査は終わりました。私の魂は抜け落ち、何を言われても右から左へ流れていきました。

支払いを終え、噂のご褒美ランチへ。とても美味しそうなのですが、食べられない。お腹も痛くなってきた。悔しいので、メインだけ意地で食べて家路へ。吐き気が増してきて、家のソファで寝ると少しマシになりました。食べ物をつまむと、またムカムカ。2回寝たらさすがに回復しているだろうとシャーベットを食べたら、ついにトイレで嘔吐。採血が午前中で吐いたのが19時。胃がひっくり返るかと思うほど、悲惨でした。

私は声を大にして言いたい、健康診断で体調が悪くなるなんて本末転倒ではないか！



これから私はどうしたらいいのでしょうか。健康診断拒否する方法あるかなあ。受診するにも、どこへ行けばいいの？どなたか私に助言をください〜。

立場が変わると何が見える

P118~

河岸 由里子

【巷の小話】

日々いろいろな方と話をしていると、ちょっとした面白い話、困った話が聞かれる。

そんな話を二つほど。

- ① ある母子家庭のお母さんの話：公衆浴場や旅館等の共同浴場の男女分けで、厚生労働省は「概ね7歳以上の男女は混浴させない」と今までの12歳以上から年齢制限を引き下げた。「我が子は、今6歳だから一緒に入れるが、7歳になったとたんに一人で男性浴場の方に送り込むのはとても不安。父親がいれば、父親と一緒に入ればよいのだから問題ないが、母子家庭ではその点困る。誰か適当な人と結婚するっきゃないかあ・・・。」と話していた。母子で旅館に泊まったりすると、大きいお風呂に入りたいがる子も多い。大きいお兄ちゃんが居れば、兄弟で行ってもらえばよいが、一人っ子、或いは女の子の兄弟しかいないとしたら、見ず知らずの男性の集団の中に、7歳になったからと一人で送り込む不安は想像に難くない。昨今は低年齢の子どもたちへの性的いたずらも懸念される。だからと言ってそのためだけに誰でもいいから結婚しようなどという無謀はもちろんしないでらう。これが父子家庭であっても同様である。娘一人女性浴場に送り込むのはやはり不安だろう。こうした問題が起こることを、厚生労働省は想定していたのだろうか？

- ② ある60代男性に聞いた話：昔、やくざの親分のところにしばらく世話になったことがあった。当時まだ10代前半。親からの虐待もあって家出し、非行に走っていたころの話である。一般的にやくざの親分になる人は、至極まともな方だったりする。柄が悪いのは下っ端のチンピラである。ある日、母親が自分を迎えに組に来た。虐待していた父親は、こういうところには顔を出す勇気がない。母親は泣いて返してくれと頼んだそう。親分に呼ばれた自分に、姉さんは「あんたはいいやくざになるよ。」と太鼓判を押してくれたが、親分は「お袋さんがわざわざ迎えに来てくれた。

おやじがどんな奴かは聞いているが、お袋を泣かしたらいけない。お前は家へ帰れ。青破門だ。」と言った。やくざの破門には、青破門と赤破門がある。赤破門は只の破門。どこの組に行こうが勝手ということ。青破門はどこの組もこの人を入れてはいけないというものだそう。その後、10代の間は落ち着かなかったが、20歳前にはし、まともな人間としてしっかり働き、結婚もするという人生を送ることになる。やくざの世界のことは、あまり知らないが、破門にも二種類あるのだと初めて知った。この親分さん、中々の人だなあ。

公認心理師・臨床心理士・北海道
かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

ああ、相談業務

P84~

先人の知恵から

P165~

大谷 多加志

2018年から、同志社大学赤ちゃん学研究センターとの共同研究で赤ちゃんの発達に関する調査を、いくつかの研究プロジェクトにまたがって実施してきました。当時関わっていた新版K式発達検査2020の改訂作業が無事完了できたのも、赤ちゃん学研究センターに協力してもらえたことはとても大きく、私自身の研究活動においてたくさんの経験と機会を与えてくださった機関で、感謝の念しかありません。以降、現在に至るまで、コロナ禍もあり、赤ちゃん学研究センターのセンター長も2度の交代があり、センターの機能や位置づけが変わっていく中で、今年度で赤ちゃん学研究センターでの共同研究が終了することになりました。赤ちゃん学研究センターでの研究が終わるのは、寂しくもあり、また心細くもあるのですが、改めて感謝を覚えるとともに、独り立ちする気持ちでこれからの研究活動を考える必要が出てきました。

そんな折、完全に思い付きで「じゃあ自前でやってみたらどうか？」と思い立ち、自分の研究室の半分のスペースを使って、赤ちゃんの発達調査を継続する方向で検

討を始めました。動き始めてみると、いろいろな巡り合わせもあって、来月にでも調査を始められるくらいに段取りが整ってしまいました。こういう風に、思いがけずトントンと話が進むことってあるよなあ…と思いつつ、せっかく得られた機会なので、またここから頑張ってみようと思います。

発達検査と対人援助学 P115～

鶴谷 圭一

9月の最終土曜日に園で初めてのマルシェを開催します。

在園児の保護者の方が市のまちづくり活動支援事業で子育てサロンを立ち上げ園を拠点に土曜日に定期的にイベントを開催してくれています。

最初は、担当職員が管理のために出勤していましたが、最近では慣れてきたのでカギを貸して、必要な設備は自由に使ってもらっています。

信頼関係あればこそですが、職員の負担なしに施設の稼働率を上げていくことができ、園の広報につながったり、大々的なマルシェの開催にもつながりました。

もちろん主任が頑張ってくれたことも大きな原動力になりましたが、園という器をいかに有効活用していくかが、さらに異次元の少子化を迎えるこれから必要なことだな、と思ったのです。

マルシェの概要は原町幼稚園 HP から



https://www.haramachi-ki.ed.jp/admission_guide/tamakoro-land/

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ [haramachi.k](https://www.instagram.com/haramachi.k)

ツイッター [haramachikinder](https://twitter.com/haramachikinder)

幼稚園の現場から P72～

中村 正

この連載も含めたくさん書き散らかして

きたので、それらをいくつかの書物にまとめたいと思い、継続雇用教員としての当面の5年間、そしてもう5年間、都合10年計画で前期高齢期を過ごす計画の大きな柱として予定を組んでいる。2冊分は原稿にして出版社に渡してある。もう一冊をまとめている。さらに創業した一般社団法人 UNLEARN の運営もこの10年間を基礎づくり期としていく予定である。とはいえ、なんら新しいことはやっていなくて、この40年近くやっていることを整形しているだけである。強いて言えば、研究モードだったものを事業モードに切り替えていることになろうか。これも学校法人の経営の一角を担ってきたこともあり、マネジメントのかたちだと思えば一貫している面もある。一人親方・個人事業主であるが、法人の運営は手続きの連続なのでその面では新しいことを学習している。法務、財務、税務、労務・人事などの諸相をひとあたり勉強である。バックオフィスとして知り合いを頼んでコンサルをしてもらっている。事務所も確保してよぼよぼ動き出している。

臨床社会学の方法 P24～

団 士郎

8月29日朝、京都を出発して、五泊六日の東北遠征をして、9月3日夜に戻ってきた。道中一度も、傘を差すことも、風に止められることもなかった。台風は全てTVニュースの中だけのことだった。

出発前、台風10号は奄美大島の辺りでグズグズしており、新幹線の計画運休が騒がれていた。時間をかけて準備してきたことも、列車が止まってしまうとどうにもならなくなる。幸い29日朝の新幹線は定刻運行だったので、予定通り福島駅で同行者と合流できた。30日に出発の院生6名は飛行機の搭乗予約をしていて、新幹線の計画運休には引っかけらず無事到着した。しかし二人の方はJR移動に不安を孕んだ状況に、断念することになり、準備して貰った企画は中止になった。

風、雨の台風被害ではないこういう被害をJRはどう考えているのだろう。今後、慣例のように念のため計画運休など連発されてはたまったものではない。安全、安心ばかり口にする一般庶民ではなく、JR運行責任者としてギリギリまで足を確保す

るのは諦めないで貰いたい。

予想より被害が少なく良かったですねーで済んでしまう気象予報士と一緒にならないでほしい。



晩年 D・A・N 通信 P49～

中島 弘美

この夏、北陸新幹線に乗って石川県を訪れた。一月に地震があった北陸地方への応援ツアーだ。人が多くにぎわっているところもあれば、建物等の被害がまだ残されていたり、地域のテレビ番組のニュースは、支援に関するものが多かったりして、まだまだ、復興半ばであると感じた。これまで、東北応援ツアー、熊本応援ツアーと、地震の被害があった地域へ、ささやかではあるが、エールの思いを込めて、各地にお邪魔させていただいた。

今年も地震、大雨、台風など自然災害が続く。現在も台風10号の影響が気がかりだ。

来年2025年は阪神淡路大震災から30年になる。被災してからこの期間をふりかえってみて、実際どうだったのだろう、来年は改めて向き合う年になりそうだ。

カウンセリングのお作法 P46～

篠原 ユキオ

夏の剪定

「この前、頑張ってた刈りはったのにあつという間に生い茂りましたねえ」と隣家の奥さんから言われて振り返る先には大きな入道雲をバックに枝葉を無秩序に生い茂らせた家の庭木がある。

連日のように熱中症警戒アラートが発せられている間はエアコンの効いた自室から出ないようにしているのだが、道路にはみ出してくる枝葉が気になると、つ

い家の影が道路にかかる時間帯を待って高枝切りバサミを持ち出す。

ひと月前にかなりきれいにしたのだが、中途半端なところでストップした。作業中に体調の変化を感じ、慌てて水分補給と水シャワーを浴びて熱中症寸前で助かった事があったのだ。それに懲りて以後、庭いじりはしばらく放つたらかしにしていたのだがまた気になってきた。放置してハチに巣をつくられた事が何度かあってその警戒感もある。

モノは違うが夏場に限らず私の髪も驚くほど伸びるのが速い。若い頃は肩にかかるほどの長髪だったが今は少し伸びても気になる。髪はここ30年以上、市販の家庭用バリカンで自分でカットしている。面倒だがそれが生きているという証拠なのだと思うと楽しみでもある。

HITOKOMART
P216~

鷓野 祐介

病気からの快復途上か、熱中症か、はたまた単なる「老い」なのか、疲れがたまっている感覚が続いています。

「一病息災」と割り切ってスローライフを実践しよう、と自分に言い聞かせつつ、「そんなのまっぴらゴメン!」と吠えたくもなる昨今です。

うたとかたりの対人援助学
P172~

寺田 弘志

若いころは「長生きなんてしたくない」「老醜をさらしたくない」「人生太く、短く」と思っていました。ここ数年、どんどん白髪になり、頭のとっぺんも寂しくなり、鏡や写真に写る自分の姿がとてもイヤでした。ここ半年くらいは、AGA(男性型脱毛症)の治療薬を買おうかなあと真剣に考えていました。頭の形が悪くて、小中学校時代、友達に「絶壁くーん」と馬鹿にされ、つらい思いをしました。それからずっと、欠点をできるだけさらしたくないと思って生きてきました。クラブ活動を選ぶときも、丸刈りをしなければならぬ野球部には、絶対に入らんとこうと決めていました。髪の毛をカットしに行っても、後ろとっぺんはできるだけふんわり残しといてくださいとお願いしてきました。

今日は孫にあごひげを「どうしてここ白いの?」と聞かれました。「年をとると、髪の毛やヒゲが白くなるんだよ」というと、孫がかわいい手であごを撫でてくれました。白髪鬢に交じる年になってやっと、老醜や欠点を隠さずに生きるのもありかなと思えるようになってきました。「もっとハゲてきたら、いっそ丸刈りでもするか」。そう開き直って、AGA治療薬を使うのはやめることにしました。

最近またお世話になった先生が亡くなっていたことを知り、悲しく、心細くなりました。「こんな私でも、生きてるだけで家族の心の支えになるかな。老醜をさらしても、長生きしよう」。そんなふうに考えが変わってきました。続きは本文で。

接骨院に心理学を入れてみた
P179~

松岡 園子

母が神戸の家を離れ、大阪に引っ越してきました。引っ越しのバタバタで、連載1回分抜けてしまいました。ごめんなさい。最初、引っ越しの話が出た時に、環境が変わるから母は嫌がるかもしれないと思ったのですが、意外にも母は、色々な思い入れのあったであろう物を、どんどん捨てだしました。一緒に住むことで安心したのか、毎年夏になると「しんどい」とヘルプの電話がかかってきていたのが、今年は全く体調を崩しません。長年住んだ家に、それほどこだわっていなかったのかもしれない。私がそう思っていただけなのかもしれない。「どこにいるか」より「誰といるか」なんだな、と改めて感じています。



統合失調症を患う母と
ともに生きる子ども
P204

山下 桂永子

先日、友人2人と旅行に出かけたのですが、空港で職員の方に、「本日、予約が満席でございまして、もし良かったら1万円分のマイレージポイントを差し上げますので次便に乗っていただくことは可能でしょうか?」と聞かれました。知らなかったのですが、旅客機というものは、キャンセルを見越して定員よりも少し多めに予約を取り、ほとんどはキャンセルが出て予約した人全員が乗れるものの、予約した人が全員チェックインした場合は、次の便に乗ってもらえるお客さんを探らしいのです。私はそんなことあるんだなあとびっくりしましたが、面白そうなので受けることにしました。友人には「先に行って空港で寿司でも食べるとして!もらったマイレージでおごるから!♪」などと意気揚々と伝えて先に飛行機に搭乗する友人を見送り、搭乗口でのんびり待っていたのですが、幸いにも?キャンセルが出て、結局は予定通りに飛行機に乗ることができました。

こういう受け身的に起こる予定変更に関してはあまりストレスを感じないタイプなのですが、これが自分から誰かに予定変更をお願いしたり、連絡したりするのはすごくストレスだなあ、面倒だなあと思います。今回は「電話連絡」に関してのお話です。読んで頂ければ幸いです。

心理コーディネーターになるために
P156~

脇野 千恵

今年は人に会うごとに「暑いね!」が挨拶となっている。お店の人、知らない人ともその言葉からコミュニケーションができる。長く生きていると、つい昔の夏を思い出す。半世紀前は、日陰に入ると夏風が涼しかったなあと。趣味で野菜作りをしているが、今年は猛暑で作物がやけど状態で、収穫が少なかった。いくら水やりしても、葉や茎からの水分が取れないからだろうか、ナスなどは実が硬く人にはあげられない。そして庭の花々も、暑さに負けほぼ枯れてしまった。ヒマワリはかろうじて咲いているが、細い茎で花を支えられなくて下を向いたままだ。近所の様子を見ると、雨戸を閉めている家を見かける。我が家も今年ばかりは、光が入らないようにシャ

ッターや雨戸を閉めて過している。冷房をかけていても温度は下がらないからだ。縁側に置いているスリッパが熱で縮み履けなくなった被害も。地球レベルでの気候変動に、居住環境や作物の育成、動物の飼育など、自分のこととして考え直していく時期なのかなとつくづく思う。

こころ日記「ぼちぼち」

P222～

岡崎 正明

クリーピーナッツの楽曲に「のびしろ」というのがあって、最初に聞いて(カラオケで友人が歌った)すぐ「かっこええ～」と気に入った。その歌詞の中に「傷が癒えていく速度は遅くなるばかり。幸せの体感速度は早くなるばかり」というのがあって、なるほど上手いこと言うなあと思った。確かに若い頃と比べて何気ない日常に感謝したり、些細なことでも幸せを感じるようになった。年のせいと言われるとミもフタもないが、個人的には「セルフモニタリング能力」が向上した気がしている。若い頃はなんかイライラしたりモヤモヤすることがあっても、自らの声に耳を傾けず、目先のことばかり考えていた。体調が悪くなってもぶっ倒れる直前まで気づかず、ボランティア先のお宅で発熱してもんのすごい迷惑をかけたりのものだ。おかげで今では体調不良も早めに兆しを感じ、行動をセーブできるようになった。大人になったなあ(当たり前?)。

自分の気持ちを認め、ちゃんと大事にしてあげる。なんでそう思うのか深ぼってみたり、己と対話する。そんなことが昔よりできるようになったこと、幸福感が増したことはつながっているように思う。

ちなみに以前オープンダイアログの体験ワークに参加した際にも、人の意見が受け止めやすくなるだけでなく、自分との対話がすごく深まる感じがした。こんな体験が当事者の方にも起こるのだとしたら、なかなか興味深いし、やる意義がある気がしている。

役場の対人援助論

P109～

來須 真紀

長かった夏休みが終わろうとしています。我が家の夏休みは、塾とソフトボールで終

わってしまいました。ソフトボールでは、大きな大会を経験することができました。私も見に行きました。残念ながら2回戦で負けてしまったのですが、その相手のチームの雰囲気がとてもよかったのが印象に残っています。相手チームの指導者は、試合中、絶対に叱りません。注意もしません。褒めて励ますのみでした。子どももまとめて指示を出すときは、サングラスを外し、膝立ちになり、子どもより視線を下にして、指示を出しています。子どもたちもお互いのプレーを褒めあって、ミスがあつたら励ましていました。本当の強さってなんだろうと思いました。中学校に進学してもソフトボールを続けたいと思っている長女。ソフトボールを心から楽しんでもらえたらいいなと思います。

教室の窓から

P263～

山口 洋典

大学に勤務していると「夏休みが長くていいですね」と言われることがあります。そんなときは「銀行の3時に降みたいなものです」と言葉を返すようにしています。銀行は窓口対応が終了してから現金と伝票の確認などが行われるように、大学もまた、授業が終了してから各種の事務処理が続くためです。とりわけ大学では成績評定のための採点を緻密に行う必要があり、私の周辺では「採点の祭典」と呼んでいる人もいます。

学部にも所属しない教員である私は、キャンパスや学部や学年を横断した科目を複数担当していることもあって、夏休みには夏期集中授業として、遠隔地でのフィールドワークを組み込んだ授業で複数のまちに訪れます。この数年は8月の6日と7日を挟む1週間は岩手県大船渡市での「盛町灯ろう七夕まつり」のサポートに、9月5日を挟む1週間は福島県榎葉町での「ならば31人の“生”の物語」での取材と編集に伺っています。

今年度はそれらに加えて、2014年から1年かえて約60人の学生のリレーで建設した宮城県気仙沼市・唐桑町鮎立地区のツリーハウスの再整備(8月26日～29日)、令和6年能登半島地震の支援に3回(8月10日～13日、9月8日～9日、9月23日～24日)伺います。一方で現場

への思いが空回りしてしまっていないか、時折は立ち止まって考えねば、と内省を重ねながら、この短信を記しています。

PBLの風と土

P278～

千葉 晃央

対人援助学会、第16回京都大会の準備をしています。今回は自分も登壇する児童に対する支援実践をテーマにした理事企画Ⅰ「多様な学びの創造 一動機づけを生み出す仕掛けを探る」発表者：河村昌樹(京都府り溪少年自然の家)、山本昌平(大阪市総合教育センター)、千葉晃央(京都光華女子大学)、大谷多加志(京都光華女子大学)について、思いをここに。

子どもたちが自ら参加し、楽しむことはいくつか浮かびます。その経験からも何かを学び、前に進んでいるのは事実とおもいます。その多くはレジャーや遊び、スポーツなどで対人援助と距離がある領域も多いところですが。今回はそこを重ねて継続的に成果を上げている実践を取り上げて、参加者も楽しいし、提供者側も楽しいプログラムに着目し、我々が参考にして取り入れるところを学びます。

現在、京都では外国人観光客が忍者グッズを買って帰る姿は日常的に目にします。日本でも忍者の人気の高いのは言うまでもなく、忍者要素がある作品も数え切れません。そして、対人援助の実践として、子どもを対象にした「忍者体験キャンプ」も毎年企画され、現在も京都で行われています。仲間とともに自然や文化にふれ、五感も用いて、行動力・生活力・創造力・判断力を養う人気企画として30年以上継続しています。そこにある子どもたちを魅了する仕掛けは何なのか? どういったメカニズムがあるのか? を京都府り溪少年自然の家、所長、河村昌樹氏をお招きして考えます。



そして、1970年代以降家庭にも浸透し、

親子で一緒に楽しむことも当たり前になったビデオゲーム。その大会を中学校の学習で「e-スポーツ」として導入している実践を行ってきた大阪市総合教育センターの山本昌平氏からもお話を伺います。他にも山本氏は多様な学びに向けた取り組みとして、不登校傾向の子どもに対する職業体験機会の確保、複数担任制の実施など、たくさんのチャレンジをして成果を上げてきました。教職員も含めた持続可能な学びの場づくりもされ、こうした取り組みから私たちも学びたいと思います。

お二人の取り組みは、これまでもあったプログラムに変化を追加して、本来ある楽しみをさらに広げ、受け手も提供する側も動機が高まり継続している活動です。対人援助学として深めるべきテーマがあるのは確実です。

「やりがい、生きがいのある対人援助を次代につなぐ」をテーマに京都大会は2024年11月2日(土)～3日(日)に京都光華女子大学で行われます。他にも価値ある企画がたくさんあります。駅からすぐの会場です。対人援助学マガジンファンの皆さんとリアルでお目にかかることを楽しみに、京都でお待ちしています。ぜひ、ご参加ください。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P18～

古川 秀明

今までかからなかったコロナにかかりました。想像以上に辛かったです。特に高熱と頭痛が激しく、苦しみました。高齢者は命が危ういと言うのに納得しました。それよりにより、コロナ後遺症で臭覚障害と味覚障害がしばらく続きました。学校現場ではまたコロナが流行しています。皆様もくれぐれもお気をつけくださいませ。

講演&ライブな日々

P284～

見野 大介

小1息子の夏休みの宿題に付き合う日々。もちろん今は余裕で教えてあげられる内容だが、教えるのが必死のパッチになるのは何年後になるのかドキドキです。

ハチドリの器

P6

柳 たかを

自分はテレビを見るのがなくなった。我が家では新聞は某大手の日刊紙をとっているが、自分は一面のトップ記事のタイトルをチラ見する程度で、新聞を広げて内容を読もうと思わない。同じ新聞のデジタル版を購読契約している、読もうと思えば読めるが、最近はその目をおす頻度は低い。

その代わりに、スマホで情報をとります。さらに英語は得意ではないが、英語を日本語に機械翻訳して英語記事と日本語記事を同時にアップロードしてくださる日本人の方が増えてきて、そういった方が注目している海外の情報をチェックしています。ウクライナ紛争、11月に予定されている米大統領選挙など。



すると、日本のニュース、テレビだけを見ては知り得ない話題やその関連情報が次々出る出る。近ごろでは日本語に翻訳された記事だけでなく、自分でオリジナルの英語記事にノロノロと目を通したり、翻訳アプリの助けを借りて自分で日本語にしてみたり、そうするうちに以前に比べて、日本語訳を見ずにその英文記事にだいたいどんな内容が書かれているかぼんやりわかるようにもなってきた。忘れてい

たり知らない単語がたくさんあって自在に読みこなすまでにはいきませんが、このまま続けていきたいと思っています。

テレビのニュースショーのような丁寧な解説無しなので、興味深い情報と理解困難な情報が混ざりますが、テレビ&新聞だけでは知り得ない情報の奥の姿が見えてくるようで興味深い、続けていきたい。

それにしても国民に知る権利がある、注射薬お薬の内容を政府(厚労省)がことごとく黒塗りで出しているのを問題視せずに報道する主要メディアって、、、ふうー

やぶにらみ日記

P147～

小池 英梨子

ねこから目線。東京店が8月8日オープンした。ねこから目線。姫路店も9月9日からオープン予定です。20代前半の若手スタッフが活躍してくれてとても嬉しいです。お知らせしたい事も色々あるけれど、今回は報告系は一切やめて、つれづれな内容にしてみました。

そうだ、猫に聞いてみよう

P159～

原田 希

農繁期と牧場の母さんの急な入院が重なったので残念ながら休載します。ダメ押しで、従業員アパートが汚部屋になっていると発覚！快適な住環境は仕事の質にも反映すると考えて建てたアパート。究明はこれからですが、プライベートなことは干渉しない、大人なんだから本人に任せる、では済まない何かが起こっている気がします。母さんの方はお医者さんに任せて大丈夫そう。とにかく家業を支えることに専念します。

原田牧場Note 休載

付け加えることができる価値は何か？

～ 公共と個人との間 ～

7

千葉 晃央



もう一つ気になったのは主要な道路の車線の構成である。車道、歩道はわかるがその間にもうひとつ車線があった。そこを走っているのは電動自転車や電動キックボードだった記憶がある。

誰もが車を運転している時、周囲にとっても注意を払っている。視界内で動くものはその大きさと動くスピードで、勝手に判断もしている。メルボルンでは、自転車の大き



移動を変える、まちを変える

メルボルンでは市内中心部のトラム（路面電車）に無料で乗車できた。便利で住民も、観光客も活用していた。こういうのが自分の住んでいるところに欲しいものである。

さやフォルムでバイクの速さまではいかない、しかし自転車よりは速いものが移動していた。

これまで、歩くか、車に乗るか以外の選択肢を持つ必要性があることは大いに発信されてきた。災害時の帰宅困難状況やコロナ禍では自転車も注目された。それでも車の圧倒的な利便性と普及実態がある。実際に車を辞めることは簡単なことではない。

帰国後、電動自転車、電動キックボード、カーシェアに興味を沸き、使っている。オーストラリアの経験から、日本がまだあまり持ち得ていない選択肢の、これらを試みた。



アクセシビリティという社会課題

移民の立場で車を所有し、維持するのは簡単なことではない。また若い世代がお金をあまり持っていないのは、いくつかの国も同じで、若い世代の移動手段の確保がテーマとなっている。

モータリゼーションが一定進行した時代に生まれた私は、生まれたときから家に車があった。普通免許もすぐにとり 30 年以上運転してきた。日本で運転していないところはないぐらい運転したし、1 日関西から東北まで一人で運転するのも平気である。

だからこそ、ここで一旦車を手放してみようと思った。車のある暮らしはしたが、車のない暮らしは経験していない。これはいい機会である。オーストラリアで見た電動自転車などの自転車以外の選択肢の日本版を使って今暮らしている。

電動アシスト自転車は最強か？！

メルボルンの町でも動力付きの自転車をよく見かけた。電動アシスト自転車はマイカーのある時代から私は持っていた。後ろの荷台にもかごをつけて、運搬と個人の移動に特化して使った。そして、車がなくなったのもう一台購入し利便性を高めた。坂道の下りで車輪が回ると充電もするし、ベルトチェーンで高耐久とメンテナンスフリーというのにしてみた。

電気代はかかるが値上がりしたガソリン代に比べると負担感は少ない。また、交通違反で罰則金を支払うこともゼロに近い。充電もそれほど頻繁ではないし、自転車を漕ぐ負担は激減する。暮らす地域にアップダウンが少ないと活動範囲は飛躍的に拡大する。京都はおおむねこの特徴に当てはまる。

電動アシスト自転車史の浅さ

書店にいても自転車の雑誌はあっても電動自転車の本は見たことがない。結局はネット情報や動画の情報を見てネットで購入した。ここ数年は大きな自転車店も見かける。自転車産業も電動アシスト自転車の伸びが引っ張っているともいう。

車を持っているとメンテナンスでお世話になるディーラーや整備工場の人と仲良くなる。自転車生活では、それが自転車店に変わり、はじめは近所の自転車店を探すことになる。いろいろ行ったが、結局とてもお世話になっているのは、おじいちゃんがやっている小規模な自転車店である。高校の前にあり、販売よりもっぱら修理需要がある様子である。

電動アシスト自転車も日常で乗っているとメンテがいる。乗っていてわかったのは、電気のパワーに車体が耐えられない、運転者の体重に耐えられないということも起きるとのことである。自転車屋さんに教えてもらったのだが、強度と軽さとコストの課題とのことである。

電動アシスト自転車はギアが一番重いものでも動力パワーで補い発進できる。その強めのアシストを得るハイパワーモードも選択できる車種も多い。その結果、チェーン等の軌道系の劣化、車輪の劣化が普通の自転車より顕著とのことであった。

さらに運転者にパワーがあり、体重が重いとすると自転車事態に影響もある。その結果として、車輪内の細い棒のスポークが折れる事案が頻発していると自転車店で聞いた。そもそものスポークの鉄やステンレ

ス材質の質の問題もあるそうである。普通の自転車では経験したことがない「スポークの折れ」は大口径のインチが大きい車輪ほど発生しているようで私も複数回経験した。

そして、パンクもある。これには酷暑の影響も強くあるそうで、釘を踏まなくても、ゴムがたまたま少し薄い部分があって、そこに気温40度以上の路面、真っ黒で熱吸収…が重なって起こっているともいう。

そもそも、電気動力と自転車のドッキングによる製品の歴史がまだ浅い。改善はこれからも続くだろう。



シェアリング方式で敷居を低く

先日「メルボルン市が電動キックボード全面禁止、事故や苦情増加 オーストラリア」

というニュースが飛び込んできた。シェアサービスのキックボードは私が行った時もあちこちに乗り捨てられて、倒れていることもしばしば。楽しそう、便利そうではあるが厄介者とされるのには納得でもある。

日本のこうしたサービスではオーストラリアと違うところがある。どこでも乗り捨てができるのではなく、ポートといって止める場所が決まっている。そのため、道にはみ出たりはしていない。アプリをスマホに入れて、周辺検索をして近くのポートまで歩く。目的地の近くのポートを決めて向かい、そこで駐車して目的地まで歩く。こうした前後に徒歩があるのも日本のサービスの特徴である。それでもいつもと違うところを歩くので面白い。『Luup』という会社は電動自転車と電動キックボード両方を展開していて、使い分けることができる。一回乗ると数百円ということが多い。距離と時間で料金が決まり、登録しているクレジットカードの口座から引き落とされる。

この『Luup』という会社は「街じゅうを『駅前化』するインフラをつくる」をテーマに展開している。電車、バスが不便な地域には本当にありがたい。夜の減便対策にもなる。利用料が数百円なのもありがたい。今は立位乗車の電動キックボードタイプ、2輪の電動アシスト自転車タイプである。今後は2輪で着座できる車両を投入し、次には4輪車両導入も予定している。

電動キックボードの速度は自転車に抜かれる程度に制限が車両にかかっている。安全性は利用の仕方次第のように感じる。飲酒運転、二人乗り、歩道で規制速度以上の走行（6キロ以下での歩道の走行は可）など、まだ課題があるのは他の交通機関と同様で

ある。



車好きほど、カーシェアを！

私はマイカーを辞めてみた。車の運転は大好き。それでも、あえて自分がしないだろうということをしてみると新しい経験ができるときき、試みた。公共の交通機関での移動が増えると、国鉄の分割民営化の弊害を多く感じる。JR西日本で暮らしていると、JR東日本にある実家までの切符が買いにくい。大きな駅間の切符はネットでも買いやすいが大きな駅から先の数駅までの切符、大きな駅の前に小さな駅から乗っていくときの切符の購入をネットでするにはどうしたらいいかまだにわからない。

車がある子育てはしてきたが、車なし子育ては初めて。雨でも雪でもエアコン完備で移動ができる魅力は強い。そのため、まったくゼロというのは現実的ではないのでレ

レンタカーも、カーシェアも利用するようになった。

予定時間に返せない！

先日のゲリラ豪雨、京都駅で帰宅難民になった。同行していた子どもは長距離移動の帰りで疲労が激しい。子どもには明日の朝の予定も控えている。雨でも動く別の路線を選択しできるだけ自宅に近づいた。その駅近くでタクシーを拾って…と行きたいところだが、こういう時にタクシーは来ない。そこで、天候も回復していたので、駅前に泊まっているカーシェア車両で帰宅した。その後、天気が回復したので車を返しに行き、その帰りは「LUUP」の電動キックボードで帰った。

こうした使い方ができるのは、私が使っているカーシェアでは、ガソリンを満タンで返さなくていいというところ、そして何時に借りても返してもいいというところである。また、近くのシェアカーはいくつかあるのでいろんな車種に乗れるので、楽しい。「結局どの車が好き？っていうか、運転しやすいのは？」「うーん、スイフトかな」「わかる！あれが一番いいやんな。ヤリスは後が見えなさ過ぎてあかんわ。アクアもそんな感じ。ヤリスクロスも…。」「こないだコウヘイがマツダ3できたわ」「あその新しいとこやんな、俺も乗ったで。ナビの操作がむずくない？」「そう、手で画面が押せないし、ダイヤルやし」「天井低いし」「頭ぶつけるよな」…独立している長男が地元の友達と遊ぶときに借りている車と私が借りる車が同

じで、共通の話題ができた。また、長男自身もカーシェアでよく乗っているといろんな車に乗り、車メーカーごとの特徴や車の運転のしやすさの違いなど20歳なのに詳しい。マイカーしかない頃はこうしたことはほぼなかっただろう。

ところで、カーシェアで返却が遅れたときは、どうなるのか？ユーザーの中には返却時間を守らない人は一定いるようである。私も実際思ったよりも時間がかかり、返却時間に遅れることがあった。借りている車に私の後の予約がなければ、延長も15分単位で延長できる。しかし、すでに予約が入っていることがあった。その時はタイムズの電話窓口にお問い合わせすることになっていた。その電話では、まず電話をしたことに感謝をされた。いくらかは無断の遅れがあるようである。次の予約のお客さんにはタイ



ムズが電話をして近隣の別車両の利用の提案か、利用開始時間の後ろ倒しなどの調整をしてくれた。その上で次回以降は余裕を

もって借りるよう伝えられた。

暮らしやすさという福祉課題

メルボルンは、移民も多く、若い人も多い。図書館は誰でも利用ができ、遅くまで複数開館している。そういった基本インフラのアクセシビリティまで都市が保障しているのである。

公共の交通機関利用者とマイカーなど自家用のものを所有して移動する者との間には、「持つ者」と「持たざる者」との差がある。いきなり平等にはできなくても、その中間を作ることの重要さも見えてくる。

日本でもシェアエコノミーは着実に進んでいる。メルボルンでみた徒歩とマイカーの中間の移動手段、シェアリングサービスは、庶民にも優しい。こうした企業を応援することも多くの人に移動の機会を増やし、人々の幸福に寄与するだろう。

公園には犬を散歩する姿。公園には糞を処理する袋とゴミ箱が完備されていた。ま



た、マーケットには無料の給水ができるところがあつたメルボルン。こうした景色が日本では、まだあまり見ていない景色である。それでも東京の「エコルとごし」はじめ、無料給水ポイントも各所でできつつある。まだまだ工夫はできるかもしれない。



臨床社会学の方法

(46)自発的参加者を対象にした地域社会におけるDV加害者対応

中村 正

1. 任意かつ自発的な参加者を対象にした加害者プログラム始動

加害者対応について、ようやく国が動き出した。2024年度から自治体を実施する加害者プログラムへの国庫補助がスタートした。「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律（配偶者暴力防止法）」は、2001年、議員立法により成立した法律である。配偶者からの暴力は、犯罪となる行為をも含む重大な人権侵害と定義し、配偶者からの暴力に係る通報、相談、保護、自立支援等の体制を整備し、配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護を図るために制定された。しかし加害者対策は当時から現在まで社会的合意がなく、法律第25条でその在り方について調査研究を行うと定めるだけだった。ようやくその域を脱することになった。ずいぶんと時間がかかった。

ここ数年、内閣府の加害者対策を具体化する委員会で座長を務めてきた。2019年度からは京都府が単独で加害者対策を実施し、それを立命館大学人間科学研究所の臨床社会学プロジェクトが受託し、暴力加害に関する男性問題の個人相談とグループワーク事業を行ってきた。自治体が先行していたのだ。国が動き出したことの意義は大きい。もちろん助成金補助という形態で自治体任せにすることもよくないが、司法が加害者

対策に積極的ではない段階で、いつまでも放置しておくわけにはいかないと考え、地域社会のなかで加害者プログラムを実施できる体制を整えることとして現行法の枠内のできるぎりぎりの内容を詰め、委員会は文書をまとめ、国が判断した。司法の変化を待つのではなく地域社会でのプログラム提供を先行させることとなった。動きを加速させるために2024年2月に自治体向け研修を内閣府主催で行ない、講師をつとめた。巻末に参考として掲載した「共同参画」という冊子にその様子が紹介されている。その箇所を引用しておく。

新たな基本方針におけるポイント

◇加害者プログラムの実施の推進等

○ 加害者プログラムは、配偶者からの暴力の防止に向けて考えられる重要な施策の一つであり、被害者支援につながるもの

○ 国は、加害者プログラムの実施を推進する

○ 都道府県等は、加害者プログラムの実施に取り組むことが望ましい

<研修講義の内容>

令和6年2月9日に実施した研修では、DV加害者に対するアプローチに御知見をお持ちの中村正立命館大学大学院人間科学研究科教授（開催当時）と田村伴子一般社団法人WERC理事に講義をしていただき、都道府県等の担当者約百人が受講しました。

中村教授は、社会病理学、臨床社会学を御専門とされ、

「脱暴力」という観点から理論と実践の両面で加害者問題に取り組む研究者です。「DV 被害者支援の一環としての加害者プログラムとは」と題した講義では、御自身が京都府からの委託を受けて実施されている加害者プログラムも紹介しながら、主に以下の点について述べられました。

- 公的な相談機関にはつながらない（被害者支援を求めない）被害者の配偶者の中には、地域社会内では葛藤を抱えつつ子どものためにも思いながら、なんとか社会生活を送っている場合も多い。こうした配偶者は、加害者プログラムを通じた働きかけが奏功する対象者であることから、受講を勧めることに、意味も効果もある。DV 防止法による支援から距離を置いてサバイブしている被害者への支援の一環としても加害者対応が機能するという意味である。
- それぞれの加害者に合った「テラーメイド」の脱暴力支援計画と伴走型のプログラムの実施が重要かつ有効である。加害者向けのソーシャルワークはないのだから、加害者プログラムがそこに存在することに意味がある。
- 刑罰のようにプログラム受講に強制性を持たせることではない形での「脱暴力のシステム」が地域社会内で構築されることが急務である。

これは内閣府 HP からダウンロードできる。

2024年度は、京都府、群馬県、神奈川県、横浜市、宮崎県が国庫補助を得て加害者プログラムを実施している。今年度より大学の研究プロジェクトが受託するのではなく、私が代表理事となり創業した一般社団法人 UNLEARN が受託している。この経過を紹介した「公明新聞」（2024年8月14日付）を巻末に掲げておく。

このDV加害者プログラムへの参加は任意である。司法が関与していないので、強制力はない。また、配偶者暴力相談支援セ

ンターをはじめとする被害者支援の仕組みとも連動していない。パラレルに並んでいるだけである。また、同じ家庭内暴力である子ども虐待や高齢者虐待にはソーシャルワーカーやケアマネジャーが配置され、ケースを扱うことに比べると、DVには被害者であれ加害者であれ、対応するソーシャルワーカー等はいない。さらに、DV防止法は男女間暴力・配偶者間暴力なので男性のDV被害者支援も同じフレームで実施できるが、男性の暴力被害者が相談を躊躇することもあり事例は少ない。さらに女性加害者向けのプログラム開発はまだできていないので、この課題は今後委ねることになる。こうした事情であるが、とりあえず地域社会で男性加害者の脱暴力のために活動する民間団体と協働する仕組みが動き出した。

現在は、諸外国にあるようなプログラム受講命令・参加命令制度は未整備である。これは保護命令制度と不可分で、刑事司法と連携したダイバージョン制度（刑罰に代替する措置）がないと始動できない。司法が関与しているからこそプログラム参加が現実味を帯びる。とはいえ、制度化されると、加害者プログラムに動機付けられていない男性たちが参加する。「刑罰のようにプログラム受講に強制性を持たせることではない形での『脱暴力のシステム』が地域社会内で構築されることが急務である」と研修会で述べたのはそういう意味である。ダイバージョン制度と紐づかないところから加害者プログラムを展開することになる。任意参加者だから適度に動機づけられた男性たちといえる。『テラーメイド』の脱暴力支援計画と伴走型のプログラム「加害者向けのソーシャルワークはないのだから、

加害者プログラムがそこに存在することに意味がある」と話したことも同じ背景である。加害者の全体からすれば一部の対象者でしかないが、まずはこの層の変容を可能にする加害者プログラムであることを目指す。ある程度、動機のある層の加害者と脱暴力へと協働できなければさらに動機付けられていない加害者へのアプローチは難しい。任意の参加者であるということは自発的な相談者であることを意味する。しかし、それは「いやいや、しぶしぶ」という面もあり、また、妻や子どもや親族に言われて来談していることもあり、さらに動機を高めるための働きかけが鍵となる。まずは地域社会のなかでボトムアップ型の脱暴力の機会ができたということになる。

2. ジェンダーと個人の責任をつなぐ関係性の社会病理

次に、加害者プログラムの基本となる諸点を整理しておきたい。まずは社会の責務（これまで加害者対応を放置してきた共軛関係もある）と暴力を振るう個人の責任の取り方の双方を見据えた加害者対策の基本理念が大切である。DVや虐待をはじめとした対人暴力について、ジェンダーが作用しているとして社会的要因に重きを置くと、個人の問題として現出する暴力の行為責任が後景に退いてしまう。ましてや免責されていくことがあってはならない。ジェンダーは社会学的なアプローチなので、個人の責任をいかに位置づけるかという課題は残る。しかし、「加害者臨床」として個人の問題にすることも重要だが、心理化・病理化する弊害もある。したがって、社会的なも

のと個人的なものの統合がテーマとなり、心理臨床的なものとしてではない個人への働きかけが男性相談を端緒として体系化されていくことになる。

類似のことは刑事事件でもある。情状鑑定を依頼されることがあるが、犯情と情状のあいだでこのことを考える。同じテーマ性をもつ。これまで「治療的司法」として紹介してきた。司法という社会制度が個人への治療的アプローチ（問題解決）をいかに組み込むかという課題である。刑事裁判における量刑判断は行為責任主義に基づくので、一般情状は参考に過ぎないという意見もある。あくまでも犯情が刑の基本となる。被疑者被告人の生育歴や心理社会的事情はあまり重視されない。とはいえ、一般情状を無視するわけにはいかない。なぜなら社会との共軛関係があるからだ。介護殺人等、情状が前景化する事案もある。情状を考慮した方が社会も安心できるからだ。このような場合は社会が共軛関係にあるといえる。また、逆に社会的な課題がその行為に織り込まれていることを指弾できる面もある。

これらは行為責任主義と治療的司法、そして社会病理の交差する点である。加害者対策という社会政策や制度構築と、暴力を振るう個人への問題解決のための実践の統合ということが絶えず問われている。

ジェンダーの視点に関わり、さらに加味して考えなければならないことがある。それは女性によるDV加害や同性カップル間の暴力である。UNLEARNの相談にも男性被害者やゲイカップルが来談する。男性性ジェンダーだけが要因ではないということになる。これは親密な関係性あるいは二者関係という相互作用の特性を考慮に入れる

べき課題である。もちろん男性に多い暴力だが、ジェンダー要因の比重は大きいがそれ以外の要因も複合し、統合されて個人の行為として現出するのが家族の対人暴力である。そうした親密な関係の典型として、家族という再生産領域がありそこで生成するという把握が必要だと考える。このテーマは暴力の再生産や連鎖、加害者への同一化、親密な関係性がはらむ高度な葛藤、アタッチメント問題等という事態の把握である。例示すれば、ガスライティング、トラウマテックボンディング、ストックホルムシンドローム、モラルハラスメント、関係コントロール型暴力等の「関係性の社会病理」を扱う概念がここに関係している。情状はこの点に関連しており、「関係性の歪みや振れ」がテーマとなる。この点はすでに論じたこともあるが、男性性ジェンダーだけを問題にするのではない立論として本格的に展開してきた。しかしここでは男性相談という枠のなかでの議論なので、今回は男性性ジェンダー問題を中心に扱うことにする。

行為責任主義を起点にしつつ、社会的要因を加味するが、それを関係性の歪みとして考慮するということになる。しかも免責とならないような水準で社会病理を扱い、脱暴力論を根拠づけていくことになる。

そのために、(1)男性性ジェンダーに関わる暴力の遍在と偏在（その男の暴力行為と背景にある男性性ジェンダーをきちんと扱うこと）、(2)男性性ジェンダーが行為者の無意識の内言のように作用している暗黙理論、(3)マジョリティがジェンダーのことを考えなくてもよいから生まれるマイクロアグレッション等の社会と個人に関わる概念を紹介してきた。

これらの概念は加害者プログラムを組み立てる際に不可欠となる。同じように男性相談論を構築することにも役立っている。理論を社会に実装し、事例から理論を豊かにする往還が可能となり、アカデメイアの役割は大きい。

ジェンダーに由来する暴力として男性問題を論じる場合は、社会構造に宿るジェンダー秩序を論じること、つまり社会的要因を指摘することになる。特に性暴力や性虐待はジェンダーの視点が不可欠となる。

しかし、その行為をした個人の責任は大きい。行為者の責任を追求し、個別の更生相談をすることは、この対人暴力は無くすことができる課題であることを意味する。対人暴力は無くせる課題だからである。個々の加害者の行為責任があること、男性すべてが暴力を振るうわけではないこと、女性の加害者の把握を念頭に置かなければならないことから分かる。ジェンダーは社会構造に行き着くが、対人暴力の克服は個人の次元から構築し、関係性の社会病理を視野に入れて克服のために実践できるという意味である（この点は、「臨床社会学の方法(36)暴力の文化—Micro Action for Violence-Free プロジェクト構想—」として論じた。対人暴力は無くすことができる）。女性の加害はジェンダーの立論だけではない要素を求めているので、関係性を射程に入れ、アンラーンという視座からプログラムを組むことにした。

こうした観点から、ジェンダー作用を含めた「関係性の社会病理」に由来する習慣的行動としての暴力からの脱学習を重視し、「心理-社会的教育モデル」とした。具体的には次のような取り組みを2019年度から

展開してきた。

まず、「暴力のアンラーン unlearn のための学校」と男性たちに紹介している。「学び忘れ」があるし、暴力を問題解決の手段として選択してきた、つまり学習してきたと捉える。男性性ジェンダー作用により間違っただけで学習してきたので、それをアンラーンする場と意味づけている。そして人生の再著述に向かうためのライフストーリーワークの場としている。一種の夜間中学(3年)であり、なお継続して定時制高校(3年)が必要だと指摘し、時間がかかると示唆している。運営はゼミナール方式としている。1クールは月に2回のグループワークを8回行う。3クール実施(1年間で24回)。クールとクールの間には個人面談をとおしてリフレクションする。可能な男性はパートナーコンタクトもおこなう(後述)。被害者支援の一環としての加害者対応という点を重視した取り組みとしている。ファシリテーターとコ・ファシリテーター、記録係、そして初期面接・連絡担当の合計5名(女性1男性4)で行っている。2024年6月現在で2グループ稼働中である。1グループは加害男性5名程度としている。グループワークに参加するため、動機形成と課題整理を兼ねて5回の個人面談を先行させる。2023年度では、24歳から74歳の男性が、実人員では40名の個人相談と14名がグループワーク参加した。

3. 脱暴力への変容を促すための対話的協働の視点

- ① 被害者支援の一環としての加害者対応であることの意味

この点について UNLEARN では、第1に、加害者プログラム参加男性のうち、被害者の了承を得られた場合、パートナーコンタクトを実施している。これが実施できるのは別居中の夫婦の場合が多い。これは夫婦間調整ではない。男性相談やグループワークでは男性の話を聞いているが、概ね現状や経過の説明としては「羅生門的現実」であることが多く、問題の理解にはずれがある。女性相談や被害者相談の経験のある女性スタッフがパートナーコンタクトを担当している。これまでの経験から、パートナーコンタクトそれ自体が被害者支援のようでもあるし、被害者像が画一的であってはならないことをこちらが学習することが多い。端的には「脆弱な被害者」ではなく力を持った被害者像が浮かび上がってくる。配偶者暴力相談支援センター等公的な相談にはのっていない人たちがばかりである。知人・友人、親族には相談している。なかには弁護士に相談している人もいた。加害男性がみている妻の姿とは異なる様子が見えてくる。被害者理解の大事さを思う。

第2はよく似た点であるが、被害者理解についてである。ここは肝心の点であるが、男性たちはエンパワーされた被害者像が理解できないことがある。一般論として、力をつけた女性たちを疎ましく思うことがある。保護命令制度、シェルター、DV相談のカウンセリング、被害者支援に関わる弁護士たちにマインドコントロールされているのではないかというのだ。家出を継続したり、生活費を要求したり、保護命令を申請したりするような妻ではないのにともいう。別居が長くなると被害者は力強くなることもある。自立のためにエンパワーしているこ

と対比していえば、加害者プログラムが並行して何をすべきなのかという問題提起となる。

第3は、主語を妻や子どもにして考えてみることを重視している。出来事のエピソードをたくさん出してもらい、その出来事を分析していくこととしている。その際に、被害者の視点から出来事をみるようにすすめる。加害者目線での思考が抜けきれない語りにはマイクロアグレッションが散見される。とくに暴力的な出来事に謝罪をする場合、この点の深まりや視野転換がないと意味をなさない。「できればよりを戻したい」、「プログラムに来てこんなに努力している」という自分中心の思考が強いのでこれを払拭したい。

第4は、視野の転換である。男性たちはことを早く進めようとする傾向がある。被害者という他者がいるにもかかわらず、反省している、謝罪したい、話をしたい、努力している等として自分中心に問題解決に向かいたいという。自分のペースでことを運びたいと思っている。長い夫婦生活というコンテキストを見ながら関係性のあり方から問題を掘り起こしている妻や子どもと、暴力的な出来事中心で、点としてのエピソードを語る男性との溝がある。「凶」としての身体的な暴力に関心を寄せる男性と、「地」としての暮らし方や習慣的な文脈を問題にしている女性の異なりともいえる。

② 非対称な関係における暴力であることの理解

長く連れ添った熟年夫婦が顕著にこの非対称性のなかを生きてきたし、妻は子どもが成長する時を見計らって別居を申し立て

るが、男性が気づかずに生きてきたという構図で考えると、出来事としての身体的暴力はなくても、長い間、家族のために生きてきた妻役割からの解放を望んでいる様子が見えてくる。

また、身体的暴力の程度がひどい場合は、子どもが小さくても離婚を選択することがあり、調停と並行しながらグループワークに参加する男性もいる。離婚になる場合、男性の心理的ストレスも深刻になり、加害者うつ的な状況になる。こうした場合は、グループワークに参加すること事態が困難になるが、つながりとしては大事なので連絡を取るようにしている。同じ家族のなかを生活していても、家族の現実や男性の暴力性の認識についてはずれが大きい。女性からすると彼の日常生活の営み方それ自体に暴力性を感じている。

以前にも紹介したがこんな事例がある。二人が恋人同士だったころ、ドライブをしていた。夜、何かの小動物を轢いたような衝撃があり助手席にいた彼女が車を止めて確認したいと言った。彼は無視して走り続けた。車の点検をしたり、もし何かの動物が死んでいたら保健所に連絡したり、路肩に寄せておいたりといろいろなことをすべきだと思った。このときの違和感がいつまでも残ったと語る。どうしてか。将来、結婚して子どもができたら大丈夫だろうかと思ったのだという。私は「生命の感受性の異なり」と名づけた。ほかにもこうした違いはたくさん語られる。

加害男性から相談に来て気づいたとして語られることもある。たとえば子どもの発達障害の受容のことがある。父親がなかなか認めないのだ。妻は発達相談に行かせた

い。夫は、子どもは多動で元気な方がよく、いつかは成長とともに収まるといって取り合ってくれない。子どもが発達障害かどうかというよりも、子どもの行動の特性を案じる妻がいて、そのことを理解してほしいと思うだけなのに、いきなり決めつけることへの不満が溝をつくっていく。妻はせめて夫婦で話をしたいと思っているだけだがそんな時間はないので無理だというばかりだ(中村正「加害者の変容可能性をひきだすための対話」『精神科看護』50(3)、23-29、2023-03 精神看護出版、中村正「ハラスメント加害者の更生はいかにして可能か—加害者への臨床心理社会的な実践をもとにして考える」『日本労働研究雑誌』2019年11月号、No.712)。

非対称性をつくるジェンダー作用もあり、関係性を組む以前に、生きることの姿勢やかたちに異なりがある。そうした差異を前提に、相互に異なる者同士がうまく関係を組んでいければよいし、相互に修正していくことができる関係であればパートナーシップは豊かになる。その関係の異なり方と、社会が保持する関係の非対称としての、典型はジェンダー秩序であるが、権力性がそこに環流している。さらに夫婦として家族を成していくと社会制度へと固着していく。子育てが加わると再生産の制度として関係がさらに固着していく。非対称な関係性が、個人同士の相互作用から始まり社会を支える相互作用へと展開していく。その権力性の発言の結果としてDV等暴力が生成する。これを加害者プログラムは解除していく役割を担うことになるので、エピソード分析を行う際にも必ず組み込むべき視点としている。

③ 関係コントロール型暴力として把握すべきこと

関係コントロール型暴力は、ヨーロッパの最近のDV理論に由来する。英国等では暴力の定義を変更している際に用いられている理論である。身体的、心理的、言語的、性的な暴力として把握することが通例であるし、日本のDVや虐待対応でもこの定義が使われている。高齢者虐待はここに経済的搾取も加わる。暴力の一般的定義が変更されてきている。

関係コントロール型暴力論はそれらに共通する、人格への支配について把握するものである。英語では、*coercive control* である。強制的なコントロールという意味であるが、私なりの訳である。暴力の類型に着目する特性づけではなく、関係性の次元から暴力を把握しようとするものである。

その対話から、関係コントロール型暴力の特徴をまとめると次のようになる。(1)相手との関係において「操作性の強さ」への無自覚さあるいは当然視がある。(2)暴力にいたったのは理由があるという。相手にも問題があるからだという。「他罰性と責任転化」である。(3)非対称な関係性における「服従化の心理の活用」がある。これは無意識のジェンダー作用のもとで当然視している日常生活の運営の仕方として現出している。(4)相手に対して「読心性(マインドリーディング)の喚起」を期待する。「察しろ」という意識や態度である。(5)「歪んだ愛着」が形成されやすいこと(あいつは俺がいなければやっていけない、特に経済的にはそうだと思う等)。(6)人格を攻撃する。事実上、他者としての尊重ではなく、価値剥奪的で地位降格的な関わりがある。モラルハラス

メントである。(7)「被害者の自責の念を強化」させるようなコントロール、つまり私も悪いところがあったのかも知れないという攻め立てがあること等である。

また、関係性に宿る暴力性も妻から表明される。該当するエピソードを紹介しておく。私の相談の記録ノート（被害者聞き取り）からである。パートナーコンタクトや虐待の取り組みである男親塾での夫婦面談の記録である。「自分のものを買うときにいつも一緒に付いてくる。僕の好みの女性になってほしいと言う。自分が自分でなくなっていく感じがする」、「交通の便の良くないところに住んでいるので本当は免許が欲しい。必要なのに、免許を取らせてくれない。運転が下手だからって言う。だからいつも彼の車で行動することになる」、「習い事をしていると言うと、それは男性から教わるのかって聞いてくる」、「同窓会に行くと言うと嫌な顔をする」、「DVを受けているのに彼という方が安全だと思えるような意識になったことがある。実家に逃げていると追いかけてきたり、メールが頻繁に入ったりするので結局一緒にいることで落ち着くから」、「今日は何をしていたのかといつも聞いてくる」、「『死んでやる』。と言われると別れられない。元の関係に戻ることが多い」という。関係コントロールの諸相が暴力に先行して存在している。

④ モラルハラスメントだったことを理解していく

こうした関係性の社会病理を視野に入れると、身体的な暴力という出来事だけではなく、そこに至る一連の過程が見えてくる。加害者プログラムに参加する男性たちはモ

ラルハラスメントを探索のキーワードにして、UNLEARNのプログラムに漂着することが多い。夫婦としての相互作用の様態を示す言葉としてモラルハラスメントは男性には受け入れられている。モラルハラスメントはフランスの精神科医、マリー＝フランス・イルゴイエヌが提起したものである。加害者が相手を不安に陥れるためによく使う方法として定式化されている。相手の意見や趣味、考えを嘲弄し、確信を揺るがせる、相手に言葉をかけない、人前で笑いや悪口を言う、他人の前で悪口を言う、釈明する機会を奪う、相手の欠陥をからかう、不愉快な仄めかしをしておいて、それがどういうことか説明しない、相手の判断力や決定に疑いをさしはさむ等が紹介されている（マリー＝フランス・イルゴイエヌ著・高野優訳『モラル・ハラスメント』紀伊国屋書店、199年）。

同じような内容として、加害者研究や暴力研究ではかなりの蓄積がある心理的暴力という概念がある。たとえば次の4つの特徴を指摘する研究がある。

第1は、「パートナーの自己イメージや自尊心を傷つける」ことである。たとえば、怒鳴る（下品な言葉、軽蔑的な言葉、卑下した言葉で言及する）、外見や行動に関して貶める、友人や家族の前で恥をかかせたり、困らせたりする（子供の感情を害したり、疎外しようとする）。とても批判的である（否定的である）、嘲笑する、感情を無効にする（非難によって個人の責任にする）、その人の行動ではなく、性格に焦点を当てて批判する等が例示されている。

第2は、「受動攻撃的に感情的なサポートや養育を拒む」ことである。たとえば、回避

や引きこもり、不機嫌な態度、無言での対処、辛らつな不作為、ネグレクト、感情放棄（自暴自棄）等の懲罰的使用である。受動性は無視や放置であるがそれが脅威になることを示す概念が受動攻撃性である。

第3は、「脅迫的な行動」である。身体的に傷つけたり、傷付けたり、殺すぞという脅迫（離婚しろ、子どもを取り上げるという強圧的な脅迫）、嘘や不貞行為、無謀な運転や行動をとること等である。UNLEARNの相談で出てくるが、「死んでやる」と仄めかすこともこれに該当する。

第4は、「個人の領域や自由を制限する」である。たとえば、友人や家族からの孤立、ストーカー行為や居場所の確認、日記や電話の記録の無効化、パートナーの就労や通学、または自分一人で何かをすることの妨害、関係における意思決定の支配、パートナーの金銭の管理、パートナーによる電話の使用の妨害、車の鍵の取り上げや車の使用不能化、性役割のステレオタイプ化、性別および／または婚姻関係に基づくパートナーの選択肢の支配、自己の権利意識または所有意識である。

これらは日常的な関係コントロール型暴力の典型であり、モラルハラスメントと類似の暴力性をもつ (K. Daniel O'Leary, Roland D. Maiuro.(2001).Psychological Abuse in Violent Domestic Relations, Springer, p.xi)。

他にも、「彼は私の時間を監視し、私の居場所を点検する。彼は私たちのお金を使い、重要な経済的決定を私に相談しない。私の友人に嫉妬したり、疑ったりした。私が他の男と浮気していると非難した。他の家族との関係に口出しをした。私が自活するのを邪魔しようとした。携帯電話を使うのを

制限された」というアセスメントに活用されている整理もある

(Jennifer L. Hardesty and Kimberly A. Crossman, Megan L. Haselschwerdt, Marcela Raffaelli and Brian G. Ogolsky, Michael P. Johnson, Toward a Standard Approach to Operationalizing Coercive Control and Classifying Violence Types, in Journal of Marriage and Family, 77 (August 2015): 833-843)。

モラルハラスメントと心理的暴力は、関係性と相互作用に焦点を合わせて身体的暴力とは異なる面を把握しようとする概念である。エピソードを紹介してもらいこうした面を取り出すこととしているが、男性は、その事件の詳細を述べないことも多く、どうしても衝突としてのものを投げる等の物理的暴力や身体的暴力の記憶に傾斜しがちである。氷山の下に隠れている部分にある相互作用の経緯については語りが少ない。もちろんそもそもモラルハラスメントや心理的暴力を把握する語彙が男性たちには少ないこともあり、現実がクリアになりにくい。個人相談やグループワークではモラルハラスメントの諸相をクリアに伝える言葉を教示する。

⑤ 暴力を肯定する思考があること-暗黙理論の存在

脱暴力への過程は、そう簡単ではない。これまで暴力的であった生き方の特性が、脱暴力過程にも反映される。たとえば、解決を急ぐこと、問題解決について自分で決めてしまうこと、もう自分は大丈夫と思い込み相談に来なくなること、「離婚してやる」と言うこと、相手も悪いと述べる等である。したがって、暴力の出来事それ自体というよりも、暴力を含んで成立している彼の日

常生活という生態学的な環境や行動のシステム、つまり関係性の組成の仕方自体を対象にして脱暴力を検討していくことになる。特に暴力を肯定する文脈を探ることを狙っている。「凶」としての暴力事件だけではなく、「地」としての、コントロールを無自覚に包含する彼のマイクロ環境へと降り立っていく。

犯罪心理学研究では言い訳や正当化を対象にして、それらを暗黙理論として整序し、定式化している。暴力を振るう者の日常生活や生きてきた軌跡に由来する意味づけのことである。またこうした暗黙理論が生成してくる過程には、暴力を振るう者の虐待の履歴をみることが出来る。生育過程において学習してきた結果と考えられる。つまり暴力の連鎖、憎しみの連鎖が暗黙理論として彼のなかに構築されている。だからといって現在の暴力の責任を減じることはできない。こうした言い訳・正当化の研究は、DVや虐待にも応用できる。具体的には、言い訳・正当化の説明行動の研究を、加害のナラティブ、暴力の文化、虐待的パーソナリティ、認知行動的な特性把握、動機付け研究、暴力の社会臨床論等としてとらえ、それらを対人暴力研究として統合し、さらに狭義には加害者臨床、広義には暴力臨床の対象を確定していく作業にすることが出来る。私は、暴力加害の実践を支えるセオリーを説明の語彙と言葉、つまり内なる声として存在している暗黙理論として抽出し、実践の慣行として機能しているのとらえる。とりわけ問題解決行動のなかに編み込まれていて、その総体が「個人の理論」として構成されている動態を掴むことを目指している。

以前、次のような暗黙理論をとりだし、詳細に考察したことがある。(1)「今月の生活苦しいのよね。」はどう聞こえたか、(2)「暴力はコミュニケーションである。」が意味すること、(3)「俺は正義である。」と考えている、(4)「アルコールが入っていて、頭が真っ白になったから。」と理由づける、(5)「ささいなことだったんです。」と言い始める、(6)「相手が俺を殴らせる。」—彼は独自の被害者像をもっている、の諸点である。これらは、事前に準備されていた「内なる声」としての動機という面と事後的に取り繕う「説明」という面がある。行動における二重性であり、両面とも文化によって提供される言語行為である。

なかでも親密な関係性における暴力行動は、葛藤を解決する過程で用いられるその人の対人関係における問題解決の習慣的な行動でもあるので、そこで使われる言い訳・正当化は動機として語られるが、それは、結果をとりつくろう事後の説明という面が文脈構成として存在している。それをきちんと聞き取ることがその後の脱暴力の臨床実践にとっては大切となる(中村正「暴力臨床論の展開のために—暴力の実践を導く暗黙理論への着目—」『立命館文学』立命館大学人文学会 編(646)、559-545、2016-03立命館大学人文学会)。

暗黙理論の掘り起こしを通して省察が深まる。氷山の下に沈んでいる暴力を肯定し、少なくとも否定しない無意識の実践的行動指針となっている様子を言語化していくのが加害者プログラムである。被害者からみた被害の内実としての関係性と相互作用の歪みのようなものを可視化させるということになる。暗黙理論として整序していくことでモラルハラスメントの実体が自らのラ

イフストーリーのなかに存在していたことに気づいていく。

⑥ 男性性ジェンダー作用

男性性ジェンダー作用は背景にある要因として暴力生成に関係している。

その特徴をまとめておこう。(1) 暴力を振るわれてもそれに耐えて対応してきた男性的な克己の過程があり、それを乗り越えてきたと意味づけている。(2) 男性が暴力被害を受けることは男性性ジェンダーからすると恥辱的なので、沈黙へと被暴力体験を幽閉している。しかしそれは単なる沈黙なので被暴力体験の辛さ等は封印しており、トラウマ的な体験の傷つきは回復していない。(3) 男性性ジェンダー作用は、こうした過程を自負できることでもあると考えさせ、自分の息子に乗り越えることを推奨することになりかねない。そうした体罰はさらに息子を暴力的な男性に仕立てあげおそれがある。三代続く連鎖となる。男性的な生き方を鼓舞することに暴力体験が存在している。(4) したがって、暴力は男性として生きていく上での資源として機能している。(5) あるいは男性的な人生にとっての通過儀礼として成長のための源泉にもなると考えている。(6) また、競争として、暴力という形態ではなく別の攻撃性へとエネルギーを展開していくものとして男性性ジェンダー作用が無意識のうちに刻み込まれている。

被虐体験を「乗り越えた」と自負しているライフストーリーのなかに暴力肯定の意識と態度が入り込んでいる。これを拭い去ることは自己否定のように思えると心情吐露した男性がいた。また、グループワークで象徴的な発言に遭遇した。グループワークでア

ファーマーセッションすると批判的になる男性がいた。アサーションに馴染めない男性である。褒めると嫌がる男性もいた。「あなたは私を褒めるに値するのか」と私にマウンティングをしている。男性性ジェンダーは脱暴力にとってもアンラウンしておきたい対象となる。

⑦ 父の影-再生産のこと

自分の父親と同じようなことをしているとすべての男性が話す。暴力の再生産の告白である。「男であること、関係性の再生産(暴力の連鎖)、気づきと再学習」という要素を脱暴力化支援としてグループワークでは重視している。男性の加害者の自己認識としての父親から受け継いでいるものがあることを暴力のライフストーリーワークとして扱い、連鎖の切断をプログラムに組み込む。

言葉を変えると、体罰を肯定し実行している思考と行動のフレームがあることを理解する取り組みである。三代にもわたる連鎖は父親らしさの追求の結果である。暴力の再生産になっていることへの気づきを促す。暴力を受けて育つ子どもの内心の研究を紹介することもある。それは自らの成育史にも重なるので自己理解となる。自分の子どもにもさらに連鎖をさせるとさらにその子どもにも影響がでるという研究も紹介し、三代連鎖を食い止める意味を理解していく。現在の子育てに過去の育ちの軌跡や意味づけが反映されている。とくに男性性ジェンダー役割が媒介していることもあり、行動のレパトリーを増やすことができるように学習をすすめる。特に重要なことは、グループワークとしてやってい

るので他の男親の努力が話されることを熱心に聴いて学ぶことになる。男親塾はサークル型の治療共同体なので、こうしてグループダイナミクスが発揮される。選択肢を増やすと楽になるという男親がほとんどである。非対称な関係性の象徴は暴力によるコントロールなので、それを止めることだけでも家族システムは健康になる。養育力の向上の前に脱暴力は大前提となるという組み立てであり、グループワークをとおしてそれを達成する。

⑧ 身体的暴力の意味

家族システムのなかで男性のもつ有形力の行使は破壊的な役割を果たす。いかなる理由があろうとも物理的身体的な暴力は、他人にすれば犯罪ともなりうる。加害男性からすれば家族だからという枠付けもあるが、相談に来る男性たちはこの点の理解はある。また、警察の介入も増え、刑事事件になっている男性の相談も増えている。男性たちは有形力の行使としての暴力は認めている。なんといっても怪我やアザという証拠がある。妻は携帯で写真に残すし、自ら通報することもある。力の差異があるので男性の暴力は危険だ。物を投げたりすることもある。壁や家具に当たり散らすこともあるという。リモコンを投げるといふ男性が多い。暴力行使が男性相談にくる契機となっているので、これは更生のための対話の手掛かりになる。

しかし、その加害性の認識という点ではずれが生じる。モラルハラスメント、男性性ジェンダー作用、暴力の再生産と世代間連鎖、暗黙理論等を経由して暴力を正当化することもあり、加害性の認知が暴力の認

知とずれている。相互作用に暴力の発生があるとして他罰性・他責性が噴出する。これは子ども虐待の加害に顕著である。その暴力には理由があるというのだ。DVの場合はジェンダー意識が作用する男尊女卑や女性嫌悪意識も作用する。さらに、問題解決行動や手段として暴力が選択されており、身体がそのように反応する。特に家族だけにそれが発現する場合の理由の理解は本人との対話でも不可欠の課題と位置付けている。

ほとんどの男性は、些細なことから口論が昂じていくのだという。その結果、暴力行使に至るといふ。妻の口論に口論で応じ続けるのではなく、手が出てしまうのだという。身体動作が先行する。男性たちはグループワークでも技術としてのアンガーマネジメントに大変強く反応するが、こうした経過だからだろう。さらにその暴力の仮面を剥いでいくと見えてくるものは何かと対話する(本稿の第55号ではこのことを扱っている。「臨床社会学の方法(43)鏡の背面—他者をとおした欲望の実現—」)。

端的には関係コントロールが生起するのは、支配の欲望ではあるが、その内的動因は、思うようにならない事態への直面であり、それを回避するための暴力となる。妻と子どもはコントロールの対象となる。口論となる時点で彼の怒りの沸点は高くなり、暴力行使の準備段階となる。しかし怒りの感情が暴力を起爆させるのではなく、つまり怒るから暴力が発現するのではなく、暴力を説明するために怒りの感情が動員されるだけであり、行動化する背景にあるものを見つめるために怒りの仮面を剥くことが必要となる。親しい人にしか暴力が向かわないと、やはりその暴力は感情にま

かせてというわけではないことになる(この点については「臨床社会学の方法(32) 怒りが暴力を振るわせるのか-感情を生起させる「憎悪・嫌悪」の構図とアンガーマネジメントの乗りこえ-」第11巻第4号(通巻第44号)2021年3月に書いた)。

⑨ ジェンダーの暴力であること

男性性と暴力の背景には「欲望の構造」がある。(1)社会の中での地位の確認と達成めぐる競争、(2)心理的不全感や不満足にねざして他者への憎悪感情が表出されること、(3)その対象に女性や子どもや周縁化された男性が選ばれやすく差別と抑圧の再生産となること、(4)コントロール感や達成感が欲望されること等である。性犯罪は性的快楽・性的満足と結びつきながら、性欲だけではない支配欲や満足感を得ようとした行為であることは犯罪心理学で共有されている。

暴力を振るうことは、男性にとって、補償的、報復的、劣位回復的でありそのために動員される資源のひとつとして男性性がある。しかし究極のジレンマは弱い立場のものに向かう暴力であることである。力の弱い者に依存している無力さの証しが、対人関係における男性の暴力なのである。もちろん、これは男性の加害についての説明という限定をしなければならぬ。先述したような女性加害者と同性カップルの暴力については別の説明をしなければならぬからである。

4 加害者プログラムに出会っていないければどんな人生になっていたのかと想像してみる

先述したように被虐待体験がありながら、暴力を連鎖させていない男性のライフスト

ーリワーク研究が必要になる。暴力を振るわないことを学習したのだから、その分岐点には何が作用したのかを知ることができるからである。脱暴力を意識化してきた経緯があり、脱学習をした契機を知りたいと思う。子ども虐待の場合は自ら体験した体罰が直線的に影響したのだろうし、DVの場合は父母の関係性と相互作用の仕方からパートナーシップのあり方を学習したことになるのが連鎖なので、自らの子育て態度やパートナーシップの組み立て方を、暴力的ではないものとして選択した人たちの脱学習(アンラーン)の過程に学ぶことになる。もちろん加害の男性たちも、こうしたグループに参加する過程では、任意の選択として脱暴力への学習を開始したことを意味する。ようやく分岐点が訪れたということになる。

諸外国のように参加命令制度があり、ダイバージョン制度があるところでは強制的な分岐点設定となる。動機形成としては「強いられる動機」である。しかし日本の場合にはそれとは異なる任意で自発的な参加者なので、分岐点を自ら選択したことになる。これはかなり重要な立ち位置である。もちろん任意参加者とはいえ、保護命令も受け、離婚を提起されている男性もいるので、任意性は高くないこともあるが、それでも選択した相談者であるので動機としては重視する。

この点を深く掘り下げ、動機を維持していく対話としては、その物理的・身体的暴力の出来事は偶然ではないことへの理解を促すことである。加害男性の思考や意識からすれば、早晩、どこかの時点で発生する出来事は必ずである。つまり保持していたリスク

が発現したと考えていく。「事故」としての偶発的な身体的物理的ではなく、むしろ「事件」として形成され、いつかは起こるかもしれないリスクがあったと示唆する。リスクの理解は過去に向けてではなく未来へと向かう問いである。

さらにこの加害者プログラムに参加していなければどうなっていたらどうかと想像することを促す。暴力が連鎖しなかった人たちの経験知をここに環流させていく。次の諸点が重要だと考えている。(1)規範の内面化、(2)他者としての尊重、(3)親密な関係性の結び方、(4)家族以外の重要な他者の存在、(5)家庭教育とは異なる学校教育の影響、(6)反暴力の社会啓発の効果、(7)ジェンダー平等政策の影響等であり、加害者プログラムに活かすこととなる。

そして、グループワークなので他の男性の経験に学ぶことになる。長くグループワークに参加している人は4年目となっている。任意参加をとおして脱暴力へと歩みだした先人となる。夜間中学のような大人の学びをとおして脱暴力をしつつある先ゆく仲間としてピアサポート的な活躍をして欲しいと思える男性が複数いる。「脱暴力の連鎖」になるだろう。

もし加害者プログラムに出会わずそのままの生活であったらどうなっていたらどうかという問いは、脱暴力のライフストーリーワークへの歩みを確固たるものにするための想像力に働きかけようとする問いである。この問いは半ば自然に暴力を含んだあるいは肯定する、少なくとも否定しない生活があり、そうした習慣的行動からの脱出には意識的な脱暴力への実践とこれまでの習慣

からの脱学習が必要なことを意識化するための問いである。これまで一般に、DV、虐待、いじめ、ハラスメント等の対人暴力研究においては、被害者に向けて暴力が選択されたものであるという言い方で加害を説明する傾向があるが、暗黙理論、暴力神話、無意識のバイアス、マイクロアグレッション(善意の暴力)等、本稿が紹介してきた概念は、暴力が自然に身についていることを重視し、そこからの脱暴力こそが選択されるべきなのだという主張である。これはさらに別に論じていくことにする(参考文献:*The Voice: The Journal of the Battered Women's Movement*, Fall 2011., Is Domestic Violence a "Choice?" No, not exactly..., Phyllis B. Frank and Chris S. O'Sullivan, A publication of the National Coalition Against Domestic Violence, www.ncadv.org)。

中村正(立命館大学) 社会病理学・臨床社会学
2024年8月31日受理

『公明新聞』(2024年8月15日付)

加害者プログラムの受講者に語りかける要原理事長(手前)＝横浜市市内



DV 配偶者や恋人など親密関係にあるあつた者から受ける暴力。身体への暴力はもろく、相手を支配しようとする行為・言動を指す。配偶者暴力相談支援センターへ相談する全ての20年度(過去最高)は94.0件となり、それ以降も高い水準で推移している。子どもの前でのDVは「面前DV」として児童虐待に...

「怒り」の原因と解消法学ぶ

横浜市NPO 受講後、8割が関係修復

「暴力につながる怒り、は自ら選択した思考の結果。思考を切り替えることで怒りや不安を消すことができる」。平日の午後、横浜市にあるNPO法人「DV被害者支援センター」の要原加代子理事長がモニターに向かって語りかけていた。同法人が実施するDV加害者プログラムの一コマだ。

内閣府は今年度から、DV(ドメスティックバイオレンス)加害者の考え方や行動の変容をめざす「加害者プログラム」の全国展開に向けて、実施する自治体への財政支援を開始した。民間団体が行うプログラムの様子を紹介するとともに、内閣府の調査研究事業に携わり、自らも京都府で男性加害者への支援を行う立命館大学の中村正特任教授に話を聞いた。

政府「プログラム」事業に交付金

DV加害者の変容めざす

「暴力につながる怒り、は自ら選択した思考の結果。思考を切り替えることで怒りや不安を消すことができる」。平日の午後、横浜市にあるNPO法人「DV被害者支援センター」の要原加代子理事長がモニターに向かって語りかけていた。同法人が実施するDV加害者プログラムの一コマだ。

配偶者から被害を受けたときの行動

	相手と別れた	別れたらいいと思うが別れなかった	別れたらいいとは思わなかった	無回答
総数(462)	16.2	40.9	32	10.8
女性(289)	20.1	46.7	23.9	9.3
男性(173)	9.8	31.2	45.7	13.3

※内閣府男女共同参画局「男女間における暴力に関する調査報告書(2024年3月)」を基に作成

要原理事長によると、13年間で約1,200人が受講し、およそ8割はパートナーとの関係修復につながっているという。

被害者の7割以上「別れていない」
内閣府の調査では、配偶者から何らかの被害を受けた人のうち、「相手と別れた」と回答したのは16.2%。女性は20.1%、男性は9.8%。また、公明党は国への働きかけを強めている。今年5月30日に岸田文雄首相に手紙を送り、加害者プログラムの実施の促進を求め、8月7日に党内閣部会が林芳正副議長官に行つた政策提言でも「全国展開」を要請した。

「DV被害を受けたときは相手と別れたらいいと思うが別れなかった」と回答した人は32%。また、公明党は国への働きかけを強めている。今年5月30日に岸田文雄首相に手紙を送り、加害者プログラムの実施の促進を求め、8月7日に党内閣部会が林芳正副議長官に行つた政策提言でも「全国展開」を要請した。

公明、全国展開を後押し

DV加害者プログラムを巡っては、内閣府が2020年度から3年間、一部地域で試行事業を行い、昨年5月に「実施のための留意事項」を策定。今年度から、プログラム事業にも使える

私はDV防止法の制定前から、加害者プログラムを調査研究し、その必要性を訴えてきたが、ようやく国が予算を付けて推進する姿勢を示した。これまで避けてきた背景には「被害者救済がまだ十分でないのに、なぜ加害者対策を先行させるのか」といった批判が根強かったことが挙げられる。また指摘しておきたいのは、今の加害者は、かつての被害者でもあつたことが多いのだ。男性を例に挙げると、父



立命館大学 産業社会学部 中村正 特任教授

暴力の連鎖断ち切る契機に

親に殴られたり、抑圧的な態度で育てられ、ゆがんだ育ちのケースが少なくない。こうした暴力の連鎖を、どこかで誰かが断ち切らなければ、悲惨な事件は、今も繰り返される。これは、児童虐待の加害親にも通じる。欧米など諸外国では、裁判所がDV加害者に脱罪プログラムを受講命令を出すのが日本には、そうした仕組みがない。プログラムを実施できる団体・人材の育成といった課題はあるが、将来的にはそうした「法的的司法」の導入をめざすべきだ。早稲田大学が合意形成をリードしてほしい。

内閣府「共同参画」177号(2024年5月、内閣府男女共同参画局)

Topics1

トピックス

DV加害者プログラムの普及に向けて

内閣府男女共同参画局男女間暴力対策課

配偶者からの暴力の防止と被害者の保護を図る上で、加害者に働きかけることで自らの暴力の責任を自覚させる加害者プログラムは、被害者支援の一環として、重要な取組です。

内閣府では、令和2年度から3か年にわたって、5つの都道府県等の協力を得て、加害者プログラムの試行実施を行い、地方公共団体が加害者プログラムを実施する上での留意事項(注1)を取りまとめました。さらに、令和5年9月に策定した新たな基本方針(注2)では、加害者プログラムについて、「配偶者からの暴力の防止に向けて考えられる重要な施策の一つであり、被害者支援につながるものである」として、その重要性を示しました。また、今後の取組方針として、国は、前述の留意事項を活用した「加害者プログラムの実施を推進する」とし、都道府県等は、当該留意事項も活用し、民間団体等と連携するなどして、「加害者プログラムの実施に取り組むことが望ましい」としたところです。

新たな基本方針におけるポイント

◇加害者プログラムの実施の推進等

- 加害者プログラムは、配偶者からの暴力の防止に向けて考えられる重要な施策の一つであり、被害者支援につながるもの
- 国は、加害者プログラムの実施を推進する
- 都道府県等は、加害者プログラムの実施に取り組むことが望ましい

(注1)「配偶者暴力加害者プログラム 実施のための留意事項」(令和5年5月内閣府男女共同参画局公表)

(注2)「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等のための施策に関する基本的な方針」(内閣府、国家公安委員会、法務省、厚生労働省告示第1号)

このように、加害者プログラムは、調査研究から、更なる知見の蓄積を図りつつ、実践・実施していく段階に入ることとなります。

そこで、内閣府では、令和5年度の事業として、都道府県及び政令指定都市(以下「都道府県等」という。)のDV被害者支援の主管課等の担当者を対象にオンライン研修等を実施しました。

<研修講義の内容>

令和6年2月9日に実施した研修では、DV加害者に対するアプローチに御知見をお持ちの中村正立命館大学大学院人間科学研究科教授(開催当時)と田村伴子一般社団法人WERC理事に講義をしていただき、都道府県等の担当者約百人が受講しました。

中村教授は、社会病理学、臨床社会学を御専門とされ、「脱暴力」という観点から理論と実践の両面で加害者問題に取り組む研究者です。「DV被害者支援の一環としての加害者プログラムとは」と題した講義では、御自身が京都府からの委託を受けて実施されている加害者プログラムも紹介しながら、主に以下の点について述べられました。



DV加害者向けグループワークの様子：中村教授提供

- 公的な相談機関にはつながらない(被害者支援を求めない)被害者の配偶者の中には、地域社会内では葛藤を抱えつつ子どものためにも思いながら、なんとか社会生活を送っている場合も多い。こうした配偶者は、加害者プログラムを通じた働きかけが奏功する対象者であることから、受講を勧めることに、意味も効果もある。DV防止法による支援から距離を置いてサバイブしている被害者への支援の一環としても加害者対応が機能するという意味である。

- それぞれの加害者に合った「テラーメイド」の脱暴力支援計画と伴走型のプログラムの実施が重要かつ有効である。加害者向けのソーシャルワークはないのだから、加害者プログラムがそこに存在することに意味がある。
- 刑罰のようにプログラム受講に強制性を持たせることではない形で「脱暴力のシステム」が地域社会内で構築されることが急務である。

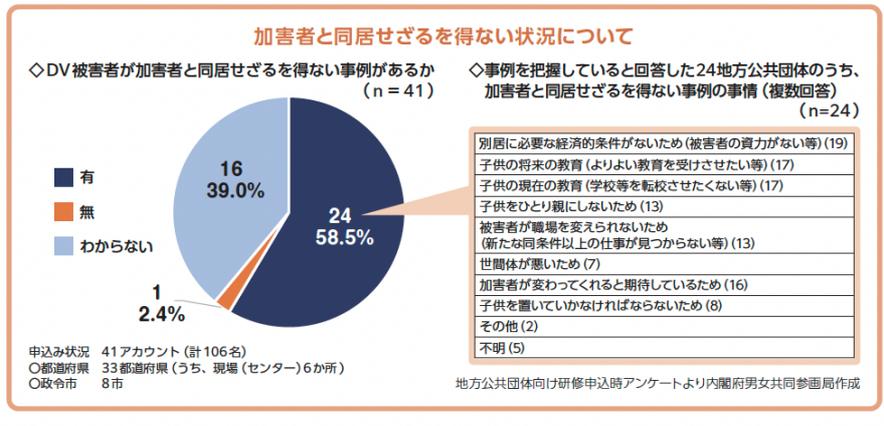
また、田村理事の「被害者支援の観点からDV加害者プログラムについて考える」と題した講義では、主に以下の点について述べられました。

- 避難することを前提とした行政の「one size fits all」(ひとつのサイズ(支援施策)をみんな(すべてのDV被害者)に合わせる)の被害者支援の在り方では、別居後に居所を秘匿することが難しい地域に居住している被害者や、発達特性を持つ子に慣れた学校に通わせ続けたいなど、同居を継続せざるを得ない事情のある被害者に、安全に暮らすための選択肢を示せないことが問題。
- 「DV加害者と同居する選択肢を与えることは危険ではないか」であるとか、「DV加害者プログラムなど効果がないのではないか」といった意見があるが、加害者が多様であると理解することが必要である。任意参加の加害者プログラムで一定の効果が得られる加害者かどうか、加害者の危険度を適切に判断(リスクアセスメント)することが不可欠だと認識している。

- 加害者に「責任を自覚させる」には、その前に、加害者に、暴力的言動は自らで選択してきたと認識させる必要がある。意図した行動(非暴力的言動)を選択している/いくことの実践が必要で、プログラム受講で変わってきた加害者がいた。
- ここでの「責任」とは、被害者との応答の中で構築されることであり、将来的に誰に対しても加害行為をしない等の責任を持つことも含まれる。なので、被害者支援の一環としての加害者プログラムについて、被害者支援側の理解を進めていくことも重要。

本研修の受講者からは、「現在、配偶者暴力被害者に支援できることは、加害者からの避難に限られるという課題があるが、自治体が加害者プログラムをできるようにになれば、被害者の未来の選択肢が増えると考えることができた」、「加害者像は多様であり、それに応じた支援・対応方法を考える必要があることが分かった」などの感想が寄せられました。

内閣府では、本稿で紹介した研修事業等を通じ、加害者プログラムに係る理解の促進に努めています。また、令和6年度には、都道府県に対する交付金の対象事業に加害者プログラム事業を加えました。今後、この交付金の活用状況等も踏まえつつ、加害者プログラムの実施を更に推進していきます。



リクナビに広告を出す理由 ～人が育つ会社論～

日本の就活は、若者の活力を奪う装置になっていないか

アソブロックの社長に戻り、就職ナビサイトへの掲載を再開した。

リクナビ。

オワコンと言われようが、やはり今も多く的大学生が見ているわけで、就活が日本の若者の活力をある意味奪っている側面もあると思う身からすれば、一石を投じるならここだと思ひ、「世の中には、いろんな会社があるんだなあ」ということを伝えるためだけに、ナビサイトに掲載をしている。

なので文章もちゃんと違和感を感じてもらえるように。

エントリーを募るために、本音と建前を使い分けたりはしない。

きもっ！と思われたら本望で、でも、きもくても 20 年続く会社もあるわけで、

- ・内定を得るためには本音と建前を上手に使い分けることが大切だ
- ・社会人になるということは、子どもみたいなことを言わないということだ

などという学習は、決してマストではないと。

そんなメッセージが、ひとりでもふたりにでも届いたらと思っている。

ということで、リクナビに掲載した広告文を共有させていただきたい。



【私たちはこんな事業をしています】（←見出しはリクナビが指定する）

主な事業はありません。

例えば、私たちは世田谷区で「駒沢こもれびプロジェクト」を主導しています。

でも地域活性事業者かと問われれば、そうとも言えません。

私たちが取り組む理由はひとつ。

「駒沢をより善くしたい」と強く願う依頼者を、心から応援したいと思うからです。

例えば、私たちは大人の学び場をいくつか開いています。

でも社会人教育事業者かと…（以下同文）。

私たちが最も大切にすること、それは――

【当社の魅力はここ!!】（←同上）

●人が育つこと

これに尽きると言っても過言ではありません。会社って、100社あれば、100通りの在り方があってしかるべきだと思います。ただ現実には、事業は100通りあっても、会社の在り方は「みんなで事業を大きくする」ということに集約されがちです。例えるなら、事業という神輿を、みんなで担いでいる感じ。でも私たちは、神輿が人で、担ぎ手が事業だと考えています。もちろん事業（仕事）はとても大切ですが、それは、人の育ちに不可欠だから。極端に言えば、儲かる事業でも「やりたい人」がいなければ、やりません。だから、主たる事業が、ないのです。

●育つとは、選択肢が増えること

私たちは、会社を「人の成長支援プラットフォーム」だと位置づけています。では成長とは何か？ それは、「選択肢が増えること」だと私たちは考えます。例えば、今この文章を読んでいる皆さんは「起業する」という選択肢は持ちにくいのではないのでしょうか？ 「卒業後は渡欧して現地企業で働く」という選択肢も、持ちにくいのではないでし

ようか？ 成長するとは、それらをも可能にすること。つまり、社会に有用な私として、どこでも生きていける自分になる、ということです。私たちは「生きるために働く」という考え方が好きではありません。その言い方が「働くことの本質」と向き合う機会を遠ざけさせていると思うからです。

●アソブロックは、ニュータイプのブラック企業を目指しています

私たちはニュータイプのブラック企業を目指しています。と聞くと、引く人もいるでしょう。この言葉には、「ブラック」や「ハラスメント」という言い方で会社が距離を置いたものの中に、本来、人材育成に向けて失うべきではなかった要素がたくさんあったのではないか、という想いを込めています。先輩から何一つ怒られなくて、成長できますか？

「無理なくていいよ」と声をかけられ続けられて、一流になれるですか？ 「新卒即戦力採用」なんて、育成放棄の言い換えだと私たちは考えます。もちろん、全員に頷いてほしいと思っているわけではありません。あくまで、私たちのスタンスだにご理解ください。

【インターンシップの内容について】

●色んな生き方をする大人に出会えると思う、たぶん。それはきっと、今必要なこと

皆さんに何をしてもらって、正直、私たちが的是にはどうでもよくて。とにかく、大学卒業までに色んな大人に出会ってほしいと思います。でも、もちろん、プログラムに興味を抱いて参加してくださるのも大歓迎です！

ほかに、勤務条件などを書く欄があり、そこはこのように書いた（一部抜粋）。

▶雇用区分

社員、委託、契約。アソブロックにおいて、そういった雇用区分に意味はありません。アソブロックに関係するひとたちは、等しく「メンバー」です。

▶就業規則

アソブロックには、就業規則はありません。好きなだけ働くことができます。ここでいう「好きなだけ」とは、自分自身にとってベストな就業時間を理解し、設定し、そう働けるように仲間にも共感してもらえんことを指します。

▶チームが大切にすること

みんなでご飯を囲むこと。

新入社員の目標は、事務所近く・あけぼのばし商店街の飲食店を、片っ端からすべて食べることに。

▶卒業制度

アソブロックは、独立も積極応援しています。
人がより良く育つには、ずっと一か所にいることが必ずしもベストではありません。
故郷には、離れてみて分かる良さもあります。

▶好きな人物像

動く哲学者。

▶事務所近くのパン屋

小麦と酵母 満
味付たまご（180円）がおいしい。

▶事務所近くのトンカツ屋

とんかつ 山さき
ロースカツ定食は、800円。安くておいしい。

▶事務所のゴミ出し日

燃やすゴミ 水・土
資源ごみ 金

▶事務所のいいところ

桜が大きい。梅がなってる。小さい植物もたくさんある。雨が降ると尚きれい。

▶人事スタッフ・熊谷の働き方

アソブロックの業務に加え、フリーの編集者に就いてアシスタント・スタッフ業を兼務。
スーパーの品出しバイト（早朝）も週3日で行う。最近、バイトメンバーでバンドを組むことになった。熊谷はボーカルらしい。

▶人事スタッフ・熊谷の最近の出来事（本人執筆）

千葉にある某巨大テーマパークは、あまり好きではない。
そう言っていたら、同じことを言うメンバーが4人集まったので、夕方パスを使って行ってみた。好いていないことがバレたのか、その日は傘を貫通するほどの大雨。
乗り物にたくさん乗った。カチューシャもポップコーンもちゃんと買った。

子どもの頃には気づかなかった宣伝広告をたくさん見つけ、
夢の国もいつだって現実と戦っていることを実感し、なんだかよかった。

掲載後、いろんな反響をもらったが、その大半は「よく広告審査が通ったな（笑）」というもの。たしかに、就業規則は法令的になるとダメだ。

ちなみに、アソブロックにも就業規則はあって、顧問の社会保険労務士が、アソブロックの実態と法令をぎりぎりにマージしたものを作っているらしい。らしい、というのは私が興味もなく見たことがないから。そんな親切な顧問の先生たちも、アソブロックの成長支援プラットフォームの担い手である。

文/だん・あそぶ

「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、アソブロック株式会社、株式会社 ea、有限会社 salvia、株式会社小さな広場ほか、10社近くの業態様々な会社の経営・運営に携わる。その独自の経営手法が、働き方改革の流れで注目され、全国でワークショップや講演も行っている。21年より対人援助学会理事。24年4月に軽井沢にある学校法人風越学園の理事に就任した。

団遊の組織論 ; <https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/>

団遊の採用論 ; <https://job.cinra.net/special/asoblock/>

仕事を辞めなくなったときに ; <https://goo.gl/bFQdpC>

カウンセリングのお作法 第40回

CON

Counseling Office Nakajima

カウンセリングオフィス中島 中島(水鳥)弘美

～学校と外部相談機関の関係性～



前回は、家族カウンセリングの関係機関である、病院などの医療機関や学校との連携について話しました。

今回は、そのなかの学校と外部相談機関との関係性について話します。

私立高校生の不登校

現在、公立小中高等学校の多くは、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど専門の相談支援担当者がいて、児童生徒が安心して学べるようにサポートをしています。一方、私立学校のなかには、教育相談担当という位置づけで、教員が担当しているところもあります。カウンセラーの配置はかなり進んでいるものの、専門職の相談員がいるとは限りません。そのような場合は、学校が外部の専門相談機関を紹介することがあります。

たとえば、私立高校一年生の生徒さんが不登校状態になった場合を考えてみましょう。

欠席が長期化し、クラス担任や学校側がアプローチしても、何も変化がみられない状態に陥ることがあります。保護者と連絡はとれるものの、本人に会うことができず、学校関係者がかかわること自体が生徒さんにとって、大きな負担になるような状況です。

生徒さんの保護者の方々が、独自に相談機関を調べて利用をする場合もありますが、学校関係者が専門的な支援が必要であると判断した場合は、外部の相談機関をすすめる場合があります。

中立的な立場で生徒家族支援

長期にわたり欠席が続くと単位取得ができなくなるつまり、留年になる可能性が出てきます。そのため、今後の進路に関して、本人の意思表示、決断が必要です。

欠席している生徒さんにとって、この決断は大仕事です。再登校ができず、欠席を続けると本人の意思にかかわらず、留年になり、来年度ひとつ下の学年でもう一度やりなおすこととなります。

学校側から原級留め置きであると明言される前に転校をするなど、限られた時間のなかで、そのほかの選択を考える必要があります。

しばらく休憩をとってもう一度同じ学年を続ける、異なる学校に転校する、再度高校を受験し直す、就職する、あるいはそのほかの進路の選択を何か選ばなければなりません。

在籍している学校にはもどらず、別の学校に転校したいような希望がある場合、どうしても留年だけはしたくないとの希望があるような場合は、学校内のスクールカウンセラーには話しづらいと本人や保護者が考える傾向がありますが、外部相談機関であれば、中立の立場で支援をし、本人のあらたな進路をともに考えてゆくことができます。

在籍している高校そのものについて無理を感じるのか、留年することが耐えられないのか、人とのかかわりがむずかしいのか、勉強そのものに限界を感じるのか、さまざまな要素が絡み合うなかで、何を希望するのか、少なくとも避けたいことはなにか、家族とともに今後希望する道を描いてゆくための支援を行います。

これからの進路を家族で話し合い、道を選択して、新しい環境に慣れるまでの支援も継続して行います。

その流れのなかで、通信制の学校などに転校した場合は、新しい学校と相談機関との連携を行い、チームとして生徒さん家族を支援し、前の高校への経過報告もおこないます。

長期にわたるゆっくり支援

関係機関と協力して支援をする部分もありますが、外部の独立した相談機関の特徴として、長期にわたるゆっくりペースの支援があげられます。

校内のスクールカウンセラーは在学中のカウンセリング等が中心になり、生徒さんが卒業後、あるいは退学、転校して、高校に在籍しなくなると、相談支援をする対象でなくなります。しかし外部の独立した相談機関であれば、ご本人と家族が希望する限り、支援の対象となります。

大学生、社会人になってからも支援

大学に進学したあと、あるいは、卒業後、社会人になってからも、節目節目で経過報告のために、来所されることもよくあります。

大学入学など環境に大きな変化があったときは、大学合格の報告とともに、学生生活についてもいろいろとお話を聴かせていただき、就職先が決まりどのような仕事なのか、期待や不安も含めて、いろいろ語られます。

大きな問題に行き詰っているわけではないけれど、ちょっと話を聴いてほしいと、不安解消のために来所されることもよくあります。それはまるで予防カウンセリングのようなものであると考え、気軽に話していただける存在になっているようです。

もちろん、社会人なりの深刻な相談もあります。

就職先でトラブルになったので、またカウンセリングに通いたいと予約が入ることがあります。結婚後の自分自身の家族、子どもさんに関してのカウンセリング希望もあり、長きにわたるお互いの信頼関係をもとに、ともに今後の方向性を考えていくこととなります。

家庭医のようなホームカウンセラー

さらにこれまでのクライアントさん以外、つまり別の家族が問題を抱えているので、そのことを相談したいと、来所されることがあります。別のきょうだい、あるいは親御さんにまつわる支援などです。

家族は、家族のライフサイクルに応じて課題があり、そのステージの変化に応じて支援が必要な場合があります。

子どもさんが高校生のときからの長いかかわりのなかで、保護者の方を含めた家族全体を知り、理解していることが多いため、まるでかかりつけの医師のように、ホームカウンセラーをさせていただいています。

晩年

D・A・N 通信

No.9

2024. 05. 21～2024. 08. 20

団 士郎

仕方ないことだが、まあ身のいろいろなものに不具合が起きる。なのに心身は今のところ至って順調である。私の身代わりをモノたちが引き受けてくれているのかと思ったりするくらいだ。だから悪態をつかず、周りの人に助けられながらメンテナンスにいそむ。何事も維持継続はなかなかの労力やコストが必要だ。

Iphone の容量がギリギリになって久しかった。加えて一度交換したバッテリーが持たなくなっていた。5年あまりも使っていたから諦めて買い換えに。できるだけ何も変化させたくなかったのはたしかだが、バッテリーが長持ちするようになった以外、前とほとんど変わらない。ただ電源が変わっていて手持ちのアダプターや充電機器は皆使えないみたいだ、しらんけど。

大音量で映画を観ても、「うるさい！」とは妻が亡くなってから言う人がないので導入した大型TV。結構楽しんでいたが、当たりが悪かったとみえて、ここ半年ほど使えなくなっていた。修理に来てもらったが部品交換で結構な高額。でも観られるようになった途端、映画鑑賞への意欲が高まる。観たことのある映画の好きな場面(ダイハード2の導入部)とか、オープニングからしばらくとか、部分鑑賞を楽しんでいる。

5/ *

金沢に行くのにサンダーバードで敦賀に。そこで北陸新幹線に乗り換えなんて、全然快適じゃない。落ち着いて読書する時間もない。金沢駅近くの展示会場で漫画トーク。部屋一杯の人が聞いてくれた。世話人さんたちと記念撮影。多くが20年付き合いだったりする。



5/ *

翌日は石川県津幡町にこんなところがあって、その研修室で三時間の講演会。40名余の出席。



帰路、内灘町の地震被災現場を見る。砂地の地面が隆起、陥没していて、まっすぐ建っているものがない。電柱まで少し沈んで低くなっていた。ここは能登半島先端地区ではない。報道もほとんどされないそうだ。

行きと同様、敦賀駅乗り換えの特急で戻る。敦賀駅での新幹線から在来線への乗り換えについてYouTubeがあるなどというわけのわからない情報に触れて、何のことだと思って検索してみたら、こんな新聞記事があった。

確かに三階ホームからサッとエスカレーターで一階ホームの乗り継ぎサンダーバード指定席に座ったら、発車2分前のアナウンス。ここで手間取ると評判が悪くなるかと思って設定した時間配分のミスだろう。

北陸新幹線の敦賀駅 在来線乗り換えシミュレーション

北陸新幹線 [+ フォローする](#)

2024年1月18日 19:38



JR西日本は18日、3月16日の北陸新幹線金沢—敦賀間の延伸開業に向け、敦賀駅（福井県敦賀市）で新幹線と在来線特急との乗り換えを再現するシミュレーションを公開した。JR西日本とグループ会社から約1000人が参加し、乗客役の人をスムーズに案内できるかなどを確認した。



5/ *

「関心領域」こんな映画タイトルがあるかと思ったが原題だった。チラッと週刊誌映画評で目にしていたが、忘れていたら町で眼にとまった。見始めて紹介を思い出した。

それにしても気持ちの悪い人たちがばかりが出てくる。映像の違和感は撮影手法を知って納得だった。あの場所には行ったことがある。





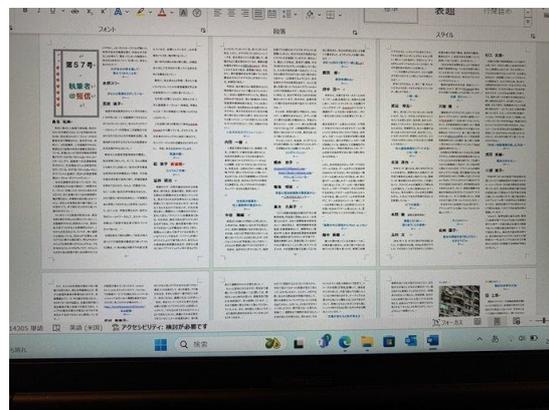
5/ *

大阪府高槻市は中、高、大の時代、つまり思春期を過ごした懐かしい場所。そこで暮らす13歳からの友人が民生児童委員会の副会長をしているので講演をと呼んでくれた。大ホールで100分ばかり快調に話す。終了後、二人で食事しながらアレコレ話す。元気で長生きならばこそその時間。



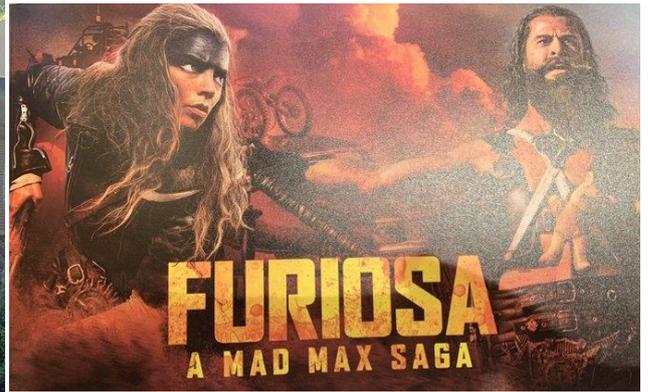
5/ *

今月の新作木陰の物語のペン入れが済んだ。あとの作業は仕事場のPCでないとできないのでこまで。月末締め切りの対人援助学マガジン57号、届く原稿の中から執筆者短信を入力していく。新刊書の校正原稿仕上げが大詰め。月末までにと心づもりしていたので多忙な5月末になった。



6/ *

半年に一度、亀岡の「AURA 学びの森」にお話に行くようになって5年。今日が9回目だ。継続が力なのは、この地で北村夫妻が二十数年続けてきた教室を見ると明らか。それを知った人が遠くからも通ってきている。本日は「家族の身体と声」をテーマに120分話す。今日もあっという間に終了時間だった。

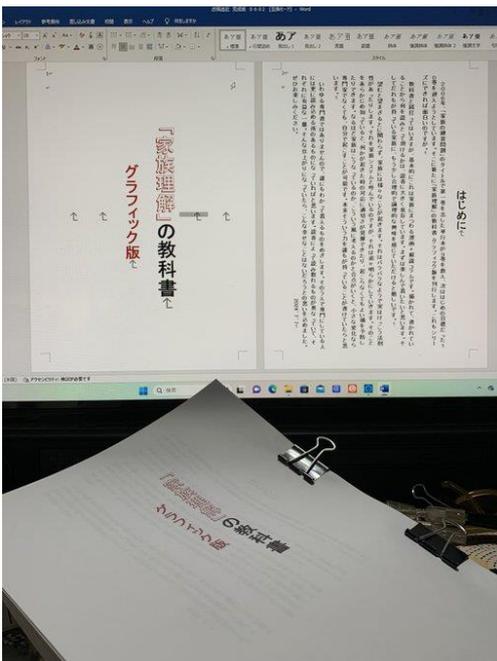


6/ *

6/ *

第二稿にあたる大幅整理をした新刊用原稿が完成した。今夜、明日に最終通読をしてから編集者に送る。第一稿よりスリムになって、複雑さはなくなった、と思う。まだこれからキャッチボールがあるから、完成はしばらく先だ。どんな本になるのやら、楽しみだ。さて、次はマガジン 57 号の編集。

同じ原稿を何度も読み返していると飽きる。気分転換に映画を挟んでと選んだのがこれ。前作、「マッド マックス 怒りのデスロード」がびっくりものだったので、さて今回は？と 4DX 劇場で観た。振動が激しく、水飛沫も飛んできて、ずっと落ち着かなかった。前作が再見しなくなった。



6/ *

昨日は仕事場に時々訪ねてくる Mさんと楽しく四方山話。深夜は今日の対人援助学マガジン編集会議の準備。合間に Netflix の無駄話を楽しむ。今朝はストレッチのあと、ドトールで送信済みの新刊の原稿読み直し。とにかく二時間で通読しての感触を測る。じっくりするまでにもう少し何かが必要。



6/ *

マガジンの編集会議は恒例の coco 壱番屋のカレーを宅配してもらう。チラシを見て注文する時、高くなったなあとの声に、過去のチラシを比べてみた。2017、2023、2024 と同じものを並べてみた。凄いな！



6/ *

貸し出していた掛け軸が戻ってきた。この後草津で開催のパネル漫画展用の作品選択、搬送にWさんとHさん来訪。段取りはついて

いるからお茶しながら雑談に花が咲く。整理していたら 2015 年の NY 展の看板掛け軸が見つかった。サイズも大きく、もう使うことはないが、玄関の吹き抜けならサイズ十分と見て掛けてみた。なんか、ちょっといい。



6/ *

再来週 6/19 夜の zoom 講座「帰ってきたトークライヴ」の演題が固まりつつある。何を話そうか思案してきたが、なかなかよっ！とならなかったのが、今日一気に二話、ググッと浮上してきた。お時間あればご参加下さい。



6/ *

対人援助学マガジン 57 号の編集作業が大詰め。今回は病気や怪我など、執筆者に不測の事態かあれこれ発生。休載の方が多い。そのせいで 250 ページ余になった。定例の

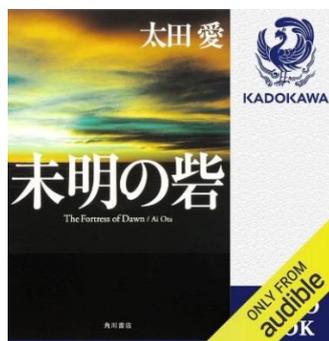
6/15 にアップはできると思います。どなたでも無料でご覧になれます。いましばらくお待ちください。



6/ *

昨日は、滋賀県内の知人二人だから、自宅に来てもらって大いに語る。我ながらどんだけ喋るのだと思った。その後、夜の草津市家族勉強会でも勢いよく話す。

今聴いている本が面白く、そこに出てきた「ヒロポンと特攻」の話をしたら、以前その話をしたと言われた。全く覚えていないことに愕然。



6/ *

さて、大詰めめの差し替えも完了した。明日、対人援助学マガジン 57 号が定期刊行されます。今回は 250 ページあまり。いつもより少々コンパクト。お気に入りの連載が休載の場合もあります。とりあえず確かめてみてくだ

さい。私は、自分の連載内で新連載をそつと始めています。



6/ *

今から弘前 WS(青森)に行って、明日には戻ってくるという、いつもながらもったいないような旅程。伊丹空港搭乗口手前のイトインにいる。空港の食物はどれも高い。そんな中で、名店喜八洲のみたらし団子。一串 108 円。希望の数だけ食べられる。隣のたこ焼き屋は 8 個で 920 円。一個が 115 円。何様のつもりだたこ焼き！



6/ *

朝の弘前駅前。チェックアウト後、N さんに迎えにきてもらって会場に。岩木山の見えるいつもの会場。馴染みの方達と初参加の方達で、一日六時間、家族理解ワークショップ。何回

目になるのかわからんくらいだと世話人が挨拶。2000年より前から来ていたような記憶が。



6/ *

今月の例会は、先月亡くなったぼむメンバーでもあった坂口の事務所に、うち揃ってお悔やみに。その前にランチ会。そこで篠原がこんなミニ写真集を皆に配ってくれた。遺族の知らない故人の姿をということで手渡すという。心配りの効いた偉い人だなあ。



6/ *

滋賀県草津市のここでマンガ展やっています。

書店で本もご購入いただけます。漏れた号をおそろえください。

【書店】
Book House ひらがきエイスクエア店
(エイスクエア SARA 2F)

<http://www.ayaha.co.jp/asq/>

期間中「家族の練習問題-木陰の物語-」1～9巻の在庫がございます。
=====

*書籍は全国の書店さんで取り扱いがあります。お取り寄せになることが多く、その場合数日お時間いただきます。



6/ *

ゆとりを持って行動している。しかし、JR 駅に来るとダイヤが乱れていた。次の電車は一本飛んだような状態だった。駅のベンチで20分ほど時間を潰す。約束のストレッチの時間に間に合わない。まあこれくらいのことなら仕方ないか。と思って、いろんな不運のある世界をこんな顔で歩いている。



6/ *

昨夜は 2020 年から zoom で始めた「帰ってきたらトークライブ」の十回目だった。一時間話の二本立てだ。二話目には 2000 年頃までよく描いていた一コマ漫画作品について、蛇足解説を語った。一枚のマンガの背景にはたくさんの描かれていないモノが詰まっている。これは 50 年前に描いた大ヒット曲「泳げ、タイヤキ君」



6/ *

今年も立命館での東日本家族応援プロジェクト+の例会が始まっている。だんだんボケてきていて、自分の日程管理がルーズだった。そのため浜松プログラム前泊予定を変更。参加者には迷惑かけずに済んでいるが、余裕を見た時間を削っている。雨、大丈夫かな？



6/ *

浜松の家族理解 WS に日帰りするため少し早起き。近年、JR の定時運行が信用できなくなったのでとにかく早めに駅へ。在来線は通

常運転で安堵。しかし新幹線、乗車予定の一つ前の列車が 10 数分遅れている。名古屋乗り継ぎがどうなるか知らないが、空いてる席に乗る。すると久々に検札がきた。

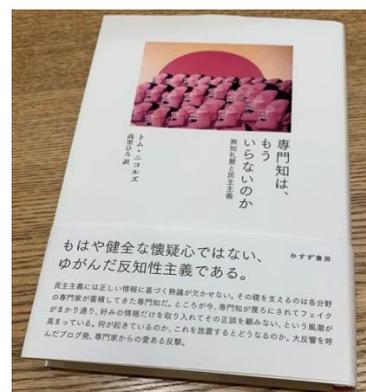
6/ *

昨日の締めは浜松駅前で鰻。ちょっと久しぶりだったがやはり美味しかった。今日は家にいて、本発送の集荷に来てもらう。同時に嬉しいお届け物もあり、先週のさくらんぼに続いて、良き黒猫の来訪だ。メールは宛先不十分で届けられないなどと怪しい事ばかり言うので無視だが。



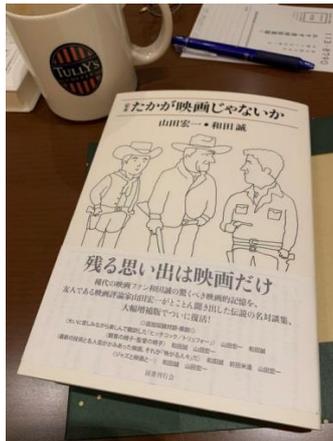
6/ *

そそられるタイトルの本の事を、SNS に誰かが書いていた。早速注文、すぐ到着。読み切るかどうかはともかく、いろいろ言いたいことが峻されそうな雰囲気だ。知を何のために、誰のために使うのかは、いつも考えていなければならぬと思ってきた。そして、なぜそう思うのだろうかとも。



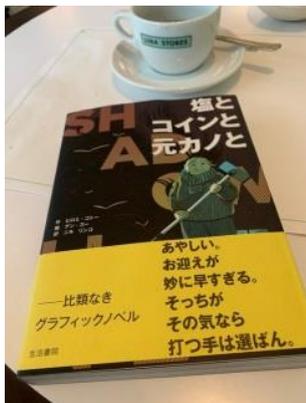
6/ *

この本は持っているんじゃないかと思った。1978年に刊行されてヒットしたという。書棚を探せばあるんだろう。和田誠さんは亡くなって、山田宏一氏が対談をいくつか追加して決定版にしたという。早速拾い読みしたが面白い。映画はテーマではなく画だと意気投合しているのがいい。



6/ *

ストレッチの後、いつもとは違う選択。するとそこで思いもかけなかった新しい本に出会い、続いて数冊も。その後、同じ場所の初めての店でランチ。ここの味がいい。手に入れた本を見ながらゆっくり楽しむ。すると新たな創作物のプランがひらめく。しばらく退屈していたから嬉しい。



6/ *

ただいま、このようなことになっています。お時間見つけて、ぜひお運びください。



6/ *

その昔、毎週末乗っていた山陰線の特急で福知山に向かう。ここ三年、毎年この時期に、私の話が好きな人たちに招かれて、話したい事を自由気ままの三時間漸。福知山は我が子たちが人生の初期に育った場所。私は20代から30代の半ばまで11年暮らした街。福知山なんて昔は誰も知らなかったが、近年は時々目にする。



6/*

今年前半の締めがこれ。20年ほど毎年出向いている。こういうプログラム構成だと、大抵、後の出番は押して押して、すみません、ちょっと短めに・・なんて事も多い。ところが今日は何と早めに終わってしまって、予定より早く開演のはこびに。気楽に長めに、だらだら喋らせていただきました。

夏の交流会

2024 **6/30** 日 13:00 ~ 16:00
YOSHUホール

主催：NPO法人FLC安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

タイムスケジュール	お申込み・お問合せ
12:30 開場	メール・郵便・申し込みフォーム いずれかにて、ご連絡ください。
13:00 パールノートピアノ演奏	〒530-0035 大阪市北区河内1-11-1 ハイネ美術館202 フォリアン呉村
13:40 人もねこも 一緒に支援プロジェクト活動報告	E-Mail info@pofic.net
14:30 団士郎さんトークライブ	会員 当日 1,000円 予約 800円
16:00 閉会	参加費 非会員 当日 1,200円 予約 1,000円 ※学生は半額

団士郎さん 「木陰の物語」の物語2024

家族心理臨床家「仕事場D・A・N」を主宰
マンガ家、コラムニストとしても活躍し、多数作品を発表。
全国で家族療法のワークショップや講演会を実施している

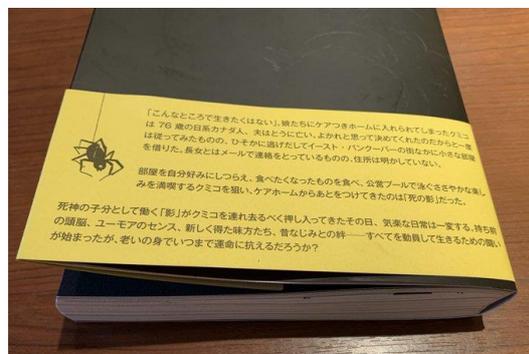
7/*

雨の日は外出しないで自宅仕事。「木陰の物語」新作の下書きが完了。ここからペン入れて、PCに取り込んで、再レイアウト。墨や影を入れて、キャプションをいれる恒例の作業。何度繰り返しても新作ができるのが嬉しいのが続いている理由だろう。今作のタイトルは「深夜」。



7/*

夜中、新作を仕上げて編集部へ送信完了。今日はストレッチに行って、その後京都開催の漫画家協会展を覗き、Sとしばし歓談。その後この350ページのグラフィックノベルを読む。なかなか不思議な興味深い物語だった。途中で気になったこの版元生活書院。ずっと昔に関わったことがあった気がする。



7/*

積読ペースが加速している。仕事場、自宅にAmazonからの配達が続く。ちょっと書店を覗くと興味深いものが。そして今日は久々に

BOOKOFFに立ち寄ったらアラアラ。陳列の違いで見つかる新たな興味もあって、読む時間が足りない。なのに audibleにもハマっているのだからしょうがない。



7/*

現在、草津市で漫画展開催中だが、更にもう1箇所。福島県での巡回展がスタート。今後、4箇所でお世話になる。いろんな人のお世話で、あちこちで見てもらえるのはありがたい。お近くならぜひご覧を。そして8月末には14年目の東北訪問。東日本家族応援プロジェクト+福島である。

岡工郎 家族漫画展 & トーク

届かぬ想いを届ける小さな物語。漫画家と家族療法士が心を繋ぐ。大学を舞台に描かれた家族をイラストとトークで再発見。お話を聴き、自分ごとで考える。お話を聴き、自分ごとで考える。お話を聴き、自分ごとで考える。

会場	日程
リゾらん (図書館)	7/4(木)~7/9(火)
大蔵公民館	7/25(木)~8/2(金)
櫻井公民館	8/3(土)~8/18(日)
白河市東文化センター	8/21(水)~8/30(金)

会場：白河市立図書館「リゾらん」会議室
8/31 (土)
漫画トーク
 とき：10:00~11:30
「うたとおそびとおはなし広場」
 とき：13:30~14:30
 詳細は NPO法人しらかわ市民活動支援会 まむさまむらび 0248-27-2090



7/*

理由はわからないけれど、ずっと気になっていた映画「フレンチアルプスで起きたこと」を観た。こういう場合多くが、それほどでもなかった

で落ち着く。しかしこれは違った。人が殺されたり、大事件が起きたりはしない。なのにイヤイヤ強烈な映画だ。そうかあ、そうかあと思苦しさの二時間余。



7/*

暑過ぎて外出する気持ちが萎える。涼しい部屋でゴロゴロ読書など楽しむ。高齢者ゆえ、お許しいただきたい。あさのあつこさんの時代小説にハマっている。昨日は旧知の人からのLINE電話で二時間ばかり、彼の今後の戦略会議。いろんなことが様変わりだ。都知事選の後始末、石丸叩きが騒がしい。



7/*

世の中の動きを、どこかに足場を定めた他者と語りあうことは、意見の差はあっても楽しさがある。垂れ流される話を情報だと受け止めてしまう安易な感性を叩き起こしてくれるからだ。歳をとると面倒臭い一言で諦めてし

まっていることが少なくない。それじやいかな
と今日は5年ぶりに機種変更に



7/*

次男が家のメンテナンスに来てくれた。大型
TVの故障をSONYの修理センターに依頼して
くれている。基盤の取り換えはなかなかの高
額。観られるようになって意欲高まる。植木
屋さんが入ったあと、周囲の雑草が目立つ玄
関周り。酷暑の中、その草抜きもしてくれた。
ランチはちか定へ。混んでいるだろうとは思
いつつ行ったので、17組目だったが待つ。



7/*

祇園祭間近の日曜。人出の多い四条烏丸付
近でK君、M君とゆったりランチ。実は長い付
き合いの、同じ大学心理学専攻の三世代であ
る(といっても皆、50オーバー)。食後は仕事
場に来て、彼らはいつものように途中で買った
ワインを。今昔話、業界、人物評、なんでもご
ざれの六時間弱。そして飲まない私のところに
空き瓶が残る。



7/*

後期高齢者医療保険料の通知がきたので支
払いに。高いなあ。新しくなったiPhoneの充電
ラインをもう一つ手に入れに。髪を切っておき
たいので、月曜だけど今日はやっていると聞
いていたHANDSへ。その後、次のマガジンの
準備で、まずは表紙を仕上げる。時間があ
るときには、あれこれやっておきたい。



7/*

こんな登場人物の掛け軸漫画制作を開始した。最終的には来春のぼむ展に間に合えば良い。時間があって気が向いたときに作業すると楽しい。何度でも試行錯誤可能だし、見切り発車しなくて良い。好きでやっていることにノルマ感を持ちたくないの、やたらに早くスタートする。これが秘訣だな。



7/*

外は暑い。ノルマは少ない。ならばインドア派だな。月末のWSの準備をしたり、ネットで映画を見たり。そしてやっぱり掛け軸作りの二作目を試してみたり。この時代小説三部作も最終巻、まもなく読了。一人時間の楽しみ方が上手になったのか、バランスが良くなったのか。



7/*

曲者ならば「名をなのれ！」になるのだが、失せ物は黙っていなくなる。眼鏡などその最たるもの。おや？消えたな？と思ったらもう見当たらない。仕方ないので新しくした。毎度同じ店に行くとボケ老人と思われそうで、ちがう眼鏡屋に。気に入っているが、ほぼ近眼は消えたと言われた。



7/*

夏を感じている表明にアロハ。いつの頃からか気に入って、体は一つなのにコレクションみたいに所有している。誰かの着ているアロハも、街でもTV番組でも常に気になる。そして、去年3月にホノルル空港で、なんとなく買いそびれたアロハがずっと気になっていたりする。買っときゃよかった。



7/*

ストレッチに行こうと、泊まり込みの職場を出たら、御池通は大混雑。エッと思ったが祇園祭のあと祭りだとか。なんだそれ？ 混雑を避けて目的地に。一時間が終わって表に出たら夏っぽい大雷雨。濡れないように道を選んでトールで新作の校正中。お祭りになると日本人比率も少し上がっている。



7/ *

月末から8月はじめに、出向く仕事を立て込んでいる。そのため月例の新作制作ができないので、早目に着手、完成させる。ペン入れ作業のBGMは時代物オーディブル。吉川英治は初めてだ。藤沢周平は鶴岡市の文学館に行ったのに休館だった。よくそういうことがある。



7/ *

Facebookで繋がっている知人が、家族の練習問題第4巻のことを書いてくれていた。嬉しくてコメントを返した後、本棚から出して久々に読んでみた。"悲しみも、哀しみも"の副題もいと書かれていたが、読み返してみても

当にそう思った。12年前に出た自分の本に、ウルツとした。コラム陣も凄い。



8月10日開催、74回目の東京WSの告知です。お盆です。お時間あれば、初めての方も、専門ではない方も、家族のことを考えてみませんか？

三 www.asoblock.com

2024.07.07 12:39

【8月10日東京】第74回家族理解ワークショップ東京

通算74回目の東京開催は、8月10日土曜日にエコルとごしで行います。ご興味のある方は下記をご確認ください。

【開催概要と参加申込方法について】

開催日：24年8月10日（土）

開催時間：13時30分～19時30分（休憩含む）

参加費：9,000円（学生6,000円 ※社会人学生は除く）

会場：エコルとごし

アクセス：<https://ecoru-togoshi.jp/guide/access/>

> 参加申込は下記のリンクよりお願いします。お申し込みが完了しますと、折り返し参加案内のメールが届きます。

<https://asoblock.smtg.jp/public/application/add/3589>

> 前回（24年5月開催）の様子

https://www.asoblock.net/works/wil/lw_hp/lw_zenkai.html

> 参加者の声

https://www.asoblock.net/works/wil/lw_hp/lw_koe.html

対人援助職のための家族マネジメントプログラム

ああ [shiro-san.com](https://www.asoblock.com)

7/ *

絵面からは南国にでもいきそうだが、そうではない。久々の伊丹。さあ出発。



7/*

盛岡で新しく「家族理解ワークショップ」を。続くかどうかは参加者が決めることだが、初めての人たちにたくさん会えたのは嬉しい。若い世代の参加者も多く、二回目がやれるといいなと思った。

沿岸部の宮古市には10年も通った岩手県で新たな縁かも。パリ五輪開会式のニュースより、大雨の隣県山形のことが心配。



7/*

帰路までのひと時、たまにしか来ない盛岡市内を歩いてみた。駅から盛岡城址公園に。小雨あがり曇り空下の緑だが、とても綺麗だ。とはいえやはり暑い。川の水勢に山形の大雨被害をおもう。「もりおか啄木・賢治青春館」でのリンゴジュースで一息つく。どこかで盛岡冷麺でもたべていかな。



7/*

あまりの暑さに自宅待機。復活した大型画面でNetflixのシリーズ一気鑑賞。「地面師」、あったなあこんな事件が。合間にオリンピックも。みんながんばってるねえ。明日からまたお出かけ仕事あり。



7/* - *

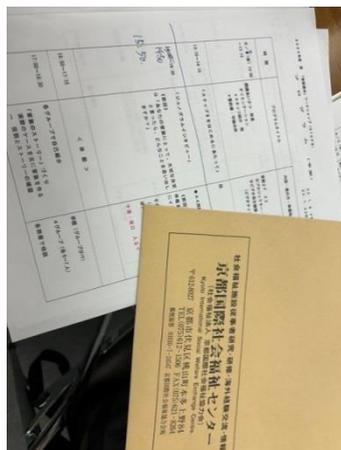
月末、二日間は立命館茨木キャンパスで6コマの家族療法/援助技法ワークショップ。夏休みに入った大学で、定年退職後も続けさせてもらっているプログラムだ。学部生から社会

人院生までと幅広い受講陣。実習を多くと思うが、つい、社会システム現状への変化起こし人としての期待が溢れる。



8/2

さあ酷暑の中始まった京都国際社会福祉センターの家族療法WS。スタートしてから30年以上経つのではないかな。今回の2024step2に、二十三名の参加。児童相談所からの参加比率が近年、ますます多くなった。今回から次世代スタッフ二名がフル参加することになり、4人体制で三日間。順調に開始。



8/*

WS 第二日。昨日、各グループが準備した課題を抱えた家族4ケースに、45分✖4の180分、初回面接をローテーション実施。午後からはそれぞれに様々な方法で、理解、介入チャレンジ。ジェノグラム事例検討と家族造形法が今日午後のプログラム。

8/*

三カ所でのWSを無事済ませて、仕事場籠りの日々。8月に予定されたものの準備をしたり、読書したり。映画館にでも行こうかとも思ったが、そんなに観たいわけではなかったのでもやめる。こういう自由もいいなあ。あちこちの打ち合わせメールや夜中の電話も、ドンドン片付ける。順調だ。

8*

おおそうだ、今夜は琵琶湖花火大会だ。外に出てはいけない、もしくは仕事場に泊まり込んで大津市を避ける日だ。年々参加者が増えて、毎年午後からは大変な人出になる。公式ページを見て驚いた。湖岸に立ち入る席が5000円。フー。子どもの頃、親に連れられて人ごみの中を浜大津に出かけたなあ。



8/ *

東京 WS74 回目に向かう。家からの移動中、聞いているのはこれ。新幹線は南海トラフ地震関係で部分徐行運転だとか。三連休の全席指定のぞみは満席。新幹線東京方面行きの時の定番、とり松のばら寿司。車中はこれを楽しむ。



8/ *

今日の会場、品川区「エコルとごし」はとても綺麗な施設だ。ここで楽しく六時間。今日のプログラム編成はなかなか良かったんじゃないか、と自画自賛。いつものことか？



8/ *

役割を終えた翌朝。出先で1日フリーだ。日常にもそんな日は年齢と共に増えたが、大抵はゆっくりする事になる。今朝は目覚ましもセ

ットせず寝てたら、チェックアウト 10 分前に目覚めた。慌ててホテルを出て、興味のある所に向かう。その前の朝食は大井町駅のパン屋さん。美味しい。



*

立ち寄り一つ目。恵比寿の東京都写真美術館。ここは好きで四度目かな？ 写真を観ようと来たのだが、別フロアで展示の、いわいとしお展が面白かった。懸命に物を作っている人のエネルギーが自分を激励してくれる。できる間はいつまでもだな。



写真展ではこの2枚が目についた。共に記憶を呼び起こしてくれた物だ。一つ目は次男との父子旅で訪れた N.Y.安宿ウェリントンの夜明けの窓から見下ろしたブロードウェイ。一晩中、救急車の音がしていた。2枚目はどこというのではない。妻と訪れたあちこちの旅が想われた。明日は4年目の命日。



2カ所目の立ち寄りはこちら。東京ステーションギャラリー。一コマ漫画に熱を上げていた頃、その類書を買えばフォロンは必ず載っていた。漫画家ではないがヒトコマは綺麗だった。展示の中ではポスターが格別素晴らしい。71歳で亡くなったと知り、自分の歳を考えてしまう。とにかく頑張ろう。

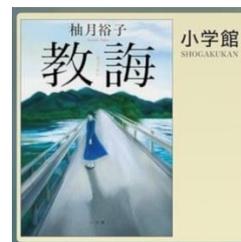


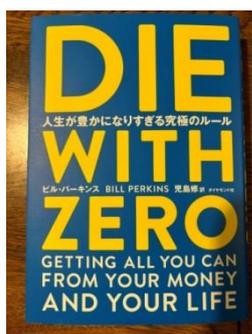
8/ *

昨日は姫路からTさんが妻の四年目の命日、お参りに来てくれた。二人でじっくり話し込む。今日は夕刻から、長い馴染みの家族心理学会繋がりのおくん、Tさん夫妻と、平木さんの四人で、美味しい割烹での食事会。例によって私は喋りすぎかもしれないが、みんな楽しそうに過ごせて良かった。

8/ *

仕事場でゆっくりしているとすぐ時間が経つ。冷房の効いた部屋で本を読んだり、漫画を描いたり Audible を聞いたり Netflix で面白そうなものを見たりしていると、自由気ままな夏休み感は溢れるが、酷暑の中働いている沢山人達に申し訳なくなったりする。私もそんな時代はあったのでご容赦を。





8/ *

昨日は下旬からの宮城、塩竈展に向けてパネルと掛軸の発送にHさん来訪。福島の巡回展も実施中だ。今月も締切前倒して「木陰の物語」新作を描き始める。月末は対人援助学マガジンの締切だから、その前に描き上げておこうという、良い心がけである。仕上がるのが楽しいから締切が苦にならない。



晩年 DAN 通信内新連載

連想映画館 (2)

2000年代半ばから10年あまり、別のところで連載していて、ごわずかの人にしか読んでいただく機会のない原稿の再掲です。

オレンジと太陽

2012年公開 イギリス映画

監督 ジム・ローチ

からのゆりかご

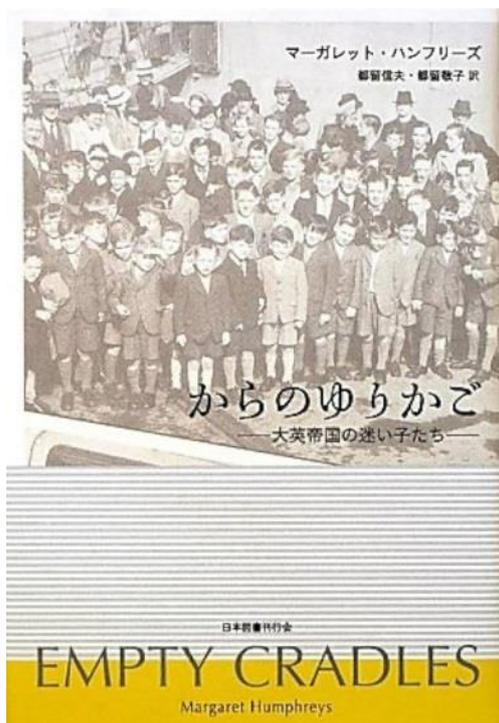
子どもは家族に属することで、社会的影響がダイレクトには届かないよう守られているところがある。保護者の選択に身を委ねるのは、責任の所在は親にあると言って良いと承認されているからだ。

「母親のせいでこうなった」、「父親があんなだったから、こんな自分になった・・・」などと後になって言わせてくれる相手が見えているのは、まだそこから拓かれる未来があるのかもしれない。

家庭事情や親の思いがけない不運によって、厳しい世界のまっただ中で、一人で育たざるを得なかった子ども達がいる。歴史のうねりの中で、選択の余地もない剥奪に翻弄されながら育った人たちだ。

この映画は1967年(昭和42年)まで、延々と国家的事業として行われてきた児童移民を扱った作品である。イギリスは国策として、大英帝国時代の影響下にある国々(カナダ、ニュージーランド、ローデシア、オーストラリア)に十三万人もの子ども達を、単身移民させてきた。その多くは実親に育てて貰うことのできない事情

から、施設にいた子ども達である。



事業の初期、子ども達は里子として里親(個人)の家に送り出されていた。養育困難になった家庭の子達の未来を考えると、これは今も有効に機能している選択肢だ。養子縁組ではなく、一定年齢に達するまでの間、里親宅で養育をして貰う子は世界中にいる。十八歳になるまで、施設で育つ子どもが多く、里親宅で育つ子どもはごく少数という日本は、かなりな里親後進国だといえる。

しかしこのイギリスの児童移民はやがて、社会状況の変化の中で、オーストラリアの人口増強政策とつながってゆく。国土の広大な豪州だが、人口はなかなか増えなかった。1940年頃の世界の状況。日本軍が南進するインドネシアは、オーストラリア大陸北部とは目と鼻の先だった。

豪州社会はその未来に、不安を抱えていた。原住民だったアボリジニの同化政策を採りつつ、イギリス系国民の人口増を政府は切望して

いた。一方、本国は経済的にも厳しく、施設には子どもが溢れる状況にあった。

移住

現在のままでは生活してゆけないと判断した人々が、家族揃って新天地を求めて移住することは少なくなかった。ある時期、特定の地域に生じた移民の歴史は、世界各地に散見される。日本でも南米への移民政策が活発だった時期がある。また、国際養子縁組で幼子が海を渡ることも、過去から現在に至るまで各国に存在する。

しかし多数の自国民の子ども達だけを、組織的に移住させるような政策は希だろう。アボリジニの親子隔離政策や、ルーマニア・チャウシェスク政権下のそれに、親と子を切り離したものが見られるが、怪しげな事業であったことは否定できない。

政策以外にも、子どもを親から切り離して集団的に養育する動きは見る事が出来るが、いずれも社会の賛同を得られたものではないし、成功したものでもない。たいていは社会運動や宗教的信念に基づく、主張先行の失敗に繋がった動きだった。

とにかく、イギリスの児童福祉施設にいた子ども達を、クレーンでつかみ取るように船に乗せて、何千キロも離れた異国に、継続的に送り込むようなことはあり得ない。

積荷

それは西アフリカの沿岸部各地から、たくさんの人たちが拉致され、船に乗せられて、南北アメリカ大陸に連れて行かれた奴隷商人が闊歩した時代を思わせる。

「黒い積荷」という本をずいぶん昔に読んだ。いきなり連れ去られた人々が、まったく環境の

異なる土地で数多く亡くなった記録の物語だった。奴隷労働に耐え、解放される日まで、強靱な体力と精神力で生き延びた黒人という物語は、一部のそう語れる人のストーリーだった。

実態は、驚くほど短期に、多数の人々が風土病で亡くなっている。奴隷商人達にとっては、遠路はるばる連れてきたのに、歩留まりが悪い。もっと丈夫な奴隷を連れてくるよう客から求められているという話が印象的だった。そんなことを思い出させるような出来事である。



現在

映画のファーストシーンは、ソーシャルワーカー(以下、SWと記す)が警察と一緒に家庭訪問するところだ。養育がハイリスクであると公的機関によって判断された子が、実母の腕の中からSWの手で保護される。しかしこれは映画の本筋ではない。イギリスの今日の、要保護児童対応の描写である。

これを見て私は、この作品がイギリスにおいてかつて行われていた不幸な出来事について

だけが描かれた作品ではないことを見逃してはならないと思った。ここに監督のイギリス社会への視線が示されていると思った。

日本社会でもずっと話題の中心に居座ってしまった児童虐待。要保護児童の救出は、児童相談所にとっては、失敗してはならない急務である。TV放映される児童虐待防止キャンペーンは、とにかく市民は通報せよと繰り返す。

たしかに「疑わしきは罰せず」ではなく、「疑わしきは保護を」でないと、最悪の事態の未然防止は不可能である。しかしこれが過度な不安と過剰防衛(保護)を引き起こすことは容易に想像できるだろう。その結果、親の側には、公権力による我が子の略奪という家族体験が強く刻まれることになる。そういう意味で、この導入部はとても印象的だ。

しかし本論が始まるのは、この後である。ある日、SWが業務を終えて帰宅しようと、駐車場に向かう途中、一人の女性から声をかけられる。相手は彼女がSWであることを承知していて「自分の親がイギリスのどこかで生きてるかも知れないので探して欲しい。私は幼い頃に単身、イギリスの施設からオーストラリアの施設に送られた者だ」と語る。

このSWが映画の主人公であり、原作「からのゆりかご」を執筆したマーガレット・ハンフリーズである。いきなり未知の女性から信じがたい話を、書類をかざしながら訴えられ、思わず「法的にそんなことはあり得ない！」と返してしまう。もったもなことである。未成年の子が単身で移住し、親の消息も分からないなどという話は、誘拐事件の被害者でもない限り、考えられない。

女性は、「私が嘘をついているというの！じゃあ、もういい！」と怒りと共に去ってゆく。

記憶と記録

これが1980年代半ばの出来事である。このSWは、そこそこの経験を積んだ専門職の女性である。知っておくべき業務上の知識は当然持っていたらう。ならば、1967年まで実施されていた児童移民についても、直接関わってはいなかったとしても、知っているのが普通ではないか。広く一般市民が承知していたとは思わないが、その分野の専門職なら、過去において行われていた業務の歴史は知っているのではないかと思った。

だがSWは知らなかった。彼女だけではなく、同僚達も誰も知らなかった。つまりはイギリス社会が、二十年ほど前まで、合計十三万人もの小国民の人生に処方していた政策を忘れたのである。いや、みんなが無意識に、言及するのを止めたのかもしれない。子ども達は地の果てのような場所に送り込まれ、やがて後からは誰も来なくなり、置き去りにされた。

誰にも知られないところで、様々な虐待も起きた。訴える手段からも遠ざけられた場で、それでも子ども達は育ち、大人になった。そしてその存在は、本国の歴史記憶から消えかけていたのである。

それはまったく別角度の、こんな事実からも興味深く例証できる。日本でイギリスの児童福祉政策を専門として研究し、まもなく定年退職になる教授がいる。この人が2012年まで、このイギリスの児童移民のことを知らなかった。研究者として大きなショックだったのではないかと思う。氏はラストスパートで、この事業がどのようにイギリス本土で展開されていったのかを、今調査していると聞いた。だがこれは当然の結果かもしれない。本国で渦中の業務に従事しているSW達が知らなかったのである。たまたまであるはずがない。

この事実に気づき、子ども達の処遇の痕跡を探し出す努力をマーガレット・ハンフリーズは一人で開始した。すると次々、該当者が見つかったのだから、組織的な隠蔽は行われてはいなかったのだろう。ただ、社会全体が忘れてがる過去は、急速に歴史的事実の項目からこぼれていくことが分かる。

歴史からの学び

児童移民をおこなっていた社会はその後、反省をこめて、再びそのようなことの起きない制度構築をしたらどうか？あの時代、親の意志確認もせず、子どもだけを遠くの国に移住させた国で今、かなり積極的に公権力をもって不適切な養育者(児童虐待者)から子どもを隔離保護していると聞く。

私はこの研究をしているわけではないから、詳細までは承知していない。しかし2011年春、ロンドンに視察調査の一員として同行した訪問先の一つは、公権力によって子どもを奪われた人たちの権利を擁護する組織だった。移民の多い国だからそこでは、様々な母国語のスタッフが働いていた。

現在、セラピューティックコミュニティという発想で、傷ついた子ども達に手厚い回復プログラムを実施しているイギリスに、一方でその勇み足に対する異議申し立てシステムが存在することは、過去から学んだ結果かと思う。

発掘

たまたまの出来事から、SWは隠されたイギリス児童福祉の消えかけた歴史に気づく。その該当者がオーストラリアで成人して沢山暮らしていることを知る。そして、いきなり親探しを打診してきた女性が、その一人であることに気づく。

これによってマーガレット・ハンフリーズの人生は一変した。調査のためのトラストを設立し、これに専従する。そして、かつての子ども達一人ひとりの過去をたどって、公文書資料館や出生証明文書のあるところを探す。オーストラリアにも通い、該当者の消息を探る。その結果、想像もしなかった多数のかつての子ども達が、パースやメルボルンに在住していることを知ることになる。

映画の詳細をこれ以上述べはじめると、きりが無い。是非ご覧になって、この事実だけではなく、私たちの社会がやりがちなことを考えて欲しいと思う。

どんな仕事もそうかもしれないが、中でも子どもの福祉に関わる仕事は、その十年後、二十年後が問われている。これが範囲限定された治療行為の専門性との大きな違いだ。

立ち位置

長い時間をかけて結果に遭遇するしかない問題を、短期的な熱意やアイデアで対処すべきではない。家族の問題はまさにそうだ。だから私は、「それでも何とか、ご家族の皆さんで…」などと優柔不断なことを言ってきたのだと思う。合同家族面接が好きなのも、そういうこ

とだ。

私は新しい診断や薬、技法に浮かれるのも、煽られるのも好きではない。誰も彼もが同じ言葉や口にして騒ぐ業界流行語は大きな問題だ。時の風に煽られて、誰かの人生を大きく傷つけておきながら、さっさと忘れてしまうような世論や政策に安易に同調してはならない。

こんな事を書くのは、私たちが類似のことを何度も繰り返しているからである。少しの賢明さがあれば、「もう今は、あんな事は行われていません」などと脳天気なことは何に関しても言えない。

私たちは過ちを繰り返す生き物である。にも関わらず歴史は自分たちに都合の良い編集をしてしまいがちだ。だから個人の記憶が大切なのだ。因果で固めないシステム論には、当然のように時代や社会が内包されている。だから曖昧さを抱えていることも承知である。けっして短期的な問題解決だけを志向しているわけではない。

*

児童移民に関してオーストラリア政府は2008年に、イギリス政府も2010年に、該当者に対して公式謝罪した。

58・お話あそび会動画解説《年少》

原町幼稚園園長 鶴谷主一（静岡県沼津市）

1991年から「生活発表会」に疑問を感じて発表会の形を変え→「劇あそび会」→そして試行錯誤しつつ1995年から「お話あそび会」という名称を使い始めて今年度で29年2016年のマガジンにその頃の取り組みをレポートしました。8年前ですが、試行錯誤の振り幅は小さくなって、ノウハウが蓄積されてきた感があり、1年で一番たいへんな活動ながらも、こども園になってから園児数が減って職員数も増えてサポート態勢も充実し、以前のようにプレッシャーのかかる状況ではなくなった気がします。成熟期を迎えたのかもしれませんが。マンネリは後退のはじまりですから気をつけていかねばと思っています。自分たちの未来のためにもこの活動を記録していく必要があると感じ、動画の編集や、それを共有できる環境が整っている現代、動画で解説してみることにしました。

従来の発表会に何かしらの疑問をお持ちの方、保育を変えていきたいという思いをお持ちの方の参考にもなれば幸いです。

「お話あそび会」ってなに？と思った方は、以前のレポートを参照していただければ、方針は変わっていませんので、概要はお分かりいただけると思います。

◆マガジン24号「発表会の意味とは？」

保育施設で年間行事として行われる「発表会」表現活動としての意味は？
発表という舞台に追い込まれる先生、延いては追い込まれる子どもたちの構造について考える。
[▶https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol24/13.pdf](https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol24/13.pdf)

◆マガジン25号「お話あそび会実践レポート」

お話あそび会の園内提案（計画書）を紹介し、取り組みへの具体的な内容をレポート。
今回はこの内容を頭に入れつつ動画をご覧くださいこととなります。
[▶https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol25/14.pdf](https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol25/14.pdf)

◆マガジン26号「保護者への伝え方」

新しく行事を改革するときには保護者への説明と共感を引き出す子言うほうは必要不可欠になります。具体的なクラス便りなどを紹介して、その方法をレポート。
[▶https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol26/12.pdf](https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol26/12.pdf)

- ◆今回は年少児の取り組み動画解説ですので、マガジン25号をお読みいただければ書いてあるんですが、年少児のやり方を再掲しておきます。
以下は、保護者向け特集号に記載する文章ですが、端的に書かれているのでイメージがつかみやすいのではないのでしょうか。

保護者向け特集号に書かれている解説

年少児は、保育者のリードに乗っかってお話あそびを楽しみます。ストーリーのあるごっこ遊びといってもいいでしょう。舞台演出や小物、大人の演技に引っ張られて子どもたちはお話の世界に入り込みます。もともと、ごっこあそびの好きな年齢ですから、ぶっつけ本番でも良いぐらいですが、一つは、きちんとストーリーを流すこと。もう一つは、雰囲気にも飲まれやすい年少さんのために場慣れという意味で2～3回ほどわくわくホールを使い、お話あそびを行っていきます。

◆保育者向けには提案に詳しく取り組み方が書かれています。

◆年少児は、保育者のリードに乗ってイキイキとお話あそびを楽しむ

先生がお話の進行役となって一緒に演技しながら子どもたちの表現を引き出していきます。たいていは、主役の子どもたちを引き立てながらも、あそんでいるうちにストーリーから子どもたちがはみ出さないように劇中のセリフとして言葉掛けしながら進行できるお母さん役や登場人物のリーダーが適任です。このときに気をつけてほしいのが、あくまでも先生ではなく登場人物としてのセリフの中に子どもたちの動きや表現を促す言葉が発せられることです。たとえば「**さあ、ジャンプしましょう**」という指示語ではなく「**とんでみようか、どうする?**」という促す言葉が使えるように配慮します。

子どもの担当する役は一役（全員で同じ役、もしくはキャラクターを変えても同じ動き。）もしくは二役までのほうが良いでしょう。セリフは多く長くならないように気をつけ、子どもたちが言いやすいことばをみんなで言うようにします。

シナリオ作りは子どもたちの様子を見ながら先生がほとんど行います。構成は、ストーリーをなぞるだけでなく、場面場面でリトミック的な動き（子どもにとってはあそびの場面）を創作でも良いので挿入しながら、子どもたちの自然な表現、かわいい表現を引き出します。歌も場面ごとに歌っていくといいでしょう。

また、補助者（道具の出し入れや他の登場人物）の登場により、ストーリーの展開を面白くすることも必要なら取り入れていきます。

では、実際にご覧いただく動画の資料です。
保護者に事前に配布する「特集号の表紙」



2022年度
お話あそび会特集号

日程	開始	クラス	テーマ
1月25日(水)	10:15	年少めろん組	まいごのたまご
1月27日(金)	10:15	年少いちご組	ドーナツペンタくん
2月1日(水)	10:15	年中 ばら組	ももたろう
2月3日(金)	10:15	年中 ゆり組	かぐやひめ
2月8日(水)	10:40	年長 つき組	美女と野獣
2月10日(金)	10:15	年長 ほし組	そんごくう

※開始時間に遅れないようにおいで下さい。†

★お話あそび会の日には平常保育です。あそびっこも平常です。†

★参観はお子さんのクラス、そのほか他のクラスも参観可能です。†

★その日の解説をしますので、開始時には必ず会場にお入り下さい。†

★本番は業者さんの撮影によりBD、DVDにてお楽しみ下さい。†

○つき組は原小学校参観日との調整で開始時間が遅くなっています。†

☆欠席が多いため、配役は変更することもありますのでご了承下さい。†

《新型コロナ感染対策》†

①発熱など感染が疑わしい方は参観ご遠慮下さい。・②マスク着用・③手指消毒†

④大きな声で会話しない・⑤玄関からわくわくホール以外には立ち寄らない†

⑥終了後は速やかに帰宅†

以上の項目をお守りください。†

はらまちようちえん

例年、年少組から順番に発表を行います。その中で2番目のクラスの動画です。おわかりのように、3学期が始まってすぐに本番ですので、導入は2学期に行っておきますが、短期間で遊び込み、本番に持って行きます。

特集号のページ（担任から粗筋などが書いてあります）

ドーナツペンタくん
～柴田 ケイコ～
いちごぐみ 1月27日(金)10:15～

Story
*ペンタくんのキッチンカーを内緒で借りて、みんなでドーナツを売りに海へ出発～!! 今日までスイスイ全開でドーナツを売りに行きます◎すると... キッチンカーを探すとペンタくんが見つかてしまっています!! 誰がドーナツを作っているのか? どの子がドーナツを売っているのか? どの子がドーナツを食べているのか? どの子がドーナツを売っているのか?

Cast
*ペンタくん
→いぶきちゃん+格山
*ペンタくん
→いぶきちゃん
*ペンタくん
→いぶきちゃん
*ペンタくん
→いぶきちゃん

Stage
ステージ
キッチンカー
ココロドーナツを
作りましょう◎
客席

Costume
*ペンタ帽子・双眼鏡・身につけるドーナツ(丸と用紙)
→髪を結ぶ際は、耳より下で結んでみてください◎
*リハーサルと当日はあさかなTシャツと あさかなスニーカーの着用をお願いします◎ 下に着る長ズボンやタイツ、つっかけなどは何でもOKです◎ 動きやすい格好をお願いします!
*ドキドキしているお友達もいると思いますが、あなかく見守ってあげてください◎

image
ペンタくん
ドーナツを
売りに行きます◎

「ドーナツペンタくん」は絵本をモチーフにしています→

2022年度年少組 お話あそび会本番
『ドーナツペンタくん』解説動画



YouTubeが再生されないときはこちらのURLをブラウザにコピーして下さい。
<https://www.youtube.com/watch?v=kkMrW7mmWQM>

- ◆どのクラスも本番前日に、他クラスの子どもたちにお客さんになってもらってリハーサルを行います。
年少の場合はリハーサルでは一部本番と違うシナリオで行い、飽きが来ないでお話あそび会を遊べるように工夫しています。本番とは違う表情が見えると思います。良かったらご覧下さい。
(リハーサルのほうが動画が撮りやすいので、臨場感があり、保護者にも公開しています。)

『ドーナツペンタくんリハーサル』 解説無し



<https://www.youtube.com/watch?v=RLvtAEIX3zQ>

- ◆おまけ：お話あそび会のバックの絵を描いてます



「幼稚園の現場から」ラインナップ

- | | | | |
|-----|-----------------------------|-----|---|
| 1号 | エピソード (2010.06) | 31号 | 幼稚園の音楽教育 (その2・こどものうた) 2017.12 |
| 2号 | 園児募集の時期 (2010.10) | 32号 | 幼稚園の音楽教育 (その3・コード奏法) 2018.03 |
| 3号 | 幼保一体化 (2010.12) | 33号 | (休載) |
| 4号 | 障害児の入園について (2011.03) | 34号 | 働き方改革・一つの指針 (2018.09) |
| 5号 | 幼稚園の求活 (2011.06) | 35号 | 働き方改革って難しい (2018.12) |
| 6号 | 幼稚園の夏休み (2011.09) | 36号 | 満3歳児保育について (2019.03) |
| 7号 | 怪我の対応 (2011.12) | 37号 | 満3歳児保育・その2 (2019.06) |
| 8号 | どうする保護者会? (2012.03) | 38号 | プールができなくなる!? (2019.09) |
| 9号 | おやこぼ (2012.06) | 39号 | 跳び箱 (2019.12) |
| 10号 | これは、いじめ? (2012.09) | 40号 | 幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉
(2020.03) |
| 11号 | イブニング保育 (2012.12) | 41号 | コロナ休園 (2020.06) |
| 12号 | ことばのカリキュラム (2013.03) | 42号 | コロナ休園から再開へ (2020.09) |
| 13号 | 日除けの作り方 (2013.06) | 43号 | ティーチャーチェンジ (2020.12) |
| 14号 | 避難訓練 (2013.09) | 44号 | 除菌あれこれやってみた (2021.03) |
| 15号 | 子ども子育て支援新制度を考える | 45号 | マスクと表情 (2021.06) |
| 16号 | 教育実習について (2014.03) | 46号 | 感染予防と情報発信 (2021.09) |
| 17号 | 自由参観 (2014.06) | 47号 | 親子ソーラン節 (2021.12) |
| 18号 | 保護者アナログゲーム大会 (2014.09) | 48号 | 親子コンサート (2022.03) |
| 19号 | こんな誕生会はいかが? (2014.12) | 49号 | うんちでたー! (2022.06) |
| 20号 | ITと幼児教育 (2015.03) | 50号 | 子どもが育つ園庭・その1 木登りとブランコ
(2022.09) |
| 21号 | 楽しく運動能力アップ (2015.06) | 51号 | 子どもが育つ園庭・その2 砂場 (2022.12) |
| 22号 | (休載) | 52号 | 子どもが育つ園庭・その3 ストライダーと
Tonka (2023.03) |
| 23号 | 大量に焼き芋を焼く (2015.12) | 53号 | リスクと安全・園庭編 (2023.06) |
| 24号 | お話あそび会その1 (発表会の意味) 2016.03 | 54号 | 夏の音楽会・動画 (2023.09) |
| 25号 | お話あそび会その2 (取り組み実践) 2016.06 | 55号 | クリスマス劇・動画 (2023.12) |
| 26号 | お話あそび会その3 (保護者へ伝える) 2016.09 | 56号 | こいのぼり製作 (2024.03) |
| 27号 | おもちゃのかえっこ (2016.12) | 57号 | この頃、気になること (2024.06) |
| 28号 | 月刊園便り「はらっば」 (2017.03) | 58号 | お話あそび動画解説《年少編》 (2024.09) |
| 29号 | 石ころギャラリー (2017.06) | | |
| 30号 | 幼稚園の音楽教育 (その1・発表会) 2017.09 | | |

▶気になる記事・ご感想質問等ありましたら気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.ed.jp



こもれびのなかのおはなし

はらまち

HARAMACHI Kindergarten
est.1957

福祉系対人援助職養成の現場から 58

西川 友理

小中高の先生と、大学の先生の違い

初年次教育（入学すぐの1年生に向けた教育）の授業で、こんな話をしました。

「大学や短大の先生は、小中高の学校で皆さんが出会ってきた先生と大きく違うところが1点あります。」

「？」

「皆さんは幼稚園教員免許を取得したいと思って今勉強しているでしょう、それは幼稚園の先生になるための資格ですよ。」

「はい。」

「小学校、中学校、高校……って、教育実習生の先生が来てましたよね。教員免許取るための実習にきた大学生さんね。……大学で、教育実習生って見たことある？」

「……あ、ないですね、そういえば。」

「そう、つまり、大学の先生って、教員免許いらないの。私持ってないし、〇〇先生も持ってないし、〇〇先生も持ってないし、そもそも大学教員免許ってもの自体が、ないの。」

「「「「えー！！」」」」

……この話をすると、教室に衝撃が走ります。

「あ、いやもちろん、小学校教諭免許とか中学校教諭免許とか、そういう教職課程を昔、学生時代に履修して教員免許を

持っている大学の先生はいますよ。そういう人は、それぞれの世代で“教える”専門家。一方で、大学の先生は、それぞれに“それぞれの分野を研究している”専門家。」

知っている学生は知っているようですが、知らない学生にとってはショックのようで

「え、そんな教える技術がない人が、教えないでほしい！」

と言った学生もいます。

うむむ。なかなかキツイ言葉です。そうか、ちゃんと免許を持った先生に教えてもらいたいのか。なるほど……。

先生と「対話」

子どもに関わる人が集まる場所で、対話についての勉強会がある と聞いて、とある会場を訪れました。なぜかたまたま、小中学校の先生の参加が多い会でした。

最後の感想の時に、口々におっしゃいます。

「子どもの思いを受け止めてあげる、って大事ですよ」

「子どもの頃から、対話のやり方をちゃんと教えてあげないといけないですよ」

「きちんと対話を体験させる授業をしたいと思います」

…確かに対話って大事だと思います。思います、が、

「…子どもを、自分の思い通りにさせようってそこから、まず離れませんか。いや、対話はいいことだと思うんですよ。」

でも、自分がいいと思ったものを、対話であれ何であれ、こどもに押し付ける形になってはいけないと思います。これがいいんだ、これがベストなんだ！だから自分の話を聴け！という形になってしまいそうで、対話でも何でもないと思います。自分が正解、自分がよいと思ったことが正しい、と、思い過ぎない方がいい、と思うんです。」

そこまで言って、周りの人がちょっと白けてしまったことに気が付きました。

だって、「～してあげる」「～してあげないといけない」「～させる」、等、子どもに対して、大人が「やってあげる」「させる」視点が強い人々が、どうやって相手と対話出来るんですか…と感じてしまったのです。

世の中の「先生」って、そういう人なのでしょうか。「～してあげる」「～させる」

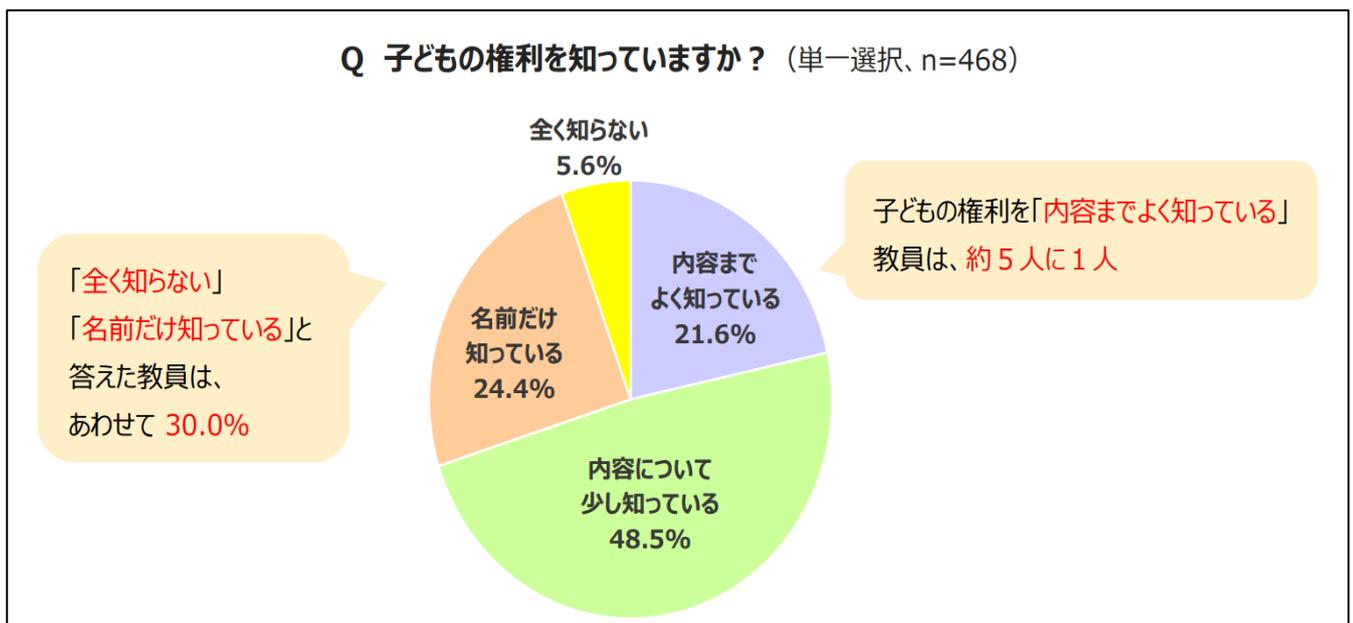
という考え方の人が、多いのでしょうか。

先生と子どもの権利条約

2022年3月に公益財団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンが、全国の小・中・高・高専・特別支援学校・外国人学校の教員468人を対象に、子どもの権利条約について調査をしました。

この調査によると、「子どもの権利を知っていますか？」という問いに対して「内容までよく知っている」と回答したのは21.6%に対し、「名前だけ知っている」24.4%、「全く知らない」が5.6%、となっています（図1）。つまり、わが国の教育現場では「子どもの権利」をよく知らない人より、知っている人の方が少数派、ということになります。

（図1）



(図2)

Q 子どもの権利として ふさわしいと思う内容をすべて選んでください (複数選択、n=468)	
内容	選択した人の割合
1 すべての子どもは、大人と同じように1人の人間であり人権を持っている。	88.2%
2 子どもは義務や責任を果たすことで権利を行使することができる。 ※子どもの権利として、ふさわしくない内容	27.6%
3 子どもは自分と関わりあるすべての事について意見を表明でき、その意見は正当に重視される。	64.1%
4 子どもは家庭でも学校でもどのような場所においても、あらゆる暴力から守られる。	81.2%
5 障害のある子どもを含むすべての子どもは、社会に積極的に参加し、インクルーシブな教育を受けられる。	73.3%
6 子どもは必要な医療・保健サービスや社会保障制度を利用し、十分な生活を送ることができる。	70.5%
7 子どもは成長途上のため、子どもに関する事はいかなる場合も大人が子どもに代わり決めるよう推奨される。 ※子どもの権利として、ふさわしくない内容	19.8%
8 子どもは遊んだり、休んだりする権利を持っている。	59.8%
9 すべての子どもは性別や人種の違いで差別されず、同じ権利を持っている。	79.7%

さらには、子どもの権利としてふさわしい内容を選ぶという設問については、回答者のうち約4割が子どもの遊ぶ・休む権利を選択せず、意見表明権については3割強が選択せず、「子どもはどんな場所においても暴力から守られる」という項目については約2割が選択していませんでした。逆に、「子どもは義務や責任を果たすことで権利を行使できる」を約3割が選択、「いかなる場合も大人が子どもに代わって決めるように推奨される」を2割が選択していました。(図2)

ある学生はこのデータを見て、こういいました。

「100歩譲って、1000歩譲って、権利条約知らなくてもさ、教員免許取るのに、日本国憲法の授業は必修なんでしょ(注:教職課程では“日本国憲法”という科目は必修科目になっています)。なんで憲

法に認められてることにすら×をつけてる先生がおるの。憲法にそれは違う、と書いてあることを選択している先生がおるの。なんで、せめて“あらゆる暴力から守られる”の項目だけでも選択率100%と違うの。約2割が選んでないってどういうことなの。」

教職課程と子どもの権利条約

この結果について、私も信じられないような思いで読みました。

保育士・幼稚園教諭をめざす学生の養成教育をしていますが、私が担当しているのは保育士の分野の科目であり、教育に関してはほとんど知りません。そこで知り合いの、高校の先生に伺いました。

「教員になるための勉強の中で、子どもの権利条約について取り上げることってあるんですか？」

「子どもの権利条約？……うーん、そんなこと教えるっていう事は聞いたことないなあ。教員養成課程の中にはなかったんじゃないかな…。」

「教員同士の会話で、子どもの権利条約の話とかはしないですか？」

「あんまり聞かないねえ……。」

そこで、教職課程コアカリキュラムを確認してみました。教職課程コアカリキュラムとは、文部科学省が提示している「全国の大学の教職課程で共通的に修得すべき資質能力」とされ、各科目で身に着けるべき最低限の学習内容が示されているものです。

ネット上にあがっているコアカリキュラム一覧に「子どもの権利」という言葉がないか検索をかけました。一件もヒットしませんでした。「権利」「子どもの権利条約」「児童の権利に関する条約（子どもの権利条約の正式名称）」等で検索しました。いずれも、全くヒットしませんでした。

教職課程の最低限教えねばならない科目の中には「子どもの権利」という概念はない、ということをしかりとわかってしまいました。

曲がりなりにも過去に児童養護施設に勤め、現在保育者の養成をしている身として。児童福祉になじんできた者としては、これはなかなかのショックでした。

「一日の中で、子どもと関わる時間がとても長い教員が、子どもの権利条約を知らないなんて…！」

幼児教育の分野ではどうか？

でも、ハッと気づきました。小中高はともかく、幼稚園は？

幼稚園教諭の養成の場ではどうなんだろう。保育士と両方の免許を持っている人もいるくらいです、幼児教育については、何か全然違うアプローチで、知っているかもしれない。

一縷の望みをかけて、保育士の資格は持っていないけれど、幼稚園教諭の免許を持っている友人に聞きました。

「幼稚園教諭になる勉強の中で、子どもの権利条約について勉強することってある？」

「うーん…」

と考え込むその友人。

「ないと思う、けど……」

続く言葉に、私は衝撃を受けました。

「子どもの権利条約を知ってるか知らないか、ってどうでもよくない？ だって、子どもの権利条約の内容って、私に言わせたら、当たり前のことやもん。」

「知っている」とは 何を知っていることなのか。

（あ、そうか。）

いつのまにか「権利条約を知っているか否か」で目の前の人をふるいにかけていた自分に気づきました。

子どもの権利条約を知らないにもかかわらず、子どもの権利が大切だと思って

いる先生方はたくさんいるのです。本当に大切なことは、権利条約の内容を知ってるか知らないか、ではなくて、子どもを一人の人として尊重しているかどうかということです。まさにこの目の前にいる方は、子どもの権利を大切にしている、すてきな幼稚園教諭です。

冒頭に紹介した学生が、私が教員免許を持っていないと聞いて、「そんな人に教えてほしくない！」と反射的に言ったように、「子どもの権利条約を知らない人に、子どもに関わってほしくない！」と反射的に感じてしまっていました。

いや、むしろ子どもを大切にしたい、大事にしたいという人が、子どもの権利条約を知らないまま、どのように教育現場で闘ってこられたのでしょうか。そのことに私は、とても興味があります。実際に子どもを大切にしている先生は、結構沢山、いらっしゃるのです。そんな人は何を背骨として、何を軸として、何を芯として、子どもを尊重するそのスタイルを作り上げていったのでしょうか。

自分を振り返ってみれば

考えて見れば、私自身、「知らないこと」はたくさんあります。というか、世の中の大半のことは知らないことです。さらに言えば、保育者養成教員をしていますが、教職課程を出ていませんので、教育についてほとんど知りません。曲がりなりにも教育に携わっているのに、です。

それぞれに、知らないことがあって当たり前なはず。解らないならわからないなりに、お互い聴き合いをすること。まさに対話していくことが大切です。

「教えないでほしい！」といった学生に対して

この文章の冒頭に挙げた「教えないでほしい！」といった学生に対して私は言いました。

「うん、だからね、教える専門家がいなくていいことは、大学は“教わる場じゃない”ってことなんです。」

そう言って話を続けます。

「もちろん知識や情報はあるし、それは伝えられますよ。専門職養成課程の科目については、養成するために必要なことは、伝えられるようにしています。伝わるように、勉強できるように、先生はそれぞれに工夫して講義の用意を一生懸命している。でも、大学の先生は基本的に「こういうことが世界にはあって、それについてこう考えてるんだよね。でさ、あなたどう思う？」という人。大学って、そういう環境……つまり、知識や情報や知りたいことのネタがいっぱいある環境の中で、学生であるあなたが、自分で探求していくところなんだろうなあ、と思います。だから大学の先生っていうのは、その道の知識や情報や、それについての考えやなんらかの経験を持っている人で、一緒に考える人、くらいに思うといいと思うなあ。」

「なるほど……よく大学は“自分で勉強するところ”って言われるけど、そういうことかぁ。」

と、うなづく学生たち。

「だからね、私、教える仕事はしているけれど、世に言う“先生”っていうのが何をする人か、“教育”ってなにすることか、イマイチわかってない気がするんです。教えるための専門教育は受けてきていないけど、でもいつの間にか、“教える”“伝える”の自分なりのスタイルは作り上げてきたみたい。ですから、もっとこうした方がいい、とか、こんなふうにしてほしい、と、意見があったら、どうぞ言ってください。そうやって、授業内容はもちろん、講義のあり方についても一緒に色々考えていけたらなぁと思います。」

「子どもの権利条約」が 教育現場に入ってきた！

教育現場における子どもの権利条約について調べている中で、面白い情報を得ました。

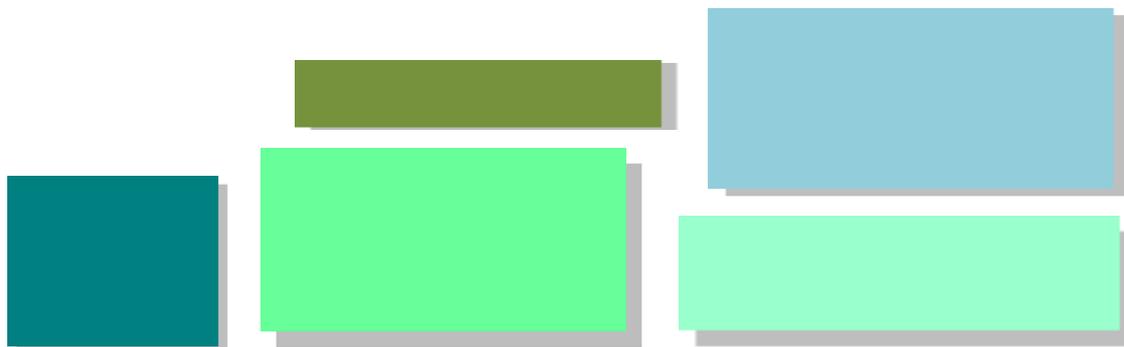
どうやら学校現場には『生徒指導提要』という、小学校から高校までの、生徒指導の理論と方法をまとめたもので、生徒

指導に関する学校・教職員向けの基本書と位置付けられています。これが2022年に改訂された際に、初めて「子どもの権利」について記載されたというのです。ネット上にデータがあるので、私も読んでみました。

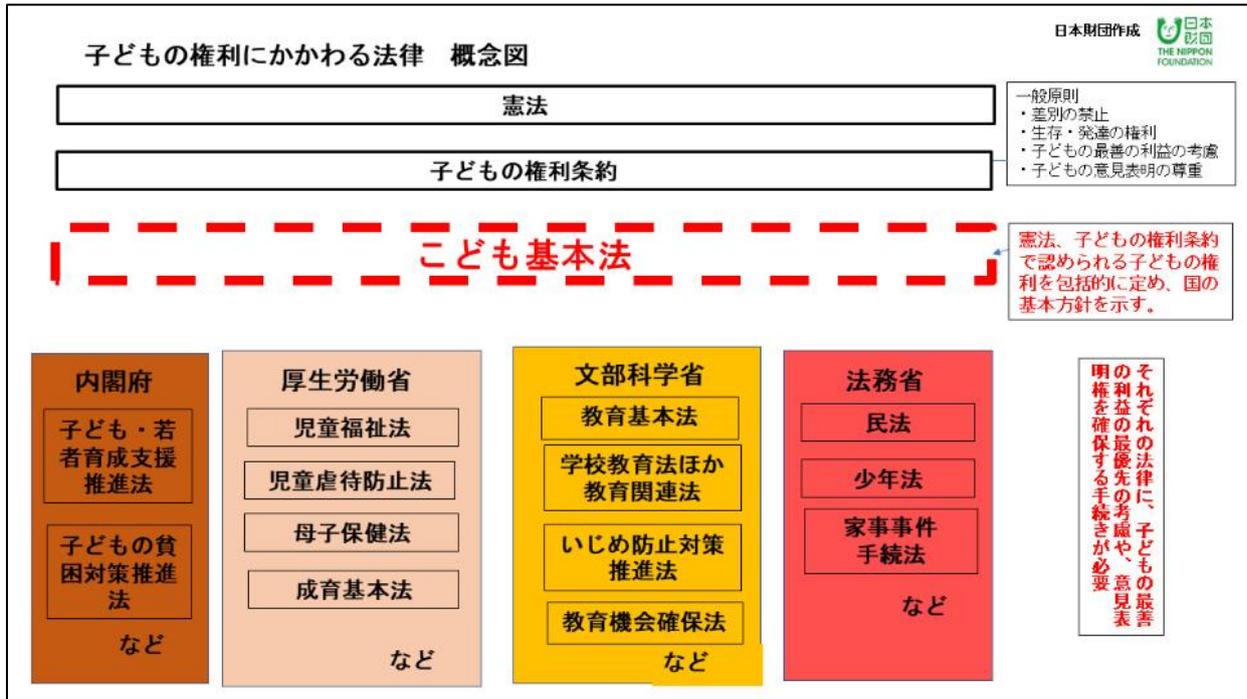
全体が140ページほどある提要の中で、子どもの権利を中心的に扱っているのは、ほんの数ページ。子どもの権利が大切だという事を考えている人にとって見れば、本当にほんの少ししか記載されていません。でも、これが小さな第一歩です。

2022年6月、こども基本法が成立しました。これは、子どもの権利条約、正式名称「児童の権利に関する条約」の国内法です。この国においては、福祉にも、教育にも、司法にも、その他どんな分野においても「子ども」について考える時には必ず関わる法律として位置づけられました。（図3）

子どもの権利という言葉が、これから教育現場にどのように広がっていくのか、ぜひ注目したいですし、なにより、現場の先生方と一緒に考えていきたい、わからないことをお互い聞き合っていきたい、と思います。



(図3)



引用・参考文献：

○公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

「学校生活と子どもの権利に関する教員向けアンケート調査」2022年3月

<https://www.savechildren.or.jp/scjcms/dat/img/blog/3897/1650252581609.pdf>

○文部科学省「生徒指導提要」

https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt_jidou01-000024699-201-1.pdf

○日本財団「こども基本法について」

<https://kodomokihonhou.jp/about/>

ああ、相談業務

～ さやかさんの話 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

18

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

今回は、不登校から引きこもりがちになったケースについて書こうと思う。不登校の子どもたちを引きこもりにしないようにということについては、以前のケースで書いているが、どうしてもどこにもつながらずに、引きこもりがちになる子はいる。少しは買い物など、家族と一緒に出掛けられるが、こうしたケースでは長期にわたる支援となる。さやかさんもそういうケースの一人である。

家族

会社員の父親（45歳）とパートの母親（42歳）とさやかさんの3人家族であった。家は新興住宅街の一戸建てで、バス停から近いため、どこかに行くには便利な場所であった。祖父母は、父

方、母方共に、自宅から車で2時間くらいのところに住んでおり、ともに健在。本児が双方にとって唯一の孫であった。

相談経過

さやかさんのケースと出会ったのは、彼女が高校1年になって、半月ほど経った頃であった。とはいえ、本人と会えるのはずっと後の話。最初は母親から、本児が学校にいけないという相談電話が入り、母親に来室していただいたのが始まりだった。

いつも通り最初に家族について聞くのであるが、母親からは、前述のような話であった。さやかさんが、いかに祖父母からも、父母からも大事にされてきたかがわかる。また、そこそこの進学

校に入学しており、将来もかなり期待されていたのが分かった。

生育歴では、特に大きな病気もなく、発達も問題なかったという。小学校の間は、活発だったが、中学くらいからは、たまに学校を休むことはあったものの、勉強を頑張っていて、成績も良かった。部活は、絵が好きだったこともあり、美術部だった。

中2くらいから少し太り気味になっていて、そのことから、周りの子にからかわれることもあったそうだ。そんな時は、家で母親に愚痴を言い、発散していたという。そうやって気持ちを切り替えては、頑張って登校していたそうだ。塾にも通い、成績は常に上位を保ち、先生方からもまじめな性格が高評価を得て、中3の時には生徒会活動にも携わっていた。

高校は目標にしていた進学校に合格し、祖父母も含めみんな喜び、本人も期待に胸を膨らませているようだったので、父母ともに安心していたそうだ。

ところが、入学式が終わって、数日たったころから、朝起きられなくなって来た。起きたとしても、おなかが痛いと言ってはトイレに閉じこもり出てこない。母親はパートがあるので、学校に行くのか行かないのか決めてくれと伝える。しかし、本人は中々決断せず、「後で行くから」と言うので、「じゃ、お母さんはパートに行くから、戸締りして弁当持って行ってね。」と言いおいて出かける。しかし、昼頃になって、学校から本人が登校していないとの電話来る。

不登校が始まる時は、どの家庭でも同様の感じであろう。家に帰って母子で口げんかになったりする。

母「遅れていくって言ったじゃない！」

本人「行くつもりだったけど、腹痛が治らなかったから・・・。」

母「だったら連絡してよ。学校に休むって連絡入れなくちゃならないんだから。」

本人「ごめんなさい。でも仕事中心だと思ったから・・・。」と言うようなやり取りが続く。そし

て、

母「明日はいきなさいよ！」

本人「わかってる。明日は行くから。」

で終わる。

他の子の場合だと、大抵翌日は頑張っていくが、翌々日は休むなど、五月雨登校（時々登校する）になってから全く行けなくなるというパターンが多いが、さやかさんはこの日1回休んでから一度も学校に行けなくなったそうだ。

母親は「パートをやめて家にいたほうが良いだろうか、自分の育て方が悪かったのだろうか、ほかの子がみんな学校に行けているのに、どうしてうちの子はいけないのだろうか」と、自分を責めるような話をつづけた。

これはよくある話である。子育ては母親の仕事であるというのが、一般的な日本の家庭の考え方で、特に女の子の場合は、父親が年頃になると手を引いてしまうことが多い。女の子は思春期になると父親に対して拒否感を持ったりすることがあり、その時に、父親の方で距離をとり、そこからまた距離が近づくためには、3～4年かかってしまうのだ。子どもが離れようとしているときに、父親が近づきすぎたり、離れようとする態度に腹を立てたりすると、思春期の問題では済まなくなり、父子の間に大きな亀裂が生まれ、修復が難しくなってしまうこともある。

さやかさんの家では、父親は程よく距離を取っていた。声掛けを全くしないわけでもなく、不登校になっても、怒鳴ったり叱ったりすることは無かった。むしろ優しすぎる父親であった。その一方で、母親は、ひたすら自分を責め、泣き崩れていた。

父母ともに彼女のことを心配し、カウンセリングには父母そろっていらしてくれたこともあった。その度に、彼女の様子を訊くと、調子が良い時もあるが、イライラしているときもある、父母と一緒に出掛けられるときもあれば、全く出掛けられない時もあるとのこと。何度かの面談ののち、父母に、精神科の受診を勧めた。学校の方も単位の問題もあるので、特別に配慮を要する生徒とし

て時間稼ぎをする話になり、そのためにも診断書を貰う必要があった。父母は何とか彼女を精神科クリニックに連れていくことができ、結果「適応障害」の診断で、抗不安薬、眠剤などが処方されたそうだ。

薬を飲んで、そんなにすぐ効くわけではない。まずは2-3週間様子を見たが、特に大きく変化する様子はなかった。ゲームをしたり音楽を聴いたりして昼夜逆転状態だったので、眠剤の効果で少しそれが改善された程度であった。

結局その後も学校に行くことはできず、転学も考えたが、父母の希望で休学することになった。

そして、2年目を迎えることになり、ほんの少し、家の周りなら一人で出られることがある、という程度にはなったが、学校には気持ちが向かず、不登校のままで、結局通信制の高校に転学した。

通信制に転学して、少し気分が替わったようで、スクーリングに母親の送り迎えで行けたり行けなかつたりを繰り返しつつ、それでも以前よりは行けるようになったので、このまま少しずつ前進していこうという話になった。

夏場は比較的調子よく、また父親や母親と出かけられるので、その時期に父母と相談し、家庭訪問で本児と面談してみることもあった。本児が会ってくれるかどうかわからなかったので、当日もし難しければ電話を貰うという形にした。訪問はこちらの都合で夜6時くらいからで設定していた。1回目は予想通り寝てしまっただけで起きられないからと言うことで中止。2回目もダメかなと思っていたら、なんと、会ってくれた。

初めて会った彼女は、ずっと家にいたこともあり、色白で、かなり太っていた。口を全くきかず、こちらからの質問に首振り人形状態で答えてくれた。初めてでもあり、すごく緊張していたので、5分程度で終了にし、あとは母親と話をして帰るという形を月1回しばらく続けた。

彼女が筆者と話せるようになるまで、絵が得意なこともあるので、絵を描いてもらうことを続けた。丁寧に、時間をかけて絵を描いていく彼女を観ながら、時々質問を投げかけるという形であっ

た。彼女が声を出して答えてくれるようになるまで、半年かかった。そして、少しずつ話せるようになってきた。

中学時代のいじめが酷く、今でも、いじめた人を恨んでいること、高校にはいったら周りの人がみんなすごく勉強ができる気がして辛くなったこと、いじめっ子が近所に住んでいることもあり、家から出たら見られるので出たくないこと、太ったから余計に誰にも会いたくないこと等を少しずつ話してくれるようになった。精神科受診は続けていて、薬も飲んでいるが、そこまで効果が上がるというわけではないようだった。

トラウマ処理をしつつ、絵をかきながら話をするというのを、二年ほど続けた。その間に、彼女が「痩せたい」と言ってくれたので家の中でのストレッチを勧めた、ストレッチが時々できるようになってしばらくしてから、ほんの少しでも一人で出かけられるようにしようと、夜家の玄関から出てみる、それに慣れたら、家の敷地から出てみる、更に、家から通りまで(約10m)を歩いてみる、と言うように、少しずつ一人で家から出られるように、練習を勧めた。これも調子が良い時に限るので、中々進まなかった。一度だけ、通りにあるコンビニにジュースを買いに行けたという話があった。その時は店に入ってジュースのところまっすぐ進み、銘柄も関係なく、一本掴んでレジに行き、急いで帰って来たという。汗びっしょりになった。すごく緊張したと。当然だろう。彼女の頑張りを思いっきり褒めた。しかしその時は出来たがその後は当分動きなしと言う状況だった。

一方、彼女との面談後に母親と話すとということも続けていた。動きが少ない中で、母親にもだんだん疲労感が溜まってくるのがわかるので、母親支援も大事である。そんな中で母親から思いもかけぬ話を聞いた。

母親はさやかさんの実の母親ではないということ、実の母親はさやかさんを生んですぐ亡くなり、その方の妹に当たる人が今の母親であることを教えてくれた。

赤ちゃんの時から育てているし、実であるか
いかを母親が気にするとあまり良くないと思
うのだが、母親としては気になっているよう
であった。さやかさん自身もそのことは知っ
ているとのこと。母親は、さやかさんを育
てるために、実子は作らないと決め、それ
を通していらしたのである。なんとなく、そ
こに無理がある感じはしたが、母親自身の
選択とのことなので支持した。

さやかさんが実母のおなかの中にいた時、
そして生まれてから、わからないまでも感
覚として実母との繋がりが絶たれたこと
は感じたのではないかと思う。彼女の精
神状態が、思春期に悪化したことは、い
じめの問題だけによるものではないと感
じた。実際、筆者が受けているカウンセ
リングのクライアントには、胎児期や出
産期の問題をかかえて、大人になって
から精神疾患を発症している方が多い
ように思う。

その後、彼女は統合失調症の診断を受け、
薬も変わったが、特に大きな変化はな
く、相変わらず、一人で出かけること
が中々できずにいた。

通信制高校を何とか終え、専門学校に
進学したが、ここでも行けたり行けな
かったりが続いた。何とか単位を取
って卒業した。その二年間の間に、学
校での宿泊に参加出来たり、友達と
の飲み会に参加したり、友達と出
かけられるようになった。最初は
おっかなびっくりで、バスに乗るの
も母親が付き添ったりしていたが、
少しずつ自分でバスに乗れるよ
うになった。

波は相変わらずあるが、調子のよい時は、一人

でバスや電車に乗って出かけたり、買
い物に行ったりできるようになってきた。
その中で、少しお金も稼ぎたいとい
う話になり、まずは就労に向けて、
作業所に行ってみようという話にな
った。

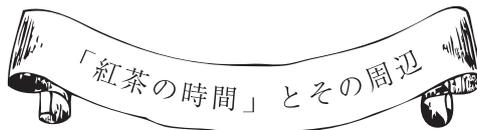
絵を描くときに、パソコンも使っ
ていた経過もあり、パソコン中心の
作業所に見学に行き、漸く作業所
に週1、2回ずつ通えるようになった。
ここまで、本当に長い長い道のり
であった。

まとめ

小・中学校で不登校になっても、高
校から頑張れる子もいる。それが例
え通信制高校であっても、スクー
リングに行ったりアクティビティ
に参加出来たりするようならあ
まり心配はいらぬ。又、何か所
属するところがあるなら、サー
クルでもお稽古事でも良いので、
小集団での人とのかわりがあれば、
これもあまり心配はいらぬ。アル
バイトができるならなお安心。し
かし、どこにも所属せず、長い
こと不登校のままいるケース
では、原因究明をしても中々進
まない。それよりは、前向きな
目標を立てて、カメの歩みで一
歩ずつ、行きつ戻りつしながら
進んでいくのを、気長に伴走し
ていくことが大事だと思う。

大抵学校不適應を起こす子ども
たちは、ゆっくり進みたいのだ。
世の中早すぎて、ついて行くの
にアップアップしている。小
さい時から急かされていれば、
息切れするのも無理はない。
ゆっくりゆったり、少しずつ、
一歩ずつをモットーに支援し
ていきたい。

きもちは、 言葉を さがしている



第 53 話

水野 スウ

ちんちゃん亭のこと

愛知県豊田市に住む鈴木けいこさん・けいすけさんは、夫婦で農家民宿「ちんちゃん亭」を営んでいます。宿の名前は、けいこさんのことをけーちん、けいすけさんのことをけーちゃん、と互いが呼びあうことから、ちん+ちゃん、で「ちんちゃん亭」。

宿だけでなく、キッチンカーでお店を出したり、夏休みにはおとなと子どもまぜこぜの、宿泊版プレーパークのようなセカンドスクールを開いたり、時にユニークな婚活パーティ・ちんちゃんコンを開催したり。そこで出されるごはんの主役はもちろん、夫のけーちゃんが山の湧き水で丹精込めて育てた田んぼのお米と畑のとれたて野菜。

私とちんちゃん亭のご縁のはじまりは、2017年にけーちんとお仲間たちが私の憲法お話を主催してくれたことからでした。その夜はじめて宿にお泊まり、寝具にはこだわっていると聞いていた通り、なんとも寝心地のいいお布団に感動しました。翌年、生活クラブ生協さんのお招きでまた豊田に行くこと

になった時も、再びちんちゃん亭に泊まらせてもらい。それから4年経った22年11月、今度は娘さん二人も連れて家族4人で紅茶の時間を初訪問してくれました。

ここでけーちんの家族構成のことを少し。けーちゃんはけーちんの二人目の夫さんで、けーちんが9歳年上です。10年前に結婚すると同時に、夫のけーちゃんは2人の娘のおとうさんになった。娘さんたちは今ともに20代、長女さんは結婚して子どもが生まれたので、けーちんはおばあちゃんでもあります（紅茶を一家で訪ねてくれた時、長女さんは臨月のお腹でした）。

実はこの再会までの間に、けーちんの身にはたいへんなことが起こっていました。20年1月、乳がんが見つかり、死の恐れが押し寄せる中でがん向きあう日々を過ごしていたのです。現在は、がんサバイバーとして自らの経験と学びと気づき、死生観をテーマにあちこちで語っているけーちん。機会があればいつか私も聞いてみたいと思っていたタイミングで、たまたま私が岐阜へお話の出前に行く用事

ができました。せっかくなので隣の愛知県まで足を伸ばしてちんちゃん亭に行こうかなと連絡したところ、ひょうたんから駒、死生観をテーマにコラボトークしませんか？と、けーちんからのご提案。そこでこの6月、けーちんと私の二本立てお話会として、ちんちゃん亭でコラボすることになったのでした。

というわけで今号のマガジンは、その時のけーちんのお話を中心にまとめた誌上アーカイブ。タイトルは「あなたにとっての、わすれられないおくりもの」。それはとても個人的な、それでいていろんなところに普遍を感じる、けーちんと原家族・現家族を巡る濃いお話でした。

けーちんの選択

けーちんは、幼い時から死を異常に怖がっていて、死にたくない一心で健康オタクになったといいます。人一倍健康に気をつかい、からだによいものを食べ、西洋医学の薬は飲まない。まわりから、けーちんは絶対がんにはならないね、と笑われていたほどの“自然派”。そんなけーちんが10年ぶりに検査を受けたら乳がんになっていたことが判明し、さらにリンパにまで転移していた。一気に死が隣にせまって来た気がしたそうです。

かつてけーちんには、乳がんで余命2年と宣告されて緩和ケアを受けていた友だちがいました。その友だちは結果的に3年間生きて亡くなったけど、緩和ケア病棟に会いに行くたび、とてもつらく苦しうだった。自分ががんと診断された時にその記憶がよみがえってきたけーちんは、訪問看護師をしている友だちのりかちゃんに、私、がんって言われたけどやっぱり最後は苦しいの？と訊いてみたそうです。すると、「おうちで亡くなる患者さんであんまり苦しむかたはいないよ、医療も受けられるし、痛みが出たら、家でも医療麻薬をつかってとることもできるよ」と、りかちゃん。え、がんの最後は絶対苦しいって思ってたけど、そうじゃない亡くなり方もあるんだ！もし自分に何かあったとしても、大好きな人たちに囲まれて、家で安心して、あんまり苦し

まずに最期を迎えられるのなら……とけーちんは少し、いや、だいぶ安心したのだそうです。

とはいえ、けーちんががんとわかった後で受けた精密検査の結果は最悪でした。浸潤性しんじゆんと言って、ほかの場所にまで広がりやすい種類のがんで、3段階のうち一番悪いグレード3、脇のリンパにも転移。増殖スピードの数値が通常は数%から20%台のところ50%もあって進行がとても速く、このままほっておいたらあっという間に死んでしまうかもしれない、という状況だったのです。

けーちんが自分のがんを知るまでの一年半の間に、病院で医療を受けずに亡くなった自然派の知人のかたが3人いました。中には、がんのかたも。一方で、抗がん剤を使う、いわゆるがんの標準治療を受けた結果、今は元気になっている友人もいます。それまで、西洋医学は悪で、抗がん剤は毒、とずっと信じ、そう発信してきたけーちんだったけど、その頃から、本当に悪なんだろうか？ 毒なんだろうか？ 一体何が正しいのか、何を信じたらいいのか、夫婦してわからなくなり始めていたそうです。

そんな経緯もあり、精密検査の結果を見て、まさにリアルタイムでのちの危機を感じたけーちんは、お医者さんから「こんな結果だけでも、あなたにはとてもよく効く抗がん剤がありますよ」といわれた時、即、ありがとうございます！ すぐに受けたいです！ と返事をしました。けーちんがこれまで言ってきたこと、してきたこととは真逆の選択だったけれど、抗がん剤治療をうける決心をしたのです。

けーちん宣言

その後けーちんはFacebookとブログで自らががんになったことを明らかにして、これまで西洋医学や抗がん剤を否定する発信をしてきたことを謝り、抗がん剤治療を受けると決めたことを報告しました。

その当時けーちんがFacebookで書いていた内容を、私は今もよく覚えています。病気にどう対処していくかは自分と家族でよく話しあって一番いいと思える方法を選んでいくので、その選択に対して私たちが不安にさせるような情報は遠慮してもらえたら助

かります、とはっきり表明していたのです。

それを読んだ時、病気についてリアルタイムで書くことも、自分たちがしてほしいことを率直に言葉にすることも、すごい勇気だ、同じことが私にできるかしら、と思いました。ただこの日、けーちんの話をはかき聞いたら、そうすることがその時のけーちんには本当に必要だったんだ、と感じたのです。それまでバリバリの“自然派”で、西洋医学や薬を拒否してきたけーちんただだけに、それと真反対の選択をすることに、きっと驚いたり、戸惑ったり、中には腹をたてた人たちもいたことでしょう。でもだからこそ、けーちん夫婦がさんざん悩み迷ったあげく、こうしようと決めた治療を迷わずに受けていくためには、友だちの大勢いるプラットフォームできちんと自分たちのスタンスを宣言することが欠かせないステップだったんだ、ということがよくわかりました。

それからもう一つ印象的だったのは、抗がん剤の副作用で髪が抜けるので、けーちんのために何かしたいという人は、仮装用のカツラをプレゼントしてくれませんか？と呼びかけたこと。面会に来てくれるかたは、かわいいウィッグじゃなくて派手で楽しいカツラをかぶってきてね、なんて、いつもいろいろな人を巻き込んで楽しいことするのが大々好きな、いかにもけーちんらしいアイデア。こんなときでも、というより、こんなときだからこそ、笑うことを大事にしようとするけーちんって本当にすごいなあ、と感じたのでした。

車の両輪で

けーちんの選択は、西洋医学を信じて、感謝して、委ねることでした。医師や看護師といった医療従事者のみなさんに感謝。病院食を作ってくれる人にも病室のお掃除の人にも、国民皆保険制度にも感謝。高いお薬を使っても高額医療費限度額という仕組みのおかげで超える分は補助が出てそれにも助けられた、だから納税者のみなさんにもありがとうと思えて、けーちんいわく「感謝がもうだだ漏れ」だったそうです。

その感謝はもちろん家族にも。抗がん剤を始めてからは、その影響でけーちんは爪が剥がれ、手も爪も指も真っ黒になった。髪がまばらに抜けて落ち武者あたまのようになった。そうなることがわかっていた夫のけーちゃんは、けーちんが髪を失くすよりも先に自分の頭を坊主刈りにしていました。それだけでない、落ち武者あたまのようになったけーちんに対して毎日、赤ちゃんみたいで可愛い、と言ってくれた。ぜったい可愛いわけじゃない！と思いつながら、けーちんはその言葉にすごく救われていたと。

けーちんは西洋医学の治療をうけながら、あわせて車の両輪のように自然療法もとりいれました。抗がん剤の影響で落ちてしまう免疫力をあげることに、体温をあげることに。自然療法家の友人がおすすめしてくれた米ぬか酵素風呂へ、片道50分かけて週2回通いました。けーちんにはどうやらその酵素風呂がとても合っていたらしく、他の患者さんほどには抗がん剤の副作用がひどく出なかったそうです。抗がん剤を受けた後は1週間寝たきりになってしまう患者さんもいる中、けーちんはすぐにキッチンカーで仕事ができたとか。とりわけ放射線治療は、痛い、かゆい、皮膚がペロンとむける、などの副作用がひどく、抑えるためのステロイドが必須と聞いていたけど、けーちんは皮膚が少し赤くなっただけで痛くもかゆくもなんともならなかったの、ステロイドも使わずにすんで、仕事を続けられたのです。

あなぐまさんの発酵温浴

西洋医学と自然療法の両輪が効いたのか、ひと通りのがん治療を終えた後で細胞を顕微鏡で調べてみると見事にがんが消失。だけどその時先生にこうも言われました。再発率は30%、乳がんは肺や子宮、肝臓に転移しやすいので、もし再発して全身に転移した場合は余命宣告です。完治はのぞめないの、抗がん剤治療で余命をのばすしかない、と。死がこわいけーちんはそう告げられてどんなにおそろしかったろうと思うけど、「次はもう抗がん剤はやらない、とにかく再発させないこと。万が一再発しちゃった

ときはなんとか自力で治す」と笑顔でけーちゃんは言いました。

自分のがんを再発させないために、とけーちゃんが決断したのは、なんと、米ぬか酵素風呂のお店を始めることでした。病気を治療する間、いろいろなひとがいろいろなものをこれいいよ、と勧めてくれて、けーちゃんも一時はわらにもすがる思いで高いお金の水を飲んだこともあったし、いろんなことを試した。なので実際に何が効いたのか確実にはわからないけど、金額的にもそう高くなくて自分の体で一番いいんじゃないかと実感できたのが、けーちゃんにとっては酵素風呂だったのです。

それまで、けーちゃん夫婦はこつこつと老後資金を貯めてきました。でも自分たちが死んでしまったら元も子もない。そこでその資金をつぎこんで22年11月、実家の裏に酵素風呂ひと桶だけの小さなお店をオープンさせました。お店の名前は「あなぐまさんの米ぬか発酵温浴」。屋号をあなぐまさんとしたのは『わすれられないおくりもの』（スーザン・パーレイ作・絵）という絵本に由来します。長老のあなぐまさんが亡くなってみんな悲しむけれど、森の仲間たちが集まって、あなぐまさんはこういうこと教えてくれた、あなぐまさんからこんなことしてもらった、と口々に語りあう。肉体が亡くなくてもその人の存在は誰かの心の中に生き続けることができる、と伝えてくれる絵本です。



けーちゃんとけーちゃん夫婦は、自分たちの残りの人生はあなぐまさんのような生き方をしたいと思っているそうです。残りの人生というのは、けーちゃん

が深刻ながんを体験して生還したこと、そして夫のけーちゃんも子どものころからのひどいアトピー症を乗り越えてきたこと。アトピーでステロイド漬けの歳月を送ってきたけど、20代半ばで何とか脱ステロイドする決意をして、それからの一年半ほどは、全身の皮膚が真っ白い鱗のようになり、歩くと白い皮膚が落ちるといふ、脱ステとの壮絶な闘いの日々。その間、本気で死にたいと思ったことが何度もあったというけーちゃんと、がんサバイバーのけーちゃんにとって、今ある日々は残りの人生、おまけの人生、に思っているのだと。

病気になる前のけーちゃんは、人のために動くことが大好きで、宿の仕事もおもしろくて楽しくて。でもその分、自分を大切にしていなかった、自分のからだへのありがとが足りなかったかもしれない、と気づきました。大切なひとのそばにこれからもいたいと思うなら、もっと自分のからだにありがとのメンテナンスをしなくちゃ、と真剣に思ったし、自分以外の人にもそうであってほしい、そう願ってのあなぐまさん開業なのでした。

あなぐまさんの米ぬか発酵温浴を始めてみると、よかったことがいくつもありました。けーちゃんが酵素風呂にはいれることはもちろんだけど、実家の裏に建てたことでお店の営業時間後、両親をいれてあげられて、温浴中のお母さん、お父さんとの会話が増えたこと。あなぐまさんの仕事の合間に二人の様子を見にいけるようになったこと。お母さんの冷え性が改善されて朝から元気に動けるようになったこと。お父さんが夜トイレに起きる回数が減ったこと。お父さんの看護が始まってからも、仕事を続けることができたこと。

原家族では3人姉妹の末っ子のけーちゃんは、年の離れたお姉さんたちが結婚して家を出た時から、両親の世話をするのは自分、とずっと思ってきました。ごりごり昭和の価値観の親に対して若い頃のけーちゃんは反発と反抗ばかりしていたし、格別に仲のいい親子だったわけじゃない、だけどそう思ってた。なのでけーちゃんと再婚することになった時も、親の具合が悪くなった時はしばらく別居してでも実家にいって世話します、と宣言したそうです。だけど実

際は、実家の敷地内にあなぐまさんを建てたおかげで、別居することなくお父さんを最期まで見送ることができた。けーちんの病気がきっかけで始めたあなぐまさんだったけど、結果的にはけーちんの原家族にとってもそこにあなぐまさんがあることが必然だったのかもしれないな、と感じました。



お父さんのこと

2022年から肺の病気を患っていたけーちんのお父さん。特に治療法がなかったので、病気が分かってからも入院せずに家で過ごしていたけど、今年1月には食欲がなくなって体重も減ってきました。お父さんは「俺はこの先どうなっちゃうのか教えてくれ。苦しんで死ぬのかなあ、入院するのはこわい」とよく口にするようになり、その言葉を聞くのはけーちんにとってもつらいことだった。友だちで訪問看護師のりかちゃんに来てもらって、父が入院したくないと言っているのを家で看取りたいと思ってる、とこちらの希望を伝えてみました。りかちゃんに相談したことでけーちんも落ち着いてお父さんに、「だいじょうぶ、もう病院に行かなくていいよ」と伝えることができるようになりました。

そこからりかちゃんは定期的に、そして最期の日が近づいてくると毎日、訪問看護で家にきてくれました。忙しそうな病院では訊きにくいことも、家に来たりかちゃんにはどんなことでも質問できたし、家族の不安と向き合ってくれて、そのおかげで家族はとても安心できた。何よりお母さんの不安をやわらげてくれたことが本当にありがたかったそうです。

2月に入り、お父さんはぼんやりしていることが

増えていきました。立ち上がるのも一苦勞でトイレには這って行くように。その頃お父さんを病院へ連れて行くと、看護師さんから栄養を点滴していきますか、と聞かれたけれど、そういうことは一切やらない方向で、と答えると、もう看取りの段階に向かわれているのですね、それでは何もせずに、と。このあたりから、りかちゃんが毎日来てくれるようになりました。

けーちんがりかちゃんから教わったという、干し柿の例えがとてもわかりやすかった。お父さんを家で看ていた時に「入院させずにいて脱水症状になったら大変！」と親族から言われて不安になったけーちんに、りかちゃんがこんなふうに説明してくれたそうです。

水分がみなぎっている旬の柿と干し柿をイメージしてみてください。汁いっぱいのみずみずしい柿は、人間でいえば水分量が8割もある乳児期、青年期や壮年期になるとその量は約5～6割、老年期になるにつれてだんだん水分量が減って行って、しまいには4割ほどになる。そうやって水分が減っていくにつれ心臓に負担がかからないようになっていくのだそうです。

だから、シワシワの干し柿みたいになったからだに無理に栄養点滴をすると、かえって心臓に負担がかかって心不全状態になることもある。終末期に過剰な点滴をすると、からだに水がたまってむくんで、かえってご本人の苦しみを増すことにもなりかねないのだとか。

死へのプロセスに今とても興味のあるけーちんによると、からだ弱ってくると徐々に食事の量が減って食べたくなくなり、口数が減り、それにとまってぼーっとする時間、眠っている時間がふえる。臓器の機能も脳も活発には働かなくなり、呼吸や心拍や血圧も不安定になる。同時にからだから水分が減っていくけど、それらすべてがある意味とても自然なことで、それがからだへの負担を減らしていくことでもあるのだそうです。

そして最期の最期には、エンドルフィンという脳内モルヒネがどんな人にも出て、その鎮静効果はモルヒネの80倍もあるという。おお～、すごい、ど

んな人にも！ それはちょっと楽しみです。

家族で看取る

2月中旬になると、お母さん、けーちゃん、お姉さんたち、娘たち、孫たち、もちろんけーちゃん、と入れ替わり立ち替わりお父さんのそばにいて、入院せず自宅で、延命措置も、点滴もなしで（本人がほしがる水分をとるだけで）あまり苦しむことなく、最期の日まで。その入れ替わり立ち替わりの中には、けーちゃんの元・夫さん（2人の娘の実の父親）もいてくれたそうです。

実はその間に2回、お父さんに危機的な時がありました。でもぐっと我慢して救急車は呼ばずに家族で様子を見ていた。呼べば心臓マッサージや点滴が始まるだろうことを知っていたからです。その代わり、苦しそうになったときはみんなで声をかけて体をさすってあげてね、とりかちゃんから教えてもらっていたので、かわるがわるお父さんに、ありがとうねー、ここにいるよ、大丈夫だからねー、と声をかけながらからだや背中をさすっていると、一時間くらいでお父さんの息が楽になってきた。お父さんが落ち着いてから一旦解散。でもその二日後にまた苦しうようになったのでもう一度みんなが集まり、一人ひとりお父さんにお礼を言いながら体をさすっているうち、ふーっとお父さんの呼吸が楽になった。そうやって家族全員で一緒に、2度の峠を乗り越えることができたそうです。

たまたま近くまで来たので、と偶然のように寄ってくれたりかちゃんが、みんなでお父さんを囲んでいる家族写真を撮ってくれました。もともとはけーちゃんが自分で撮るつもりをしていたけど、りかちゃんのおかげで一人も欠けてない家族写真になった。88歳のお父さんが、家族に見守られる中でおだやかに、枯れるように、亡くなっていったのは、最期の家族写真を撮ってもらって、たった30分後のことでした。

お父さんのお葬式は、けーちゃんたちらしい方法で自宅でシンプルに楽しくおこないました。それができたのは、けーちゃんが葬儀屋さんとの打ち合わせを

事前に済ませていたから。決めないといけないことがたくさんあるけど、亡くなった後だと感情的にも時間的にも冷静に決めるのは難しいだろうなと想像していたのです。

葬儀をすることになったらきっとモヤモヤするよ、というんな人から聞いていたので、モヤモヤすることはできる限り減らし、感謝だけの葬儀にしようというんな工夫もしました。たとえば、お香典は頂かず、よってお返しもなし（それってできることなんだ！とちょっとびっくり）。88歳と高齢のお父さんだったので連絡は最低限の親族にだけ。車をとめるところもご近所さんをお願いした。当日のお弁当は自分たちで。あらかじめ用意してあった何枚かのお父さんの写真を、デザイナーである娘さんに楽しくデザインしてもらって、それを遺影に。お経は友人であるお坊さんにあげてもらう、などなど。いろいろなことを可能な限り、友人たちに頼んで、巻きこんで、誰も我慢しない、誰も無理しない、服装も平服で、というスタイルでお父さんのお見送りをしたそうです。

お父さんからのギフト

こんな日々を過ごした後、お父さんはいくつものわすれられないおくりものをのこしていただきました。

けーちゃんの一番上のお姉さんは、夫さんも娘さんも息子さんも、そのパートナーもみんな医療系の仕事についている医療一家。けーちゃんが自宅でお父さんを看取ろうとしているとお姉さんがはじめて知った時、お姉さんはとても心配してお父さんを東京に連れてきて入院させる、と言っていたそうです。その後しっかり家族で話し合っ、結果的にはお姉さんたちもお父さんを家で看取することに同意してくれたという経緯がありました。それでも姪ごさんは不安だったんでしょうね。すごく信頼できる看護師さんにおじいちゃんの今の状態を話して「入院させないなんてありえないですよ」と言ったそうです。するとその看護師さんから「これだから医者には困る。先生、しばらく仕事休んでもいいから、おじいちゃんの看取りをしっかりとってきてください。」と押し出されて豊田までやってきました。

でも一連の看取りを経験して彼女の考えは変わっていき、最後、棺桶の中に「おじいちゃん、死に方を見せてくれてありがとう」という手紙を入れました。そして自分が医師なのに、訪問看護師のりかちゃんに「私、生まれかわったら訪問看護師になりたいです」と話した、と。今からでもできることがあるよ、ってりかちゃんは言うてくれたそうだけど。そのくらい、お父さんは最期、苦しまずに、枯れるように人が死んでゆく姿を見せてくれたのでした。

そしてもう一つのおくりもの。けーちんの長女さんは、なぜか昔から人に迷惑をかけちゃいけない、とアンテナを張って空気を読んで過ごしてきて、子どもに迷惑かけたくないから最後は施設に行く、そのために貯金しなくちゃ、と言っていたそうです。けどおじいちゃんの看取りを経て、私もじいちゃんみたいに、みんなに囲まれて手を握られながら死にたいと思った、と。

それを聞いたけーちんはとってもうれしくなって、長女さんにこんなふうに話したといいます。迷惑をかけたくないから自分でなんとかするためにお金を貯めなきゃ、というゴールから、みんなにお世話になります、だから助けてくださいというゴールになったことで、人と関係性をつくろうと思える。そんなふうに思えてよかったね、と。

人に頼らず生きることをゴールにすると、人と関係性をつくるよりも稼がなきゃ、貯金しなきゃ、になるけど、人にお世話になることをゴールに設定すると、関係性を大切にしたい、お互い様の気持ちになって、周りの人への感謝のきもちであふれる。

ああ、本当にそうです。なんて大切なギフトを、けーちんのお父さんはお孫さんにのこしていつてくれたことだろう、と私も胸が熱くなりました。

ゴールを設定する

けーちんの話の中でも特に印象的だった「ゴールを設定すると生き方がかわる」という言葉。長女さんにも話したように、ゴールが変わった瞬間から、言動や行動、人への接し方が変わる、とけーちんはいいいます。

けーちんの大きなゴールは後悔なき人生だけど、具体的にどんなふうに最期を迎えたいかを想像して、元気うちから、こうしたい、こうしてほしい、と家族に伝えていきます。こわがり不安がりだから、体が弱っていても入院せずに最後まで家にいたい。必ず誰かに交代でそばにいてほしい。(ちなみにがん入院していた時のお守り必需品は、スマホと充電器とレンタルwi-fi。コロナ下で会いにきてもらえない時期だったけど、いつもそばにいるよ、一緒にいるよ、の感覚でいられるようにLINE電話はずっとつなぎっぱなしだったそうです)

そして最期の時が近づいてきたら、痛いこと、苦しいこと、死の恐怖から解放してほしい。痛みをとるのに医療麻薬をつかって意識がもうろうとなっても構わないよ、それまでにしたい話は全部しておくから。訪問看護は友だちのりかちゃんにお願いしたい。結婚式がそうだったように、葬儀はみんなに仮装してほしい。香典はいただかない、参加費というかたちでもらうのはいいかな、お返しは私がかじり用意しておきたい、などなど。あれ？ 死ぬのが怖かったはずなのに、こんなふうに考え出すとちょっとワクワクしてきた！ とけーちん。

夫婦だから、家族だから、言わなくてもわかる、通じ合えるはず、察して当たり前、とけーちんは思っています。今のけーちんは、大人だから、親だからということで、自分の怖い気持ちも不安も、隠したりしない、ごまかしたりしない。これっておそらくまわりに波及します。そうか、言ってもいいんだ、隠さなくてもいいんだ。病と向き合うために、人生の大変なことに一緒に立ち向かうために、自分に正直になって相手にそれを伝えるって、誰にとってもすごく大切なことだと思いました。

終わり方をこうと決めたら、このゴールからの逆算人生がスタートします。人生のしまい方にその人の人生が凝縮される。「どう死にたいか」から「どう生きたいか」が見えてくる。そうしたら自分の選択に自信が持てる。やりたいことがはっきりする。パートナーや家族や友人との関係性も変わっていきます。

人は一人では生きていけないからこそ、みんなと

協力して、みんなに甘えていけたらいいな、とけーちん。脳性まひ当事者で小児科医の熊谷晋一郎さんがいうように、自立とは依存先を増やすこと。一人に全部お願いしたらしんどいけど、たくさんの人に少しずつ依存することで、みんなができるときにできる範囲でかかわることができるんじゃないのかな。

だから、けーちんにとって人生のミッションは、苦楽を共にできるチームをつくることなのです。病気の時にも痛感したと言っていたけど、家族はいざというときに協力しあうチーム、弱った時にお世話になる存在。そうとらえたら、その人たちに対して自分がいばったりなんてできないよね。困ったときには仲間や友だちにも助けてほしいと思ってる。そしたら、その人たちに意地悪なことだってできないよね。

どの人だって、ずっと心も体も健康な状態が一生続くわけじゃない。そのうちできないことや自信がなくなる瞬間がやってくる。そういう時にその人が踏ん張れるのは、体の細胞レベルに溜まった安心できる言葉のおかげなんじゃないかな。

けーちんはそれを「大好き」の貯金、と表現していました。好きだよ、大事だよ、生まれてきてくれてありがとう、って言葉をかけ続けられると、その先の人生で落ち込むことや悲しいことが起きたときも踏ん張れる力になるんじゃないかな。愛情のタンクがいっぱい貯まると、そこから愛が溢れ出て人に優しくできるって信じてるし、その優しさは連鎖していくと思う。そう考えるけーちんは、今でも毎日けーちゃんや娘さんたち、新しい家族である長女さんのパートナーにも、いっぱい言葉にして伝えているそうです。

beingあなた／わたし

ごくごく個人的なこともオープンにして、自然体の語りで自らの死生観を語ってくれたけーちん。パワーポイントでいろんな写真や絵を次々と映しだしながら話すのだけど、その画像や添えたコピーがおもしろくて楽しくて、話の中身はがんや死についてなのだけど笑いがいっぱいの1時間半でした。



絵本を持っている私の左がけーちん
後ろで手を広げている左の坊主頭がけーちゃん

どう死ぬかは、まさに、どう生きるか。けーちんの話は、見たばかりの「かづゑ的」(監督：熊谷博子)という映画にとっても重なるところがありました。かづゑさんはハンセン病の元患者さんで、10歳で岡山の長島愛生園という療養所に入って以来、96歳の今もそこで暮らしておられます。若い頃から本をたくさん読み、想像の中で自由に世界中を旅し、手の指や足をなくそうとも、とことん自分らしく、幸せになるために生き抜いてきたひと。

この映画の英語のタイトルが「being Kazue」だと知った時、すごく深くていい言葉、びっくりと思いました。ほかの誰でもない自分であること／自分であること、自分を生きること。けーちんの話を聴きながら、ああ、なんともけーちん的だなあ。being けーちんだなあ。そう思ったし、私もまた、being スウで生きていきたいよ、と強く、楽しく、感じたことでした。

けーちんは今後もこういう話をいろんな人に聞いてもらいたいと思っています。内容はそのつど、夫婦で話しあいを重ねてバージョンアップしていくのだった。死ぬことと生きることのお話の出前という仕事は、今後、けーちんけーちゃん夫婦にとっておそらくライフワークにもなっていくのだろうな、と思う。機会があればあなたにもぜひどこかで聞いてみてほしいお話でした。さらに機会があれば、ちんちゃん亭にお泊りもぜひどうぞ。

農家民宿ちんちゃん亭

<https://tinchantei.eyado.net>

住所：愛知県豊田市押井町寺ノ入4

連絡先：090-1280-0033

おまけ。私のあなぐまさん体験

ちんちゃん亭でのお話会翌日。私はけーちゃんにお願いして、以前からずっと興味があった「あなぐまさんの米ぬか発酵温浴」を初体験させてもらいました。ちんちゃん亭から車で40分ほど走ると、けーちゃんの実家、最初の結婚で暮らしたお家の裏に建っている、あなぐまさんに到着です。

お風呂の入り口の前に、けーちゃんがあなぐまさんをはじめた時の想いがはってありました。

店主けーちゃんは、2020年1月に乳がんと宣告されました。闘病中は「酵素風呂」に週2で通い、目視レベルでがんは消滅しました。

「自分よりも誰か」「休息よりも仕事」。自分を大切にしていませんでした。忠告してもらっても「忙しいから」と言い訳をして。あんなに忙しく動いていたのに、病気になったら予定が全て白紙になりました。やりたいことをやるためには、健康でいなくちゃいけない。誰かの役に立ちたいなら、大切な人のそばにいたいなら、自分のカラダに「ありがとう」のメンテナンスをしてほしい。「忙しい」のはみんな一緒。何を優先するかだけ。

温熱+酵素+微生物のチカラを借りて、細胞を修復しましょう。日々生まれては消えていく「がん細胞」や、病名がつかない「未病」をやっつけて、ずっと健康で過ごせますように。大切な人たちと一緒に長生きできるように「米ぬか発酵温浴」を開業しました。 2022/11/22 open

脱衣所で服を脱ぎ、浴室にはいり、どきどきしながら米ぬかで満たされた木のお風呂桶にはだかのからだを横たえます。ふわっふわっ、ふっかふかの、米ぬかのお風呂。ひとに見られたくない部分にだけ自分の手のひらでぬかをかけたら、別室でスタンバイしているけーちゃんに、お願いします、と声をかけ

る。風呂桶の中の私のからだに、けーちゃんが素手で米ぬかをすくってはかけていってくれて、私はすっぽり米ぬかにうまります。目の上にもぬか入りの袋を乗せてもらったので、もうこれ以上の無防備はないよなあ、状態。



しばらくするとじわあっとぬくぬく度があがってくる。かわいた米ぬかのこちよい重み。この、じわあっとあったかいきもちよさは、わが家でお腹に箱型の温灸を乗っている時のじわあっにも似てるけど、この温浴はからだ全体がうまっているので、そのきもちよさ、半端ないです。通常は15分が目安だそうだけど、私は5分追加してもらいました。熱さの感覚は個人差があってそれよりもっと短い人も。

ぬかに埋まって目を閉じたまま、傍にいるけーちゃんと言葉をかわします。お客さんにはいろんな病気のかたがおられるよう。けーちゃんの病気にとってこの発酵温浴はとてもあっていただけで、だからといってここにくるお客さんに、これで絶対なおります、とか、そのためにもっと頻繁に通わないとダメです、とか断定的なことは決して言わないようにしているそうです。

けーちゃんと話していると、あなぐまさんで働いてくれている7人のスタッフさんにとっても感謝しているのが伝わってきます。あなぐまさんから自分の給料までは出ないけれど、それにまさるおつりがきつといっぱいあるのでしょ。

ぬか漬けに毎日の手入れが必要なように、このお風呂にも毎日のお世話が要ります。よくある酵素風呂はぬか独特のにおいが気になるけど、あなぐまさんでは通常の3倍もの時間をかけてお手入れをしているので、こんなにも香ばしいにおいを保っているのだそう。その手間ひまかかる役を夫のけーちゃんが担ってくれている。だからお店のスタッフさんみただけで、けーちゃんにももう感謝しかないんだよ、とけーちゃん。

ぬかのお風呂から出て、シャワーをあびて、タオルでからだをふいて、服を着て終わり、と思ったら汗が、顔から背中から身体中から吹き出す。ありゃ、これからスタッフさんとの研修会と称するランチなのにどうしよう、って思ってたけど、ランチタイムまでにはもうその汗がすっかり引いて、全身さらっとかわいていて、この上もない爽快感。米ぬかでのんり香ばしい自分のからだ、なんていいきもち。

こんな発酵温浴が近くにあったら私、通っちゃいます。関心あるかたはぜひ問い合わせしてみてくださいね。
2024/8/29

あなぐまさんの米ぬか発酵温浴

女性専用／完全予約制

はじめてのかたのお試し価格は3300円

住所：豊田市高上2-3-7

連絡先：090-1280-0033



<https://www.instagram.com/explore/locations/305945709473079/>



<https://www.facebook.com/p/あなぐまさんの米ぬか発酵温浴-100068215837424/>

Blog「バンビの独り言」

けーちゃんの乳がんサバイバーの記録はブログから読むことができます

<https://blog.goo.ne.jp/banbiblog/e/ef8b2d2a76d95f40964000302ddf88ec>



ちんちゃん亭にお泊まりしたみなさんと

路上生活者の個人史

第12回

竹中尚文

松山 直樹 氏(仮名) 1967年生

生まれは西宮です。生まれた頃の家族構成は、両親と私と2歳下の弟との4人家族でした。父親は、電気店を経営していました。冷蔵庫や扇風機などを売る店です。母親もその店を手伝いながら、私たちの子育てをするような生活でした。しかし、街の電気屋で電気製品を買う時代ではなくなったのです。人は大型スーパーとかで電気製品を買うようになりました。私が小学校の頃に、父親の店は潰れました。父親は転々と仕事を変えていました。母親もパートで、私たちの生活も変わりました。私は地元の小中学校を卒業して、神戸の高校に進学しました。

高校を卒業して、神戸で就職をし

ました。その会社で旋盤の仕事をしていました。神戸は鉄鋼や機械の大きな会社があって、その下請け会社もたくさんありました。そこで15年近く働きました。辞めた理由ですか。給料が上がらないのですよ。30才を越えても就職したときのままの給料では、昇給などは一切ありませんでした。だから転職しました。加古川市にある金属関係の会社に行きました。給料も良かったし、社宅もありました。転職して2年目の頃に結婚をしました。子どもが生まれて直ぐに、その会社が倒産してしまっただけです。家族3人で女房の実家に転がり込みました。加古川市北部の田園地帯にある農家でしたから、大きな家でした。しばらくは農業の手伝いをしていましたが、次の

仕事を探しました。就職したのは大阪で飲料品関係の会社でした。大きな会社でした。そこで物流関係の作業をしていました。女房は子育てもあるから、そのまま実家に住み続けました。私は加古川の女房の実家から大阪まで1時間以上かけて通勤していました。そんな生活が20年近く続きました。

義父さんから、「家を建てて、独立をしてはどうか」といわれて、近所に家を建てました。それから間もなく、離婚ということになりました。理由ですか。お互いの考え方の違い、というか生活観とか人生観の違いでした。僕は離婚したくなかったですよ。上の子どもは成人していましたけれど、下の子どもは高校生と中学生でした。子どもたちの将来のこともあるし、新築の家のローンもあ

るし、心配しました。ローンは義父さんが何とかするし、子どもたちは女房が育てるといなのです。仕方なく、家を出ました。

それから、直ぐにコロナが始まりました。コロナ禍の中で会社の経営状況がよくないといなので、リストラにあいました。少しばかりの退職金をもらいましたが、直ぐにこの路上生活です。また、頑張っ働かないといけないと思うのですが、何かもう働く気持ちになれないのです。頑張る気力が起きないのです。今は、バス停で寝ています。寝袋に入って眠ります。こうやって、炊き出しもあります。確かにきびしい生活ですが、仲間がいっぱいますから何とかかなります。仲間がいなければ、こんな生活もできません。

今回の話を聞いていて、奥様やその家族の方々からは異なったストーリーを聞かされるかもしれないと思いました。どのストーリーが真実であるかということより、松山氏がホームレスであるかという現実に関心があります。一般的にホームレスになるとするのは、人生の選択であるように思われているようです。松山氏の場合も彼の選択だといえそうかもしれませんが、積極的に選り取った道ではありません。実際のところ、気がつけばホームレスだったということかもしれません。私たちが社会生活を送る要因に「希望」というものがあるように思います。いつか、松山氏がまた頑張っ働こうという気持ちになるような日がきてほしいと思います。そんな「希望」もてる人のつながりが結ばれてほしいと願うのです。

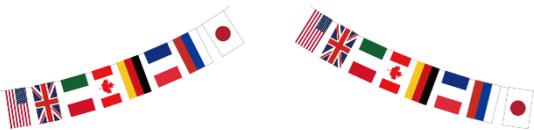


スポーツおじいさんにないたい！②



『チャレンジャーズ』

國友万裕



1. 無意識だったことを意識化すると…

いきなり、際どい話で恐縮なのだが、最近になって俺の陰部の謎が解けた。

実は俺は、睾丸が普通の男性よりも相当大きいのだ。普通の人、3、4倍くらいの大きさだ。これは赤ちゃんのときからで、おばあちゃんが心配して、病院に連れて行ったこともあるくらいなのである。

その時、その病院の先生は、「大きい方がいいんですよ（笑）」と豪快に笑っておっしゃったのだそうである。

その後、俺はそのことに関してはそれほど気にしたことはなかった。長いことプールに通っていたので、短い競泳用のパンツをはくことはあったが、睾丸が大きいことを他の人から指摘されたことはなかったし、一旦水に入ってしまうと体は見えなくなる。仲のいい男の人と温泉に行くこともあるが、人の股間なんてみんなジロジロ見ない。

ところが、最近になって、マッサージの人からそのことを指摘され、たまたま泌尿器科に頻尿の治療のために通っているので、その先生にそのことを相談してみたのだ。

すると、なんと、鼠蹊ヘルニア（脱腸）がその原因だったのだ。だから睾丸が大きいわけではなく、脱腸で、腸がはみ出しているので、大きく見えるのである。

コロナの前だから6年くらい前だったと思うが、鼠蹊ヘルニアのせいで、救急車で運ばれたことがある。あの時の痛さは大変なものだった。

あの時は若い男の先生が2人、一生懸命ヘルニアを体の中に入れようとしていたのだが、うまく入らない。そこにベテランの年配の先生がやってきて、ぐっと押すとすっ

とヘルニアはおさまった。医者は年寄りの方がいいと言われるが本当にそうだなあと実感したのだ。思えば、あの時手術を勧められたのだが、忙しいし、怖いし、しなかったのである。

今回の泌尿器科の先生は、「無理に手術する必要はないけど、もし気になるんだったら、ヘルニアの手術をすれば普通になるし、紹介状を書いてもいい」と言ってくれた。

しかし、ネックがあった。全身麻酔の手術でするみたいなのだ。俺は全身麻酔は嫌なのだ。前に骨折した時に一度だけ経験があるのだが、一瞬のうちに意識がなくなる。あれは怖い。

もちろん、手術は寝ている間に終わるので、医者の方はその方が楽なのだろうが、そのまま目が覚めなかったら、手術の最中に地震でも起きたらという気持ちにもなってくるのだ。どこか部分麻酔でやってくれるところないかなあと思っているのだけど、この頃の医者は手術というと必ず、全身麻酔だとか言ってくる。部分麻酔でできる手術でも、全身麻酔のほうが医者の方はやりやすいのだろう。

まあ、このままでいいかと思った。一般人に見せるようなところではないわけだから。

だけど、その部分を意識し始めると異常にそのことが気になるようになってくる。これまではプールに行ってもお風呂に行っても、全然気になっていなかったのが、この頃はみんな俺の股間を見ているんじゃないかという気持ちになってきて、意識してしまう。

人間って、そんなものなのだ。意識し始めると、他の人は大した問題とは思ってなくても、本人にとっては問題が大きくなっ

ていく。

スポーツ問題にしても、俺は子供の頃から、運動神経ゼロだと言われ続けた。親や親戚からも言われ、先生たちや周りのクラスメートからも言われ続けた。だから俺は子供の頃からその部分を過剰に意識するようになって行った。

俺は60歳になった今でも、そのトラウマをどうすることもできない。俺を傷つけてきた人たちは、俺をこれだけ傷つけたことを覚えてもいないだろう。言っている方は深い意味はないのだ。別に相手が運動神経が良かろうが悪かろうが、他人からしてみれば、そんなのどうでもいい。軽い気持ちで、冗談半分で言っているのだ。しかし、言われている当人には、それが一生消えない重荷になることだってあるのだ。

人間って、本当に嫌な生き物。

それはそれでいいのかもしれないのだ。この世が理不尽で、嫌な奴に満ちた社会だということがわかっているから、この後老いて、天に行くのも怖くなくなる。

俺が洗礼を受けたのは一つにはそのせいだ。洗礼は天国へのパスポート。きっとこの世よりもいい世界が死後の世界には待っているのだ。

2. 男という快樂

2ヶ月ほど前だ。

ボクシングでちょっとトレーニングが高度になって、元教え子のトレーナーからお腹を殴られた。何回も殴られた。俺は、殴られるたびに、「いてえ〜」とうずくまった。

その後、その日はまともに眠れなかった。上体を起こしたような変な姿勢で眠ったの

だった。その後も痛みは1週間くらい続いた。

次にジムに行った時に、「俺はもう60歳なんだから、あれはやめてくれ。あれだと仕事に響くんだ」と元教え子に訴えた。ところが、彼の方は俺がそれを言ってもどこ吹く風。「殴り合うのがボクシングじゃないですか」と荒っぽいトレーニングをやめようとしなないのだ。

彼は20代半ばだから、まだまだ若い。ちょっとぐらい痛みが残っても、深刻な問題とは思っていない。

マッサージの人にそのことを話したら、「いじめられているんでしょうに」と言われた。そのマッサージの人も、時として、ものすごく痛い治療をしようとするのである。「止めて！いてえ！」と俺が叫んでも、「ちょっと押しただけですよ。大丈夫です」と一向にそれをやめようとしなない。

思えば、この人も子供の頃から体育系で、スポーツクラブのインストラクターをしていたこともある人だった。

体育系のやつって、こんなものなのかと俺は思った。

「痛い！」ことをわざとやる。それが特訓みたいな雰囲気なのだろう。

先日のボクシングのトレーニングでは、元教え子から、「僕の顔を殴ってください。一回殴れたら、練習終わりにします」と言われた。

とは言っても、彼の方は俺が殴ろうとしても、器用に体をかかわしていく。殴るに殴れない。それに教え子の顔を殴るなんて、どうしても躊躇してしまう。「俺は元々人の顔を殴れるような性格じゃないんだよ。俺はMなんだから」と彼に言った。

「じゃあ、僕が先生を殴るのは良いんですよ？ Mなんだったら」と彼は笑って答える。「それは、それで困るけど、、、」と俺。

「本当にこいつは俺の体のことを真面目に考えていない」と本当に半ば切れそうにもなるのだが、なんとなく体育会気分で嬉しくなる部分もあるのだった。

このジムに行って楽しいのは、でかい声で、「ありがとうございます！」「おっす」と掛け声をかけることができる自分になったことだ。

ここは小さなジムで、若い男たちがメイン。女の方はほとんどいない。だから恥も外聞もなく、体育会っぽい掛け声かけられる。昔の俺だったら柄にもないことだから躊躇していただろう。

上半身裸になって、練習することだってできる。この間も暑かったせいで、後半はずっと上裸のままトレーニングをした。元教え子は、「そんな汚い体をださんと。シャツを着てくださいよ」と笑いながらも、俺の上裸の写真を撮ってくれた。

楽しいひとときだった。

おそらく、体育系の男たちは、もう小学校の頃から、こういう思いを味わってきたのだろう。多少、荒っぽいことをしても、言いたい放題を言っても、どこまでが許されるかがわかっている。

だから俺も彼らのことを嫌いになることはなく、関係は続いていく。思えば、彼のトレーニングを受け始めて、もう4年の月日が流れているのだ。

3. 男になんてなりたくない！

俺だって、子供の頃、こういう付き合いを

したかったんだと思う。だけど、それができなかった。そこにはいくつかの要因があった。

① スポーツ音痴

何よりもスポーツ音痴だったことである。これは俺の母の家系からの遺伝だ。母側のおじいちゃんはまったくのスポーツ音痴で、兵隊にも行かれなかったと聞いている。母側のおばあちゃんは、俺を誰よりも愛してくれていたが、「万ちゃんも、スポーツさえできればねえ。昔はそんなのはどうでも良かったから」と母にもらしていたのだそう。俺がスポーツができないことは、子供の頃から俺の人生の癌だったのである。

このおばあちゃんの言葉から考えれば、昔はスポーツ能力なんてどうでも良かったのだろうか。それを裏付ける資料みたいなものはないのだが、俺たちの頃は、それより昔に比べてスポーツ教育が厳しくなっていたことは事実だったのかもしれない。実際、俺のおじさんもおじいちゃんに似てスポーツ音痴だが、おじさんは、適当に体育の授業をさぼって、そのことに悪びれもせず、普通に社会人になっていったのである。

② スポーツは似合わないという劣等感

俺は物心つくから、スポーツができないと言われ続けてきたので、スポーツをするのは、自分には似合わないという思いもあった。俺は大人しく本を読んだり、テレビを見たりしているタイプの子だったので、腕白とか悪ガキいう要素が全くない子だった。俺は子供の頃からワイルドなことをするのが似合わないと言われて育ったのだ。

だから、スポーツマンっぽいことをして

も似合わない。俺たちが小学校の高学年の頃 G ジャンが流行っていて、正月の親戚の集まりの時のために、母が俺に一着 G ジャンを買ってくれた。しかし、俺より3つ年上の従兄は、自分も G ジャンを着ているのに、俺の G ジャン姿を失笑した。「あんたには似合わないんだよ」

それ以来、俺は G ジャンは着なくなった。

俺の心が弱いと言われてしまえばそれまでだ。人からどう言われようが、気にしないで着ればいいのだと言われるかもしれない。しかし、俺は元々、G ジャンというタイプのキャラじゃないことは自分でもわかってたし、自分が気にしていることを、人に指摘されるのはひどく自尊心を傷つけられる経験なのである。

俺は男っぽいことをする柄じゃないのだという思いはずっと俺の心の底に染み付いていた。体育の時間は出来る限り自分は何もできないんだと無力に小さくなって過ごした。俺にとっては何もできない弱者であるよりほかなかったのだ。それが自分の身を防御する唯一の方法だったのである。実際できなかったし、頑張ってしまうと似合わないと言われることは目に見えていたからである。

③男になると不当に厳しくされる

さらに、いつも話す小学校の高学年の時の女の先生だ。

この先生は女子には絶対に体罰をしないのに、男子には容赦なく顔が赤くなるくらいビンタを喰らわす人だった。この先生が担任だった3年間、一度もこの先生からビンタされなかった男子は俺1人なのである。他は1人残らずビンタされた。一方で、

女子の方は1人としてビンタされた子はいなかったのである。

俺がビンタされないで済んだのは、一生懸命、自分の男の部分を抑えていたからである。ちょっとでも気を抜くと、その先生からビンタされる。ちょっとでも男の子らしい悪戯や腕白なことをしようものなら、容赦なくビンタが飛んでくる。

その女の先生の口癖は、「男の子は将来一家の大黒柱にならなきゃ行けないのよ」だった。「男は男らしく、女は女らしく」という考え方が非常に強い人だったのだ。「男は強くあらねばならないけれど、女は弱くても構わない」と言うのが、この人の考え方だった。

にもかかわらず、男の子が男の子っぽい腕白ぶりを発揮すると容赦なく殴る。自分が男子たちに男らしい男であることを強要しておいて、男が、男っぽいことをすると殴る。彼女は、全くの矛盾を男の子たちに押し付けていたのである。

俺は以前にもまして男の子集団から外れて行った。俺はその先生の体罰がそれくらい嫌いだった。俺だけは殴られないようにしようと思っていた。俺はだんだんと自分が男だということを憎むようになって行った。女の子の集団で遊ぶようになっていったのである。

セクハラはどれだけ相手が挑発的な格好をしていたにしても、誘惑的な態度をとったにしても、する方が悪い。それはフェミニストたちがずっと訴えてきたことだ。そうであるのならば、俺がキモい男だったにしても、運動神経ゼロであったにしても、Gジャンやタンクトップが似合わない男だったにしても、それを露骨に意地悪く言う方が

悪いのである。

そして、体罰もしてはならないことが定められているのに、自分の気まぐれで平気で体罰する先生の方が悪いのである。あの当時はコンプライアンスなんて、全くない世の中だったのだ。

サンドラ・ヘフェリンの『体育会系 日本を蝕む病』という本があるが、日本は体育ができないとそのあとにも希望がもてなくなる。まず、男の子らしい遊びから排斥される。俺はドッジボールの仲間にも入れなかった。このまま大人になって、社会人になっても付き合いゴルフだってできないだろう。そもそも友達もできなくていつだってハミ子だった。そんな俺が日本の体育会みたいな社会にはまっていけるだろうか。

俺はだんだんと現実の世界から逃避し、自分の世界で遊ぶようになっていったのだ。

4. 過去や現在を正しいと思わないで……

俺は高校になってすぐに不登校になった。

学校にいても人目が気になって、先生の話聞くことすらできなくなり、完全に気が触れたような状態になってしまっていた。1年高校を休学しても治らず、その後、通信制の高校に移った。全てが惨めな毎日だった。母にも苦勞をかけた。近所の人たちからは白眼視される日々が続いた。

母はその当時から、ある宗教団体に頼るようになった。そして、一度母に連れられて、その団体に行った。

あれは17歳の時だ。通信制の高校に移って2年目になり、どうにか大検を目指して前向きに勉強していた頃だった。

その時、宗教団体の上の方の地位にある

おばさんが出てきた。母より年上の人だった。俺の状態がどうなのかということは母や他のおばさんたちから多少は聞いてはいたはずだったが、会ったのはその時が初めてだった。

そのおばさん、俺に会うなり、次のように偉そうに説教をし始めた。

「もう一度、高校を受験して、行かれることをお勧めします。ちゃんとプロセスを踏んでいかないと・・・」

ただでさえ、不登校でどうすることもできず苦しんでいる子に、こんなセリフを言ったらますます追い詰めるだろう。その時、俺はすでに3年も遅れていて、どうにか大検を受けて、大学に行こうと前向きになっていた頃だ。そんな時にこんなセリフを言われたんじゃ、ますます、迷いが生じる。

このおばさんの問題点は社会の仕組みや社会のプロセスを踏んでいくのが真っ当な生き方だと思っている、そのことに疑いすら持っていないところだった。形の方が先で、他の要素を全く考えていないのだ。そして自分の方が相手よりも正しいのだという思い込み。当時は、こういう人というのはたまにいたのである。

俺は普段大学生と接しているが、大学の場合は高校までとは訳が違うし、みんな大人である。アメリカの大学なんかだと25歳以上の大学生が40%もいるのである。しかし、日本は大学生であっても、1年や2年浪人したくらいのことを気に病んでいる子はたくさんいる。

それが、高校となったら尚更である。高校生はまだ管理の下に置かれる。軍隊のような統制下におかれる。そういう生活を3年も遅れてできるだろうか。

さらに、このおばさん、その後、高校の話になったときは、「私の知り合いの息子さんは、学校から帰ると目一杯勉強していました。高校生っていうのはそれくらい勉強するものですよ」とそれが当たり前のことみたいに断定した。

当時は確かに受験戦争は厳しかった。一流大学に入るためには3年間勉強にプライオリティをおかざるを得なかった。そのため、そういう日本の教育体制に対する批判もあったのである。しかし、このおばさんは社会のあり方に対する疑問を全くと言っていいほど持っていなかった。画一的な社会や周りと同調する社会を丸ごと受け入れていくのが、人間の真っ当な生き方であるかのように思っていたのである。

時は花の1980年代である。まだバブルが弾ける前だったので、好景気だった時代だ。努力すれば人間誰でも報われるという信念を持っていた人が多かったのである。

日本はサンドラ・ヘフェリンさんがいうように「同調圧力」と「根性論」の国だ。個人差なんかは全く無視して、周りと同じことができないやつは容赦無く糾弾される。根性なしと言われる。そういう国なのである。

当時は、それこそベルトコンベアーの時代。同じルーツを辿って、同じスーツをまとうって、同じ行程を歩いていく。当時の日本人は、それが真っ当と思っていた。そういうアホな国だったのだった。

先日7/26(金)のニュースに出ていたのだが、熊本の中学で、遅刻した罰としてプールの端を走らせてやけどさせた体育教師のことが問題になっていた
(<https://news.yahoo.co.jp/articles/0e5e36>)

[ab6f7b8154635b88cf4b88e6bc828a3d2d](#))。

まだいまだに、九州はこうなのである。

まして、九州の人吉である。人吉といえ
ば、郡部のほうで、熊本市で暮らしている人
間であっても滅多にいくことはない。熊本
の郡部は、つい 10 数年くらい前まで、男子
中学生に丸刈りを強制していた地域で、そ
ういうところだから、意識が 50 年くらい遅
れているのだと俺は偏見と差別に満ちたこ
とを思ってしまうのだった。

まして、俺たちの頃は親だって先生だっ
て、第二次大戦を潜り抜けた世代だった。だ
から、衣食住にも困るような時代を通り過
ぎているから、学校での体罰や叱責ぐら
いは軽いことみたいに思っている人が多か
ったのだろう。

だけど、過去や現在を正しいと思わない
で！世の中は確実に変わっていく。人の心
だって確実に変わるのだ。これ、前に日吉ミ
ミの歌の歌詞にあったよね？笑

これを九州だけのことだと思いたい。

もう俺は九州に帰る気はないから、九州
なんて異文化社会と思って、自分と切り離
せばいいのだ。九州は保守的。共産党の力が
強い京都とは、文化が大きく違っているの
である。

とはいうものの、俺は京都に来てからも
う 40 年以上が経っているが、俺が京都に
来てから接してきた人は主としてインテリ
族である。

そもそも大学から大学院に進んで、大学
の講師の仕事をした。当然のことながら、
周りは超高学歴の人たち。

30 代になって、男性運動に参加したが、
ここで出会った人たちも、大学関連者が多
かったし、普通よりも遥かに学識のある人

たちだったのである。

そして最近になって、クリスチャンにな
り、教会に通い始めたが、教会にくる人たち
もインテリ族の人ばかり。

従って、俺が京都に来てから出会った人
たちは、ほとんど頭脳派で、優等生できた人
ばかりなのである。これを基準にして、世の
中を考えるのは間違いなのかもしれないの
だ。

ちょうどお盆の頃、教え子の男の子 2 人
と筋トレに行った。俺は体育会のやつが好
きだ。俺が体育会とは程遠い性格だったか
ら、体育会のやつを見ると羨ましくて、憧
れてしまう。例えば、普段プライベートで食
事に行ったり、卒業後も付き合いを続けて
いるのは体育系のやつが圧倒的なのである。

彼らは本当に俺を持ち上げるのが上手い。
ジムでも、親切に指導してくれるし、「先生、
マッチョですよ」「僕の親父なんかには比べ
れば、はるかにしまっていますよ」と嬉しい
ことを言ってくれる。あまりにもお世辞が
上手いので恥ずかしくなるくらいなのだ。

トレーニングが終わった後、サイゼリヤ
に行った。

ここでも、彼らは、「先生、僕が水持って
きます」「おしぼりどうぞ」と至れり尽く
せりである。

俺は、彼らがあまにも気を遣ってくれる
ので、やはり体育会だから、上下関係の厳
しい世界を生きているせいかと思った。昔
は体育会という上下関係厳しくて怖いと
いうイメージだったのである。しかし、彼ら
に聞いてみると、今はそれはないとのこと
だった。

ただ、「クラブの OB で、1960 年代、70
年代ぐらいにクラブにいた人だと怖いです

よ」と漏らしていた。

60年代、70年代に大学だった人といえ
ば、おそらく団塊の世代前後の人である。も
う戦争は経験していないにしても、学生運
動の嵐の中で育った人たち。人間は戦い、傷
つくことによって強くなるんだという古い
価値観に囚われていたのだろう。

いや、そこまで考えていなかったのかも
しれない。あの世代の人たちは今の感覚で
言えば単細胞なのである。思えば、俺が中学
くらいの頃、ちょうど映画とかに関心を持
ち始めた頃の映画やテレビドラマは単純で、
陳腐な内容のものが多かったと記憶してい
る。

あの当時、山口百恵主演の『赤いシリー
ズ』が人気があった。『赤い疑惑』というド
ラマでは、彼女が白血病で若死にするまで
の物語をもうメロドラマに描いていた。不
治の病だけではなく、あり得ないような悲
劇が彼女をどんどん見舞っていく。今見る
とアホみたいな話なのだけど、あの頃の人
はあんなアホなものに夢中になっていたの
である。

映画でもそうだ。あの頃は、白血病で死ぬ
という映画が非常に多かったのである。し
かも、それを現実とは程遠い、あり得ないく
らいの御涙頂戴映画として描いていく。

この頃はそういう映画はめっきり減った。

これは時代の成熟だと俺は前向きに考え
ている。

5. 『チャレンジャーズ』(ルカ・グアダニーノ監 督・2024)

スポーツ映画にしてもそうだ。

70年代には、『ロッキー』(1976)が一斉

を風靡した。ああいう単純明快なスポ根映
画があつた頃は人気があつたのだ。

1996年『白い嵐』という映画があつた。
この映画は海兵隊の男の子たちと鬼の指導
者の話だが、これは褒めている人もいたけ
れど、俺は好きになれなかった。

1982年の『愛と青春の旅立ち』でも鬼の
軍曹が出てくるが、あの当時は鬼の軍曹を
ある面美化して描いていたのである。

もちろん、これらの映画の場合は、軍人を
志願している若い子を教育するという目的
があるからで、そうそう優しいことばかり
も言っていられないというのはあるのだろ
うが、それにしても行き過ぎだと俺は思っ
ていた。

そういえば、この当時までは、自動車教習
所の教官なんかでもヤクザ者みたいな人が
多かったのだ。

しかし、その後、時代が下るにつれて、そ
ういう単純なスポ根映画やしごき文化はな
くなっていった。

21世紀のスポーツ映画は、単なる根性も
のではなくてきている。むしろ、男の子
にシンクロをやらせたり(『ウォーターボー
イズ』)、女の子にサッカーをやらせたり(『ベ
ックカムに恋して』)という、クロスジェンダ
ーの面白さを狙うものが増えている。

最近見たスポーツ映画でダントツで面白
かったのは、『チャレンジャーズ』である。
これはゼンデイヤの主演で、テニスの世界
を舞台にしている。

ここでは彼女が演じるテニスプレイヤー
が2人の男性テニスプレイヤーを同時に愛
し、しかも男2人もゲイ的な関係になって
いくところが、きわめてファッショナブル
に描かれる。すなわち、スポーツを介したバ

イセクシャルの話であり、ネタバレになるが、とりわけラストの男2人が抱き合う場面は秀逸である。

ある先生の話だと、最近の日本のアスリートが世界的に活躍するようになったのはシゴキ文化の衰退のせいだそうである。

先述の通り、アメリカでもスポーツ根性ものはもちろんあるが、日本はとりわけ根性論の国、練習させ過ぎるといのは昔から批判されていた。しかし、徐々にそういう文化はなくなってはいるのである。

おそらく、生徒をシゴク指導者や教官は、おそらく、そういう支配的な男が男の中の男だと思っていて、そういう男を演じることにハマっているのである。

しかし、そういう先生たちはもうオジイちゃん。近いうちに世の中から消えていくだろう。そう考えれば、世の中は悪くなんかになっていない。むしろ、多様性や感受性を大事にする世の中へと進化しているのである。

あと10年、20年、とりあえず、まだ俺が生きている間に、今までの鬱憤が晴れるような世の中にならないかなあ。それが俺の切なる思いである。

役場の対人援助論

(49)

岡崎 正明

(広島市)

助言かせんといかん！

若い頃は生意気で（今もその感は否めないが）、児童相談所に勤めてから初めて入ったお客さんとの面接で、30歳位上の先輩職員に、

「あの～、DVとかあるかもしれないので、夫婦分けて面接した方がいいんじゃないですか？」

などと意見したりする職員だった（内心ビビってたけど）。

たしか還暦近い左官の夫と、30代のブラジル人妻が3歳の子どもと来所していて、生活の立て直しのために子どもを施設に預けたいという相談だった。目がクリクリした可愛い子だった。

私は採用試験で、

「アメリカでは10年以上前から児童虐待が社会問題になっています。これから日本でもそれは大きな問題になると思うので、ぜひ児童福祉分野で仕事がしたいです！」

と鼻息荒く話し（珍しくこの予想は当たってしまった。競馬はてんでダメなのに）、めでたく希望が叶って児童相談所勤務となったのだが、社会福祉士の資格だけは通信制の専門学校でとって入庁したものの、大学は法学部でまったく福祉のことは学んでおらず、20代の職員は私だけということもあって、何をどうしていいのか、誰に何を聞けばいいのか、まさに「何が分からないのか、それが分からない」状態であった。

そのくせ、かすかに分かることや自分が思いついたことは、つい黙ってられない質で、上司や先輩にアレコレ意見具申し、

「うん、たしかに。岡崎くんの言うことももっともだ」

「いいんじゃないか」

などと評価されると、

（よしよし、俺の考え間違っていないぞ！悪くないぞ！）

と喜んで、ホッとして、自分がここでやっていける足掛かりをなんとか感じようとしていた。

だから質問に的確に答えてくれたり、納得できる助言をくれる先輩や上司、役割的に

言えばスーパーバイザーと呼ばれる人たちをすごく頼りにしていた。今さらながら、そういう存在に本当に助けられ、支えられ、目をつぶってもらってここまで長く勤められるようにしてもらったんだと思う。

ただ、逆にそうでもない年配の職員に対しては、

（あの人より俺の方がなんぼか働いとるわ！）

などと、余裕がなくなると自分のしんどさを八つ当たりの的にぶつけるような心持ちになり（だぶん隠してたつもりだが、態度に出ていたことだろう）、無礼極まりない若者であった。

今さらだけど、本当にごめんなさい。

因果応報？輪廻転生？あなたの番です？…よく分からないが、時の経過とともにそんな生意気な若手職員も歳をとり、ここ数年は見事に中間管理職となって、今まさしくスーパーバイザー的な業務が中心となってきている。

「あの、岡崎さんちょっと…」

「ご相談したいことがあるのですが、いいですか？」

最近私に話しかけてくれる職場の人の多くが、こんな感じの声かけから始まる。

伺い、承認、報告、許可。協議、相談、お墨付き。そしてそれにとまなう責任…。

そんなワードを意識する仕事が増えてきて、私の感じる悩みも、仕事の見え方も、若い頃とはずいぶん変わってきたように思う。まあ、そんな現象は私だけではなく、同世代の多くが経験することだろうけど。

職員からの相談を受ける側、助言する側の立場となり意識すること。1つはもちろん、子どもや当事者家族にとって、今の私たちにできる最大限のことは何か？何が一番いいのか？ということで、これは昔から変わらないポイントだ。

ただ、それと同じくらい意識することがもう1つ。それは相談をしてきた職員・ケースワーカーにとって、私がどう対応し、どう助言すること（あるいはあえて助言しないこと）がいいのか？どうすれば彼（彼女）の役に立ち、学びになり、効果があって元気になれるのか？という点である。

どんなに的を得た見立てで、家族のためになる正論な意見でも、現実的にケースワーカーが実行できないことでは、まさしく絵に描いた餅だ。

「そんなこと言うけど、それできんの？」

「じゃあ、おたくがやってみてよ」

なんてバックレたことは、うちの若い子は人間ができているので言わないが、そんな風に思わせてしまったら、こちらの負けである。

そのことは、私の師匠（勝手にそう思っているが、先生は弟子認定してくれない）である、児童精神科医の岡田隆介先生から教わった大切な姿勢のひとつで、先生がほとんど前半は眠っているような判定会議でも、後半の最後にバツと起きて、

「それはこういうことやん。君すでに〇〇できてるし。これでいったらええやん！」

と、困り果てている担当ケースワーカーにリフレーミングを行い、とにかくワーカーを勇気づけ、元気にすることで、家族にも変化を起こしていく姿を目の当たりにしてきた者として、身に染みている。

なお、岡田先生のスゴさについては、対人援助学マガジン57号、宮井研治さん作「人生は対応のバリエーション ～第5話私説『岡田隆介論』～」に詳しいので、ご参考に。

そんなわけで、ケースの正しい理解と効果的な助言を目指しながら、担当職員を勇気づけ、さらに教育的効果も狙うというのが、目下私の命題なのである（一度に何匹のウサ

ギを追うつもりなのか？って感じだが）。

「スラムダンク」でいえば安西先生、「鬼滅の刃」でいえば鱗滝左近次、「風の谷のナウシカ」でいえばユパ様あたりが、目指す理想像なのだ。あ、ちなみにユパ様はあの風体でなんと45歳(!)という設定らしいが、どう見ても私の年下には見えない貫禄と説得力がある。さすが腐海一の剣士である。

だから最近はその相談を受けている最中に、個人的に良いこと思いついたり、「こうすればいいじゃん！」なんて感じて、

(待てよ～岡崎。ここですぐいっばい言えばいいってもんじゃないぜ…)

とひと呼吸おいて、伝える内容やタイミングをフル回転で考えたりしている(でも結局よく喋るけど)。

細かく、丁寧に、具体的に助言を伝えることで、より正確にその意図を理解してもらい、高い効果を狙いたいと思う反面、あまりに手取り足取りやり過ぎると、自分の頭で考えない、私の意見を聞くだけの人間を作ってしまうかわないか？指示待ち人間にしまわれないか？

「俺が頭脳でお前は手足！黙って言われた通りに動いてりゃいいんだよ！」

的な方向に行くのは非常に危険で良くないよな…とったり。

かといってあんまりにもケースの見立てがズれてて、子どもの福祉にも良くない状況なのに、

「そうかー。キミがそう思うなら、好きにおやり。自由気ままにね～。ルルル～」

なんてのも絶対ダメだよな～とか。

なんとかその間にある、ベストバランスを探そうとあがいている。そんな感じである。いまだに正解は分からんけども。

正解が分からないといえ、

「どうしたらいいですか？」

と聞かれて、これにすぐ答えの方がいいのか？それともまずは本人の考えを聞くのがいいのか？も悩ましいところで。まあ大抵は、

「あなたはと思うの？迷ってていいから教えて」

と聞くようにはしているが、

相談してきた職員からすれば、

(分かんないから聞いてるんだから、早く答えてよ！)

とか、

(た、試されてる？)

とか思わないかな…と少し心配もしてしまう。

でもやっぱり、自分であーでもないこーでもないと考えて欲しいなと思って、そんな問いかけをしてしまう。別に試してるわけではないし、私も正解を持っているわけではないので、純粋にケース家族の一番近くにいる人の意見を聞きたいというのが、根底にある。

理想的なスーパーバイズとは何なのか？なりたてスーパーバイザーの私に分かるわけではないが、普段気にしているポイントを忘備録代わりに記すとしたら、下記のようなところだろう。

① 聴く・理解する編

- ・ 相談してきた職員が何に、どれくらい困っているのか？

- ・ どうしてその職員はそう思っているのか？（見立ての理由・根拠）
- ・ 職員のできている点、上手くいっている点はどこか？
- ・ 本当はどうしたい、どうなればいいと思っているのか？
- ・ 職員とケースや関係機関の間で、何が（どんなパターンが）起きているのか？
- ・ 今、ここで（スーパーバイズ場面で）何が（どんなパターンが）起きているのか？

② 伝える・動かす編

- ・ いかに分かりやすく、納得できるように伝えるか？
- ・ 本人ができそうだと思うか？希望や見通しを持てる助言になるか？
- ・ どうしたらより職員本人が主体的にケース理解を深め、想像力を高められるか？
- ・ 本人がマシやできている点を認識し、リスクもストレングスも平等にテーブルに乗せて見られるようになるか？
- ・ いかに本人の努力を労い、苦労を分かち合って感謝を伝え、心理的安全性を高められるか？

ざっとではあるが、そんな風に整理して考えると、基本的にスーパーバイズにおける職員への向き合い方と、私自身のケースとの向き合い方って共通しているなあ…と気がついた。まあそれは私が曲がりなりにも家族療法やシステムズアプローチを学んだから、当たり前前といえば当たり前なのかもしれない（っていうか、それしか知らんのだが）。

対象が職場であれ、当事者家族であれ、そこにシステムとパターンがあり、こちらがどう関わって変化を起こすか。その辺りに私の興味はあるのだろう。悩む職員にどうジョイニングしてコンプリメントし、例外探しやリフレーミングで「なんとかやれそう」との希望を作り出していくか。多くの先達や師匠・岡田先生から教わったそのタネを、どう若手に受け渡していくのか。それが今私が最も大切にしている仕事なのだ。

ただ悩ましいのが、若い頃は確認・承認をしてもらえる先輩・上司・師匠などが多くいて、間違いの修正や助言をもらうことができていたのだが、この年になってくるとドンドンそういう相手が減ってしまい、

（これでいいのだろうか…）

という不安を自分で処理したり確認したりすることに、まだ慣れないでいたりする。

まさか若手におじさんのグチや悩みを聞かせるわけにもいかないし。

まあ今はまだ少なからず、自分の上司や先輩というポジションの人がいてくれるから良いが、この先さらに歳を重ねると、どんどん相談したり承認してくれる相手がいなくなるんだよな…などと考えていると、所長や社長といわれる人の、いわゆる「トップの孤独」の大変さ、しんどさを改めてしみじみと感じるようになった。

世の中のトップの方々、本当にお疲れさんです。

臨床のきれはし

SHEET26

浅田 英輔

Power dynamics

なんとなく「やさしさ」が求められる時代である。

強い言葉や「指導」はハラスメントと指摘されることもあり、うるさすぎるなあとすることもなくはないが、これまでハラスメントが見過ごされすぎてきた反動とも考えられる。やさしく言えばいいというものでもないが、怒鳴りつけたり、ましてや暴力は不要である。それに、職場の同僚や部下に対するセクシャルなかかわりは不要なはずだ。

ただ、こういうものは一概に「これこれしたらハラスメントです」とは言えないはずである。暴力などの明らかなもの（暴力はハラスメントというより犯罪である）は別として、例えば一度怒鳴ったらハラスメントなのか？間違いを指摘したらハラスメントなのか？どれも「場合による」としか言えないのではないだろうか。どうしても我々は、「〇〇することはハラスメントになります」とか決めたがるし、はっきりさせたがる。

本来は行為があったかなかったよりも、相手の人間性の搾取があるかどうかであるはずだ。そしてそれには関係性が大いに影響する。だから、年頃の男女のいわゆる「アプローチ」は該当しないことが多いはずである。しかし、意図しない相手からの唐突なアプローチは好ましいものにはなりにくい。段々仲良くなって、「なんかいい感じ」になってから先に進めばいいのに、一言ふたこと話したことがあるくらいの人がいきなり告白してしまうのはハラスメントととられてもしょうがない。どうしても

年長男性はパワーを持っていることが多いので、若い女性が適当に同調しているものを好意ととってしまうのだろうが、それにしただってソレとコレと違うのくらいわかれよと思ってしまう。

そういう場合も含めて、「どういのだとよくて、どういのがダメ」というのは非常にわかりにくい場合も多いので、ひとまとめにして「ハラスメントだ！」としているのだろう。気心のしれた相手に対して「アホか www」というツツコミをするのは、だいたいの場合 OK だが、ほぼ初対面の新人さんにそんなこといったら怖がられたりして、それはハラスメントだったりするものである。

どれにしても、相手との距離感が適切でないと言えるだろう。人と仲良くなるには、いい感じに踏み込んでみたり、ちょっとだけ言い過ぎてみたりして距離を測っていく。遠すぎると仲良くなれないし、変に近すぎると警戒されるだろう。そこをうまくやるのがコミュニケーション能力というヤツなのだろう。

やたらと人事部門に言いつけたり、いきなり大騒ぎしてしまうタイプは、そもそものコミュニケーションが取れていない可能性が高い。上司に対して関わり方の不満を言うにしても、（モノによるが）いきなり「それはハラスメントです」などとするのは悪手である。大ごとにしてその上司の社会的立場を粉碎したいという目的なのであればそれでよいが、よりよい環境で働きたいということが目的なのであれば、その方法はだいたい間違

いである。同僚に相談したり、直接の上司に相談したりといった段階を踏むのが適切であるが、そういうコミュニケーションが取れない人もいる。

これらの原因のひとつとして、人間関係の経験値が足りてないために、だんだんと距離を縮めることがうまくないということが関係してそう。あるいは、距離を詰める手段をあまり持っていないのかもしれない。周りにいる若い独身コミュ強は、驚くほど気軽に女性を飲みに誘うなど、距離をほどよく詰めるのがとてもうまい。詰めすぎない。でも詰める。重ねてきた経験 + 成功体験 (+ たくさん失敗) が違うのだろうと思う。

私の周りでは目立たないが、飲み会に参加したがない人。若い人に多いというが、ある程度年齢がいった人たちの中にもそれなりにいるように思う。「酒を飲まないで仲良くなれないのか？」という考えの人もおかしくはないが、職場の飲み会というのは「お手軽」なのである。職場の飲み会以外で、仲良くなりたい同僚を誘うほうがよっぽど難しいよね？ 仲良くなりたい人、もしくはまだ話したことがないけど普段はあまり用事がない人と仲良くなるのにお手軽なモノが職場の飲み会である。もちろん、気の合う人ばかりではないだろうし、面白いばかりではないだろう。でもまあ、参加してみて、「この上司はこんな顔ももってるのか」とか、「この人意外とめんどくさい人だな」とか、楽しんでいる自分を発見するとか、いつもとちょっと違うものがみえたりする。それが多分、コミュニケーションの経験値になるのではないだろうか。

仲良く話せる人が増えると、職場の飲み会も楽しいし、普段の仕事も前よりは楽しくできる。そうなってくると、「ハラスメントだ！」なんて大騒ぎせずとも、誰かに相談できたり、職場環境をよりよくするための工夫ができたりするのだ。別に、職場の人とすごく仲良くならなくたっていいんだけど、プライベートの一面を知っていたり、大事にしているもののひとつを知っていたりするほうが、普段のコミュニケーションもスムーズになり、なにかと聞きやすいし、頼まれやすく、仕事がうまくいくのではないだろうか。

少し年をとってから、部下や後輩にハラスメントだと言われずにうまく指導するためにも、ほどよく仲良くなる術を持っていることは大事なことだと思う。仲のいい先輩に「もうちょっとここは丁寧にチェックしなさいね」と言われるほうが、受け入れやすいだろう。仲がいいわけでもなく、前から気に食わない人から注意されると「なんでオメーに言われなきゃならんのだよ」「ハラスメントかよ」となりがちである。

コスパタイプを重視して、「直接役に立たないことはしたくない」という気持ちもわかるが、「ピンポイントで必要なものだけ得る」というのは非常に難しいことである。一見いらぬものや無駄なものをたくさん集めて積み上げて、その上にできあがるのが「ほんとに必要なもの」であることは多い。20人の職場の飲み会でも、ちょっと話してみたいなと思える人が一人か二人いればよい。もしかしたら、あなた自身がそう思われている一人かもしれないし。「今日は話したことない人二人と話してみよう」と思って参加するのもよいかも。参加してみたらつまらないかもしれない。でも、そういう経験を重ねることって案外大事なんじゃないかな。

ハラスメントだーと騒ぐ前に、できることは結構あるんじゃないかと思ったりする。

もちろん、許せないやつは許さなくてよい！！

発達検査と対人援助学

⑰ 赤ちゃん研究の第二幕

大谷多加志

一般社団法人の設立時社員になりました

今年の8月に、新しく設立される一般社団法人の設立時社員かつ理事になりました。無給の公益性重視の一般社団法人なのですが、この辺りを届の提出で許可してくれる大学の寛容さがありがたいです。この一般社団法人の名称は『子どもと育ちのコホート研究・実践協会』となっていて、乳幼児の発達研究の実施や支援を行うことを目的に設立されました。法人の設立に関わるという、これまでに想像もしていなかった展開に、戸惑い半分、わくわく半分という感覚です。41歳で前職を退職した時に個人事業の開業届の提出くらいはやったのですが、法人設立となると比べ物にならないほどたくさん手続きがあり、とても自分にはできない仕事だと思いました。主導して下さった理事の方に感謝です。この法人の設立にはBOLD (Baby Online Live Database) という件級プラットフォームが関わっているのですが、本日はこのBOLDを含めた赤ちゃん研究関係の近況について書いてみようと思います。

BOLDのこと

『BOLDとは、日本赤ちゃん学会ライブデータベース研究部会が運営する発達研究

のための新しいオンライン調査システムです。全国の大学等の発達研究者と子育て中の保護者をつなぎ、自宅から気軽により多くの方に研究に参加してもらうことを通じて、人の心や脳の発達、そして発達の個人差を多面的に把握することを目標としています。単なる研究の場所としてだけではなく、赤ちゃん、保護者、発達研究の研究者の交流の場となることも目指しています。』（日本赤ちゃん学会ライブデータベース部局ホームページより）

Webまたは紙媒体の調査票に回答してもらうことでデータを得る。少子化が進み、乳幼児（特に多くの場合在宅である0歳児）の発達調査を行うことがますます困難になっていくと予想される中、このようなオンライン調査は今後さらに本格化していくと期待されます。一方で、オンライン調査にはメリットだけでなく、デメリットあるいは限界もあります。赤ちゃんと直接会うことはできませんから、調査手法は限定されます。また多くの場合、対象者は自宅などから参加することになり、参加のハードルは下がりますが、調査場面の設定を厳格化することは難しいです。ただ、これらの限界はあっても、やはり今後オンライン調査は赤ちゃん研究の中での大きな流れになっていく

と思います。

BOLD システムの利用を検討される研究者の方や、調査に参加してみたいお子さんの保護者の方は、以下のリンクから連絡あるいは BOLD へのご登録をお願いいたします（登録無料です）。また研究者の方は加藤ほか（2024）や、Kato et al.,(2021)などにシステムの特徴や今後の展望について書かれていますので、併せてご参照頂ければと思います。

【BOLD の登録手順はこちら】

[resigtration \(bold.or.jp\)](https://bold.or.jp/resigtration)

【BOLD を利用したい研究者の方はこちら】

[研究者向け情報 \(bold.or.jp\)](https://bold.or.jp/researcher)

赤ちゃん調査のこと

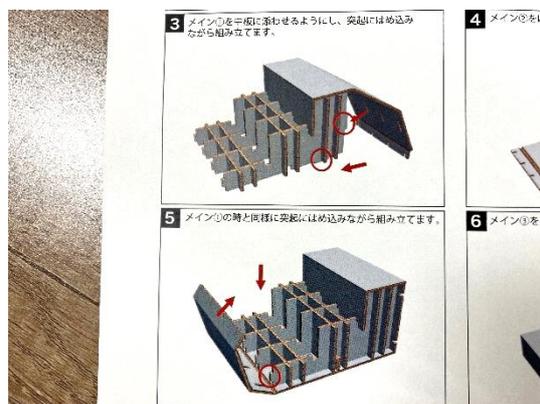
そんな想像が膨らむ BOLD のプロジェクトにこれからも関わっていくわけですが、一方で自分自身はほとんどの調査を対面で実施し、調査手法もアンケート式のものほとんど使ったことがなく、個別に実験的な手法を用いてデータを得ることは中心です。そうすると、オンラインによる制約は、相対的にほかの研究者と比べても大きくなってしまいます。あとは単純に、赤ちゃんと遊びながら調査をする方が好き、というものがあります。

ここからは執筆者短信に書いたこととも重なるのですが、対面での赤ちゃん調査のお話です。これまで、対面での赤ちゃん調査は同志社大学赤ちゃん学研究センターに共同研究の計画を採択して頂き、実施してきました。おそらく 2018 年が最初の共同研究だったので、そこから 7 年目ということに

なります。今、科研費を得て行っている研究も、もともとは赤ちゃん学研究センターの計画共同研究でスタートを後押しして頂いたことがきっかけで、センターとの出会いがなければ今の研究活動はまったく実現できなかったと思います。

その赤ちゃん学研究センターが、2024 年度末で学外の研究者への共同利用事業を終了することとなったと発表されました。シンプルな寂しさと、あれほど助力頂きながら大した成果を出せなかった申し訳なさと、慣れ親しんだ訪問先がなくなる喪失感など、いろいろな感情が渦巻きまわっています。とはいえ、まだ赤ちゃん学研究センターでの調査は今年度末まで続きますので、最後までやりきり、これまでの成果もできるだけよい形でまとめられればと思っています。

一方で考えないといけないのが、自分の研究活動のこれからです。いくつかの研究テーマがありますが、やはり赤ちゃん研究が一番ウエイトが大きなもので、これが続けられなくなるのは大きな痛手でした。それで、少し自信はなかったのですが、自分の研究室で独自に赤ちゃん調査をスタートさせてみることにしました。幸いにして、学内の単年度の研究助成を得ることができ、調査スペースの設備購入費を準備することができました。



イオンモールでフロアマットを大量買いして床に敷き詰め、本棚に覆いをつけるためにカーテンとカーテンレール替わりの針金を設置し、最後に室内における組み立て式のダンボール階段を特注で作ってもらって、赤ちゃん学研究センターの調査室をギュッとコンパクトにしたような調査室が誕生しました。倫理審査などの手続きも完了し、あとは参加者募集ができれば、いつでも調査を始められる段階になりました。自前でこのような試みができるのも、これまでに与えてもらった機会があったからにほかなりません。終わるものもあれば始まるものもあります。ここまでつながってきたものを、よりよい形で次につなげていきたいです。



※予算不足で手すりは自作しました！

文献

加藤正晴, 土居裕和, 孟憲巍, 村上太郎, 梶川祥世, 大谷多加志, 上原泉, 箕浦有希久. (2024). Baby's Online Live Database によるオンライン縦断研究. 心理学評論, 67(1), 95-108.

Kato, M., Doi, H., Meng, X., Murakami, T., Kajikawa, S., Otani, T., & Itakura, S. (2021). Baby's Online Live Database:

An Open Platform for Developmental Science. *Frontiers in Psychology*, 12. doi:10.3389/fpsyg.2021.729302

立場が変わると何が見える



～その10 対人援助者の姿勢～

坂口 伊都



はじめに

今年の夏も猛暑。朝8時の外気温が34℃と、最高気温でも不思議ではない気温です。今後、夏の気温はどこまで上昇するのでしょうか。未恐ろしさを感じます。

8月2日～4日に開催された京都国際社会福祉センター家族療法ワークショップ STEPⅡにスタッフとして関わらせていただきました。受講生は23名。

1日目 13:00～18:30

2日目 9:30～18:30

3日目 9:30～15:30

という長時間の研修でしたが、気がつけば、あっという間に終了時間が来ていました。

私は、「家族面接の質問からの展開方法について」を担当。

2日目に受講者が4つのグループに分かれ、それぞれ問題を抱える家族になりきり、各グループ分の家族面接を録画します。3日目の担当時に、その中の1グループの録画を見ながら、振り返り、面接者に別の質問を考えてもらい、その場で模擬家族に新たな面接を実践し、また振り返るワークです。

家族面接の初回面接では、ジェノグラムを描きながら、家族の名前、漢字、年齢、職業等を尋ね、3世代を描いていくのが基本です。それは、私の中でテンプレートのようなものになっています。受講生の皆さんが、基本情報を得ることに悪戦苦闘している姿を見て、改めて慣れていないと難しいものなのだとわかりました。

具体的には、

「どなたからでも結構ですので、家族の紹介をしてください」と面接者が促します。

「では、私から。父の〇〇です。」

「お父さんですね。(白紙にジェノグラムの口を書く)〇〇さんの漢字は？年齢は？お仕事は何をされ

ているのですか？」

とジェノグラムにお聞きした情報も書き込みます。

「次は、母の△△です。」

「お母さんですね(ジェノグラムに○を足す)。漢字は？おいくつですか？お仕事は？」

この手順で尋ねていくと家族の基本情報が得られます。家族と一緒にジェノグラムを描いていくと、完成させたいと思うようで、丁寧に教えてもらえることが多いです。

受講生の皆さんも家族の基本情報を聞こうと試みます。

「どなたからでも結構ですので、家族の紹介をしてください」

「では、私から。父の○○です。隣が母の△△、長男の□□…」

と、サラッと家族の紹介が終わります。

違いは、ジェノグラムを家族に見せながら描いているか否かです。

ジェノグラムは、内部情報として使用しており、家族と描くことに抵抗を感じてしまうと話す受講生がいました。

それぞれの当たり前は、同じではないのですね。家族と一緒にジェノグラムを描くと、そこにいるメンバーが皆、ジェノグラムに気持ちが向かい、家族の情報を伝える事に抵抗感が下がること、その場で聞けなかった情報も後で話題にあがれば、ジェノグラムを見返しながら自然に質問ができることを伝えたら、「こういう使い方もあるのですね」と驚いていました。



何故、家族の基本状況を踏まえないかということ、人の生活は家族の営みがあり、その上に様々な症状が出てくるからです。今回の模擬家族事例では、子どもがモノを盗むという行動が問題にされ、面接者の多くがそこに焦点をあてていました。その行動に家族システムがどう影響しているのかに興味を抱くことが最初の一步です。

今回は、いろいろな対人援助職がありますが、その姿勢について考えていきたいと思います。どうぞ、最後までお付き合いください。

犬と猫と

以前に 4 歳のネコが亡くなった時のことを書きました(対人援助学マガジン50号)。その時は、4歳という若さで逝ってしまい、とても悲しかったことを思い出します。動物と暮らすということは、病気や看取りも含まれることは頭ではわかっていますが、いざその場面になると冷静でいることは難しい。

我が家には、15歳と14歳の老犬と7歳の猫がいます。14歳の老犬の目は、ほとんど見えていません。15歳の長老犬は、元気で良く吠え、食欲旺盛。猫は、マイペースに犬と違う場所で良く寝ていました。

ある日、一番元気だった長老犬が吐いて、便も緩い。何か悪いものでも食べたのかな？翌日になるとふらふらとして、まっすぐに歩けない。顔が大きく右に傾いて、見るからに変です。何も食べたがらず、急に亡くなってもおかしくないように見えました。

今年から行き始めた動物病院で診てもらうと、

「これは、突発性前庭疾患の可能性が高いですね」と図鑑のような教科書を見せてくれました。

平均感覚をつかさどっている前庭神経に異変が起こる病気で、老犬に多いそうです。眼球が揺れ、ずっと船酔いをしているような状態になっていて、犬なりに平衡感覚を保とうと調整して顔が傾いていく。何が原因で起こるか、わかっていないとのことでした。

「先生、この病気で死んでしまうのですか？」

「死なないです。落ち着いていくまでに個体差がありますけどね」

「それでも治療は、対処療法しかできません。血液検査をしてもこの病気では何も数値として出ないのですが、この病気でない可能性は捨てきれないので検査をすることもできますが、どうしますか？」

こちらが尋ねる前に、

「血液検査をすると、だいたい 5,000 円ぐらい。点滴と吐き気止め、下痢止め、念のためのステロイドを少しだと、これぐらいの値段になります」

と教えてもらえました。血液検査はせず、処置をして、明後日の診察受診となりました。受診も 19 時 30 分までに入ればいいので、仕事の後でも駆けつけられます。

犬は、フラフラしながらも吐き気止めが効いてく



ると、ささみなら食べられるようになり、ドックフードも嫌がらなくなっていました。やれやれです。

次は、猫の呼吸がいつもと違う？

お腹で息をしているように見え、呼吸も早い気がする。食欲も落ちているので、犬の診察時に一緒に予約を入れました。

犬は体調が戻りつつあり、様子を見るだけで終わりました。

猫の方は、きょうだい猫が同じような状態で入院後すぐに亡くなっていることを伝えると、血液検査とレントゲンを撮ることを勧められました。

「犬は元気になったので、治療なしで 880 円。猫の方は、血液検査、レントゲン、胸に水が溜まっていたらそれを抜く処置で、16,000円ぐらいかかってしまいますが、大丈夫ですか？」

レントゲンを撮ると胸は真っ白。水か血液が胸に溜まっている可能性を指摘されました。

この子もきょうだい猫と同じようにあっけなく亡くなってしまうのだろうか。

医師は、血液検査の結果を見ながら、可能性をいろいろと聞かせてくれました。

「血ではなくピンクかかった水の可能性が高いと思われます。まずは水を抜いて、経過を見ながら治療を考えます。水を抜いていく途中で、何かあれば呼びに行きますね。」

抜いた水は、ピンクかがっていました。また呼吸が早くなったら連れてきて下さい。経済的な負担ができるだけかからないように相談しながら進めていきたいと言ってもらい、重い気持ちはありながらも、少し気が楽になっている部分がありました。

気づけば、夜の9時。2 時間程、経っています。老犬は元気になりましたが、若い猫の方は重症でした。

病気、死が目の前にやってきても、何とかなる気がしたのは、何故なのでしょう。



未来を感じる対応

4歳で亡くなった猫の時は、悪性リンパ腫で抗がん剤治療を勧められました。毎週、動物病院に通う必要があると言われ、経済的負担も大きく、ただただ重い空気の中で過ごしていました。

結果は、入院して抗がん剤治療を2回終えた後、亡くなりました。

今回は、経過観察中で、これから先どれくらい猫の寿命があるかわかりませんが、動物病院からの帰り道、何とかやっていけそうな気がしました。前回と何が違うのでしょうか。悪性リンパ腫とは言われていないことでしょうか。前回の病院は通うことがストレスでしたが、今回の病院には行きたいと思う私があります。

前回の病院は、大学病院のように治療中心で話が進み、今回の病院は町医者のように家族の生活を気にかける比重が高かったのではないかと感じます。

家族療法ワークショップの「家族の営みがあり、その上に様々な症状が出てくるものだ」という言葉を思い出しました。

対人援助職は相談の際、子ども、しょうがい、高齢者等中心に置くべき人を考えます。それは、それでいいのですが、問題行動にばかり目が行き、その周りにいる家族のことも意識的に見ようとしているかいないかの違いに似ています。

例えば、虐待をしている親に対して怒りを感じることがあります。あの親は子どものことを何も考えていない、毒親、身勝手、こんな親と一緒に暮らすよりも分離した方が子どものためだと思い込んでしまう。そうすると、親との対峙が深まって話し合いにならない状況に陥る。子どもの立場だけでなく、親の視点も含めた家族の負担感や感情を含めて理解しようとする、親の信頼を得ます。対人援助職を信頼するプロセスを今回、私は味わいました。

金銭を含めた細かい説明と将来を見越した選択肢をいくつか提示してもらい、それを選んだ場合の可能性、医師としての意見も聞かしてもらいました。

医師の率直な意見を聞いたうえで、家族で検討する。猫の体調、白血病ウイルス発症リスク、今の小康状態、そして金銭面、それらを鑑みて家族の決断を出していく。

家族での話し合いはスムーズに進み、家族面接のバックスタッフからスーパービジョンを受けているようだと感じました。

スーパービジョンは、自分が受け持ったケースについて助言や指導を受ける場ですが、教えを乞うというスタイルになると、理解が深まる気がしません。

スーパーバイザーから最初に「あなたは、どうしたい？」と聞かれると、

スーパーバイザーの意図にあった答えを求められているという気持ちが先立ち、そこに気持ちを奪われる自分に嫌気がさします。

家族面接のバックスタッフとのやり取りはまず、

「家族面接してみて、どんな印象をあなたは持った？」と聞かれることが多いです。

直接に向かい合ったファミリーセラピストの印象を聞き、バックスタッフの席から見えた率直な意見、聞きもらしていないかの確認をしながら、家族について皆で語らう。

このスタイルは、横並びで意見を出し合い、その結果、家族への理解が深まるから好きです。

当事者家族としては、現状打破できる、具体的な行動があると救われます。

それは、養育里親をしていた時に度重なる里子のトラブルで疲弊した時の経験から感じたことです。

家族面接には、「宿題」があります。問題を抱えた家族に変化を起こそうとする試みです。

上手く回っていない現状に変化をつけてみるということが目的です。少し頑張ればできる小さな変化を考えます。それをして、家族の営みがいい方向にいけば続ければいいですし、上手くいかなければ違う方法を探すだけです。

今回の医師の言葉には、率直に一緒に考えようとする姿勢を感じました。前回の悪性リンパ腫の治療の時は、治療が上手くいかない可能性もあるので、そこは事前に了承するようにという扱いがあり、人間の医療モデルと同じですが、家族としては突き放された印象を持ちます。

宿題にあたる部分は、具体的な治療法です。別の高度医療をしている病院を紹介してもらい、精密検査、手術をしていくか、胸に溜まる水を抜きながら進めていくかの選択肢になりました。



猫は、どこまで元気でいてくれるか、急変するのかわかりませんが、心構えはできました。信頼できるドクターと一緒に温かく家族で支えていきたいと思います。

周辺からの記憶 44

2022年6月 福島フィールドワーク

村本邦子(立命館大学)

この夏はプエルトリコに行ってきた。プエルトリコは、カリブ海の北東部に浮かぶ島である。先住民タイノが暮らしていたが、コロンブスに「発見」され、スペインの植民地になった。それから、先住民やアフリカから「輸入」された黒人奴隷を使って金採掘が行われ、金が掘り尽くされると農業植民地となり、貧しいスペイン人たちが農業移民としてやってきた。1898年の米西戦争の結果、アメリカに割譲され、現在までアメリカの未編入領土である。住民はアメリカ国籍を持つが連邦所得税は免除され、大統領の選出権はない。

その結果、アメリカ企業が進出し、タックスヘブンとして本土の富裕層が集まり、住民の多くが貧困で、「現代の植民地」とも言われている。貧困や暴力の問題に加え、2017年のハリケーンマリアなど大災害の影響もあり、DV、虐待、自殺などメンタルヘルスの状況が悪いことが指摘されている。現在のプエルトリコはリゾート開発され、ローカルな人々は住むところを追われ、ビーチへのアクセス権も奪われた。自分の意志とは無関係土地を追われる人々が世界中にたくさんいる。

それでも、プエルトリコは音楽や踊り、美術など文化の水準が高い。町中のあちこちにあるグラフィティには眼を見張った。しかも、自分たちのルーツやアイデンティティを主張するメッセージ性の高いものが多い。ふと双葉駅周辺の絵を思い出した。「フタバ・アート・ディストリクト」というプロジェクトによるものだ。アートで双葉を活気づけようという取り組みらしいが、いつもここに来ると複雑な思いに襲われる。地元の人たちはどう思っているのだろう。



6月24日(金)

仙台空港の展示

今年はプロジェクトに先立ち、新しい体制での「プロジェクト+」の事前調査を兼ねて、6月24日から26日、個人的な福島フィールドワークを実施した。

いつもは新幹線を使うため、仙台空港に来る機会はありませんでしたが、今回、空港ターミナルビルの一角に震災関連展示を見つけた。2021年2月に、仙台空港は、震災伝承ネットワーク協議会より「震災伝承施設」として登録されたようだ。

2011年3月11日、仙台空港も津波によって甚大な被害を受けた。ライフラインは寸断され、浸水で孤立した空港には、空港を利用していた客や避難してきた地域の人、空港や関連施設のスタッフなど約1,700人が取り残され、全員が退避するまでに6日を要した。自衛隊や米軍の復旧作業により、震災発生から約1か月後の4月13日に国内線の一部が再開、同年9月に国際定期便が復活し、復興への一歩を踏み出した。当時、あまりに早い復旧に驚いた記憶がある。

そこには、高さ3.02mの津波到達点を示す津波高表示と、震災当時の様子を時系列で説明した震災説明パネルが常設展示されていた。空港内各所には、津波警報等発表時の避難経路を知らせる津波避難サインも設置されていた。



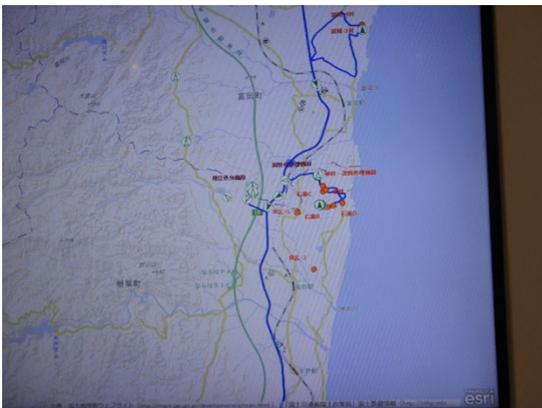


特定廃棄物埋立情報館「リプルンふくしま」

一度、特定廃棄物埋立施設の見学をしたいと思っていたのだが、事前に見学者の個人情報を探しく求められ、多少緊張した。初めに、情報館「リプルンふくしま」の館内を簡単に案内され、説明があった。

説明は、除去土壌や廃棄物などの発生経緯と処理の流れ、運び出しから埋立てまでの流れ、安全対策、放射線の基礎知識、地域の復興に向けた取り組みから成っていた。





特定廃棄物とは、放射性物質汚染対処特別措置法に基づく対策地域内廃棄物と指定された廃棄物を指し、対策地域内廃棄物と指定廃棄物からなる。対策地域内廃棄物とは、旧警戒区域等の汚染廃棄物対策地域で発生した災害廃棄物や家の片付けごみであり、指定廃棄物とは、一定濃度(8,000Bq/kg)を超える放射性物質を含み環境大臣が指定した廃棄物のことである。

なお、指定廃棄物に指定された焼却灰(10万 Bq/kg 以下)のうち、放射性セシウムの溶出量が多いと想定される焼却飛灰及びそれと主灰の混合物は、放射性物質汚染対処特措法に基づいて、安全に埋立処分できるようセメント固型化処理を行う施設がある。特定廃棄物の処理の流れは次のような感じである。

搬出準備・・・保管場所において放射能濃度が 10 万 Bq/kg 以下であることを確認し、すべて収納容器に封入して搬出。

輸送・・・輸送計画に基づき、輸送車両の運行状況及び作業の進捗状況をリアルタイムに管理しながら輸送。

セメント固型化・・・放射性セシウムが比較的溶出しやすい廃棄物(飛灰等)はあらかじめセメント固型化する。

受入管理・・・輸送された廃棄物の放射線量や収納容器の状態等を確認。

埋立処分・・・収納容器のまま、土壌層や不透水性土壌層等を敷設しながら埋め立てる。上流側区画にはセメント固型化した廃棄物を、下流側区画にはセメント固型化しない廃棄物を埋め立てる。

浸出水の処理・・・浸出水は、有害物質の除去や消毒などの処理を行った後、放射能濃度等が基準をみたくを確認してから放流。



簡単な説明が終わると、タクシーで特定廃棄物セメント固型化処理施設、それから自家用車で特定廃棄物埋立処分施設を見学した。タクシー代を含めて無料であることに驚いた。

見学にあたっては、「特定廃棄物埋立処分施設見学は、案内スタッフの指示に従い行動していただくようお願いします」の他、「私的な記録としてのみ使用し、これを無断で公開、二次使用しないでください」などの注意事項がたくさんあった。よって、自分で撮った写真は残念ながら紹介できない。ただし環境省や企業(KONOIKE)のHPの写真が転用できたので、出典を記したうえで紹介することにする。



固型化処理施設

https://shiteihaiki.env.go.jp/tokuteihaiki_umetate_fukushima/cement_solidification_plant/about.html



第二保管施設 破碎・改質処理施設

https://shiteihaiki.env.go.jp/tokuteihaiki_umetate_fukushima/cement_solidification_plant/about.html



粒度調整・異物除去設備

<https://www.konoike.co.jp/news/archive/2019/201904012121.html>



混練物を養生するための養生ラック

<https://www.konoike.co.jp/news/archive/2019/201904012121.html>

廊下からガラス越しに中を覗くことができたが、あちこちに「管理区域」と書かれた放射能区域を表すマークのついたサインがあった。建物内の作業はほとんどロボット

がやっており、人は防護服を身に付けていた。こうして毎日、危険と隣り合わせで働いてくれている人たちがいることを改めて認識した。



埋立作業図

https://shiteihaiki.env.go.jp/tokuteihaiki_umetate_fukushima/landfill_disposal/



特定廃棄物埋立処分施設

https://shiteihaiki.env.go.jp/tokuteihaiki_umetate_fukushima/reprun/related_facilities/umetate/

案内してくれた若い女性によれば、周囲の空気線量も年々減ってきているということだったが、科学の最先端と言っても、要するに穴を掘って埋めるという原始的な方法しかないんだなと溜息が出た。

東日本大震災・原子力災害伝承館

それから双葉へ車を走らせた。



伝承館に入るなり、スタッフが、「この前の裁判の結果も地元の者にも納得いかない」と熱く語る。これまでの経験と比べ、やや意外な感じがしたが、そういう人をむしろ置くようになったのだろうか。

裁判とは、6月17日、福島、群馬、千葉。愛媛で提訴された4県の集団訴訟で、「津波対策が講じられていても事故が発生した可能性が相当ある」として国の賠償責任はないとする統一判断を示したことを指している。裁判官4人のうち3人の多数意見で、検察官出身の三浦守裁判官だけが国の責任を認める反対意見を出したと報じられた。4県の原告総数は3700人、二審判決は群馬以

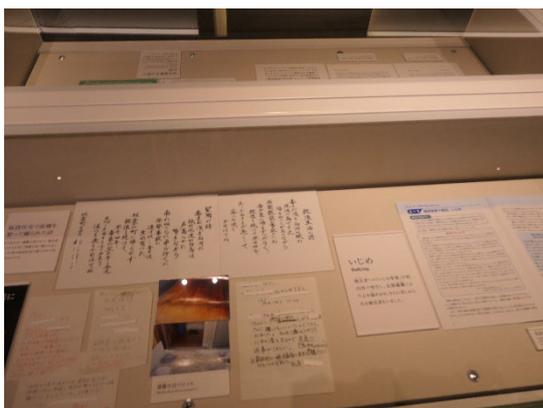
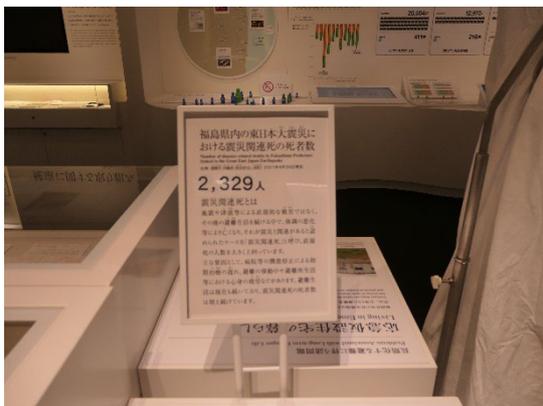
外の3県で国の責任を認めていた。最高裁判決以後、各地の地裁と交際の判決はいずれも国の責任を否定した（東京新聞、2024年6月14日 <https://www.tokyo-np.co.jp/article/333374#:~:text=%E6%9C%80%E9%AB%98%E8%A3%81%E3%81%AF2022%E5%B9%B46%E6%9C%8817%E6%97%A5%E3%80%81%E7%A6%8F%E5%B3%B6,%E5%8F%8D%E5%AF%BE%E6%84%8F%E8%A6%8B%E3%82%92%E5%87%BA%E3%81%97%E3%81%9F%E3%80%82>)。

まず、展示室に入る前に、プロローグ（導入シアター）で7面の大型スクリーンで見ることになっている。福島県出身の西田敏行のナレーションで、原発の建設から地震、津波、原発事故の発生と住民避難、復興や廃炉について、映像やアニメーションを交えて説明される。どうしても原発導入したことの正当化のように聞こえてしまう。

それから関連年表、事故前の町の状況、子どもたちの日記や作文だとか、コンクールのポスターなどの掲示があり、町の人たちが希望を持って原発を受け入れていたような文脈が見せられる。



それから、災害の始まり、事故直後の対応、県民の思い、長期化する原子力災害の影響、復興への挑戦の順に展示ブースが並ぶ。批判を受けて、最初はなかった関連死者数2,329人の数字が展示されていた。



「健康に対する取り組み」というコーナーがあったが、心身の健康と銘打ってあるにも関わらず、内容を見ていくと、放射能の身体的影響については触れられず、心の問題にすり替えられているような印象を受ける。双葉から浪江にかけ大きな福島県復興祈念公園国営追悼・祈念施設ができることになったが、少しずつ道路が整備されていた。



6月25日(土)

あじさい寺

番外編ではあるが、特定廃棄物埋立施設を案内してくれた女性が、いわきのあじさい寺(臨済宗妙心寺派波立寺)を教えてくれたので、朝、立ち寄ってみる。

806年、徳一大師が海上鎮護を念じ、海上から出現したと言われている薬師如来(波立薬師)を安置して創建したと言われている。道路を挟んだ目の前に、海から突き出た弁天島と、朱塗りの橋がシンボルの波立海岸があり、玉砂利の珍しい海岸だった。

たしかに色とりどりのあじさいが咲き乱れ、あじさい寺と呼ばれるにふさわしいお寺だった。タイミングもよかったのだろう。



野馬土ツアー

この日は、南相馬市にある NPO 法人野馬土の被災地ツアーに申し込んでいた。野馬土は被害を受けた農家を中心に、2012 年 10 月に設立され、米・野菜の放射能測定、再生可能エネルギー、被災地ツアーなどを行っている。「野馬土」には、「野馬追の相馬の大地、ノマドは荒野を駈ける遊牧の民、野窓は世界に開かれたウィンドー」が重ねられているとのこと、農業が盛んでありながら原発大国でもあるフランスの財団に寄せられた市民の義援金が発端となってスタートしたそうである。カフェにはまちの人が集まり、直売所には、地元の新鮮な農産物の他、全国に広がる農業のネットワークを介した日本各地から旬の特産品が並ぶ。

ここで発行されている「被災地フクシマの旅」実行委員会による『しんぶん福島からの発信』の第 10 号（2019 年 3 月）から第 14 号（2022 年 3 月）までを頂いたが、希望の牧場の吉沢正巳さんや生業訴訟団長の記事、中間貯蔵庫やヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館、東日本大震災・原子力災害伝承館の見学レポートなどとても充実した内容となっていた。

とくに伝承館の展示に関する批判もはっきりしており、①原発メルトダウンがなぜ起きたのかの原因説明がされていない ②建設当初から盛んにふりまかれた「原発安全神話」の反省がまるでない ③福島県民の大きな被害の分析が不十分 ④こうしたことがないままロボット開発、空飛ぶクルマ研究などの施設を作るのが復興計画の目玉という展示 が指摘されていた（2021 年 3 月）。次の号（2021 年 9 月）には、「批判

受け、一部展示変更」の記事があり、「安全神話の崩壊」のパネル展示が新たに加わったことが書かれていた。政府が人災と認めたことによりこの展示が追加されたそうである。これが、唯一、この伝承館で評価できる点かもしれないと書かれていた。私自身も開館直後と翌年に訪れ、変更点を確認していたが、細かい所まで気づいていないことが多かった。とくに直後は写真撮影 NG だったため、詳細の記憶がない。この記事によれば、「原子力の利用」という習字の作品が追加された。

私自身は、きのう展示を見て、町の人たちが希望を持って原発を受け入れていたような文脈が見せられているように感じたが、つまり、町の人々に責任転嫁しているようなニュアンスを感じたが、確かに、県民の立場からは主体性を取り戻すために必要な視点なのかもしれないと思った。

「原発災害」ではなく、「原子力災害」の伝承館となっているところがミソという指摘には、漠然と不思議に思っていたが、深く考えたことがなかったことを認識した。しかし、その意味はまだ十分に明らかにできていない。その他、汚染水処理問題や除染土壌の再利用、除染なし解除など厳しい批判がクリアに掲載されていた。同時に、「故郷で 12 年ぶりに田植え再開します」「野馬土は今年も農家の無用な被ばくを防ぐ土壌測定やってます」（2022 年 3 月号）など故郷再生を目指す取り組みが紹介されていた。

2021 年 9 月号には浪江小学校校舎解体後に残る子どもの像（三原由紀子氏撮影）の写真があり、強く心に残った。機会があれば一度訪れてみたい。



三原由起子氏(浪江出身)撮影

小学校校舎解体後の校庭に残る子どもの像

そして家の解体がど
んと進んでいます。
国の費用で解体して
もらえる申し込み期
限が残りわずかです。

家が3軒だけで、後
は解体後の更地と3
軒の空家となり寂し
い限りです。

個人的なお話を聞きながら被災地を回れたことは、またこれまでとは違った視点から考えることができありがたかった。渡辺さんは飯舘村長泥区出身、妻は川内村出身で、最初、川内村に避難した。しかし、すぐに仕事が再開したので戻り、最終的に相馬に暮らしている。詳しく語らなかったし聞くこともできなかったが、妻はすでに亡き人なのか、「お母ちゃんは」と頻繁に話題に出ていたが、「お母ちゃんは違うところに行っちゃって、軽自動車は残してある」とおっしゃっていた。住民票は今も飯舘村に残っているようだ。



10時半にガイドの渡辺さんと落ち合い、私たちの車に乗ってもらってツアーを開始した。「避難指示区域の再編状況と概念図」という地図を見ながら走った。わかりやすい地図だが、相馬から広野に向けて南に走る地図になっていていつも逆さまなので、方向音痴の私の頭はやや混乱した。



<http://www4.pref.fukushima.jp/investment/special/sing/e04.html>

まずは沿岸部に沿って車を走らせ、いわゆるイノベーション・コースト構想の新たな風景を見て回った。イノベーション・コースト構想とは、2017年に結成された機構によってプロジェクト化された構想である。浜通りにおける産業復興のために、あらたな産業を創出するのだと、廃炉、ロボット・ドローン、医療関連、エネルギー・環境・リサイクル、農林水産業、航空宇宙という6つの重点分野からなり、巨額な

予算がすぎ込まれている。東日本大震災・原子力災害伝承館もこの一環だった。



個人的には、被災住民それぞれへの補償も十分でないのに、莫大な予算を載せて復興を主張するこの構想を苦々しく思ってきたが、渡辺さんには「批判的なんですね」と言われてしまった。「もちろん批判的です。そうじゃない人いるんですか？」と聞くと、ツアー客にはいろいろな人がいるようで、イノベーション・コーストにできた研究所や会社に興味を持って、憧れる人たちもいるそうである。

その後、リプルンや伝承館に案内してくれた。きのう行ったばかりだったが、言い出しずらく、再度見学した。リプルンで除染土を「再生資材」と呼んでいることに渡辺さんは憤慨しておられた。

また、十分な時間がなかったが、2021年10月に記念館としてオープンした震災遺構請戸小学校も見学した。ざっと見た限り、原発災害の展示はなく、津波被害が中心になっているように感じられた。またじっくり見学に来たい。

福島県が広いこともあるが、あっという間に7時間ほど経ってしまった。次回は自分の故郷である飯舘村へも案内したいと言ってくれた。また機会があればと思う。

6月26日(日)

宝鏡寺

午前には宝鏡寺の伝言館に立ち寄る。半年前には建築途中だった未来館が立派に出来上がっていた。伝言館の入り口には「死を想え」、未来館の入り口には「希望の未来へ」と刻まれていた。



双葉駅周辺

お昼は双葉駅周辺を見て回る。駅前にはピカピカの役場ができており、駅の裏には長屋コミュニティを作っている途中だった。移住者も募集していると言う。あと1ヶ月かそこらで避難解除になるらしい。明るい希望を描き出そうとする意図と現実が妙にシュールな光景を映し出していた。







富岡 311 語る会のガイドツアー

午後は、富岡 311 語る会のガイドツアーに参加した。この回は、富岡町の町民たちが東日本大震災で経験したことを「語り人(かたりべ)」として語り続けていこうと立ち上がったもので、2013 年から活動を始め、2015 年に会として独立、2016 年に NPO 法人化した。2017 年に避難解除された地点を中心に案内しながら、町民としての体験を語ってくれる。

事務所は「さくらモールとみおが」内にあって、そこでガイドと合流した。こちらの自家用車にガイドが乗り込み、方向を指示してもらって移動する。



ちょっと行くと、周囲はまだ除染土の丘がいっぱいである。

ガイドは当時小学 6 年生だったという若い男性である。自分や家族のことも交えていろいろと話をしてくれた。

ここは商店街だったが、取り壊されて何もなくなった。ここは富岡高校。双葉郡には 5 つ県立高校があり、震災で休校になった。廃校にはなっていない。もともと女子高だったが、共学になり、国際スポーツ科というのができて、日本全国から優秀な生徒を募ってスポーツに強い学校になった。高校にゴルフの打ちっぱなしやジムもある。バト

ミントン、ゴルフ、サッカーが強い。すべて人工芝生で、天候に関わらず練習できる。人工芝生の県立高校はここだけだろう。芝生はそのままだから、放射線量は高いと思う。

今はその意志を広野の町にある双葉未来学園で受け継いでいる。全校生徒 700 人。双葉郡にはひとつだけで、遠くからも通ってくる。当初はさほどでもなかったが、今は偏差値が高くなってきている。双葉郡の子どもは優先される。いわきには高校がたくさんあるが、未来学園に憧れて、いわきから来る生徒たちもいる。校舎が大学のキャンパスのような作りになっていて、奥にカフェがある。



当時、自分は小学 6 年生で、震災が起こった時、体育の時間だった。グラグラ揺れて立ってられないほどだった。記憶は曖昧だが、11日の夜、学校の体育館に避難して、家に DVD とか取りに帰った。雪が降ってきて大変だった。12日には、警察官だけが防護服を着てマスクしていた。身内に原発労働者がいたら状況が何とかわかっていたが、そうでないとまったくわからない。避難

と言っても数日かなと思っていた。

大人からは何も説明はなかったし、自分が避難民ということはわかっていたが、深くわかっていなかったと思う。3月11日の時点でみんな散らばったが、避難所では数人の友達と一緒にいたから、学校もなくゲームばかりしていた。みんなで集まってカードゲームをし、自由気ままな感じで遊び歩いていた。

避難所の記憶は断片的。友達と学校に行き、食べ歩いて避難所に帰るといった生活で、ビッグパレットも5ヶ月間だけで、そこからみんなと別れて県内のアパートに入った。仮設住宅は抽選で当たった人だけだったし、親があんな薄い壁のところには住めないといく回くらい引越した。

バリケードが張られて、2012年になって物を取りに一時帰宅できるようになったが、15歳以上だったので、自分が入れるようになったのは2015年だった。

中学生になっても、義務教育だから勉強しなくても卒業できるとまったく勉強せず、美術と体育をのぞいてオール2。高校に入る時、どこも行くところがなく、私立でお金を払えば入れる高専に行って絵の勉強をした。美術だけは5だった。卒業した後、同じ高専の声優科に進学して、演劇の授業の講師で来ていた人が今の職場の代表（青木淑子さん）だった。富岡高校の元校長。声優はいろいろ闇の部分があることを知ってあきらめ、ちょうど就活をしていた時に、親が富岡に戻るといっているので、縁あってここに就職することにした。

父は富岡生まれで、母は川内生まれ、妹がいて、当時は1歳だったから何も覚えていない。学校では、町探検をしたり、資料館に

行ったりして一応習うが、それきり。今の小中学校の先生は富岡出身ではなく、若い先生が多く、だいたい3年以内で転勤していく。ちゃんと学ぼうとしない先生も少なくないので、図書館とかに行って自分で勉強しないとわからないことが多いと思う。

校舎が見えるが、これが今の小中一貫校。もともと1小、2小、1中、2中だったのが、三春町に富岡の学校ができて、すべての学校を閉校にしようとしたところになった。妹は郡山からバスで三春まで通っていたが、2019年にこの学校に帰って来た。もともとは富岡に1500人生徒がいた。

放課後に表現塾というのを学校でやっていたが、学童保育ができたことで教育委員会が打ち切った。普通の小学校とはちょっと違う。震災前はあったが、今は学校にPTAもない。地域との交流ができず、なかなか難しい。NPOでかたりべ育成講座をやっているが、富岡の小学生は誰も来ない。かたりべユーチューバーという講座をしたら一人だけ来た。夏休みも小中高生向けにやろうと双葉郡のすべての教育委員会を回ったが、今のところ1人だけ。震災前は地域との交流は結構あった。こんなふうには先生が入れ替わりで頻りに転勤するという事はほぼなかった。今は1年とか、3年とかで、ようやく慣れたのに、移動でリセットされる。

この道は震災前とほとんど風景変わっていない。国道6号線で、こちらに行くと相馬市、逆に行くといわき市。ここは役場、文化センターなどあった。ここから先は夜ノ森。町の半分以上は農業で、田んぼや牛。1年前か2年前まで更地になっていたが、今はだいぶ戻って、農業をやり始めている。富岡町で作って、「天の米」と売り出している。



空き地が目立ってくるが、建物を壊して6300世帯あったものが半分くらい解体された。夜ノ森地区は1月26日に帰還地区が緩和されて、11年ぶりに入れるようになった。その前は、虎ロープが張られ、右は入れるけれど、左は入れない。開通するところも見に行っただ。震災後、初めて足を踏み入れたら、懐かしいものだらけ。自分は夜ノ森で育ったので、自転車で走り回っていた。ここにも建物あったけど、解体された。セブンイレブン、レンタルビデオ、カラオケ、ヨークベニマルがあった。ベニマルも友達とカードゲームよくやっていた。なくなると、何があったのかわからなくなる。

昔の友達で富岡に住んでる人はゼロ。先輩や先輩とかはいる。郡山市にいた友達の方はそのまま郡山市にいる。11年前にバラバラになって、4年前に富岡で成人式があ

って、9年ぶりに会った。見た目が変わり過ぎて、誰が誰だかわからない感じだった。

夜ノ森駅をちょっと歩いてみましょう。無人駅。もともとここに駅舎があって、できるだけ震災前と同じように作ろうとした。桜祭りをやった時は人が来た。夜ノ森に住んでる人はほとんどいないので使う人もいない。桜が4月に咲き、5月につつじが咲いていた。花をとれるように車掌さんがここだけ徐行してくれていた。そのつつじも、震災でほとんど伐採され、今、少しずつ植えかけている。ここにあるいちょうの木は、駅が出来た時の記念に植えられたもので、駅も百年。「百年迎えました」という看板が以前はあったが、撤去された。

富岡の桜はほとんどソメイヨシノ。あれはエドヒガンザクラで、一番最初に咲いて、散り始めるころにソメイヨシノが咲く。





ずっとバリケードが張られていたが、今年の1月26日に撤去された。120円の時の自販機。双葉銀行。中に入れるが、全部ガラスが割られている。

今は、生活県内では放射線高くはない。町に一時帰宅で2015年に戻った時は、人が住んでいなくて、ほとんど静かだったが、戻ってきて、この町が好きだなと思い、語り部をやっているのを見て決意が固まっていった。今、語り部は20人くらいいる。ただほぼ高齢者で20代は3人だけ。



監視カメラがあって、夜はパトロール隊が回る。友達と自販機照らしていたら、警察官が来て、職務質問された。「懐かしくて」「悪い人いるんですか」と尋ねたら、「あんまりないんだよね」と言っていた、

たんぼを借りて太陽光パネルが置かれている。84.5メガワット、7000世帯を賄える電力。

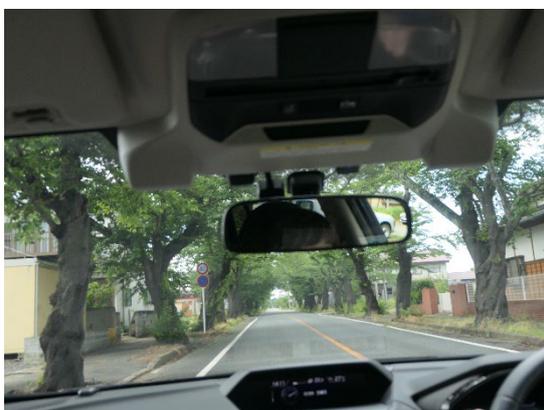


ここは母校があったところ。今は介護施設とジムやカフェになった。サッカーをやっていた。ここで震災にあった。校舎にカビがはえていた。2019年11月の時の写真で、この後に壊されてここがオープンした。学校はなくなっちゃった。



ここが桜並木。2,2 キロで 200 本の桜。大正時代に個人が植えたのが始まり。今年は桜祭りに 2 万人集まったが、イベント目的だからその時だけ。芸能人も来た。6 年間手入れできず、木が病気になってねじれてしまった。菌に感染して、切って今は手入れしている。年月が必要。

桜並木が通学路だった。30 分くらいのところにある家があった。小学校の鼓笛隊パレードで通った。



小学校時代に住んでいた家。別の人が借りて住んでいたが、大家さんと連絡取れずそのままになっている。この後、子ども時代の家族の物語を語ってくれた。

当時子どもだったガイドの語り部の話を聞きながら現地を案内して頂いたことで、当時の状況をイメージする助けとなり、これまでにない貴重な体験だった。ここに感謝したい。

それにしても、黒いフレコンバックが中間貯蔵庫に埋められ、すっかり見えなくなった。イノベーション・コーストにポツポツと建つピカピカの建物に、まるで記憶が塗り替えられていくかのような錯覚を覚える。

つづく

精神科医の思うこと③④

『お金の話』

松村 奈奈子

親族に自営業が多かったので夏のお盆に親族が集まると、大人達がなんやら経営やお金の話をよくしていました。税金や倒産や自己破産の話なんかも、小さいころから聞いていた言葉でした。子供の頃の夏の思い出のひとつは、ちょっと「生臭い」お金の話です。そのせいか、子供の頃から新聞の経済欄に興味があったり、ちょっと大人になってからは「なにわ金融道」というヤミ金屋さんの漫画が好きでした。それは自営業の人や普通の主婦が「ヤミ金」にお金を借りに行き、ヤミ金屋の主人公とやりとりしながらもまれていく漫画で、なるほどこんな世界があるのかと勉強になりました。これって、精神科の治療場面で、ちょっと役に立つこともあったし、「お金」の事では思うこともあるので、今回のテーマは「お金の話」

「眠れない日が続いて」と高齢の母親に連れられて受診した中年女性。「何かストレスがありましたか？」と聞くと、1年ほど前からたくさん買い物して、利息も返せないほど借金をしてしまったといいます。やっと母親に相談して、とりあえず精神科を受診したようです。「ヤミ金でなければ、自己破産などいろいろ方法ありますよ」と話すと「選挙権とかなくなるんですよね？」と高齢の母親が聞いてきますが、いえいえそんなコワいものではないです。自己破産のメリット・デメリットを軽く説明して、専門家への相談を勧めました。とりあえずお薬は出さずに、経過を見る事にしました。数週間後、再び母子でわざわざ菓子折りを持って受診され「司法書士さんに相談した」「ほっとして、眠れて仕事もできるようになった」と笑顔で話します。「情報をお伝えただけですが」と話し、もちろん菓子折りは「上手くいったお祝いとして、お二人で食べてください」と持って帰ってもらいました。

もひとつお金の話、50代の女性が「眠れない」と受診されました。「何かストレスが？」と聞くと、小さな会社を経営する夫が急死したと話します。ワンマンな夫に苦労したと言いますが、残された会社の経営は順調で、息子と二人でやっていく覚悟との事でした。悩みは夫に前妻と子供がいて、その子供に遺産の相続権がある事だと言います。会社も夫の名義の資産の一部

なので、どうやったら会社の経営を息子と二人で続けられるか、前妻の子どもに理解してもらえるか、日々悩んでいると言います。多額のお金を前妻の息子に取られてしまっただけでは、会社の経営ができなくなってしまいます。会社の税理士などにも相談したが、何も提案がなかったと言います。うーん、それは確かに悩ましい。「先生どう思う？」と聞かれ、一緒に金額の事など解決策を話し合うと、すっきりしたのか薬の処方希望されずに帰りました。その数週間後、女性はさわやかな表情で診察室に表れ「上手くいったし、先生に報告しようと思って」「聞いて欲しいねん」と話します。前妻の子どもの所に息子と話し合って決めた金額を現金で持参し、「これで遺産を放棄してほしい」と2人で頭を下げたと言います。考えていた額より少額だったので「上手にやったねー」と感心すると「上手い事やったで」と女性はニヤリとします。賢い女性で、わざわざ報告に来てくれたおかげで、こちらも勉強になりました。

この2つのケース、いずれも「眠れない」と初診で話しますが、お金に関するトラブルにより悩みがメインの問題で、解決方法を一緒に考えることで、お薬なしで治療は終了しています。私はできるだけお薬無しで、患者さんが良くなればいいなあと思っています。「ストレス」があるなら、どうやったら「ストレス」を減らせるのかを考えるのが、精神科のメインの治療ではないかとも考えています。もちろん、避けられない「ストレス」で薬物療法をすることも多いですが、治療者のちょっとした生きるための知恵や情報で改善するなら、それがベストだなあと思います。お盆に大人の「お金の話」を聞いて育って、お金の知恵が役立ててよかった話です。

まったく違う次元ですが、「お金」の問題が背景にあるケースあります。

金銭的な問題で、夫からのDVに耐えているうつ状態の母親は、中学生・高校生の子供がいました。「進学にお金があるし、今は離婚できない」と母親は話します。話してみると、ちゃんと子供たちを大切に思い、頑張っているいい母親であるのが伝わります。「子供たちに、両親の今後や離婚についてどう思っているのか、ちゃんと聞いてみたらどうですか？」とアドバイスしました。「えっ、子供に聞くんですか？」と母親は戸惑います。「子供もいろいろ考えていると思いますよ」と返しました。翌週、母親はすっきりとした表情で診察室に入り「驚いたことに、子供たちはお金のことはいいから、我慢しないで離婚したらいいって言ってくれたんです」「もっと早く、子供たちに相談したらよかった」と涙を流されました。

ちゃんと子供の事を思っていると、子供は思ってくれている人の事を思いやれるんだと私は思います。その後、離婚し「お金」はちょっぴり厳しいですが、子供たちと笑顔のある生活がはじまり、精神科の通院は終わりました。

実は精神科医は上手くいってない家族だけでなく、特別児童扶養手当の申請など障害者に対する診断書を書く仕事があって、精神的に健康な家族とお話しする機会も多いです。そんな場面では「真面目に働いてるけど、こんな収入でここまでしか子供にしてやれんよ」と笑って子供たちに話し、子供たちは「仕方ないなあ、公立高校頑張るわ」と笑って現状を受け入れる、仲のいい母子家庭をたくさん見てきました。みんなが笑顔でいる家族からは、笑顔の秘訣をたくさん教わりました。

一方、母子家庭で「子供にお金のせいで苦労をかけたくない」と、朝晩といっぱい働いて、笑顔が途切れた母親を「お母さん、あんまり家におらへん」「そんな無理して働かんでも」「仕事でイヤな事あったら、むっちゃ僕らに怒鳴る」と非難している子供たちもたくさん見てきました。たいがい、ちょっとワルな事をしちゃってる子で、児童相談所でお会いします。

精神科ってよろず相談所的な側面あるなーと日々思っています。よろずにいろんな知識があると、患者さんに寄り添って問題が解決する方向に導きやすいのでは？なーんて思います。ちょっぴり好奇心旺盛なので、いろんな知識を患者さんから教えてもらうのは好きだし、教えてもらった事を誰かに伝えたりしながら、よろずの知恵をためています。もちろん、そのよろずの知恵は、診察でいかされています。特に「お金」の問題は生活に直結するので、お金のトラブルの解決方法は、とても役に立っています。

そして、この仕事をしていて繰り返し気づかされるのは、「お金」は 1 番大事ではないという事。笑顔の絶えない健康的な家族は、お互いを思いやり、ちゃんとそれを言葉にして、「お金」の問題を含めて、隠し事の少ない家族です。お互いをちゃんと思いやれる事が本当に大事ななあと思います。

なので、お互いを思いやれずに、大人が思い込みで行動したり、大人が無理をし続けて子供にガマンを強いると、家族の誰もが笑顔の無い状態となってしまいます。いやー、「お金」の事で、傷つけあっている家族を見るのはツライです。

ただ、「お金」に翻弄される大人をみていると、大人自身が「お金」より大事なものに気づけずに育ったり、テレビや SNS で発信される、なんだか「お金をたくさん持つこと大事」的なメッセージに流され、判断が上手くできなくなった大人なのかなあとも思います。そんな大人はたくさんいて、だから毎日のように、「お金」のトラブルがニュースになっていますよね。ほーんと、「お金」、難しいなあと思います。

番外やぶにらみ日記・アメリカ編

絵と文 柳たかを

約1ヶ月半のアメリカ旅行、僕がロスアンゼルスから大陸横断バスを利用したおかげで知りあえた洋画家のK君、ニューヨークに美容師の修業に来ていたM君、さらに僕達よりずっと前にニューヨークにアートの武者修行に来て活躍している日本人芸術家達、この人達に共通しているのは、何のためにここに来ているのかをかた時も忘れない明確な目的意識だと思った。「何のためにここにいるのか？」

日本にいる時より、はるかに自由を感じるニューヨークの日々でしたが、興味に身を任していると自分を見失なう予感もありました。特に若い時は遊びたい誘惑も強いので流されやすいと思った。だから一通り見聞し期限を区切っていったん日本に帰ろうと思いました。

(アメリカ編おわり)



やぶにらみ日記

アメリカ(19)



やぶにらみ日記

アメリカ(20)



やぶにらみ日記



アメリカ(21)



やぶにらみ日記



アメリカ(22)



やぶにらみ日記



アメリカ(23)



若くは日本のカーゴ船は船がアメリカに行かないと行かない



「おれは田舎者だが、少しづつでも安全にアメリカに行くつもりだ」

節約したい



しかし、アメリカで給食をやるんだと、人生をかけた決心をかためるために、時間のかかる船旅にしたつもりだ

Shank



決心は大きいほど固めるための時間が大切にならねえだ

「クミン! 日本には、今分帰れないなあ」

やぶにらみ日記



アメリカ(24)



人は誰でも自分の人生という物語の主人公だよ



心がないと生きて挑戦する人生は同じ時間でも、とこそ、悪魔の物語にある物語になると思いませんか?

「なるほど、なるほど」



時間はあんなに増やしたり減らしたりは出来ませんが、心があれば、深いところまで入るんだ

「Shank」



若い人が何者かになりたいと目標をもち、挑戦するのは同時に心のまをたかやすにしたいな

「いいえ、いいえ、物語か」とは、わけが

やぶにらみ記

アメリカ(25)



やぶにらみ記

アメリカ(26)



やぶにらみ記

アメリカ(27)



やぶにらみ記

アメリカ(28)



居場所の大人にできること - 子ども食堂篇VI -

馬渡 徳子

かくして、我が無料塾・子ども食堂は、4年前から7月からの夏休みに定例の月曜日夕方からに加えて、お盆を除き火と水曜日の昼にも開いていることから、能登半島地震の二次避難世帯で、引き続き親戚やみなし仮設住宅での生活を継続する選択をされた方々にも口コミで拡がり、就学前の幼児たちで賑わうようになった。

これまでは、小中高校生が中心で、きょうだいも居ても幼児期の子どもの参加は稀でほぼイベントの時のみだった。保護者の同伴参加も毎回5~7世帯程で、8割の子どもたちは単独で参加していた。

乳幼児の食事介助をしながら自分の食事をするパパやママの姿を観た下にきょうだいのいる子どもたちから「ここのご飯くらい、パパやママがゆっくりと食べれたらいいのにね。」「うちは、ばあばと交代で食べとったよ。」「私らが遊んであげるよ。」「畳を敷いて、小さい子が遊べるおもちゃやお昼寝シートもあったらいいね。」との生活感溢れる建設的な提案があり、運営会議で論議し、早速に「**畳の幼児スペース兼だらだら寝そべるスペース**」をつくった。

すると、これまでイベントだけに参

加していた幼児期のきょうだいたちが保護者と参加するようになり、保護者通しでまったりと会話する場面が増えていった。

畳スペースでまったりとしながら漏れ聞こえてくる先輩ママと現役ママの会話から、「ほう、そういうことだったのか・・・」と腑に落ちることが多く、私は現役の保育士さんに、この声を聴いて欲しいなあと思った。

そこで、私の職場の同僚の保育士さんにも声をかけると「実は、子ども食堂ってどんな場所なのか興味あったの。地域の新しい社会資源を知っておくことは大事だよな。」と都合のつく時間に参加くださるようになった。

やがて、その方の友人の元保育士さんや放課後等児童デイサービスの指導員さん、助産師さんと支援の輪が広がっていった。

子どもたちにとっては、その方々の何気ない雑談から、あまり知り得なかった職業を知るところとなり、興味深そうに質問をしている場面も観られている。

この「場」は、子どもたちの提案から展開している。そういった展開を支持することができる運営スタッフのメンバーであることを誇りに思う。

心理コーディネーターになるために Vol.15

山下桂永子

☆電話連絡メモ

午前中の面接を終え、席に戻るといくつかの電話連絡メモが貼られている。保護者や連携機関からの電話連絡が入っていたらしい。電話連絡メモには、名前欄と、「折り返し連絡をください」「また後で連絡をします」「電話があったことだけ伝えてください」「特に何もおっしゃいませんでした」など書いてあるところにチェックする項目欄、そして備考欄がついている。

それをざっと確認し、「Aちゃんのお母さんからだ。夕方の面接のキャンセルかしら。それとも何か面接前に伝えたいトラブルがあった？すぐ連絡しよう。今ならお母さんもお仕事昼休みに入って電話にでやすいかも」「これは、B課のCさんからだから、新規ケースの紹介か情報提供かな。また後で連絡しますになってるし、今は昼休みに入ってるだろうから、ご飯食べてからこっちから連絡しよう。」「これはD校のスクールカウンセラーのEさんね、今日はD校勤務日かな。今は4時間目まだ終わってないなあ。D校に連絡して、面接中だったら午後の空き時間をまず聞いておこう」など優先順位を決めて対応していく。



☆保護者からの電話連絡

すでにケース担当が決まっている保護者から連絡があった場合、基本的にはケース担当が出て対応することになっているが、担当の勤務曜日でない場合は、担当の勤務日を伝えて後日にかけてなおして頂くか、担当から連絡をする旨伝えることになっている。

しかし中には、担当がその時不在であるにも関わらず、相談内容を話し始めてしまう保護者もいて、そうすると少し困ったことになる。教育センターには様々な職種の人がいて、電話を取るのは相談員とは限らず、込み入った内容に対応するのは難しい。また、電話を取ったのが相談員であったとしても、それまでの事情や経緯を知らないのに話を聞きこんでしまうと、その保護者と担当相談員との関係性や今後の面接方針に大きな影響を与えかねない。

保護者からすると、例えば、困ったことが起きて学校に連絡して担任がいなかった場合、とりあえず電話に出た他の先生に事情を説明して、担任に伝えておいてもらうというのは、特に違和感のない、普通のことであるかもしれない。しかし教育相談では、かなり繊細な個人情報扱うので、その情報を今までは誰が知っていて、誰が知らない、この情報が誰に伝わり、どのように扱われるのかはとても重要なことである。

そしてそれは、保護者担当がいなかった場合に、子ども担当が保護者の話を聴くということも同様である。例え内容が、保護者から子ども担当に伝えてほしいという内容であったとしても、それを保護者担当が聴いて、子ども担当に伝えるということと、子ども担当が保護者から直接聴くのとは、保護者と保護者担当の相談員、子どもと子ども担当の相談員の面接の構造が全く違うものとなり、関係性が変わってしまう。

担当がその時に不在であるのは仕方がないし、子どもの体調不良による面接のキャンセルなどは日常茶飯支持のことであるし、事務的なことの電話連絡であれば大きな影響はないかもしれないが、だからと言って保護者からの連絡を簡単に捉えていいものでもない。

ケースにもよるが、「この保護者からかかってくる場合は、このようにお返事してください」とケース担当者から電話を取る職員に周知しておく場合もある。



☆保護者への電話連絡

私が勤める教育センターでは、基本的に電話相談のみで対応することはあまりない。大抵は、保護者から電話相談がかかってくると、内容を伺い、来所してもらっての相談にならせていくので、積極的に相談員から保護者へ電話をかけていくことはほぼない。

だからといって相談員から電話をかけることがよくないとは思っていない。むしろ相談員から電話をかける場合、どのようにすればより援助的であるのかということは、ここ数年、私にとってかなり意識していることである。



そう思うようになったのは、コロナ禍で感じたことが大きい。2020年3月からの学校の臨時休業期間に面接ができなかった時、教育相談とは何か、心理的援助とは何か、今できることは何か、自問自答しながら相談員の仲間とともに試行錯誤した日々のなかで、ホームページでの心身のケアに関する発信や、定期的な面談の代わりに電話をかけていくことも始まった。お母さんや子どもに直接に会えなくても、対面での対話はできなくても電話でつながって、少しだけ寄り添っていくことはできるかもしれない

と定期的な面談同様に保護者に電話をかけた。

今、何してるんだろうな、今電話かけて大丈夫かな、などと思いながらおそるおそる電話をかける。子どもが後ろで泣き叫んでいるのが聞こえて、保護者の話を深く聴きこむことができなくても、ちょっとでも今の困りごとに寄り添って、持てる限りの心のケアに関する情報を伝え、無理なくできることがあればお伝えし、うまくいかなければ一緒に悩み、解決できなくてもなんとか今を乗り切る術を一緒にひねり出す。

電話をかけて何も困りごとがないと言われたとしても今の状況をサバイブしていることを労い「何かあれば連絡くださいね」「また～ぐらいに連絡させていただきますね」と言って電話を切ること数か月。

電話でもできることあるかも。と思った。対面の方がそりゃあ面接構造がしっかりしているし、電話やオンラインだとどうしても感じてしまう情緒のやりとりのタイムラグみたいなものはないし、こっちだって安心して話を聴けるし話ができる。でもでも電話でもいろいろ工夫すれば、共感的理解も肯定的関心も自己一致だってなんとかやれるかもしれない。今の状況ならやるしかないんじゃないか？それができればちゃんと援助じゃないか。と。

☆電話連絡という援助

コロナ禍が終息を迎え、感染症とも共存しながら学校が再開されるようになったここ数年。教育相談の中での電話は基本的に面談との併用なので、こちらから保護者に積極的にかけることは少ない。電話での対応は内容としてどちらかというところの情報やりとりに偏りがちだが、援助的かどうかは吟味しつつ、電話をかけることは以前よりも増えているし、教育センターとしての電話相談の対応数も増えている。時代の流れと言えればそれまでだけれど、時代に合わせて電話による相談業務もアップデートしていく必要があると思っている。

性格上、少しおせっかいでサービス精神が旺盛すぎるところもあるかもしれないので、それは厳に自戒しなければならないとも思いつつ、席に貼られた電話メモを確認し、電話を取ってくださった方への感謝も忘れず、これからも電話連絡を教育相談の中で援助的に活用していきたいと思っている。





断片的なものの感情の記憶

今回のマガジンは何を書こうかな、と呟いたところ「またエッセイっぽいのはどう？」と言われて考えてみた。確かに最近言い切ることには疲れてきたような気がする。自分の中を消化されずにモヤモヤと漂っていて、妙に何度も思い出される出来事だけれど、事例報告書に乗ることも、分析や考察に使われることもない、ただの記憶。そんなものを書き綴ってみたくなった。

どんな風にかこうか？と考えると読み返した本がある。岸政彦先生の「断片的なものの社会学」という本だ。学生の頃に、ふらっと立ち寄った本屋さんで目に留まり、ジャケ買いしたのだが、読んでみてめちゃくちゃ面白かった本である。社会学者としてインタビューを行い、語りを分析することを仕事としている著者が、分析も解釈もできなかったが心に残っているエピソードを書き綴っている。

『この世界のいたるところに転がっている無意味な断片について、あるいは、そうした無意味な断片が集まってこの世界が出来上がっていることについて、思いつくままに書いてみよう。(2015岸)』という実験的で挑戦的なこの本は、「物事や他者を分析して解釈し、理解しなければ！」と躍起になっている頭を冷やすような良い処方箋のような1冊だった。9年ぶりに読み返してみてもやっぱり面白かった。



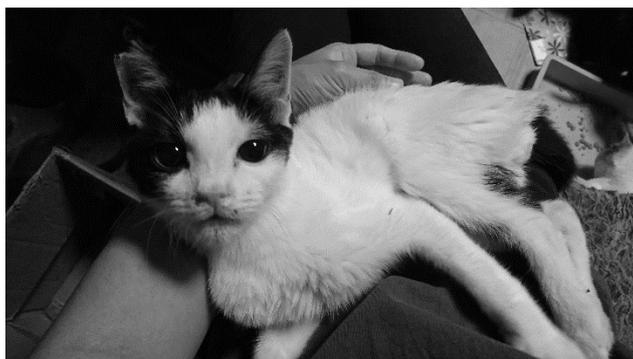
私の中にも、漂ったまま消えていかない「無意味さ」を含んだ記憶の断片がある。それを今回は書いてみたいと思う。

はじまりのエピソード

多頭飼育崩壊のお家に初めて関わった時のことだった。猫が増えてしまったはじまりのエピソードを聞いたところ、「夫が交通事故で亡くなって、その車からこの子が出てきたんです（ロシアンブルーのシニア猫を撫でながら）。夫の形見と思って大切にしているんです。その後、たまたま保護して、飼い始めた猫との間に子猫が沢山生まれてしまっ
て・・・。」と涙ながらに語ってくれた。そんなドラマみたいな事も起きるのか、それは思い入れが強くなるなど純粋に心動かされて聞いていた。その後、全頭の不妊手術など色々終わり、数ヶ月経ってからこれまでを振り返りをご家族と話をしていた。はじまりのエピソードを改めて聞くと、「お兄ちゃんが猫飼い始めて、心の安定に良いつて聞いて、夫が亡くなってから私も不安定やったから、それで猫を飼おうと思ったんですよ。」とさりりと言われた。全然話が違うじゃないか。

今でこそ関わった多頭飼育崩壊の家庭が20件以上になり、飼い主さんが語る過去のエピソードは、聞くタイミングによってだいぶ変わることがよくある、という事を知ったので、多少のストーリーチェンジでは動じなくなった。飼い主さんが語る物語との距離感が掴めてきたというべきか。

私たちは誰でも、過去の出来事を語る時、今の時点で振り返ってみて、その出来事を意味づけて、解釈して話している。今の状況が変われば、過去の出来事の意味づけや解釈が変わることは当然とも言える。だいぶファンタジーだった始まりの1匹のエピソードが、色々落ち着いた頃に現実味のあるエピソードに変化していたのは、良い事なのかもしれない。



無意味な会話

猫を26匹にまで増やしてしまった高齢女性のお家の支援に入っていた。子猫は引き取って保護し、成猫は全頭不妊手術を支援して、現在お家の中には17匹だ。飼い主さんがお住まいの県は10匹以上の多頭飼育者は行政に多頭飼育届けというものをささなければいけない。届け出を出すと保健所の職員さんが家庭訪問に来るのだが、飼い主さんが訪問

をひどく嫌がっていた。「形式的なものだから、さらっと対応していただければ大丈夫だと思いますよ」と説明し、私も立ち会うことで渋々同意してくれた。

訪問当日、職員さんが2名こられて、まずは申請されている頭数が本当に飼われているのか個体確認をするという。飼い主さんが淡々と、なぜかちょっと怒ったような口調で、指差ししながら、「あれが、アマリ、こっちはコナン、今逃げたのがルパン」と言いながら説明していく。猫たちは知らない人に驚いて逃げまどい、いくつかの部屋を行ったり来たりする。「うん、うん」と相槌を打ちながら何か書き留めていく職員さん。押し入れを開けて「ここに隠れてるのが、シャーロックで、あれがダイキチ」と確認作業は続いていく。「うん、うん」と相槌を打ちながら何か書き留め続けていく職員さん。今、ダイキチと言われていた子はさっきルパンだと言われて、逃げ走って押し入れに逃げ込んだ子ではないだろうか。猫は17匹中15匹キジトラ模様だ。みんなそっくりなのだ。などと考えながら見守っていたら確認作業は無事全頭終わったらしい。ほんまかいな（エセ関西弁がでるほどツッコみたくなった）。

次に、職員さんは「この子たち、飼い主さんに何かあったら、引き継いで面倒見てくれる人いるの?」と聞く。「いないですね。」と飼い主さん。「もしもの為に、見つけといてもらえますか」と職員さん。「はい。分かりました。探しておきます」と飼い主さん。その回答を聞き、職員さんはうんうん、と言いながら何かをまたボードに書き留める。

横で見ていると、こんなに無意味な会話が世界にあったのか、と驚いた。80歳近い飼い主さんは相談できる人が誰もいなくて多頭飼育崩壊に陥ってしまったのだ。友達が沢山いる人だって17匹の飼い猫を引き取ってくれる人を探すなんて至難の業だ。できるわけがない。1mmの期待もしていない指導、1mmのやる気もない回答。会話としては成り立っているし、文字だけを見れば意味も通っている。でも、2人の間には何も通っていない、形式だけの会話。家庭訪問は10分ほどで終わった。なぜか皆、満足そうだった。私だけ空っぽだった。



日本を、前へ。

ある市営住宅に住む家族の元に訪問した。このお家では猫が70匹以上に増え、体調が悪くて働けないお父さん、精神的な病気を抱えるお母さん、引きこもり歴10年以上の子ども、おばあちゃんへの高齢者虐待と、沢山の課題を抱えている。そんなご家族との付き合いも7年になり、全頭の手術を定期的な見守りを経て、猫は13匹にまで減っている。とうとう子どもは自立して家を出る準備を進めている。そんな時に、年金や生活保護費など公的支援が減ってしまうことが分かった。このまま猫を飼い続けられるのか、そんな深刻なテーマが家族会議の議題にあがっているらしい。猫の今後に関わる重要な会議なので、私にも参加要請があった。会議の日、お家の窓には通行人に見えるように選挙ポスターが張られていた。推し党があるんだ、と思いながらお家に入り、コタツを囲んで話し合いが始まった。各自のお金の事情を共有しあい、家族それぞれの今後の生活や猫に対する想いを話しあう。これから独立しようとしている子どもが「本当に全頭飼い続けられるのか。飼える頭数に減らすこともやむなしではないのか。」と厳しい意見を投げかける。それに対し、ただ、「飼いたい、ここまで面倒見てきたんだし」という親世代。はじめは、一人暮らしをする子どもが、自分に支給される生活保護費や障害者年金から猫のお世話代にお金を捻出したいんじゃないかと思っていた。でも話をきいていたら、そんな浅い話ではなかった。お家の猫たちは。おしっこが詰まりやすい子が多く、療法食を買っているために、フード代と猫砂代などで月4万円ほどの支出になっていた。療法食を諦めて低価格のフードに変えれば月1万5千円で済む。だが、そうすると恐らくおしっこが詰まって苦しむ子が出てくる。

ずっと猫たちのお世話や通院をやってきていたのは自分（子ども）で、病気で苦しむ子を見ることは本当に辛いこと。自分が一人暮らしになれば、今まで可愛がってきただけの親世代が看病やお世話をすることになる。それが本当にできるのか？という現実を見た子から親への問題提起だった。

愛護センターに引き取ってもらって殺処分になって死ぬ。家で体調が悪くなり、病院へ連れて行くお金が無いから治療を受けられず苦しんで死ぬ。どっちに転んでも死ぬ。自分たちが飼い主だったばかりに……。話のトーンは下がっていく。でも、同じ死ぬでも、愛護センターで知らない人に囲まれて怖い想いをして苦しんで死ぬよりも、家で苦しんで死ぬ方が、まだ恐怖が無いだけましかねえ。見るの辛いだろうけどなあ。耐えられるのかは分からない。フードの質を下げたすぐに懸念するような事態にあるのかも分からない。

でも、とりあえず、3人で5千円ずつ出し合って全頭を飼い続ける方向で2ヵ月間頑張ってみようよ。それで2ヵ月後にもういちど家族会議をしようということになった。「じゃあ、また2ヵ月後に。」そうやって家を後にして、団地の階段を下りてお家を振り返る。「日本を、前へ。」お家の窓には青く眩しいポスターが貼られている。

今月も全員で生き延びられるだろうか。そんな不安を抱えたお家の窓で「日本を、前

へ。」と道行く人へ語りかけるポスターが目に焼き付いて離れない。



■ えぐいビワと壁の穴

黒猫ばかりをお家で可愛がっているおばあちゃんのお家に訪問した。みんな真っ黒で、壁に空いている小さな穴から出入りしている。みんな真っ黒なので、実際に何匹がおばあちゃんの家に入ってご飯を食べているのか誰にも分からない。ケアマネージャーさんは穴を閉じた方がいいんじゃないかと言った。でも、穴を閉じてしまったら、閉じた時に外に居た子は二度とお家へは入れなくなってしまうし、お家の中の子は、外界との穴が閉じられた時点でおばあちゃんの“飼い猫”になってしまう。この黒猫たちは、夜になると穴から入ってきておばあちゃんの家に入ってぬくぬくと寝て、朝になると穴から出勤していき、上の階のおじいさんの宅の玄関先で朝ごはんをもらって、30m先の空き家で遊んだり、子育てをしたりして、60m先のスナックにも出入りしてご飯をもらっている。私が把握しているだけでも、3カ所は餌場があるのだ。おばあちゃんは認知症がはじまっている。シェア猫のままの方が彼ら（猫）には良い。

おばあちゃんの家を訪問すると紅茶かコーヒーを出してくれるのだが、ある日、出てきたコーヒーにはなぜかクルトンとパセリが浮いていた。味はコーヒーなのだが、見た目がおかしい。飲みかけのコーンポタージュの上にコーヒーを入れたのか？そんな事するかな？と思いながら半分くらい飲んだところで、おばあちゃんが「お代わりし」と紅茶を注いでくれた。コーヒーとクルトンと紅茶が混ざったその飲み物は、ちょっと切ない味がした。

でも、美味しくはないけど飲めないほどではないな、まだ大丈夫。そう考えていたら「これ、近所でビワ取ってきて甘く煮たんやけど。」と焦げ茶色の塊が小皿に乗せられて出てきた。今、冬ですけど。恐る恐る口にすると舌いっぱい広がるえぐ味。これは、ダ

メダ。

帰り道、おばあちゃんちの穴を道路から眺めながらケアマネージャーさんに「認知症が酷くなってる気がするんです」と電話をした。おばあちゃんがここで猫と暮らせる時間はあとどれくらいあるだろうか。



認知症のおばあちゃんの一人暮らしは、どこまでがセーフラインで、どうなったらアウトラインなのか、自分では判断ができなかった。でも、えぐいビワを食べた時、こればヤバイところまできはじめてしまったんじゃないかと急にきみしくて悲しくなったのを覚えている。笑いの小ネタにできないレベルになったというか。ケアマネージャーさんがとても親身に対応してくれたので、その後も任せられてよかったが、ずっとビワの味が忘れられない。そもそもビワだったのかも不明なのだが。

おわり



小池英梨子

ねこから目線。～保護猫とノラ猫専門のお手伝い屋さん～ 代表

NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」 プロジェクト代表

ご意見・感想・お問い合わせ：e.kosame12@gmail.com

先人の知恵から

45

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

今回は「ト行」から以下の12個。ちょっと飛ばし気味ですが、最後まで行きたいのでお付き合いください。

- 問い声よければいらえ声よい
- 同じて和せず
- 同床異夢どうしょういむ
- 灯台下暗し
- 問うに落ちず語るに落ちる
- 同病相憐れむ
- 蠮螋の斧どうろう
- 遠きを知りて近きを知らず
- 遠くの親戚より近くの他人
- 十で神童十五で才子二十過ぎれば只の人とお しんどう さいしはたち ただ
- 時は金なり
- 捕らぬ狸の皮算用と たぬき かわざんよう

<問い声よければいらえ声よい>

こちらの出方次第で相手の態度や気持ちはどうにでも変わることをたとえ。問いかける声が良いければ、相手の答え方も自然に良くなるという意から。

親子の間でよく口喧嘩になる。例えば、子どもが門限に遅れた時など、最初から親は怒っているので、「なんで遅れたのか」と詰問口調で訊く。子どもは子どもで、叱られないように、ごまかそうとしたり、嘘を言ったり、逆切れしたりして、その結果益々親を怒らせるということが起こる。親の方が、一歩引いて、穏やかに尋ねれば、子どもも正直に答えることに不安を感じないだろう。

ちょっとしたことで、良い方にも悪い方にも転がるのが、親子関係である。そういう意味でこの諺を伝えている。

<同じて和せず>

すぐに他人の意見に同調するが、心から親しむことは無い。つまらない人たちの交際を言う。「同ずれども和せず」ともいう。和=和合、調和。出典には「君子は和して同せず、小人は同じて和せず（君子は人と調和するが主体性を失うことは無い。小人は付和雷同するが人と協力し合うようなことはない）」とある。君子と小人の差異を言った孔子のことは。 出典 論語

今の時代、SNS で、様々な意見が飛び交っている。子どもたち、否親たちも含め、情報過多の世界にどっぷり漬かっており、それこそ、正しいかどうかもわからない意見に振り回されている。

他人の意見、考えに簡単に同調し、それをまた吹聴する。そういう情報をネタにして、人とのつながりを作ろうとする。そんな繋がりは本来の繋がりでない。誰かさんの悪口を言うことで、仲良しになっていこうとする小学生みたいなものだ。

情報を、よく調べもせず、考えもせずに信じ込んで、「いいね」を打ち、またその話を別の人と話題にする。そうして、様々なフェイクニュースが広がったりするのだ。そんな説明も加えつつ、情報については慎重に入手すること、確認をすること、情報を簡単に信じ込んでいる人たちと一線を引くことの必要性を伝えている。

<同床異夢>

同じ仕事をしていながら、また、同じ環境や条件にありながら、目標や考えが違うことのため。一つの寝床に共に寝ていても、別々の夢を見ているという意から。「どうしよう同床各夢おのおのゆめむ」ともいう。

出典 ちんりょう 陳亮 しゅげんかいにあたるのしよ 与朱元晦 書

一緒に住んでいる家族であっても、それぞれ別々の個体で、別々の考えがある。自分の考えを押し付けるべきではない。夫婦の間でも、親子の間でも、よく起こることだ。同じものを見ている、感じ方や捉え方は人それぞれ。それは家族の中でも見られる

ことである。お互いに、何を見ているのか、それを見て何を感じているのかは、確認しあわなければわからないのだ。よく、ワークで尋ねるのだが、「大きな木」という言葉からどんな木をイメージするかと尋ねると、30人いたら、多くが落葉樹のモウモワとした木を思い浮かべ、数人がクリスマスツリーのような針葉樹を思い浮かべる。そしてごくわずかの人が「この木なんの木」の木を思い浮かべ、たまーにポプラやヤシの木が出てくる。大きな木という言葉だけでもこんなに違ってくる。それは家族の中でも起こるだろう。きっと自分と同じなはず、A と言ったらこれしかない、という勝手な思い込みで進まないで、一つ一つ確認する手間を惜しまなければ、家族間の揉め事も減るのではないかと思う。

英語では・・・

One thing thinks the bear, and another he that leads him.(クマの思いとクマを引くものの思いは別である)

または Same bed different dream.とも、Cohabiting but living in different worlds. とも訳されている。

<灯台下暗し>

手近なことはかえってわからず、気が付かないものであるということ。燭台は周囲を明るく照らすが、その真下は影となって暗いことから。灯台=油の入った更に芯を浸して火をともし昔の燭台のこと。

これは誰でも知っている諺かもしれない。何かを探しているときに、手元にあるのに

遠くばかり見ていると見つけられないということが時々ある。もの探しだけではなく、身近なところで起こっていることに気づかないということもよくある。他人のことばかり指摘している人に限って、自分のことが見えていない。そんな子どもたちに、この諺はわかりやすい。人のことは見えても自分のことはあまりよく見えていないのだ。探し物と、自分自身を見ることと重ねて、この諺を伝えている。

英語では・・・

You must go into the country to hear what news at London. (田舎に行かないとロンドンの新しいニュースを耳にすることはできない。)

<問うに落ちず語るに落ちる>

人から聞かれているときは用心して秘密を洩らさないが、自分から話をしているときは、ついつい真実を話してしまうものだということ。「問うには落ちいで語るに落つる」「語るに落ちる」ともいう。落ちる＝自白する。

秘密と言うのは必ず漏れると思った方がよい。勿論守秘義務については別問題だが、子ども達や親たちの話では、「これ秘密ね。誰にも言わないでね。」と言って守られることは無い。人の口に戸は立てられない。それは以前書いたとおりである。そして、この諺のように、人から尋ねられているときは、秘密を守ろうと注意することができるのに、自分が話しているときは、注意が散漫になりがちで、つい秘密を漏らしてしまう。テレ

ビドラマなどでも時折「語るに落ちたな」というセリフを聞くことがあるが、これは大抵刑事もので犯人が罪を暴露する場面使われている。その場面も大抵犯人が、多弁に話している中で真実の暴露が起こっている。余計なことを言いがちなのは、自分が率先して話しているときなのである。自ら率先して話すときは要注意と言う戒めである。

最近は SNS での発信が殆どで、その中では無責任に人を中傷したり、周りを不快にさせるような言葉も匿名ゆえに発信したりする。面と向かって言えないことは、SNS での発信をすべきではないし、自分から発信するというだけで、この諺のように言わなくても良いことや秘密の暴露をしまいがちになる。この諺はそんなときの注意にも使える。

英語では・・・

The tongue is ever turning to the aching tooth. (舌は常に痛む歯のところに行く)

<同病相憐れむ>

同じ悩みや苦しみを持つ者同士は、互いの辛い気持ちがよくわかるので、慰め合い助け合うものだということ。同じ病気で苦しんでいる者同士は、その苦痛が理解できるので互いに同情しあうということから。
出典 呉越春秋

これはまさに「当事者研究会」や「MCG」(※注)、グループセラピーがどうして効果的かと言うことと繋がる。どんなに勉強しても、その人本来の痛みや苦しみは、同じ体

験をしている者にしかわからないだろう。子育て中のしんどさは、子育てしたことのある人にしかわからないし、発達障害の子を育てている親の苦しみも、発達障害の子を育ててみないとわからない。

同じ苦しみや体験をした人たち同士が一番お互いを理解し、支え合えるということから、この諺はグループで使うことが多い。

(注) MCGはMother and Child Groupの略で、子育て中で煮詰まっている母親のグループである。自分の気持ちを吐き出し、他の母親たちもみんな同じように悩んでいることに気づくことで、子育てに煮詰まらないようにするためのグループ。

＜^{とうろう}螳螂の斧＞

自分の力の弱さを顧みずに、強敵に立ち向かうことのとえ。又、強がることのとえ。カマキリが、どんな相手にも斧のような前足を振り上げて立ち向かっていく様子から。「螳螂が斧を持って隆車に向かう。」ともいう。螳螂＝かまきり。隆車＝高くて大きな車。 出典 韓詩外伝

無謀な人、身の程をわきまえない子どもを見つけると、この諺を伝えて説明する。大きな敵、巨大な力に立ち向かいたい気持ちは受け止めつつも、カマキリが車輪に勝てないように、無駄死になるような無謀さは諷めねばならない。

失敗を経験することは大事だが、まるきり歯が立たない状態であれば、それは止めるべきではないか。勿論巨大な敵でも、最初からあきらめてしまっただけでは何にもならない

という言い分もある。「一矢報いる」という諺もあるし、何もしないで逃げるよりはということもあるかもしれない。ただ、一人で立ち向かうより、仲間を集めて立ち向かった方が良い。その能力があるなら、そちらに意識を向けさせるべきだろう。その場合はこの諺は当てはまらない。

自分の能力を顧みず、誇大妄想的に立ち向かうのであればこれは諷めるべきで、そういう子にはこの諺が当てはまる。子どもでは自己肥大しがちなので、そこは大人が気を付けてみていく必要があるだろう。

＜遠きを知りて近きを知らず＞

他人のことはよくわかるが、自分の事となるとわからないということ。又、遠大なことについてはすぐれた意見をもっているが、身近なことについてはわからないということ。 出典 淮南子

灯台下暗しでも書いたが、他人のことはよく見えるし、他人の悪いところは特によく見えるのだが、自分のことは全く見えていないことがある。それだけではなく、将来のことばかり言っていて、今をしっかり考えていない、或いは地固めをしていないという人にもこの諺を使う。ぐちゃぐちゃの土壌の上に、何も建てられない。夢は大事だが、夢に向かって進めていくには、足元の一步が大事なのだ。

＜遠くの親戚より近くの他人＞

いざというときには、遠く離れたところに住んでいる親戚よりも、近くに住んでい

る他人の方が却って頼りになるということ。「遠い親戚より近くの他人」「遠い一家より近い他人」ともいう。

この諺は、母親たちによく使う。夫の転勤で引っ越してきた母親や、実家が遠い母親などは、近くに両親が住んでいる人をうらやましがる。近くに両親がいてくれたら助けてもらえるのにと。また、最近では両親との関係性が悪い母親も増えた。そうすると、子育てを助けてもらえる人をほかに見つけなければならない。最近では様々なサービスが増えた。ファミリーサポートセンターやシルバー人材センターもあるし、レスパイトなどもある。しかし、一番助けてもらえるのは、ご近所さんではないだろうか？筆者も実家が遠かったので子育て中は、隣の家などのご近所さんや、近所のお店のおばさんなどに随分世話になった。象さんの子育てのように、今はみんなで子育てをしていく必要がある。近所には子育てを終え、子どもたちも遠くに行ってしまうと、孫育てでもできない、気のいいおじさんおばさんが沢山いる。その人たちも、子育てを手伝うことで、生きがいを見つけられたりするのだ。お互い様でやっていけたら一番である。他人と関わるのが苦手な人が増えたが、様々な支援の一つとして、考えてもらうようにしている。

とお しんどう
＜十で神童＞

さいしはたち ちだ
十五で才子二十過ぎれば只の人＞

幼いころは並外れて才知のあるように見えた子ども、成長するにつれてごく平凡な普通の人間になってしまうということ。十歳の頃は神童と言われた人が十五歳になると

才子程度になり、二十歳を過ぎると平凡な人になってしまうという意から。「十で神童十五で才子二十歳過ぎては只の人」ともいう。

子どもは、保護者がびっくりするような力を見せる時期がある。そんな時期に「うちの子天才かも」と思う保護者も多い。スポンジのように何でも覚え、吸収していく様子に、びっくりする。しかし、そのまま、ずっと大人になるまで伸びていくということは無いのである。さかなクンや藤井聡太さんのようにずっと一つのことに秀でた人はいるが、凡人は二十過ぎればただの人なのだ。あまり期待しすぎず、本人が得意なことは伸ばしてあげようという程度で行くのが良い。得意そうだからと徹底的にやらせたら、きっと嫌いになって出来なくなってしまいうこともあるので要注意。

英語では・・・

A man at five may be a fool at fifteen.(
5歳で大人並みの子は15では馬鹿と言う
こともあり得る)

＜時は金なり＞

時間は非常に貴重で、金銭と同様の価値がある。無駄に使わないでよく励み務めるべきだという戒め。英語の Time is money. から。

昨今、スマホや PC に依存する子どもや大人の問題が取りざたされている。かつてはゲーム依存が主であったが、最近では YouTube や TikTok などの動画配信が主

である。何時間もそうしたものに時間を費やしている。その結果ストレートネックの問題も起きているし、身体機能の低下も問題とされている。筋トレに時間を費やす人、趣味の麻雀や競馬・競輪等に時間とお金を費やす人、人それぞれである。自分の時間をどう使おうと自分の勝手と言うのは正しい。大人は自分の行動に自分で責任を取ればよい。しかし子どもはどうか。問題は健康体の維持と脳への影響。これは子どもに特化する。何時間も、スマホやタブレット、PCなどの画面を見続けていることの弊害と、観ている内容による弊害、更には、考えることやコミュニケーションが減ることでの弊害であろう。

子どもたちは、昔のテレビと同じで流行りの動画を観ていないとクラスの会話についていけないし、ゲームで育つ友情もある（最近のゲームはほぼ協力プレイ）。従って一概にゲームや動画を見ることを禁止するという話ではない。長時間というのが問題なのである。1, 2時間ゲームや動画を楽しんだところで問題はない。しかし体を動かしたり、本を読んだり、何かを造ったりなど、ゲームや動画を見ることを除いた、自発的な行動を増やすことが大事なのである。小児科学会では、長時間のゲームや動画視聴の脳への影響として、前頭葉への血流の不足がもたらす情動調節機能の低下など、幾つかの問題の可能性を挙げている。

YouTube には勉強するものもあるので、そういうものを利用するのは有用だろう。だが、子どもたちが見ているのは、ゲームの実況動画や配信だったりする。面白い、楽しいから続くだろうし、何時間でも飽きないのだろうが、人生は限られている。夢中にな

っているときは気付かないが、もっといろいろなことを知る時間、学ぶ時間、体を整える時間にも意識を向けてほしいと思う。

<捕らぬ狸の皮算用>

不確実な事柄に期待をかけ、それを当てるに色々計画を立てることのたとえ。まだ狸を捕まえないうちから皮を売って儲ける計算をするという意から。

たまに、この諺がそのままと言う人に出会う。生まれてくる子の将来を考えている親である。まだ生まれてもいないのに、この子は、英才教育を受けさせてとか、××学校に入れて、医学部にとか……。夢を見るのは仕方ないが、親の決めた人生にあてはめられる子はたまったものではない。本人がどのような力を持っているかは、育てる中でしかわからない。先ずは丈夫な子を産むこと、生まれたら健康に育てることくらいでよい。そんな先のことを今から言ってみたって意味がないのだ。

子どもでも、時々この諺に当てはまる子がいる。宝くじを買って、3億円あてて、悠々自適で暮らすとか、YouTube で動画配信して、広告貼って、それでお金稼ぐとか言っている。昔は、ミュージシャンになってお金稼ぐと言っていた子や、タレントや声優で稼ぐと言っている子がいたが、最近は動画配信を考えている子が多いなと感じている。

動画に広告を貼ったところで、再生回数が100万回とか、1000万回とかという、いわゆるバズったら、お金も入るだろうが、数十回くらいではコンビニでおにぎりも買

えない。その現実をしっかりと伝えないとい
けないので、この諺はちよくちよく使う。

英語では・・・

Sell not the bear's skin before you
have caught him.(熊を捕らえる前に熊の
皮を売るな)You count your chickens
before they be hatched.(ひよこが孵らぬ
うちにその数を数える)

出典説明

論語・二十編

儒教の経典。「大学」「中庸」「孟子」とと
もに四書の一つ。孔子の言行や門人た
ちとの問答を記録した書で、孔子の死
後に門人たちが編集したものといわれ
る。孔子は諸国を回って仁の徳によ
る政治を説いたが、本書は孔子の
人物や思想を知るうえできわめて
重要な資料である。

陳亮 与 朱元晦書・・・

陳亮は、南宋の儒学者、字は同甫・同父。
号は龍川。事功派永康学派の雄。朱熹の論
敵として知られる。朱元晦とは、朱熹のこ
と。

吳越春秋・・・

春秋時代の吳・越両国の興亡を記した書。
後漢の趙曄の撰。吳は太伯から夫差まで、
越は無余から勾踐までの間のことが記さ
れている。十巻本と六巻本がある。

韓詩外伝・・・十巻

「詩経」の解説書。先秦時代の故事・古語
と「詩経」の詩句を関連づけて開設した
書。前漢の韓嬰の著。「内伝」と「外伝」
があったが、現存するのは「外伝」十巻だ
け。「かんしげでん」とも読む。

淮南子・・・内編二十一巻

紀元前二世紀、前漢の武帝の初期に成立
した哲学書。編著者は、前漢の高祖劉邦の
孫である淮南王劉安。無為自然の道家思
想を中心とし、政治・軍事・天文・地理な
どにわたって、諸学派の説を収めている。
内編二十一巻・外編三十三巻があったと
されるが、現存するのは内編二十一巻。

参考文献：以前にも掲載したが、此処に載
せている故事・諺及び出典説明は「新明解
故事・ことわざ辞典」三省堂編修所編 より
転載させていただいている。

うたとかたりの対人援助学

第30回「授業実践 大学生と替え唄2題」

鶴野 祐介

はじめに

1996年以来、大学生を対象に、子どもの頃に彼らがよく口ずさんだ替え唄についてアンケート調査を行い、その成果を発表してきた（『生き生きごんぼーわらべうたの教育人類学』2000、『伝承児童文学と子どものコスモロジー〈あわい〉との出会いと別れ』2009他）。また、笠木透の調査研究を補足する形で、戦争中の子どもの替え唄についてまとめた（『子どもの替え唄と戦争ー笠木透のラストメッセージ』2020他）。

今回は、2024年度前期の授業で大学生たちにワークショップとして取り組んでもらった替え唄作りと、同じ受講生たちに実施した、子どもの頃に歌っていた替え唄についてのアンケート調査、2つの授業実践の成果を紹介する。前者には、若者たちの日常生活の中での喜怒哀楽がリアルに表現されている。また後者には、子どもの替え唄の世界にも時代を超えた普遍性と当今の流行を反映した時代性の両方が見られる。そうした2点について考察してみたいと思う。

1. 大学生の替え唄作りワークショップ

2010年度より非常勤講師として授業担当している大谷大学の「教育社会学」（幼）では、毎年、受講生全員に替え唄作りのワークショップを行ってきた。

「中等教育ー統合と分化ー」の単元で、中学・高校の頃の自分自身の心の葛藤を大学生である現在の視点から振り返ってみるとともに、その頃の自分に対するエールを送ることで逆に現在の自分をポジティブに捉え直すことが、ワークショップの趣旨である。

元歌はアンジェラ・アキ「手紙 ～拝啓、十五の君へ～」(2008)。1番では15歳の「僕」から未来の自分への送信を、2番では未来の自分が15歳の「僕」への返信を綴っている。2008年度NHK全国学校音楽コンクールの中学校の部の課題曲にもなったこともあってか、今でも中学の頃にこの曲を歌

ったという大学生は多い。

拝啓 この手紙読んでいるあなたは
どこで何をしているのだろう
十五の僕には誰にも話せない
悩みの種があるのです
未来の自分に宛てて書く手紙なら
きっと素直に打ち明けられるだろう
今 負けそうで 泣きそうで
消えてしまいそうな僕は
誰の言葉を信じ歩けばいいの？
ひとつしかないこの胸が何度もばらばらに割れて
苦しい中で今を生きている
今を生きている

拝啓 ありがとう 十五のあなたに
伝えたい事があるのです
自分とは何でどこへ向かうべきか
問い続ければ見えてくる
荒れた青春の海は厳しいけれど
明日の岸辺へと 夢の舟よ進め
今 負けないで 泣かないで
消えてしまいそうな時は
自分の声を信じ歩けばいいの
大人の僕も傷ついて眠れない夜はあるけど
苦くて甘い今を生きている

人生の全てに意味があるから woah
恐れずにあなたの夢を育てて
ラララ Keep on believing

負けそうで 泣きそうで
消えてしまいそうな僕は
誰の言葉を信じ歩けばいいの？
ああ 負けないで 泣かないで
消えてしまいそうな時は

自分の声を信じ歩けばいいの
いつの時代も悲しみを避けては通れないけれど
笑顔を見せて 今を生きていこう
今を生きていこう

拝啓 この手紙読んでいるあなたが
幸せな事を願います

原則として、下線部はそのままにして、それ以外は自分自身の体験談と現在の自分からのコメントを綴ってもらう。これが替え唄作りのルールである。

毎年度、最終回に私が選んでおいた3編を紹介して、得票数で第1位を決めている。

2. 2024 年度のお気に入り3作品

今年度は約80名が受講し、第7回の授業の中で替え唄づくりのルールを説明し、ほぼ全員が1～2週間後に提出してくれた。その中から私が気に入った作品を3編紹介してみたい。ちなみに、受講生全員の得票数が一番多かったのは、3番目の「田舎」だった。

「暴食」

拝啓 この手紙 読んでいるあなたは
どこで何をしているのだろう
十五の僕には誰にも話せない悩みの種があるのです
未来の自分に 宛てて書く手紙なら
きっと素直に打ち明けられるだろう
今 食うて寝て 食うて寝て
アイスはさみ再度 ご飯 お肉 おにぎり
「お」がつくものはおいしい
ひとつしかない このお腹 たくさん 食べ物が入る
幸せの中で 今を生きている 今を生きている

拝啓 ありがとう 十五のあなたに
伝えたいことがあるのです
1限と2限 3限と4限の間に お菓子を食べてたよ
勉強してるからと 自分に言い聞かせるが
心のどこかで 罪悪感に飲まれる
今 あれ食べたい これ食べたい
消費期限切れでもいいの
自分の天使と悪魔がさきやくわ
「もう終わろうよ、痩せようよ」
「まだだめだ 何でも入る」
幸せで辛い 今を生きている

人生の全てに意味があるから woah
恐れずに 食べっぷりを誇ろう
ラララ Keep on believing

食うて寝て 食うて寝て
アイスはさみ再度 ご飯 お寿司 オムライス
「お」がつくものはおいしい
ひとつしかない この人生 悔いのないよう食べまくれ
自分の声を 信じ歩けばいいの！
どうせ昨日も 今日も明日も
食べるんだから チャラだよ
だから決して誰も 「食べ過ぎ」なんて 絶対言うなよ

拝啓 この手紙読んでいるあなたが
幸せなことを願います

「顧問の言葉」

拝啓 この手紙 読んでいるあなたは
どこで何をしているのだろう
十五の僕には誰にも話せない悩みの種があるのです
二十の自分に 宛てて書く手紙なら
きっと素直に打ち明けられるだろう
今 腹が立つ 悔しくて 逃げ出したくなる私は
顧問の言葉 心にぐさぐさ刺さる
「ほんまに3年か？ しっかりせい！」
何度も何度も怒られ
心の中で「うるさい！」と叫ぶ「うるさい！」と叫ぶ

拝啓 ありがとう 十五のあなたに
伝えたいことがあるのです
あの頃の私は 顧問うざすぎたけど
今となっては顧問 love♡
荒れた部活動 顧問が立て直した
3年の仲間割れ 顧問が修復した
今 腹立たい 情けない 逃げ出したくなる私は
誰の言葉も 心ですべて受け止める
二十の私 後悔し 眠れない夜もあるけど
こころの中で「ごめん、先生」「ごめん、先生」

人生の全てに意味があるから woah
顧問も意味あると信じて
ラララ Keep on believing

うざすぎて うざすぎた 中学の顧問だけど
本当は裏で 誰よりも生徒思い
ああ 腹が立つ 情けない 十五の私の感情
顧問の言葉 信じ歩けばいいのに
うざいと思う その気持ち 避けては通れないけれど
心の中で「抑えろ！耐えろ！」「抑えろ！耐えろ！」

拝啓 この手紙読んでいるあなたが
幸せなことを願います

「田舎」

拝啓 この手紙 読んでいるあなたは
どこで何をしているのだろう
十五の僕には誰にも話せな 悩みの種があるのです
未来の自分に 宛てて書く手紙なら
きっと素直に打ち明けられるだろう
今 電車ない バスもない 移動手段ない私は
誰の手借りて 移動すればいいの？
田舎すぎるよ 何も無い 遊ぶところは家か外
苦しい中で 今を生きている 今を生きている

拝啓 ありがとう 十五のあなたに
伝えたいことがあるのです
京都に来た今 何でもある場所で
住み続ければ見えてくる
自然いっぱい田舎はきれいだけど
やっぱり地元は本当に何も無い
今 電車ある バスもある ICOCA も作った私は
いつでもどこへも すぐに移動できる
カフェにカラオケ 居酒屋に服屋 行くところ多いよ
インスタ映えする場所・物多い

人生の全てに意味があるから
田舎しかない魅力がずっとある
ラララ Keep on believing

あたたかい いやされる 田舎の自然や人たち
出会う人みんな 顔見知りで挨拶
ああ 数年後 その町を出て 別の町に行くから
今は田舎でできることをしてね
いつの時代も 悲しみを避けては通れないけれど
緑に囲まれ 今を生きていこう 今を生きていこう

拝啓 この手紙読んでいるあなたが
幸せなことを願います

3. 「十五の僕」の「悩みの種」さまざま

これら3編以外にも、当代中高生気質が垣間見ることが出来る秀作が目白押しだった。その中から a. ~f. の主題別に分けて、抜粋で紹介したい。

a. PCゲーム

「今 モンハンが楽しいよ
アクションも追加されてるし
モーションも改善 快適になってるよ」

「今 ゲームしてアニメ見て 受験のストレスを解消
今の自分の楽しみは二次元だ
勉強中も二次元の世界で頭がいっぱい
アニメ見ながら勉強している 勉強している」

b. アイドル

「今 高校に入りたて それでも考えちゃう未来
保育士目指したい でもあまり自信がない
そんな時には 星野源 聴いたら心が安らぐ
苦しい時にも 歌に救われた 命の恩人」

「今 ハロプロで 推しメンが 増えすぎた DD は
新グループのピヨーンズ 恐らく前こ沼る
ひとりだけを選ぶのならば 船木〇で
迷いに迷う中で アンジュは船木
娘。は佐藤優樹」

c. 部活動

「今 苦しくて あきらめてやめてしまいたい時は
練習を続けて 一つに合わせていこう
仲間とともに 奏でてる この音を信じて
迷いの中で 今を信じていこう」

「今 あぎできて 痛くても やりがいを感じる僕は
自分の意志で 立候補したキーパー
たくさん本読んで 調べても
何度もシュート決められて 苦しい大会
泣きそうである 泣きそうである」

d. 試験勉強

「今 一夜漬け 一夜漬け いつものことだけれど
何度言われても 誰に注意されても
居残り授業 私だけ これで何度目だろう
帰りたい中で 課題終わらせる 課題終わらせる」

「今 受験期でストレスが めっちゃ溜まっている僕は
何を楽しみに過ごしていけばいいの
学校が終われば塾に行く そして自習室にこもる
塾のバス臭いチャリに変えよう チャリの方がいい」

e. 生理現象

「今 苦しくて 腹痛い 冷や汗止まらない僕は
誰に言葉を掛け トイレいけばいい？
ひとつしかない洋式が 空いていないとき絶望
苦しい中で 我慢やりすぎず 早く出てこいと」

「今 やめられない どうしても
ポテチに伸びてしまう手を
太ると分かって わかってはいるのだけど
でも美味しいし 本当に疲れも全部吹き飛ばから
今日は頑張ったし 今日はいいいね」

f. 人生

「今 何事も全力で頑張ろうとしている僕は
何を迷って 人生歩んでいるの？」

一度しかない人生を挑戦し続けて
探りながら 今を生きている 今を生きている」

「今 苦しくて切なくて 明日が見えてこない僕は
孤独な気持ちを ひとりで抱えきれないよ
一つしかない この胸が何度も強く締め付けられ
寂しい気持ちで 今を生きている」

「今 傷ついて会いたくて 消えてしまいそうな僕は
君の言葉を信じ歩いていいの？
ふたりの中の思い出を 忘れようとしたけれど
忘れないでと 彼を想っている」

4. 子どもの替え唄 ロングヒット編

子どもの頃に歌った替え唄について、同じ大学生
にアンケート調査を行った。主に2010年代に関西
地方で歌われたものと考えられるが、1990年代に
も歌われていたものと、2010年代以降ならではの
ものに大別される。前者から紹介する。

あるひんけつ 森のなかんちよー
くまさんにんにく であつたんこぶ/たんそく
花咲く森のみちんぼこどっこいしょ
くまさんにであつたんこぶ (「森のくまさん」)

もういくつねるとんかつ お正月がつるっばげ
お正月には たこあげてんぶら
こまをまわして あそびましよんべん
はやくこいこい おんぼろ救急車ピーポー(「お正月」)

あかりをつけましょ ぼくだんに
ドカンと一発 ハゲあたま
五人囃子も ふっとんだ/死んじやつた
今日はかなしい ひなまつり/おそうしき
(「うれしいひなまつり」)

となりのじっちゃんばっちゃん イモ食って屁して
大事なパンツに穴開けた ヘイ!(「アルプス一万尺」)

走る こける 血が出る 肉が裂けて 骨が見える
病院 病院 かけつけ テキトーに手術され
死んじやつた (「Runner」)

ぶんぶんぶん ハチが飛ぶ お池のまわりに
爆弾しかけて ドカンドカンドカン ハチが死ぬ
(「ぶんぶんぶん」)

さる、ゴリラ、チンパンジー (「クワイ河マーチ」)

からすなぜ鳴くの からすの勝手でしょ (「七つの子」)

チャリラー 鼻から牛乳 (「フーガニ短調」)

アン アン そこはダメよ 大事なところ
ソーセージ ミートボール お稲荷さんの皮
(「アンパンマンのうた」)

5. 子どもの替え唄 新世代編

いま いま 別れの時
⇒ピーマン ピーマン わかめ味のポッキー
飛び立とう 未来信じて
⇒飛び納豆 苦いシイタケ
はずむ 若い力 信じて
⇒パズル 破壊力 信じて
この広い この広い 大空に
⇒ゴミ拾い ゴミ拾い 大空に (「旅立ちの日に」)

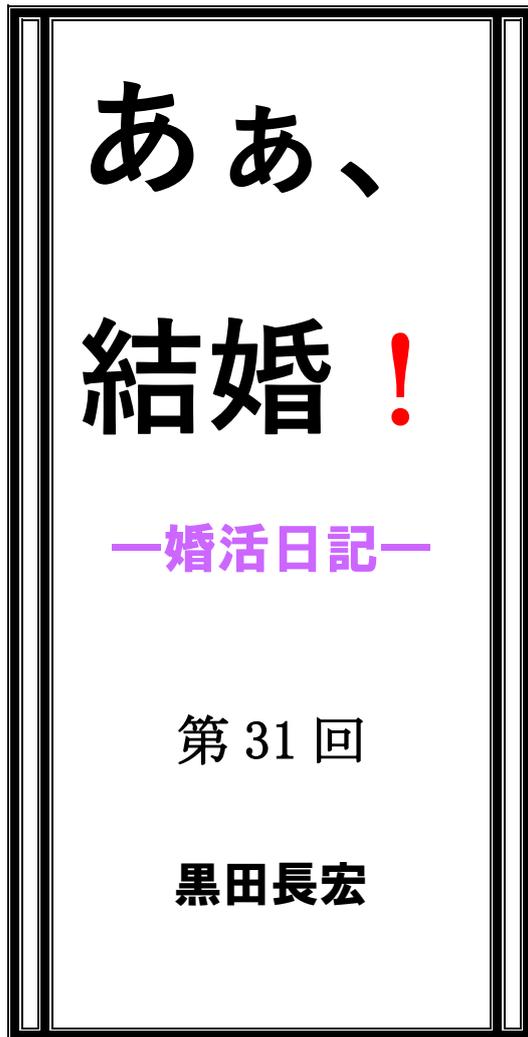
歩こう歩こう 私は元気(+ぼくは病気)
歩くの大好き(+ウイスキー/ぜんぜん)
どンドン行こう(+どこへ?)
坂道(+すべって) トンネル(+くぐって/真っ暗)
くさっぱら(+で草むしり)
一本橋に(+きりぬけて/ひっかかって)
でこぼこ砂利道(+じゃり多い/工事中)
くもの巣くぐって(+ひっかかって/べったべた)
下り道(+でころぶ!/バイバイ!) (「さんぽ」)

今 わたしの願い事が かなうならば 翼がほしい
この背中に(+はと/つる/くじゃく)
鳥のように(+醤油がはねたら目立つけど)
白い翼(+セットにドリンクバーで)
つけてください(+食べ物を消化するところ)い
この大空に(+キャプテン) 翼をひろげ(+おならで)
とんで行きたいよ
悲しみのない(+おかわり) 自由な空へ
翼はためかせ(+誰かのお金で焼肉) 行きたい
(「翼をください」)

おわりに

最後の2編は、元歌の文節にかぶさるように「ツ
ッコミ」を入れる(+〇〇〇)。ロングヒット編の「森
のくまさん」や「お正月」と一見似ているが、これら
が1人でする尻取り遊びであるのに対して、「さんぽ」
や「翼をください」は2人目の「ツッコミ」が〈ノ
リ〉や〈グルーヴ〉感覚をもたらす言語ゲームと言
え、新世代に相応しい「ヒップホップ調替え唄」で
ある。

持論では、替え唄には「子どものコスモロジー」
が投影している。これからもリサーチを続けていき
たい。



<2024年5月2日>

思わぬ急性心筋梗塞発症事件から3か月が経過し、出直しせねばならない。そのため、早めに57号の原稿を提出し、58号分の出来事に向けて再稼働である。(原発のせいで嫌なイメージの単語になってしまったが。)

<5月3日>

58号も記述の日が空くのかなと半ば忘れていたところ、茨城新聞に東京の医療機関が非匿名の精子提供を募集するとあり、私自身の先祖代々の遺伝子のバトンを私でストップする罰の悪い気持ちを、まだ工夫できるかも知れないと思い、ただ45歳までの募集なので、年齢制限について医療機関にメールした。思えば結婚難だって、年齢制限で困難な面がある。適齢期はあるのも事実だが、限界にはまだなっていない場合も限界とされてしまう場合があるかも知れない。でも適齢期が一番適齢なのは当然だとも思うが。

<2024年5月9日>

58号で提出しようと思っていたのだが、精子提供の逆説のような案が閃いて、行動もしたので、私のような急性心筋梗塞で命拾いした者は、3ヶ月の間に何があるかわからない、待ってられないと思い、今回は再提出が多くなって申し訳ないのだが、やる気がないよりは悪くないと思い、(やる気がない時期も悪くはないのかも知れないが)

これ以下の部分を付記させていただく。

<5月8日>

新聞を隅々見ていたのは良かったかも知れない。今回の東京の医療機関の担当の女性は自らがご主人の了解を得て、精子提供を受けて子供を持たれた経験者だと記事に書いてあったが、丁寧な返信を2度くれた。年齢制限のルールがあるので、すぐに決着は付かなかったが、もし将来的に高齢者でも精子提供が出来るようになったなら連絡をくれ

るとのことで、私のほうも、積年思ってきた結婚難周辺の事々を殴り書きして訴えた。久しぶりにアクションを仕掛けたような気もする。望みを捨てなければ、可能性はまだやってくると信じてみたい。

<5月9日>

起床して着想が閃き、しつこいようだが、非匿名の精子提供を15日から開始するという医療機関の担当者にメールを重ねた。その着想は、精子提供するような男性は、社会的に優秀とされていたり、当然若さがあつたり、妻帯者であつたり、将来妻帯できる男性ではないか。すると配偶者からの子供と、精子提供した子供との異母兄弟姉妹間の結婚が生じるのではないか。異母兄弟の結婚は遺伝子が近い配偶者だと遺伝病の生じる可能性から結婚は禁じられているが、精子提供からそうしたことを減らすためには、結婚出来ず孤独死するような結婚難男性の精子提供ならばどうなのかという逆説のような事を提供したのだ。私自身の結婚難高齢化により、以前よりやる気は色々な面で減少してしまっているが、久しぶりに活動しているような気がした。他の面からも、高齢結婚難男性が救われる方法論、広げられれば女性も救われる方法論をもっと意識してインプット、アウトプットしなければいけないはずだったのだが、きっかけがないと行為できない。今回は新聞を隅々眺めていたことからの着想と実践だと思う。茨城新聞にもこの事を伝える営業をしてみようかなと思う。

<6月13日>

久しぶりにこのファイルを開くと、精子提供の話題は既に意識から遠のき、また無為の日々に陥る。これこそが現実。ドラマなどは面白いように出しているわけだ。現実を書いている。この結婚難状況では、昔のように純粹に恋に陥ってしまうようなエネルギーも生じない。なにしろ年齢という壁が抑制する。こうしてどれだけ書いても書いても、特定の相手の出現と、その相手への思いに陥ることの出来る純粹な精神こそが

この日記の解決方法なのだろう。とは、思うものの・・・。

<8月1日>

締め切りの通知が届いたので久しぶりにワープロソフトを開けてみると、まるで忘れてしまっていたのだが、当初は精子提供について関心を持って書いていたのだった。

自分自身が先祖代々いつからかわからないほど繋げてきた遺伝子を終わらせてしまうのかと思うと辛いのだが、どれだけ頑張って婚活をしたことだろう。同時代の女性たちを恨みたくもなる。

マクロとミクロと言っているのかわからないが、マクロが結婚難時代をどうすればいいのですかと問いかけていく方法をこうしてやっているわけだが、ミクロは特定の人、一人にアプローチするという、このほうが直接的であり、現実

現するということなのだろうが、今のところ、ミクロがさっぱりで、マクロは、とうとうなぜか急に増えてきて、

YouTube 登録者がこの書いている時点で1600人を超えた。1600人の登録というのは決して少ない数字とは言えないと思う。結婚できる国に戻るよう引き続き頑ってパフォーマンスしていきたい。(結局内容は6月13日の状態のままだった)



故・斎藤稔正先生のこと

J R 茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

催眠医学心理学会の今年の会報（『催眠学研究 Vol.62』）を開いて、「えっ」と声が出ました。

佐々木雄二先生が去年の2月22日に亡くなったことは以前の記事でも書きました。

佐々木先生の追悼のページが今年の会報にあることは想像に難くありませんでした。

しかし、そのページの前に、斎藤稔正先生（立命館大学名誉教授）の追悼のページがあったのです。

愛弟子の福原浩之先生・加納友子先生が斎藤先生の追悼文を執筆されていました。

斎藤先生は佐々木先生の後を追うように3月11日に亡くなっていらっしゃいました。

「一月も開けずに一緒に逝ってしまうなんて、そんなに仲良くしないでくださいよ」と心の中でつぶやきました。

私は佐々木先生が大学のゼミの指導教官でしたが、卒論には斎藤先生の心理テストを使わせていただきました。

お二人がいらっしゃらなければ、私は4年間で卒業できませんでした。

お二人とも私の恩師です。

斎藤先生の業績は福原先生・加納先生が紹介されていますので、個人的な思い出を書いてみます。

お酒と冗談がお好きな先生でした。

卒論を書く前に初めてお目にかかったのも居酒屋でした。

「外国語を学ぶコツは何だと思う？」

「えー、外国語はとても苦手です。ぜひ教えてください」

「外国人のガールフレンドをつくることだよ。そうすれば、必死にしゃべろうとするから、覚えるだろ」

「なるほどー・・・でも外国人のガールフレンドできるかなあ」

「なーに、当たっていただけろだよ」

斎藤先生は相当おモテになったようで、留学中に何か国語かをマスターされたとか、されなかったとか・・・。

マスターされた外国語の中には、とてもマイナーな外国語もあったそうです。

ある学会である年、そのマイナーな外国語を話す研究者を招待することになりました。

ところが、その外国語を通訳できる人がどうしても見つかりませんでした。

しかし、斎藤先生がその外国語を話せることを学会関係者がどこかで聞きつけて、通訳を依頼してきたそうです。

「で、引き受けはったんですか？」

「うん、やったよ」

「すごいですねえ、通訳までされるなんて。わからない言葉とか出てきたらどうするんですか？」

「そのへんはだいたいこんなことやろうという意識をしないとけばいいんだよ」

「大丈夫だったんですか？」

「なーに、訳が正しいかどうかなんて、わかるやつはその会場には一人もいないんだから、心配ないさ」

大らかな先生でした。

ほんとうはちゃんと通訳されていて、冗談でそのようにおっしゃっていたのでしょう。

大学卒業後、たまたま京都に就職したおかげで、斎藤先生のASC研究会に入れてもらえました。

とても人懐こい先生で「一度この研究会に足を踏み入れたら長い付き合いになるからね」と笑っていらっしゃいました。

立命館大学の衣笠校舎に、多いときは月1回くらいで通っていました。

先生のゼミの院生・学部生の他に、各界で活躍されている方々にお目にかかることができました。

前号、前々号で紹介した山下宰先生、僧侶の谷尚道先生、病院で心理カウンセラーをされている長谷川浩先生といった先生方が当時の常連でした。

斎藤先生は研究会の後などで、肩こりにはこれが効くんだよと「ゴキブリ体操」を披露して下さいました。

殺虫剤をかけられたゴキブリがひっくり返って脚をジタバタさせるように、仰向けに寝て手足をブルブル震わせるという体操です。

先生は毎日ゴキブリ体操をされていて、これで肩こりが解消したそうです。

先生は大真面目なのかもしれませんが、実演してみんなを笑わせていらっしゃいました。

最後にお目にかかったのは催眠医学心理学会の懇親会でした。

学会の懇親会といっても、堅苦しいものではなく、お座敷の呑み会でした。

その時、学会で特別講演をされたミルトン・エリクソン財団のジェフリー・ザイク博士が Frozen shoulder（五十肩）だとおっしゃいました。

私は座布団を枕代わりにして、博士に Judo-therapy（柔道整復術）を体験していただきました。

斎藤先生も Cockroach exercises（ゴキブリ体操）を英語で紹介されていたのではなかったでしょうか。

「もう年賀状終いするから」という連絡が最後でしたが、そんな急に亡くなるとは思いませんでした。

斎藤先生が亡くなったこと、そしてそれを知らなかったことはとても残念でした。

でも、去年の春、私は家族のことで精神的にきつい時期でしたし、佐々木先生の訃報に接して落ち込んでいました。ですから、知らなかったのは何かの思し召しなのかもしれません。

その頃から一年以上経って、我が家も少しずつ落ち着きを取り戻し、家族旅行の帰りの機内でこれを書いています。墓参の機会があれば、お参りに行きたいです。斎藤稔正先生のご冥福を、心よりお祈り申し上げます。

斎藤先生のことを、他の号でも書いていたので、リンクを貼っておきます。

対人援助学マガジン30号 接骨院に心理学を入れてみた2 P287 下から10行目～
<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol30/50.pdf>

対人援助学マガジン54号 接骨院に心理学を入れてみた25 P188 下から8行目～
<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol54/29.pdf>

親や恩師の先生方には、できるだけ長生きしてほしいと思います。

未永く幸せな人生を送っていただきたいですし、何かのご恩返しをしたいという気持ちもあります。

でも「自分を守ってくれた人が生きているというだけで安心」という自己中な気持ちも混じっています。

最近、お世話になった方たちが次々と亡くなっていき、後ろ盾がなくなったような気がします。

背中がスースーする感じがします。

なんとなく不安なのです。

自分がそう感じるから、家族のために長生きしたいなと思うようになりました。(できるだけピンピンコロリですが・・・)

患者さんにも言われることがあります。

「元気でいてください」

「先生いないと困る」

「ずっと(接骨院)やっててくださいね」

「(接骨院が)あるだけで安心」

茨木にはたくさん整形外科や接骨院・整骨院があります。半分以上「社交辞令で」そうおっしゃっていると思っていました。

いまは半分以上「本気で」そうおっしゃってくださっているのだと感じます。

お世話になった方々は、もうほとんど亡くなっていて、ご恩返しもできません。

その分、今生きている誰かの役に立ったり、将来、誰かの役に立つものを残したりしたいです。

パラドキシカルストレッチングと パラドキシカルコントラクティング

「パラドキシカルストレッチング」と「パラドキシカルコントラクティング」という仮説も、誰かの役に立てれば幸いです。

本誌56号の「接骨院に心理学を入れてみた 27」で次のように書きました。

一見縮めているのかと思える方に伸ばすことで、縮みすぎている筋肉を伸ばすことができます場合があります。

このようなストレッチングを私は「パラドキシカルストレッチング」(逆説的伸長)と呼んでいます。

いっぽう、一見伸ばしているのかと思える方に縮めることで、伸びすぎている筋肉を縮めることができる場合があります。

このようなコントラクティングを私は「パラドキシカルコントラクティング」（逆説的短縮）と呼んでいます。

なぜこのようなことが起きるのかについては、何種類かの説明ができます。

例えば、三平方の定理にはいくつもの証明の仕方があるのと同じです。

ただ、これらはまだ私の仮説なので、証明とまでは言えませんが・・・

今回は、それらの内の一つを説明してみます。

一つの筋肉は、たいがい二つ以上の骨と骨をつなげています。

（皮膚、筋膜、腱膜、腱鞘、関節包などにつながっている筋肉もありますが、ここでは説明を簡単にするため骨と骨をつなぐ筋肉に話を絞ります）

骨盤に近い側の骨に筋肉がくっついている部分を起始と呼びます。

骨盤から遠い側の骨に筋肉がくっついている部分を停止と呼びます。

その筋肉が収縮すると、起始側の骨と停止側の骨の両方に力が加わります。

通常は起始側・停止側の両方の骨が互いに近づきます。

もし片方が固定されていれば、もう片方の骨が近づきます。

筋肉の長さが短くなるので、このような収縮を「短縮性収縮」と呼びます。

両方の骨が固定されているとか、同じ姿勢・肢位を保っている場合、骨は動きません。

筋肉の長さも一定ですから、このような収縮を「等尺性収縮」と呼びます。

筋肉の長さを変えずに力を入れて筋肉を収縮させるアイソメトリック・トレーニングやプランクがこれにあたります。

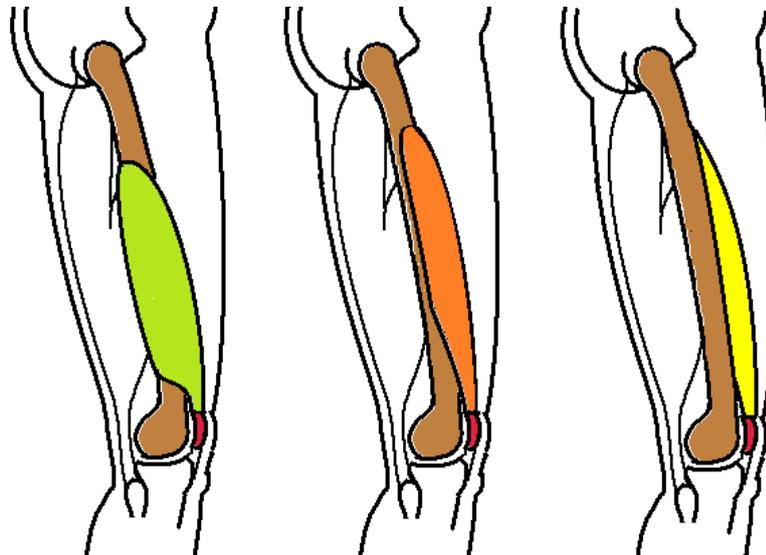
いっぽう、筋肉を収縮させているのに、長さが伸びてゆくという奇妙な収縮の仕方もあります。

「エキセントリック収縮」という別名があるこのような収縮を「伸張性収縮」と呼びます。

例えば、太ももの前面に大腿四頭筋という筋肉があります。

この筋肉は4つの筋肉が合わさった筋肉です。

そのうちの3つ（外側広筋・中間広筋・内側広筋）は大腿骨（太ももの骨）と膝蓋骨（お皿の骨）につながっていて、これらを収縮させれば膝を伸ばすことができます。



外側広筋（緑） 中間広筋（オレンジ） 内側広筋（黄）
大腿骨（茶色）と膝蓋骨（赤）をつないでいる

スクワットをする際、これらの筋肉は、しゃがむときは膝が曲がるので伸張性収縮をし、立ち上がる時は膝が伸びるので短縮性収縮をします。

空気椅子と呼ばれる膝を曲げた状態を保つ運動をするときは、等尺性収縮となります。

さて、この3種類の収縮で筋肉や関節を損傷しやすいのはどれでしょうか？

予想がつかしましたか？

実は、3種類の中で一番安全だと言われているのが「等尺性収縮」です。

体を動かさない状態で力を強い目に何秒間か入れると、効率的に筋力をアップできることがわかっています。

筋肉や関節に負担が少ないので、ケガをしたときのリハビリなどに向いています。

短縮性収縮は縮みすぎが起きやすく、伸張性収縮は伸びすぎが起きやすくなりますが、反対のケースもあります。

ただ、筋肉は伸びているときのほうが、筋力が低下します。ですから、伸張性収縮がもっとも筋肉に負荷がかかるので、もっとも筋肉や関節を損傷しやすいと考えられます。

さて、エキセントリック収縮よりも、もっと奇妙な収縮をご紹介します。

同一の筋肉が、短縮性収縮と伸張性収縮を同時におこなう収縮を、パラドキシカル収縮と呼びます。

皆さま、初耳ではないでしょうか。なにせ今初めて書きましたから。

例えば、先ほど紹介しました大腿四頭筋ですが、残りの1つの筋肉は、大腿直筋という名前で、骨盤（青）の股関節



大腿直筋（ピンク）

の少し上の部分と膝蓋骨（赤）をつないでいます。

先ほどの3つの筋肉は1つの関節を動かす単関節筋ですが、大腿直筋は股関節と膝を動かす二関節筋なのです。

大腿直筋が収縮すると、股関節が前に曲がり（太ももが前に上がり）、膝が伸びます。

つまり、足を高く前に上げるような動作を可能にする筋肉なのです。

これは短縮性収縮になります。

では、スクワットをおこなうときはどのようになるでしょうか。

しゃがむとき：股関節を前に曲げる部分は短縮性収縮、膝を伸ばす部分は伸張性収縮（起始が近づき、停止が遠ざかるパラドキシカル収縮）

立ち上がる時：股関節を前に曲げる部分は伸張性収縮、膝を伸ばす部分は短縮性収縮（起始が遠ざかり、停止が近づくパラドキシカル収縮）

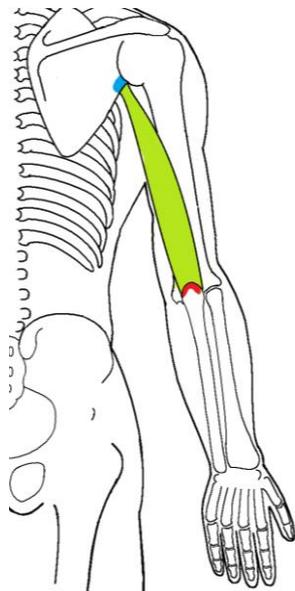
部分と書きましたが、はっきりとした境目はありません。起始の近くが停止に作用していることもあれば、停止の近くが起始に作用していることもあります。

走るときはどうなるでしょうか。

欽ちゃん走り、足が前に行くとき：短縮性収縮

膝を曲げて、太ももを前に上げるとき：起始が近づき、停止が遠ざかるパラドキシカル収縮

膝を伸ばして、太ももを後ろに伸ばすとき：起始が遠ざかり、停止が近づくパラドキシカル収縮



もうひとつ例をあげてみます。

上腕の後ろにある、上腕三頭筋の長頭(左の図で、グリーンの筋肉)は、肩甲骨の肩関節の下(青)と、肘の出っぱっている部分(赤)とをつないでいます。

上腕を体側に近づけ、肘を伸ばすはたらきをする二関節筋です。

あん馬で、両腕を真下にまっすぐ伸ばして体を支えるとき：短縮性収縮

懸垂運動で、肘を曲げて顔を鉄棒の上に出すとき：起始が近づき、停止が遠ざかるパラドキシカル収縮

重量挙げでバーベルを真上に上げたとき：起始が遠ざかり、停止が近づくパラドキシカル収縮

パラドキシカル収縮は、探せばいろいろと出てきます。

生理的に正常な範囲を超えたパラドキシカル収縮で筋肉を傷めたときは、次のようなパラドキシカルストレッチングやパラドキシカルコントラクティングが有効になるでしょう。

起始が近づき、停止が遠ざかるパラドキシカル収縮の場合
→ 停止を近づけつつ、起始を遠ざけていくパラドキシカルストレッチング

または

→ 起始を遠ざけつつ、停止を近づけていくパラドキシカルコントラクティング

起始が遠ざかり、停止が近づくパラドキシカル収縮の場合
→ 起始を近づけつつ、停止を遠ざけていくパラドキシカルストレッチング

または

→ 停止を遠ざけつつ、起始を近づけていくパラドキシカルコントラクティング

同じ筋肉でも有効なストレッチングやコントラクティングが変わるのは、いかに収縮させたかで、筋肉の曲がり方やねじれ方が変化し、目には見えないひずみが筋膜や筋線維に残されるからではないでしょうか。

短縮性収縮、等尺性収縮、伸張性収縮、パラドキシカル収縮をしたときの筋肉の形は、それぞれ異なったものになります。

筋肉の形が違うということは、筋線維のねじれ方や曲がり方が違う、そして、筋膜の伸び方や縮み方が違うということの意味しています。

そして、それぞれの過度な収縮で生じた損傷は、元に戻り方もそれぞれで異なってくることになるのです。

次回はまた違う角度から、パラドキシカルストレッチングとパラドキシカルコントラクティングについて説明してみます。

ではまた

現代社会を『関係性』という観点から考える

③改めて「介護は誰が担うべきか 家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察」

更生保護官署職員 三浦恵子（社会福祉士・精神保健福祉士）

1 はじめに

連載 14 では『「開く」ことと「閉じる」こと』と題して私見を述べさせていただき、それに続くかたちで、連載 15 では『つながりが支えるところ』と題し、我意を通し続けた結果「閉じる」生活となり社会的孤立に至り心身状態の悪化を招いた高齢者（単身生活者）の事例を紹介しました。連載 16 では、連載 14、15 の流れを引き継ぐかたちで、『「見える」ことと「見えない」こと』という切り口で、現代社会を関係性という観点から見直してみました。それを受けるかたちで連載 17 では、これまでの連載を踏まえ、「地域社会」との「関わり方」を考えると題して、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察してみました。

つまり、本連載では「地域社会」で生きるということについて考えてきたともいえません。まさに現代社会においては、（望まない）「孤立」「孤独」が問題となっています。支援機関とつながらないまま命を落としてしまうような事態になったり、拡大自殺的な事件が発生する例もあまたあります。家族介護が行き詰ってしまった上での介護殺人、子育てに悩んだ末の子殺しなどがその例であると言えます。こうした点について連載 19 では「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということと題して問題提起をさせていただき、続く連載 19 回では「自分は誰かとつながっている」という感覚を持つために私が必要だと痛感している『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について、連載 20 では、『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について、それぞれコロナ禍の中を生きていくうえでの関係性について私見を述べさせていただき、連載 21 では、Society から Home へ矮小化していく社会について私見を述べさせていただきました。

本連載も 5 年を超え、コロナ禍はじめ連載開始時と社会情勢は大きく変化しています。私自身も専門性の殻に閉じこもることなく、業務上・業務外での連携において学んだことや様々な関わりの中で学びまた考えさせられたことを連載原稿に落とし込み、主題そのものはぶれることなく視野をより広くとって論じていきたいと考えています。

連載 23 では「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる「家族助」について、地域包括ケアシステムの在り方について私見を述べさせていただきました。連載 24 ではすこし角度を変え、自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさと題し、私自身が実際に直面したり間接的に関わったことをベースに、「知っている」ことだけの生活で生きるということに含まれる一種の「危うさ」、「知らない」ことが「意識しない排他性」につながるなどについて、引き続き連載 25 では「知らないことが不安や排除につながる」ということというテーマでそれぞれ私見を述べさせていただきました。連載 26 では、大学生に刑事政策と司法あるいは更生保護について話をする機会に感じたことをベースに「今の社会」に対する若者の不安に、大人としてどう向き合う

のか」というテーマで私見を述べさせていただき、続く連載 27 では、私が昨今感じている「理想とされる家族は今や『描かれるもの』の中にあるものか」ということにつき、課題提起の意味合いをこめ私見を述べさせていただいた。その後の連載 28（連載 29 と記載していますが 28 に修正します）では「自分には支えてくれる人がいる」「まだできることがある」と誰もが感じることができる社会へと題して、「愛と仕事」（フロイト）及び「居場所と出番」（犯罪対策閣僚会議）に言及しました。そして連載 29 は、家族介護当事者の立場から、「選べない日々」を過ごす人々への「まなざし」と題して、様々な境遇のただなかにある人を「社会がどう見るか」という点について、私見を述べさせていただきました。

今回は、「選べない日々」を過ごす人々への「まなざし」で家族介護を取り上げたことから、連載 6「刑事政策から見た「介護」～高齢犯罪者による殺人事件を一例として」を更に深めるかたちで、厚生労働省のデータ等にも言及しつつ、家族アセスメントという観点から更に掘下げて私見を述べさせていただきます。

1 はじめに

介護保険制度の導入は、家族のみに介護の負担を求めない「介護の社会化」の時代の到来として、大いに期待を集めました。しかし、制度利利用については必ずしも初期の目的を達したとはいえない、つまり、本当に必要な人が必要なサービスにつながっているかという点では私は疑問があると考えます。『介護殺人』『介護殺人の予防～介護者支援の視点から』（共にクレス出版）などの著作等により、介護殺人に関する綿密な分析を行い、介護者支援の具体的な方策の必要性を世に問うた湯原（加藤）悦子氏も、「介護保険では法制度上、家族を考慮しないことで社会サービスの利用にインセンティブを与え、社会化を促すという方策がとられたのである。」「『あえて家族介護を評価しない』という戦略によって、家族介護が不可視化されたことの問題は大きいと問題提起している。」と述べておられます。

2 厚生労働省のデータから見た「高齢者虐待」とその結果としての「死亡」「殺人」

前回の連載 6 では「刑事政策から見た「介護」～高齢犯罪者による殺人事件を一例として」として、犯罪白書のデータを引用して説明をしました。

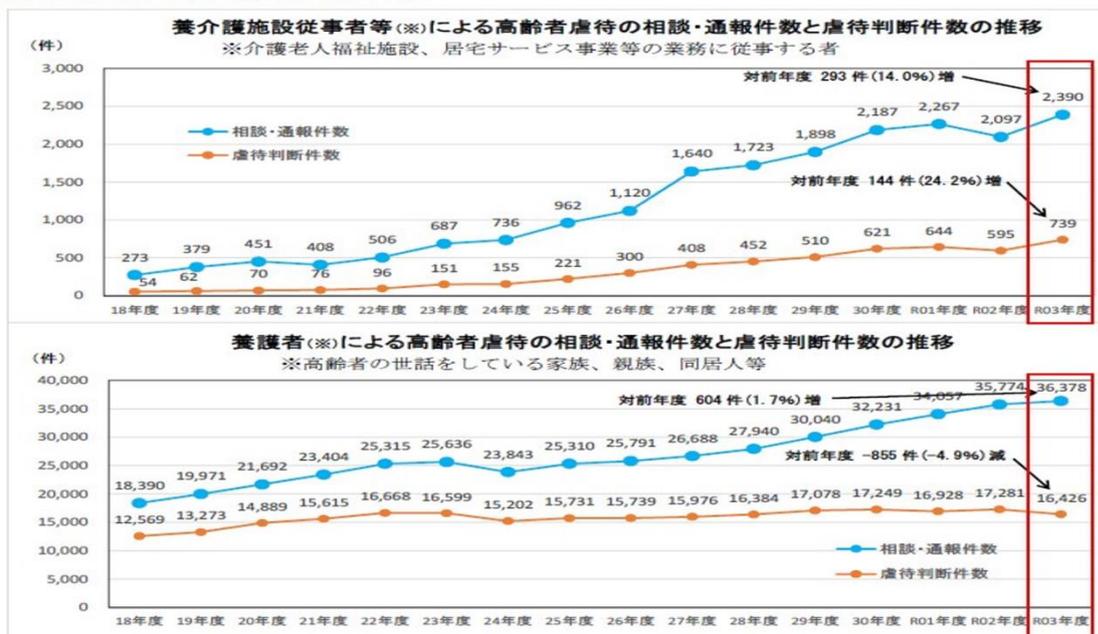
今回は公表されている厚生労働省のデータをベースにして検討してみたいと考えます。

まず、令和 3 年度「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等、関する法律」に基づく対応状況等に関する調査結果（出典：厚生労働省）を提示します。

この調査は平成 19 年度から毎年度実施されているもので、平成 18 年 4 月に施行された「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」（高齢者虐待防止法）に基づき、全国の市町村や都道府県で行われた、高齢者に対する虐待への対応状況をまとめたものとなります（出典：厚労省 IP）。

そして今回引用した調査結果は、同調査に関する厚生労働省のプレスリリース添付されていたものを引用したものであり、執筆時（令和6年7月）最新のものです。要介護施設従事者と養護者等に分けて統計がとられており、グラフでは施設従事者の虐待の増加について目を引くところですが、今回は特に養護者、家族による虐待死亡件数について注目したいと考えています。ちなみにグラフ上の赤い囲みは私が加えたものです。

【調査結果(相談・通報件数等)】



7

3 家族介護場面での暴力(心中等含む)の取扱いについて

これはあくまで私の推測ですが、経済的虐待等(年金等の搾取)等は身体的虐待に比べて目に届きにくいのは当然として、こうした「家族という閉じられた関係性の中で行われる行為」については、よほど周囲が注意をしていないと気づきません。

私自身、刑事政策の仕事に従事している年数と家族介護者としての従事年数がほぼ同じであり、業務に専従する傍ら片手に余る数の家族・親族の介護の両立に努めてきました。その経験をもとに述べさせていただくと、介護専門職における「家族」に対する見立てに関しては、刑事政策や児童の分野に比較すると、どうしても「薄いな」と感じられることも少なくありませんでした。

次に引用する記事概要でも黙々と妻の介護に従事してきた夫が「胸が張り裂けそう」と訴えた際、地域包括支援センターの職員が「心配なことがあれば連絡ください」と電話で伝えるしかなかった、と報じられています。当然私はこの事例について報道ベースでしか知り得ませんし、実際には様々な手が打たれたのかもしれませんが。

しかし実際には、このやりとりの一週間後に妻は病死、夫は自死していると報じられていることから考えると、この夫の「胸が張り裂けそう」という言葉は相当追い詰められた状況で必死で助けを求めるものだと思われ、自殺・心中等のリスクがかなり高い場面だと推察されました。そもそも、介護度以外にこの家庭における自殺や心中リスクについてアセスメントされていたのか、とも考えさせられました。

報道：“2人の孤独死”の現実「胸が張り裂けそう」76歳夫は言い残した（毎日新聞 R4. 6. 12）

R4. 1. 31、社会福祉士が板橋区のアパートの一室をロックするも応答がなく、通報で駆け付けた警察官が室内に入ると、夫（当時76歳）が風呂場で、妻（同73歳）は居間で倒れていた。2人とも既に死亡。警視庁によれば、妻は病死だった可能性が高くその直後夫が自死したとみられるという。遺書は残されていなかった。2人暮らしの親子や夫婦らが、屋内でいずれも亡くなった状態で発見されるケースがあとをたたない。死因は病気や自死、無理心中などで、後追い自殺とみられる例もあった。最近10年間では東京都内だけで117世帯234人が確認された。彼らの最期を知ろうと、関係者を訪ねた。

夫婦に携わっていた地域包括支援センターの職員は相談記録を見ながら「同じような思いをする人を少しでも減らしたい」と話した（R4. 5. 16）。知人によると、亡くなった2人は約10年前にこのアパートに引っ越してきた。間取りは4畳半と6畳の部屋がある「2K」で家賃は月額6万円。同じ地区からの転居で、夫婦にとっては住み慣れた地域だった。2人は仲の良い老夫婦として知られていた。妻は認知症の兆候があったが、すし職人として働く夫が支えた。元々3人家族だったが、身体障害のある一人息子は30代で亡くなり、アパートの部屋には息子の遺影が飾られていた。妻は、息子の思い出話を楽しそうに知人に話したという。夫婦は夫の収入でやりくりした。夫は派遣社員として都内の複数の店ですしをにぎった。そのほか夫に2カ月に1回支給される10万円の年金とこつこつ蓄えてきた貯金があった。同じアパートで隣の部屋に住んでいた70代男性は約3年前、「うちの人が握ったのよ」と妻がうれしそうにすしを差し入れてくれたことを覚えている。「決して派手な生活ではなかったが、仲むつまじい夫婦だった」と振り返る。そんな夫婦の生活の歯車が狂い出したのは、新型コロナウイルスの感染拡大で初の緊急事態宣言が発令されたR2年春以降とみられる。地域包括支援センターの記録では、夫がR2. 10に「手持ちの生活費が3万円しかない」と訴えていたことが分かる。外出自粛や飲食店の営業自粛の影響で、夫の仕事は大きく減った。生活費が残り3万円となったR2. 10、夫は地域包括支援センターに相談している。「これからどう生活していけばいいのか」。さらに妻はR2年春から体調を崩し、冬になると硬膜下血腫により不眠や気分障害などの症状が出るようになった。自分の頭を瓶でたたいてしまったり、夜に突然外出してしまったりすることもあり、そんな妻の姿を目の当たりにした夫は驚き、心を痛めた。周囲からは認知症の疑いも指摘された。訪問医療のサービスを利用し、妻の症状は少し落ち着いた。しかし、アパート建て替えのため大家からR4. 2までに退去するよう求められた。認知症の疑いのある妻が過ごしやすいうようにしたいと考え夫は同じ地区に住むことにこだわったが、夫婦に保証人になってくれるような親類や知人はおらず、転居先はなかなか見つからなかった。地域包括支援センターの担当者は「病気の奥さんのことを第一に考えていた。住み慣れた場所を離れることへの不安は大きかったと思う」と話す。結局、社会福祉士の支援で転居先が見つかったがそこは地理の分からない区内の別の地区だった。知らない土地へ転居することに夫は不安を感じていた。妻の病気が回復の兆しを示さないことへの焦りもあったとみられる。夫はR4. 1. 24、相談先の地域包括支援センターの職員に不安を吐露した上で電話で「胸が張り裂けそうです」とこぼし、職員は「心配なことがあれば連絡ください」と電話で伝えるしかなかった。夫婦が亡くなっているのが見つかったのは、それからちょうど1週間後。その日はR4. 2から住むはずだった転居先の初期費用の支払日だった。仕事を失った夫は妻が亡くなったことで将来に絶望したとみられる。

4 家庭そして家族介護者に対するアセスメントの重要性について

そもそも、在宅介護において、家族介護者（厚労省のデータでは「養護者」と記載）がどのような経緯で介護に従事するようになったのかという経緯について、私自身の経験上ですが、細かくアセスメントされることはありませんでした。「だって『家族』だから当たり前」というニュアンスの言葉を聞いたことも多々あります。

「突然仕事をやめて帰ってきた未婚の息子」が家族介護者になった場合、息子側の事情や「困りごと」にも注目すべきだと考えていますが、介護という場面においては、当事者への心身のアセスメントはしっかりと行われていても、家族に対してはさほどなされていないことが往々にあると考えます。

そもそも、家庭は極めて密室性の高い場所であり、そこで暴力や不適切介護が起きていても人目にはつきづらいものです。児童虐待であれば、学校その他への啓発も行われ、学校その他の場で「良識ある大人」が虐待の兆候を発見し通告に及ぶことも可能ですし実際にそれが推奨されています。しかし、デイサービスなどを利用しない「家族介護」ではそうした機会もなく、閉じられた空間に支援者が入る機会は非常に限られてしまいます。

実際に養護者（家族介護者）による虐待死亡件数は下記のような状況で推移しています。

養護者による虐待死亡件数

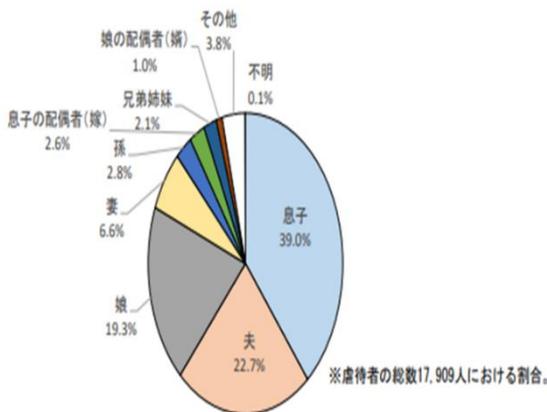
表2 高齢者虐待の年度別虐待による死亡例の推移

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R01	R02	R03	R04
件数	31	27	24	31	21	21	26	21	25	20	24	28	21	15	25	37	32
人数	32	27	24	31	21	21	27	21	25	20	25	28	21	15	25	37	32

虐待等による死亡事例（令和4年）

養護者（介護をしている親族を含む）による事例で、被養護者が65歳以上、かつ虐待等により死亡に至った事例：「養護者のネグレクトによる被養護者の致死」が14件14人、「養護者による被養護者の殺人」が6件6人、「養護者の虐待(ネグレクトを除く)による被養護者の致死」が4件4人、「その他」3件3人、「不明」5件5人 合計32件32人

図23 被虐待高齢者からみた虐待者の続柄



8

この養護者（家族介護者）による虐待死亡件数という点のデータを確認すると、高齢者虐待の年度別「虐待における死亡例」の推移というグラフが提示されています。年度により変動はありますが、大まかにいって年間30人程度の高齢者が養護者（家族、親族）等の虐待により亡くなっていることがわかります。

「〇人に1人が貧困の中で育つ」「〇日に1人の子供が虐待で命を落とす」という具体的な数字が世間の関心を引き付けたことに倣えば、「12日に1人、高齢者が虐待で命を落としている」ということとなりますが、私の体感では高齢者の虐待死については社会の関心は児童ほど大きくなく、マスコミその他で掲載されるのは、亡くなってから御遺体を放置していた死体遺棄事件等が、いわゆる「8050問題」の文脈で語られることが多いように感じています。

団塊の世代が後期高齢者となる「2025年問題」もいよいよ間近に迫り、介護従事者の不足も深刻な問題のなか、何を言っているのかとお叱りを受けるかもしれませんが、対人援助学マガジンという自由な論説の場なので敢えて述べさせていただくと、他の対人援助同様、家庭そして家族介護者に対するアセスメントはやはり欠かせないと考えます。

暴力が支配していたような家庭では、要介護者と家族介護者のパワーが逆転した時に何が起きるかということは想像に難くないでしょう。そうした事態を防ぐためにも、家族介護者がどのような経緯でその立場に置かれたかということについても、私は確認が必要だと思われまます。

他の親族から介護を押し付けられたり、失職し家を失ってやむをえず「実家」に戻ってきたり、親の年金を頼りに生活してきた子ども世代がいきなり介護に直面したりといったケースでは、家族介護者のモチベーション云々を問う前に、家族介護者にも適切な支援を入れていかないと、介護をきっかけに家庭が崩壊することもありえと私は考えています。

5 それでもなお「法は家庭に入らず」（制度は家庭に入らず）なのか

一方で、実際に家庭内暴力の通報を受ける立場におられた方から、「児童虐待ならともかく、大人同士の暴力、しかも好きで結婚した者同士であれば、そこで起きる出来事はあくまで自己責任だと思う」ということを、「現職だったら話せない本音ベースだけど・・・」という前置きのうえでお聞きした経験があります。

実際、保護を求めても「法は家庭に入らず」といったトーンで説諭をなされた挙句、危険な環境（暴力を振るう家族のいる家）に戻されてしまうという事例も、薬物依存症家族支援の現場において幾度か経験しました。一方で、支援者側がどんなに「分離」に尽力しても、「結局は家庭に戻ってしまう」というケースも少なくないため、そうした事例が重なると、支援者側も消耗してしまうのが、家庭内暴力やDV案件だとも感じます。

コロナ禍で急増したDV対策として内閣府が中心となり「DV相談プラス」が設置され、24時間対応がなされています。相談件数も相当に伸びていますが、その伸びだけをもってその窓口が「支援の入口」として周知され機能していると考えるのはやや単純だと考えます。なぜなら、匿名の電話相談窓口では、同一人物が複数回かけてこられることも往々にあるからです。

介護に関する相談窓口に至っては、実際に広く周知されているかということ、そうした実感はありません。かつて「うちの事業所は地域の方が知らない人はいない」と断言される地域包括支援センター職員の方にお会いしました。確かにそのエリアの地域包括支援センターの業務を受託している病院（法人）は地域では歴史も名もある病院であり、その病院であれば確かに「地域の方」は皆知っておられるでしょう。しかし当該病院がその地域の地域包括支援センターの業務を受託されていること、そこでどういった支援を受けることができるかという点については、まだまだ周知が必要だと感じました。

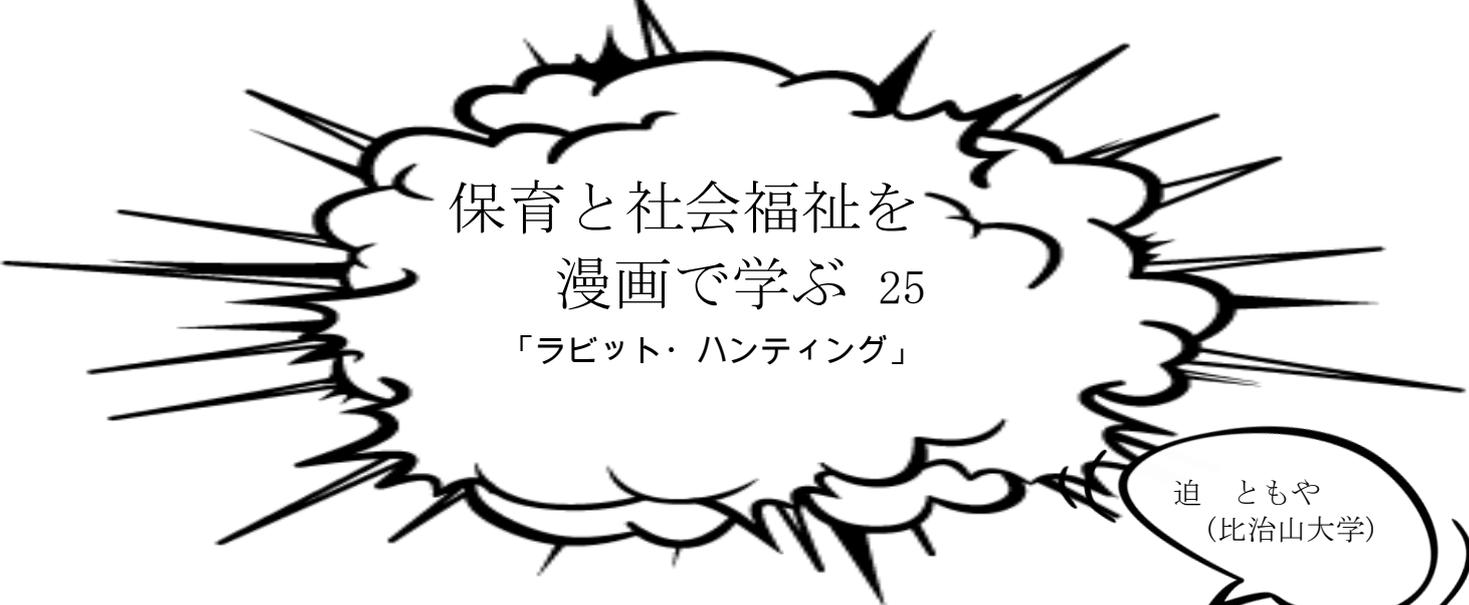
家族介護をしてきた実感ですが、家庭内における暴力リスクについては、「まさか」という「正常バイアス」が働いてしまった結果危機介入が遅れがちであったり、要介護者の抱えるアルコール問題に関しては、平成早期の段階で介護場面に特化したアルコール問題について、関西アルコール問題学会が冊子を発行して啓発活動を重ねてきた地域もある一方、服薬と同時に行えば危険な飲酒についてのアセスメントが甘いと感じる地域（飲酒について寛容である地域）もあると感じています。

そうした意味で、家族介護に関連した支援において、要介護者だけを見るのではなく、

家族歴を初期にアセスメントすることでの静的リスク、飲酒量の変化を見極めることなどによって察知できる動的リスクについてモニタリングすることの重要性について、より考察を深めていくことが、介護家族当事者でもある私の今後の課題でもあると考えています。

出典

令和3年度「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等、関する法律」に基づく対応状況等に関する調査結果（厚生労働省）



保育と社会福祉を
漫画で学ぶ 25
「ラビット・ハンティング」

迫 ともや
(比治山大学)

TONOさんの「ラビット・ハンティング①②」(2003、2007)を紹介します。モデル事務所に所属する少年少女と、かれらをめぐる大人たちが織り成す、セクシュアリティの傷つきのアンソロジーです。

天使のように無邪気でストレートな少女、チャイナ。彼女のいとこ、あけっぴろげででたらめ話を能天気話す少年、ジョンジョン。二人の親友で正義感の強い少年、クロムの3人が中心人物です。モデルの子たちのお話なのに、「うさぎ狩り」がタイトル？ と思いませんか。

男子ロッカールームに入りびたるチャイナは、女子ロッカールームから締め出されそうになっている。群れて生きようとする女の子たちから「いつもジョンジョンベったり」「みんなになじもうとしない」「感じ悪いのよ」と言われ、突然始まった生理に困っても、チャイナは薬局の場所を教えてもらえない。遠巻きに見ている女の子たちをよそに、クロムは「スーパーでナプキンを買ってくるよ」とつげる。母子家庭で育った彼は、母親のために買いにいったことがある。それに、チャイナへの好意もあった。

クロムに口うるさく指示を出す男性スタッフのフリッツは、事務所の誰ともうまくいかに、辞めた。だがその日の午後までフリッツはどこかに隠れていた。ロッカールームにひとり残ったクロムに、フリッツが襲いかかった。気づくとクロムは両手をテーブルに縛りつけられ、口にテープを貼られていた。フリッツはクロムの体をまさぐりながら「ゆっくりあそんでやるよ」と口にする。

そのとき、ロッカールームに入ってきたチャイナが助けを呼び、クロムは助かった。

フリッツからの性被害が深刻だったのか、病院に入院したクロム。フリッツは留置所に送られたらしい。見舞いにきたチャイナは、無邪気な顔でクロムにいう。「ねえ…私が、もしもフリッツがあなたにしたみたいなきことをしたら…嫌？」

クロムは驚きながら応じた。初めてだったことが済んだあと、クロムはおどおどしながら「愛している」と口にする。しかしチャイナはうつむき、「ごめんなさい」と残して病室を去った。

おかしい事を言ってしまったのかと考え込むクロムに、ジョンジョンは、「あいつはビギナーにも慣れてるもん。平気平気」と笑いかける。「チャイナはそういう奴なんだよ」。だから女子たちの仲間にも入れて貰えないのだと。

チャイナはクロムに話しかける。「ちょっとお見舞いのつもりだったのに、ごめんね。愛してるなんて言うんだもん」。

「言うだろう、ふつう」というクロムに、チャイナは「私にはおしおきだった」と返す。彼女は6歳の時から家庭教師によって性被害を受けていたのだ。

チャイナはその後、何度も被害に会った。「うさぎ狩りだと思えば理解できる。きっと私、血の匂いがするのよ。キツネはケガしたうさぎを追いかけるもの」「途中から服を破られるのが嫌だから、自分で脱ぐし、殴られたくないから、自分から足を開くようにした」。

(『ラビット・ハンティング①』より「ラビット・ハンティング」)

チャイナは性被害から奔放な性行動をとることになったようです。「自分が傷つけられたことをクロムもされた。慰めてあげられるなら」ととった行動が、クロムには予想外に大きな経験だったのです。

人は大切にしていることを傷つけられると、自分を周りと同じだと感じにくくなってしまいます。「自分だけあんなことをされた」「自分は汚されてしまった」という気持ちが芽生え、周りから浮いた言動をつい選択して、「みんなになじもうとしない」と扱われます。はみ出し者になると被害を受けても周りが助けてくれなくなり、悪いループにはまってしまいます。「なじもうとしないあの子が悪い、自業自得だね」と仲間が見捨てると、血の匂いにひかれてキツネたちがやってきます。「うさぎ狩り」は現実世界の様々な場面で行われています。

父親に先立たれたチャイナは母親の元を離れて、モデル事務所の社長のもとで暮らしている。クロムも若くて美人の母リンカとの母子家庭。母の上司が母を襲おうとしたとき、クロムは上司の尻をナイフで刺した。仕事を無くした母が困った末に、クロムはモデルの仕事を始めたのだ。

仕事に空き時間ができた日、クロムはチャイナに、家でお昼ご飯を食べようと誘った。家に入ると、服が脱ぎ散らかされており、リンカがジョンジョンとベッドをともにしていた。年齢を偽って母親に取り入ったと聞いたクロムは激怒し、ジョンジョンに殴りかかる。リンカはケガをしたジョンジョンに「もうつきあえないわ。あなたの年じゃ、私は犯罪者よ」と告げ、車で病院に連れていくことに。「そんな奴、送ってくたない！」とキレるクロムに「あなたがケガさせたのよ！」とリンカ。

母親に叱られてしょんぼりしていたり、縛られて涙目になったりしていたクロムに、チャイナはときめいている自分に気づく。
(『ラビット・ハンティング①』より「ラビット・ハンティング2」)

傷つきを抱えたチャイナは、しっかりしているように見えても、自分と同じく傷つくクロムにひきつけられているようです。チャイナはクロムの姿に触れることによって、自分の傷を癒そうとしているのかもしれませんが。傷ついた人が傷ついた人を癒すことがあります。当事者同士の助け合いはそのような取り組みです。傷ついた経験がないと癒せない訳ではありませんが、自分と同じく傷つき、それでも生きようとする他者の姿から、人は生きる力を得ることができます。さらに考えを深めると、対人援助の専門職にも傷ついた当事者はいます。「傷ついた癒し手 (Wounded Healer)」という言葉があります。

現代の心理学関連で「傷ついた癒し手」に最初に言及したのは、ユングだと言われています。ユングは、「より深いところに達するあらゆる治療は、およそ半分が医師の内省にある」として、「医師が患者において正すことができるのは、自分自身において正したものだけ」であり、「自分自身の傷つきの分しか、医師は治すことができない」と述べています。

またユング派の分析家であるグッゲンビュール=クレイグは、治療者も患者も含めて全ての人が「健康一病氣」という元型を持っているといいます。

治療の場面では、患者は治療者に「内的な治療者」つまり自らにも備わる治療者の部分を投影し、逆に治療者は患者に自分自身の弱さや傷つきを投影します。ここで治療者が、自分の内的な傷の存在を自覚できていれば、患者の中にある「内的な治療者」が育ち、より治療的な関係が効果的に進みます。このとき、表面上（意識）は「治療者が癒しを提供し、患者が癒やされる」という構造ですが、深層（無意識）では、逆のことが起こっているようです。つまり「患者が癒しを提供し、治療者が癒やされている」と。

実はジョンジョンも、夫婦間の悩みをもった母親から性的な虐待をされたとリンカに告白しています。クロムはそれもいつものでたらめ話ではないかと疑いますが、傷つきを抱えた子どもがでたらめ話をすることをもまた、よくあることなのです。自分を見てほしいという甘えの欲求による行動であったり、空想に逃げることで現実認識が歪んでしまうこともあり得ます。少年少女らにとってかつての傷を負ったエピソード、そして現在の逸脱行動は、小さなトラブルと和解になって日常を進めていきます。

クロムは昔のできごとを思い出した。6歳の夏、山の中のキャンプ場で、スタッフの大人もモデルの子どももみんなヌードになって写真を撮ったことがあった。山のように丸裸の人を見たのはあのときだけなのに、クロムが覚えているのは人の身体に刻まれた傷のことばかりだった。

「別れた男に刺された」「バイクで転んだ」「胃を全部とったんだ」「この子がここから出てきたの」… 圧巻だったのはスタッフのアイカだった。身体の右側ばかりに刃物で切り刻んだ傷跡が無数にあった。「私が左ききってことよ」…。

その秋には事務所を辞めたアイカについて、「実の父親の子どもを流産したことがある」「薬の飲みすぎで死んじゃったんですって」などと様々な噂が流れた。もうそれからずいぶん経っている。

クロムはその後、飲食店で働いていたアイカに会いに行った。「あの時、どうしてあんなに傷だらけの体を…隠さずにみんなに見せたんですか？」

アイカは、今もリストカットの跡がある右腕をクロムに見せた。「これは私が生き延びた記念。こうしなければ生きられなかった。これは私が負けずに生きぬいた証拠。誇らしい大切なものなのよ。だからきつと、他人にも見せたかったんでしょね」。

アイカのもとには半年前に生まれた赤ん坊がいる。「おかげで忙しくて、なんにもするヒマがない」とアイカは赤ん坊を胸に抱いた。（『ラビット・ハンティング②』より「ラビット・ハンティング7・8」）

人間は若いうちは肌もきれいで傷も少ないものですが、年齢を重ねると皺やシミ、消えない傷跡が多くなっていきます。人の身体の傷は、その人の歴史を示す痕跡なのかもしれません。

自傷行為は、当事者によると「自殺したり、突然暴れたりしないためにする」ことです。傷ついた経験が思い出されたとき、激しい怒りや不安、悲しみ、緊張などに混乱した気持ちが起こります。感情をいったん静め、落ち着かせるために自傷は行われます。耐えられない経験を強いられ、加害者から逃れられないような状況にあるとき、人間は自傷行為によって意識状態を変えることができるという研究があります。自傷によって痛みが発生するとともに、βエンドルフィンなどの脳内麻薬様物質の濃度が上

昇し、鎮痛効果が得られます。ただし、これは繰り返しの要因になりますし、耐性がつくためにどんどん自傷が深くなっていくのです。また、当事者自身がそのメカニズムに気づいているとは限りません。つらい気持ちに苛まれている自分から意識を消すために薬を大量に飲んだり、万引きや逸脱的な性行為をすることも、自傷行為の代わりになることがあります。チャイナの奔放な性行動もそうだったのかもしれない。

実際に自傷をする人を見たら、するべきでないことがいくつかあります。自傷を頭ごなしに否定すること、責めること、もうしないと約束させること、理解できないのに理解しているように話すこと等です。当事者にひとりで抱え込ませないことも大切です。

アイカは子どもができたことで「なんにもするヒマがない」状態になっています。一人では何もできない赤ん坊の世話をすることは、大きな癒し効果があります。赤ん坊は無能力状態で周りに投げ出されているのに、周りの世話を引き出す力もっています。養育者は、赤ん坊の姿のなかに世話をされて喜ぶ自身の反映を見ており、赤ん坊も養育者のなかに力強く有能な大人の反映を見ているのではないのでしょうか。傷つきを抱えた人が赤ん坊に触れ、援助者としてふるまうことは、傷つきを癒すことになり得ます。人間には「健康－病気」と同じように機能する、「赤ん坊－養育者」のような元型もあるのかもしれない。くわえて実際に忙しくて、自分の傷つきに苛まれる余裕がなくなることも効果的です。忙しいことは、逆説的に傷つきから離れる余裕をもたらすのです。

「傷ついた癒し手」は、傷ついた人を癒すことで自分の傷を回復させることができると書きました。このことはおそらく、本や漫画、映画などを見ることによっても得られる経験だと思うのです。つまり傷をもつ読者が『ラビット・ハンティング』のような作品を読むことは、読み手のなかの「内的な治療者」を活性化させることになるのだと思います。

2024年6月に日本版DBS法が成立し、子どもへの不同意性交等の犯罪歴の照会が可能になりました。しかし、逮捕歴のないジャニー喜多川氏が存命であっても、この法の対象にならないことは大きな課題として議論の余地を残すこととなります。

紹介作品：

TONO (2003-2007) 『ラビット・ハンティング①②』新書館

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

参考文献

C. G. ユング (横山博監訳) (2018) 「心理療法の根本問題」『心理療法の実践』みすず書房

A. グッゲンビュール=クレイグ (樋口和彦・安溪真一訳) (2019) 『心理療法の光と影—援助専門家の《力》—』創元社

松本俊彦 (2012) 「自傷行為の理解と援助」『精神神経学雑誌オンラインジャーナル』

<https://journal.jspn.or.jp> > jspn > openpdf (最終確認：2024.08.15)

※ご感想・ご意見などは筆者のメールアドレスまでお寄せください。⇒ sakotomoya@gmail.com

『余地』

～相談業務を楽しむ方法 27～

<雨の日>

杉江 太朗

～雨の日～

雨の日に考えることがいくつか重なってこのテーマで書こうと思った。有名な心理士さんが、「雨の日の心理学」という本を出すらしいが、決してその本に感化されたわけではない。その本の存在を知る前に、このテーマで書こうと思っていた。とは言え、この原稿がアップされる頃には、上記の本が発売されているはずなので、その本を思い浮かべる方もいるかも知れない。先にこちらが雨をテーマにすることを思いついたと主張したところで、内容には天と地の差があるから、争いにもならないだろう。

日本で生活していると、雨の日は、日常とは違った生活が流れているように感じる。天気予報や雨の降り方にもよるだろうが、通勤手段、服装、靴の選び方、傘を持っていくかどうかなど晴れている日とは考えることが変わってくる。どこも同じだと思うが、屋根のある駐車場のスーパーは混みやすくなる。誰だって濡れるのは嫌なのである。

雨は、濡れるし、ジメジメするし、傘も増えるし、道も混むし、洗濯物も乾かない。

しかし雨の日だからこそできる援助があると思いいこのテーマを選択した。この原稿を読んで、雨の日の過ごし方に小さな変化が生まれたり幸いである。

～雨の日の傘～

こんなことがあった。来るときは晴れていたのに、帰るタイミングで大雨に見舞われた車椅子を押す来所者がいた。車椅子には子どもが座っている。駐車場までは屋根がなく、このままでは濡れてしまう。しかし、雨がやむ気配はない。担当していた若い職員が見送ろうと入口付近に立っている。雨の予報でもなかったもので、その職員も傘を持っていないようであった。来所者は、濡れるのを覚悟で車まで走ろうとしているタイミングで私が通りかかり、私は咄嗟にその職員に傘立ての奥の方の傘を使って、せめて子どもだけでも濡れないように傘をさすように伝えた。

傘立てには、所有者のわからない傘が溜まっていく傾向がある。置いた人間も忘れてしまい、いつの間にか職員の数以上の傘が溢れてしまう。そして一定の時

期が経つと捨てられてしまう。奥にあるいずれ捨てられる運命の傘を使ったとして、同じタイミングで元の所有者がその日に焼けた傘を使うことはないだろうし、バチが当たるようなこともないだろう。日に焼けた傘も、やっと傘という出番を得られたのである。自分のことを傘だと忘れていたかもしれない。

私の事務所には、2～3年毎に検査を目的に来所するという方もいる。来所自体は強制ではないが、やはり次の来所に繋がる対応を心がけたいと常に考えている。雨の強さによっては、傘をさしたところで濡れるという結果は変わらないかもしれない。しかし、傘をさすという行動があるかどうかで言えば、当然ある方が良かったろう。「なぜ傘をさしているのに濡れたのか！」と怒る人はいないはずである。

私が雨の日に傘をさすのには、まず子どもや保護者が濡れないようにという前提があるが、それ以外にも相手からどう思われるのかという打算的な部分も含まれている。この仕事は、自分の行動が相手からどう思われているのか、他者から見たときにどのように映っているのかという視点も必要である。雨の日に傘をさすという行動は、誰にでもできるし、簡単で、当たり前と言えれば当たり前で、責められる要素は少なく、比較的受け入れてもらいやすい。理想を言えば、誰のかわからない傘よりも自分の傘を利用出来るのか一番だが、日の目を浴びない傘の利用方法

としては間違っていないだろう。

～雨の日の痕跡～

こんなこともあった。中々出会えない家に訪問に行くことがあり、チャイムを押すが反応がなく、そこに人が住んでいるのかわからない状態が続いていた。

ところがたまたま雨の日に訪問したときに、家の前に傘が置かれており、さらにその傘が濡れていた。さらに、アパートの廊下には足跡が…。ということは、間違いなくこの家には誰かが住んでおり、さらに私が訪問する直前に出入りをしていたことがわかったのである。名探偵のアニメでも、雪の日の足跡がその推理を左右する場面に出くわすことがないだろうか。雪の日の足跡よりも、雨の日の足跡の方が出会う確率は低いかもしれない。それでも訪問を続けていると、そうした場面に出くわすことがあるのである。もし雨の日だし、どうせ出会えないから今日の訪問はやめておこうとなれば、その発見はなかったはずである。結果的に、その日もチャイムを押して反応はなかったが、誰かが住んでいるかわかっただけでも大きな進歩である。

雨の日は、何かヒントを残す確率が高くなる。一方で、そのヒントが消えるのは早い。敢えて雨の日に訪問することが、新しい発見に繋がるかもしれない。

～雨の日の外回り～

前職で外回りをするのがあったが、統計などなく、感覚的なものでしかなく、晴れの日よりも雨の日の方が、営業の成績が良かったように感じている。

バイクで移動して、敢えて、屋根のないところにバイクをとめて、濡れた状態でチャイムを押す。自身を、ノルマを抱えた、雨の日でもバイクで営業をさせられている、大変な企業の一員だと見えるように意識して、率先して雨の日には出かけるようにしていた。濡れてでも営業をしなければだめな状況にいる自分を見せることで、同情を誘っていたのかもしれない。というか、敢えてその同情を誘うように意図して行動していた。今考えたら、ただの茶番なのであるが、それでも心配をしてくれる人もいたし、そのときにノルマに協力してくれた人もいた。あと、上司も濡れた状態で職場に戻ると、仮にノルマが達成できていなかったとしてもさすがに何も言ってこなかった。雨の日様々である。

～雨の日だからこそ～

雨の日は、日本に住んでいる限り、晴れの日よりも少ない。だからこそ、少し行動するだけで普段と違う結果を得られることがある。雨の日に傘をさすことは普通だが、急な雷雨の際に、さっと傘を出せる人は少ない。雨の日だからこそ、普段と違う変化に気づきやすくなる。雨の日だか

らこそ、普段と同じ行動をしていても、少しだけ頑張っているように見られる。こうしたことを意図的に、打算的に出来ることも対人援助のスキルではないだろうか。あくまでもさり気なく、あくまでも自然に、雨の日でもそのような行動ができるように目を配り続けたい。

～余談～

雨の日は、お気に入りのレインシューズ、カップ、傘などでテンションを上げています。



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～番外編⑩～

ちからのカタチ 2



松岡園子

色々な場所で私自身の体験をお話しさせていただく中に、統合失調症の症状がひどくなってしまった母と12歳の私が2人で神戸の家で暮らすのを心配した親戚の取り計らいで、私は奈良の児童福祉施設へ入所することになったエピソードがあります。これは今から30年ほど前のことですから、子どもの意思も尊重されるように変化してきた現在ならまた違った対応になったかもしれないと思うのですが、当時の私はその決定に納得がいかず、一度入所した児童養護施設をたびたび脱走して、ついには母と2人で無理やり神戸の家へ戻って暮らし始めました。

しばらく経って神戸の中学校へ転入したときにも、中学校の先生には自分の母の病気のこと、家事をしなければならなかったことを相談したくなかった（相談すると中学校の先生は、きっと児童相談所とつながっているから、一度そうされたように、児童養護施設へ入所させられてしまうと思ったから）ということを現在、支援者の方々の前で話すと、「そうですか……」と、ショックを受けられている反応が返ってくることが多いです。私が当時いちばん頼りにしていたのは、私の選択した生活を強制的に変化させられる心配のない、友達のお母さんです。

子どもの支援をしたいと日々お仕事をされている支援者の方に、いちばん相談したくないなんて、どうしてそのような悲しいことが起きてしまうのでしょうか。相談をされると、なんとかしてあげたいと思う、そのなんとかする方法が、困難な環境自体を取り上げてしまうことだけとは限らないのではないかと思います。その子ども自身が、困難な環境をなくしてほしいと望んでいるなら、環境を変えることが必要な場合もあると思いますが、当時の私の場合は、環境を変えずに母と暮らしたいという気持ちが強かったのです。それでは周りの人は、深刻な状況になるまで放っておけばよかったのかというと、そうではなく、乗り越えられるようなサポートをしながら「見守っているよ」というスタンスで関わってくれている人がいると思えたからこそ、安心して心を開くことができたのではないかと思います。

当時の私も、誰にも相談したくなかったわけではありません。理解のできない行動がみられ、まともに話の通じない母と一緒に生活も、いつもわからないことだらけで不安で、相談相手を求めています。でも、相談相手を選んでいたので。相談できる人とできない人、その違いは何なのでしょう。私はその一つに、支援をする側の「子どものもつ力の認識」の違いがあるのではないかと感じています。安心して相談できた人は、私のもつ力を信じてくれた人です。

誰にでも子どもの成長に伴って「この年齢では、まだできないだろう」「これぐらいの年齢になったら、できるようになるだろう」と感じる基準があると思います。その基準のもと、一般常識とされているもの、自分の経験、家族や友人など身近にいる人からきいた話などでしょうか。

たとえば12歳になった私の子どもが、電車を使って行ったこともない3県向こうの〇〇駅までひとりで行きたいと言いついたとしても、「わからない時は人に訊ねてなら、行けるだろう」と思えるのは、自分が12歳の時にそうしたことを経験したからです。そうしたことを経験したことの無い人からすると、「そんな危ない、帰って来られないかもしれない」と思うかもしれません。自分が親なら、行ってはいけないと禁止するところかもしれません。相談した子どもの側としては、もう親には相談しないでおこうと思います。だって相談したところで、禁止されてしまうのですから。さいわい許可が出たとしても、子どもの側も喜んで準備もなしに飛び出したりはしないと思います。自分なりに行程を考えたり、調べたりするのではないのでしょうか。自分ごとになると、人は真剣になり始めます。

親の側も、たとえそれを許可したとしても、放っておくわけではないでしょう。帰ってくるまで、それは心配でたまらないと思います。メモを持たせたり、復唱させたり、どのように行くのかの確認、本人が困った時の対策、連絡先の確保など、子どもが安全に帰ってこられるように、最善を尽くそうとするはずで。

信じて、最善を尽くして、やらせてみる。この親と子の関係は、支援者と対象の子どもに置き換えてみることもできると思います。先ほどの例では、もしかしたら、危ないからだめだという他に、やらせてみて面倒なことになったら困るという理由も考えられるかもしれません。先回りして見守ることは、かなりエネルギーを使うことです。しかし、困った時には、すぐに助けを求められるサポートを受けながら1人でやり遂げた経験は、その人の自信になり、困難に直面しても切り抜ける力を高めてくれるのではないのでしょうか。

先日、歌の先生をしている方から筋肉の話聞き、なるほどと思ったことがあります。人の表情をつくるのに関わる筋肉は、およそ20~30種類あるとされているそうですが、そこに筋肉があることを知らずに生活をしていると、次第に衰えてくるそうです。しかし、「ここに筋肉がある」と認識し動かすようになると、筋肉が鍛えられ、表情も豊かに変化してくることのこと。そこで、それまで意識していなかった口の周りの筋肉（口輪筋）を動かすエクササイズをするようになり1カ月ほど経つと、筋トレ効果が出だしたのか、口角を上げ

た笑顔を作りやすくなったと感じます。

筋力だけではなく、「ちから」と名前のつくものは、まずはその力が「ある」と認識することが第一歩で、認識しながらその力に負荷をかけ、鍛えることができるのだとその話をききながら感じました。体力、精神力、想像力……さまざまな力が私たちを支えています。

「子どもの困難を乗り越える力を高めるには、どうするのが良いのでしょうか？」という質問を福祉や教育関係の支援者から受けることがあります。まず第一歩は、子どもにも困難を乗り越える力が「ある」ということを周りの人が教えることではないでしょうか。そのためには、教えようとしている側の人、人にはそのような力があり、それは高めていくことができるということを完全に信じていなければ、教えることはできません。私が福祉や教育関係の仕事をしている方からそのような質問をいただくということは、子どもは困難を乗り越える力が弱い、力がないなどの認識をもたれている方が多いのかもしれない。

力の認識は、その人のそれまでの経験によるものではないでしょうか。力は発揮する対象があって初めて認識できるものです。対象に直面した後にしかわからない力を高めることができると思えるには、体験や反復を通じて力を高めていった、その人の実感が必要なのではないかと思います。皆が同じ体験をしてきているわけではありません。勉強や仕事、スポーツを通じて、また逆境を体験し、それを乗り越えることで力をつけていった人など、その過程は多種多様で、目の前の子どもと同じ体験をしたことがあるかどうか考えてもらおうと、ないことの方が多くはないでしょうか。

私自身の体験で振り返ると、経験豊富な年配の方や、若くても苦難を乗り越えてこられた方などからは、母とふたりの生活を応援してもらえた気がします。同じ体験をしてきたわけではないけれど、困難な状況に直面し、それを乗り越えてきた方には、その状況や、乗り越える過程を想像しやすいのではないかと思います。だからといって、今から苦難を体験することをお勧めしてはなりません。実際に体験しなくても、想像力で補える部分は大きいと思います。サポートをしたいと考えている対象者の話を聴き、想像して理解を深めることで、新たなことにチャレンジしたり、困難を乗り越えていく力を高めるアイデアが得やすくなっていけば良いなと思います。

<連載>

ザイコロジー

⑥ファイナル

そだちと臨床研究会

川畑 隆

「京都児相マンスリー」からもう1つ

凧と娘

小学校1、2年だったと思うが、私は手作りの凧を持参して大きな広場での凧あげ大会に参加した。でも、いっこうに凧があがらないのである。まわりの凧は風を真っ向から受けて堂々と胸を張っているのに、我が凧は地面に足をつけてまるでだだをこねる幼児のように、私の願いに逆らうばかりであった。「人と違う」ということが、その時、私の身体と心を縮めた。

不器用なのである。不器用だったり、できることが少なかったり、気が小さかったり、そんなことが自分に影響を与えているのはよく知っていた。自分に男の子が生まれたら、ある意味で自分のそこらへんへの挑戦で、我が子のためにも突破してゆかねばと少しだけ緊張の糸が張っていたのだが、女の子が生まれて少しだけホッとしたのは正直なところだった。男の子だったら泳ぎもオレが教えてやらんといかんから、スイミングスクールへでも行かなあかんかなあ

とっていて、でも女の子だったから、活発で器用な女房が教えればいやと、うまい具合に緊張はしぼんでいったのである。

凧を2歳10か月の娘のために作った。…と言っても生協の品物で、紙、竹骨、糸は用意されていて、あとは切って、描いて、貼って、糸を通して、という作業がこちらに任されている。娘が期待して見つめるそのもとの、「おかあさんといっしょ・にこにこぷん」のピッコロを図柄に描き、張り糸で凧の胸を張り終わって、まずは第一段階を突破した。夜中であった。

翌日、窓から外を見ると、広々とした田んぼで複数の凧が高く舞い上がっている。どうも娘の手を引いて凧を持ってその中に乗り込んでゆく勇気が出ない。やっぱり不安なのである。25年も前の体験が今の自分の足を引っ張っている。

夕方まで待つことにした。アパートの真ん前が田んぼで、そこでの様子は3階建て18世帯の眼下にあからさまになる。年末の里帰りやらで多数の家族は不在だという有利な条件を考慮しても、凧上げの親子たちも家に帰り、見ようとしなければ見えにくい明るさの夕方まで待つことを妨げるものは、自分の図太さのなさへのいらだち以外には見つからなかった。

いよいよ夕方、出陣である。ベランダからは女房が目凝らして見つめている。でも風がないのだ、昼間はたしかにあったのに。でもまあとにかくあげてみよう。娘に凧を持たせ私が糸を持って走ろうとする。しかし娘が凧を離さない。離すように教えるとうなずくが、またしつかりととられまいと握りしめてしまう。粘り強い説得の末、やっと離してくれて宙に凧が放たれるが、私の背以上に高さは更新されず、すぐに着地。

今度は娘に糸を持って走らせることにした。ヨーイ、スタート。娘はその途端、糸を下に置いて自分だけ走り出す。これは何回やっても修正できなかった。2つのことを同時に行うこと

の幼子にとってのむずかしさを、可愛らしさとともに痛感した。

そんなこんなで二人で走り回ったが、結局、期待した結果は得られず、私と娘はもうほとんど真っ暗な田んぼをあとにした。

それから正月三が日、「風がない。しょうがないなあ」を繰り返し、より馴染みのあるボール蹴りをするために、私と娘はアパートの階段を降りていった。

今、レコードプレイヤーの上で、ピッコロ風と、もしあがらなかった時の代替え風として100円で買ったビニールカイトが、勇敢に大空に舞いあがる日に備え、休息を静かにとっている。(京都児相・川畑隆の『ほとんどマンスリー』(『京都児相マンスリー』改題)第7号 昭和63年1月)

子どもの歌

長女が生まれて1曲作り、次女が生まれて1曲作りしました。そして『こもりうた』も作りました。赤ん坊に聴かせたことはありませんが…。『自由の歌』は、公募に落ちました。

こもりうた

疲れた眼は閉じなさい
疲れた体は横たえなさい
そしてちっちゃな心もそつと
柔らかい布団に包みなさい

今日は嬉しい日でしたか
心が大きく踊りましたか
それともとっても悲しい日でしたか
大粒の涙をこぼしましたか

あなたへの私の囁き

あなたの遠くで聞こえていますか
あなたはいま幸せですか
王子さまはやさしいですか

もう私も眠くなりました
あなたの髪を撫で上げて
そしておでこにキスをして
幸せに眠りましょう

疲れた眼は閉じなさい
疲れた体は横たえなさい
そしてちっちゃな心もそつと
柔らかい布団に包みなさい

小人たちの歌

赤いクレヨン 踊る
幼子の瞳がうっとり夢見ているよ
ホラ 耳をすませば画用紙から
元気な小人たちの歌が聞こえる
踊ろう！ 手をとって
足音かるやかに 今日の喜びを
歌おう！ 手をうって
心の満ちるまで 自由の歌を
僕らの願い 伝えてよ 友だちに
明日もすばらしい朝が来るように

青い折り紙 踊る
幼子の瞳がキラキラと輝いているよ
ホラ 耳をすませばまたあの歌が
にぎやかに小人たちがやってくる
踊ろう！ 手をとって
足音かるやかに 今日の喜びを
歌おう！ 手をうって
心の満ちるまで 自由の歌を
僕らの願い 伝えてよ 友だちに
明日もすばらしい朝が来るように

身障国体の要員

京都府主催の全国心身障害者国民体育大会の要員として、和歌山県担当になりました。和歌山のみなさんと仲良くなってとてもよい思い出ができたのですが、同じ要員の看護師の卵たちとも一緒に過ごしました。その彼女たちのことを書きました。

あなたに逢えて

あなたに逢えてよかった
そんな思いが満ちて
かたむけるグラスの中に
笑顔が揺らいで浮かぶ

あなたに逢えてよかった
他ではないまごころに
別れるときの涙も
岩に優しくしみるように

はじめての人との出会いに
心はずませて
でも見たくはない自分とも
出会ったりして

晴れたり曇ったり
あなたに逢えてよかった

あなたに逢えてよかった
そんな思いは豊かさ
思い出すあの日あの時
面影がそこに揺らいで

あなたに逢えてよかった
あられずりの輝きに
とめどない涙は

すべてかけねない言葉

こわれてしまう危うさと
貫いてゆく強さの中で
今いっばいに開いて
自分を確かめようとして

晴れたり曇ったり
あなたに逢えてよかった

四万十川下り

職場の人たちとゴムボートでの四万十川下りに出かけました。水が苦手な私にとってはまさしく「冒険」でしたが、下り終わって真っ赤に火照った手でもった生ビールのジョッキの輝きを、今でも思い出すことができます。

SHIMANTO

SHIMANTO の川 SHIMANTO の山
SHIMANTO の人 SHIMANTO の夢

静けさに身をゆだねて
大きな愛に抱かれている
艇(ふね)が進む 水を切って
時の流れはゆるやかに

きびしさが目の前に迫る
君も知ってるだろうと
艇が進む 水にたたかれて
時がそのとき止まる

SHIMANTO SHIMANTO すべてを包んで
また静かに流れてゆく

SHIMANTO の風 SHIMANTO の空

SHIMANTO の星 SHIMANTO の愛

おいてきた悲しみも
みんな連れてこいと言っている
大空のきらめきは
心の服を脱がしてしまう

人にやさしくなれるのは
悲しみをくぐってからだ
流れ星が流れて
伝えに来てくれるような

SHIMANTO SHIMANTO すべてを包んで
また明日を迎えてゆく

喫茶店での半日

「いい曲を作りたい」…そんな思いが高まって、半休をとって喫茶店にこもりました。そしてできあがったのが『選択』。苦労して作った分、理屈っぽい感じがするのですが、かけた時間は無駄じゃなかったような気がします。

選択

外は雨が降っている
人通りはそんなに多くない
カップの冷めたコーヒーが
過ぎ去った時を刻む

新しいコーヒーを告げる
私の思いを断ち切るように
ウェイトレスは手荒に
カップをひきあげてゆく

永すぎたのかもしれない
知りすぎたのかもしれない

臆病になったのは
賢さのせいではない

生きることは選ぶこと
生きることは棄てること
護ったのは幻
すべて失くしてしまった

新しいコーヒーが運ばれて
ミルクが静かに沈んでゆく
そのやさしくなじむ様が
今の私に重たすぎる

ドアがふいに開かれて
傘をたたむ二人連れは
水面に投げられた小石のように
今の時を知らせてくれる

幼かったのかもしれない
怖かったのかもしれない
あなたに任せたのは
賢さのせいではない

生きることは選ぶこと
生きることは棄てること
護ったのは幻
すべて失くしてしまった

時は先に進むだけ
雨はやみそうもない

Kさんのこと

ひと回り以上年上のKさんと同じ職場になることはありませんでしたが、府下3児相合同での仕事などではご一緒することがありました。そのKさんが急に亡くなられました。Kさんの同僚のTさんの思いも含めて、胸に迫るものが

ありました。

告別—Kさんに捧ぐ

今朝 あなたが亡くなったこと
聴いたとき 心がただよいました
おさまりつかない心に向かって
実はそうなんだよと
あなたが囁きました

あなたに嫌われてるってこと
それが密かな誇りでもあったのです
不思議に闘争心がかきたてられて
とっても元気が出ました

過激なあなたに過激だねと言われて
優しさ感じ始めてたこの頃
まだ温かいあなたの息遣いを
心がのがすまいとしています

大勢の人が あなたと別れをするために
ここに集っています
それぞれの心の中で
それぞれの別れが
行きつ戻りつしています

弔辞の声が時間を戻して
歴史が過去に凍り付くようです
でも あなたが活かした子どもたちは
確実にいま 心を震わせています

そして 歩みを共にしたTさんの
遠い目とこらえきれない涙に
この全身が吸い寄せられたとき
激しくあなたを偲びました

Kさん あなたに別れを告げます

ファイナルです

高校生の頃から書き始めた歌詞を、6 回にわたってふりかえってきました。そのことで「曲」は舞台に出さずとも「歌」を納める作業を終えた感がある程度得られました。他の方が書かれた歌詞に私が曲を付けた歌はとりあげませんが、それらも含めてやっぱり財産だという感じがします。

さて、欲張って、詞だけでなく曲にも日の目を見させるために、自分の作詞作曲分を YOUTUBE に少しずつ投稿していこうと思います。そのことは前からチラついてはいても気持ちのうでハードルが高く、この『サイコロジ』のファイナルを機に頑張ってみることにしました。若い頃のコンサートの音源が残っている曲はそれを使いたいと思います。『ターチャンのオリジナルソング』…10 月頃にはその①を投稿できているかもしれません。よかったら YOUTUBE を覗いてみてください。

『サイコロジ①～⑥』におつきあいいただき、ありがとうございました。次の号から新しい連載を始めるかどうかは未定です。また私の名前があったら、よろしく願います。

2024. 08

応援、母ちゃん！18

～ 夫の育休 ～

たまむら ふみ

玉村 文

育休修了証

および日頃の感謝状

- 成果報告
- 保育園の準備、行事への参加
- 毎日の献立考えること、食事の用意
- 買い出しと管理
- 次男くんの寝かしつけ、授乳以外のお世話
- 散髪、通院、遊び相手
- 家づくりのための調査と選択、記録化
- 洗濯と掃除（これはいつも）

などなど、たくさんやりました！ありがとう！
これからも、長女ちゃんの時のように離乳食作りの協力と、妻への労いの言葉を毎日1個は伝えることを、よろしくお願いします。



1. はじめに

わたしは子ども達をお風呂に入れたあと、夫が子どもたちに怒っているのを聞いて髪の毛も乾かさずに子ども達の対応をしなければならず、休息ニーズが満たされずうんざりした気持ちになりました。あと5分、わたしに時間をちょうだい。もしこのリクエストが叶えられたらリラックスした気持ちになります。

2024年4月18日に第三子を出産しました。37週6日、3336gの男の子でした。我が家は子どもは3人までと決めたこともあり、妊娠出産は今回で最後。最後なので、夫も初めて育休を取得することになりました。男性の育休は、過去の記事にも書いていましたが、2022年度の男性の育休取得率は17%と、まだまだ多くの人取得しているものではありません。とはいえ、第一子を出産した2019年度と比べると、周囲からは育休取得をチラホラ聞くようになってきました。今回は、育休を取得した夫をもつ妻からのレポートです。

2. Nさんの事例

数年前に第一子をし、1年間の育休を経て職場復帰されたNさん。Nさんの夫は、彼女が仕事復帰した際にバトンタッチで育休を1年間取得し、家事育児をメインで担ったそ

うです。ここでは、バトンタッチ育休の事例を紹介します。

Nさんは、夫が育休を取得する前の夫婦の関係は「離婚の話も出るほど」良くなかったと話します。Nさんは出産前はバリバリと働き給与も夫も変わらないほど。仕事も好きで、キャリアを諦めたくない、もっと働きたいという思いをもちながらも、子育てをメインで担いながら夫を羨ましく感じていました。些細なことで喧嘩になると、もともと感じていたNさんの不公平感がより刺激されて、大きな喧嘩にまで発展していきました。そのことに危機感を感じて、Nさんは夫婦関係の改善のためのカウンセリングにも通ったそうです。

夫婦の関係改善を模索するなかでのバトンタッチ育休。結果的に、Nさんの夫が育休を取得した経過で二人のパートナーシップはとても良いものになっていったそうです。男性の育休取得がパートナーシップの改善や良好な関係性に良い影響をもたらしたのはなぜか。Nさんはこう話します。「夫の気持ちもわかった」と。Nさんの夫が育休を取得する代わりに、Nさんがフルタイムで仕事復帰してみると、Nさんの上司から「夫が家にいるのであれば、残業もしなさい、子どもの病気を理由に休まないで」と直接言われたそうです。その出来事から、Nさんは夫もNさんが育休中に仕事のプレッシャーも感じながら働いていたんだと思いを馳せることができるようになったと言っていました。

Nさんのこのような話を育休中のママ達数人と聞いていました。聞いていたママ達はこぞって、パートナーの気持ちに理解を示すことができるようになったのが素晴らしいと感じていました。育児をメインで担

っている立場のママ達は、「こんなに大変だとパートナーにわかってほしい」という気持ちが強く出てしまうと振り返ったのです。これにはわたしも共感しました。

3. 我が家の事例

育休を取ってみたいと思いつつも様々な事情でこれまで取得できなかった夫に、「子どもは3人までなので、今回で最後だよ」と育休取得を促したのはわたしです。キャリアがストップしてしまうことへの不安や、同僚に迷惑をかけてしまうことへの罪悪感をもっていることは理解したうえで、これからも長く働き続けるためにも一回お休みをとることは必要な時間だと思ったためです。長い仕事人生をみると、数ヶ月の育休取得は些細な休みですし、自分のキャリアを考えられるまとまった時間にもなると思いました。

出産前にそのようなやりとりをして、夫は会社と交渉し2ヶ月の育休を取得することが決まりました。わたしも産後の回復に時間がかかったため、夫が家事育児を担ってくれたり、二人で子ども達の対応をできたことはとても助かりました。そして、マイホーム建設のための時間としても活用したため、まとまった時間を打ち合わせ、内覧や夫婦の相談に充てることができました。夫にはもっと自分の時間としても使ってもらおうと思っていたのですが、結果的に家事、育児、マイホーム建設に時間を割くことになっていました。そのような期間でしたが、一度だけキャリアコンサルティングをオン

ラインで受けることができたようで、夫と仕事を相対化する時間をもてたようです。リスクリングまではできなかったと言っていました。家事と育児の両立だけでもマルチタスクのちからは向上したように見えていました。

産後の身体が回復するまで、夫がメインで家事と上の子達のお世話を担う予定でした。でも上の子達もそれぞれ自分の気持ちがあつて、「お母さんがいい」となることが多く、上の子達の寝かしつけは夫に代わってもらうことはできませんでした。その代わりに、赤ちゃんの夜泣き対応を3日ほど代わってもらいました。夜間授乳があつたりこれまで夫も仕事があるため、夜のお世話はほぼわたしが担ってきました。それを体験してもらったのです。夜間の対応を代わってもらった次の日は睡眠不足から体調を悪くしてしまう夫をみて、これはやはり頼れないなと感じて役割を戻すということを2ヶ月で3回ほど繰り返しました。夫が一晩でしんどくなることを、わたしは3人目まで毎晩担っているんだと夫にわかってほしいとっていました。とても大変なことを担っていると認めてねぎらってほしいとっていました。「わたしの気持ちをわかってほしい」ニーズがとても強くあり、夫の気持ちを理解しようとする余裕はありませんでした。

今回夫が育休を取得したことで、夫はわたしへの理解を深めたように思います。育休を振り返って「なにもできなかった」と話した夫。家事育児をしてあつという間に一日が終わり、今日何もできなかったと感じる育休時間。体験して同じことを感じてくれたことで、わたしへの理解を深めてくれ

ました。一方で、わたしは N さんの体験談を聞いて、夫への理解の前に育休取得をしてくれた感謝や、「なにもできなかった」と話す夫にそんなことはないと思いたいと思うようになりました。それを形にしたものが、「育休修了証」。本文の頭に載せてあります。この育休修了証を夫に手渡しし、わたしからも夫に歩み寄る姿勢を示した夫の育休最終日でした。

4. 終わりに

男性の育休取得からパートナーシップを考えるにあたって、N さんの事例はわたしに影響を与えました。子育てをメインで担う人への配慮を求めてしまうこの気持ちは、わたしが育児の当事者であるためだと思います。とはいえ、社会でも、育児をメインで担うママ達の気持ちをわかってほしいというメッセージは、年々増えてきているように感じます。パートナーに育児を担ってもらう戦略として、このメッセージは使われてきたと思います。最近では、産後うつを予防する観点からもこのような発信があります。

産後の女性の身体や心は大きな変化に直

面しますし、回復していない中育児が始まってしまいます。それを一人きりで担うことも少なくありません。コロナ禍ではより孤独感も強まりましたし、孤立無援状態で子育てを担うリスクが大きいことは社会が証明しています。

育児者への理解や寄り添いととも、パートナーの立場や気持ちを理解することがより強いパートナーシップのために必要なのだと思いました。

さて、我が家はどうか。夫が初めて育休を取得した 3 人目の産後が最も夫婦喧嘩が少なかったような、そうでもないような。とはいえ、夫婦二人で一緒に子育てする経験は、関係の安定を促したように思います。

破裂の可能性が高まるため、一般的には 3 回程度までと回数を重ねない方が良いとされています。わたしも子ども 3 人共に帝王切開での出産だったので、今回で最後だと決めました。ですので、最後に貴重な体験ができたことを嬉しく思います。帝王切開は麻酔が効いているから痛くない出産と言われることも多いのですが、術後の痛みは大きく身体の回復にも時間がかかります。なんせ 50 cm、3 キロの赤ちゃんを出すために、20 cm ほどお腹を切るのですから。

篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
(公社)日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

古い町並みを歩いて
いると時折小さな鳥
居を住宅の塀や壁に
見つけることがある。
関西の人間には昔か
ら馴染みの立ち小便
をさせないためのお
まじないだが関東で
は殆ど知られていな
い。

京都の伏見稻荷神社
の赤い鳥居の風景は
外国人観光客にとっ
ては日本らしい風景
の定番だが、京都の
街中に今でも時折見
かけるこの小さな鳥
居の意味はガイドブ
ックには多分載って
いないだろうな。



若い頃、大阪天王寺の駅ビルの大きな階段を上がっていて前を歩いている女性のミニスカートの目があった事があった。その瞬間、誰かに頭をイヤと言うほど殴られた。と反射的に思うのだが本当は階段の壁面にあった広告の出っ張り部分にぶつかったのだった。頭から落ちた帽子を拾い上げて何事も無かったような顔をして階段を上った。

暑さと恥ずかしさで顔に汗が滴って来た。拭った手を見ると血だった。頭頂部が切れて血が出ていたのだ。慌ててトイレの鏡の前で応急処置をして、家に着くまでずっと頭を押さえながら帰ったのを覚えている。男の悲しい性（さが）ゆえの何とも恥ずかしい若い日の思い出である。



2014.10.20

猿の惑星

京都市動物園は精華大学のカートウーンコー
スの1年生にとっては動物クロッキー800
枚を仕上げるという夏休みの課題に取り組む
ハードトレーニングの場所である。

動物園の目玉はゴリラの生態がうかがえるゴ
リラ舎なのだが、私は園の中心部にある猿島
が好きだった。周りを取り囲む円形の塀の上
から猿たちの動きを眺めていると、それぞ
れの行動に見入ってしまい、時間を忘れたも
のである。

そんな場所も残念ながら一昨年の11月末に
85年の歴史を閉じ、サルたちはそこに接す
る類人猿舎に移されてしまった。

今は分けられたそれぞれの狭い空間の中
で、どんな事を思っているのだろうか。



今、絵を描く時にこんな風にし
てモチーフのサイズを測ったり
することはボクには無い。
漫画表現においては形を正確に
写し取るという事は大して重要
な問題ではないからだ。
しかし美大受験生時代の石膏デ
ッサン修行はそうではなかった。
それは正確に目の前の石膏像を

修行

画紙に写し取るための必須作業
だったからである。
この時、対象物に対して腕はま
っすぐに伸びていなければ測定
に誤差がでてくる。
そういう意味では漫画も描き手
の想いがまっすぐであることが
重要だと言える。

昔は誰もが必ず車の中に入れていた道路地図帳を見ることが無くなった。
最初の頃は正確さに不安のあったカーナビも近年は飛躍的に能力が向上し、今はスマホがあれば人も車もどこにでも行ける時代となった。

しかしこれは同時に自分の位置情報も第三者に把握されることであり、それがさまざまな事象の分析にも使われている。
西遊記で孫悟空がお釈迦様の指に落書きをしようとするのは一人の人間の見ている世界が如何に小さな世界であるかを見せる

場面だが、『手のひらで転がされる』という言い方があるが今なら『スマホの上で転がされている』時代だと言えるだろう。

到達ポイント



少年期

永島慎二さんの本に『少年期』というのがある。私はこの本の描く世界が大好きである。いつも幼い頃の想い出と繋がって来て、懐かしく切なく、温かい映像が頭の中に広がって来る。そして自分もそんな時代の絵を描いてみたくなるのである。



水影



脱皮

川下の風景⑮

～人生は川の流れるように～

米津 達也

【ビジョン】

前号も我が子の身近な話から始めたが、もう一人、今年受験生の子がいる。これまであまり勉強に熱心ではなかったが、四月以降、いろいろ環境にも感化されたのだろう、猛烈に勉強に励んでいる。この酷暑の中、ひたすら自転車を漕いで塾に通い、夜半に帰ってくる。こういう時、田舎に暮らしていると可哀そうだなと思うが、当人はそんな田舎から抜け出たくて勉強に励んでいるのかも知れない。希望の大学に入り、さっさと下宿生活をしたいと目論んでいるようだが、自分の行く道を親にろくに相談もせず決めるだけの意思があるなら幸せなことだと思って養育義務をせつせと支払っている。

仕事では30代半ばの青年と面接をした。青年というには歳を過ぎているが、業界の特性上、まだまだ若手で通る年代だ。高校を卒業し、何となく就職先を選んだ。その後、親の勧めもあり、介護の仕事を選んだという。職場を転々とし、この歳になって同じ介護業界だが職種の異なる仕事を希望し、今回の面接に至った。最近の求職者はハローワークで求人票を捲らない。手元のスマートフォンで検索すれば、大手求人サイトが条件に見合った職場を仲介してくれる。無料という触れ込みだが、もちろん支払うのは求人側でその紹介料は馬鹿にならない。昨今、行き過ぎた仲介料に関しては規制の動きもあるが、どこも喉から手が出るほど欲しい働き手であるから焼け石に水だ。話は飛んだが、そんな求人サイトを見て応募してきた青年と面接をした。ジーパンにポロシャツ、髭も剃らずに入ってきた姿を見ると3分で切り上げたいと思った。平成元年生まれだと言う彼と話をすること30分。子供の頃の夢を聞いてみた。ちゃんとやりたいことがあったらしいが、それを親に相談すると反対されて、おずおずと引き下がって今に至らしい。別に今からでも遅くない、やってみたら、と声を掛けるがその気はないようだ。介護業界に骨を埋めると覚悟したなら、年齢からしてもそんなにチャンスは多くない。5年後の自分、10年後の自分はどうなっていると思うか。これも毎回面接で聞く質問だが、大方しっかりとしたビジョンが語られることは少ない。面接の時はスーツを着るんだよ、と周囲の大人は教えてこなかったんだろうか。そう思と、社会や親の責任を思う。この場限りの面接、おそらく二度と会うことは無いから別に気にすることも無いが、5年後、10年後のビジョンは視ておく方が良いと思っている。社会は、介護業界は大きく変化する。

【草加市視察】

埼玉県草加市と言えば、やっぱり煎餅だよな、と思っていたが、物産店に行くと今は革製品の街だそう。煎餅職人の数は少なくなる一方で、革加工職人の数は増加している。『翔んで埼玉』という映画の印象もあるのか、地味で東京都心のベッドタウンという印象だが、初めて草加市を訪れた私からすれば随分住みやすそうだし、

私が暮らす生活圏に雰囲気も似ていて親近感もある。私の暮らす地域を通る東海道、中山道。草加市を通る日光街道。街道文化の違いなども感じながら、本来の目的である視察研修の会場を訪ねた。

今回の視察研修のテーマは「共生型サービス」。介護と障害、互いに制度上相乗りしているサービス。制度発足は2019年度介護報酬改定だが、

全国的にもあまり普及しているとは言い難い。対象が異なるケアに心理的な障壁があるようだ。今回視察した事業所は、昨今、業界ではそこそこ有名なコンサルが携わっている。会場は20人弱。参加者名簿を見て笑った。ほぼ、地方の田舎法人ばかり。もちろん、自分たちのことも含めてだ。理由は推察できる。次の介護ビジネスの展開をどうするか。そのヒントがこれにあると踏んだのだろう。視察研修の触れ込みもそういう類のものだから、それを指南してくれるコンサルは救世主になると信じている。

一通り視察研修を終えて思ったことは、主流になり得ないビジネスを掘り起こして、それをコンサルビジネスのネタにしようとするシステムなのだとは別の発見があった。つまり、介護業界自体が社会保障財政的にも、人材確保困難な状況が更に加速する観点からも、全体的に縮小傾向にあるわけだが、そこにあの手この手で隙間ビジネスを考える人は多いわけで、それがビジネスモデルとして成立する業界体質にも辟易としている。つまり自分たちで歩む道を、自分たちで決めることも実現することも出来なくなっている。冒頭の青年と同様、5年後10年後のビジョンを描く力が無いと、今後の変化に対応できなくなる。

【答え合わせが必要だ】

話はヒマラヤに飛ぶ。世界第2位の高峰K2(8611m)で世界的クライマーである日本人二人が滑落、安否不明のままとなった。未登攀の西壁ルート、7500m付近からの滑落。挑戦したひとり、平出和也の言葉を眼にした。

「未知なる世界だからこそ自らの目を見て、手で触れながら答え合わせをする」

彼は未踏ルートの岩肌や雪の事を言ったのだ

ろうが、人生もまた同じであると語っているのかも知れない。答えの視えた人生など無く、我々は常に手探りで突き進むと共に、その先のルートが進めるのか、撤退を余儀なくされるのかを読み解いていかなければならない。

眼前のクライアントは語る。60歳で自分の人生は終いでいいと思っていた。だから55歳で早期退職し、残された5年で周辺整理をするつもりだった。思いがけず大病を患い、そして運の良し悪しがわからぬまま現代医学に生命を救われ、60歳で終いと思っていた人生を75歳まで生きるに至った。そこに悔いがあるわけでもなく、ただ生かされている人生に感謝している。彼は妻を40代で亡くし、二人の子どもを育ててきた。60歳で終いと思ったのは、早くに逝った妻への思いからなのか。ただ、そこに人生に対する諦めの所作は見られない。大病の後遺症もあり、自由に歩くことは出来ないが、車椅子を器用に使って、ひとりで暮らすには大きすぎる田舎の母屋で日々読書に耽り、クラシック音楽などを聴き、時に昔馴染みの友人と食事に出かけ、親しい友人に誘われて月に1度は映画館に足を運んだりもする。人徳に恵まれた生き方がどのようなものであったか、三か月に1度の面談で小一時間ばかり人生談を聞くのは楽しみにしている。

機会があれば問うてみようと思う。自らの人生の答え合わせの結果を。本人が余分と語った15年の時間はどのようなものであったか。果たして、思い描くルートの先に頂上があったのか。教わることも多いこの仕事の価値として。

2024.8.25 米津達也

こころ日記「ぼちぼち」 その③

M先生からの学び

昔々学級担任をしているころ、毎日「学級通信」を出していた。その頃年間授業日数は200日を超えていた。私の目標は毎日出すこと、200号を達成することだった。これは教育実習の担当教官だったM先生の影響からだった。



小学校、中学校、高等学校の教員免許を取ったが、M先生とは小学校の実習でお世話になった。M先生の学級経営は学ぶことばかりだった。まるで魔法をかけたかのように子どもたちを操り、一人一人の子どものやる気を引き出していく。

毎日もめごともあったが、話し合いをさせながら自分たちで解決する方法を考えさせる。この様子を見て、私はこんな先生になりたいなと思った。子どもに大きい声で怒ることがなく、静かに叱る。おそらく子どもの動きをよく観察し、その成長に理解を持っていた人だったのだろう。



放課後、M先生は毎日職員室の机に向かい、親向け学級通信を書いていた。毎日何をそんなに書くことがあるのだろうと、読ませてもらっていた。今はパソコンでササッと打てるが、当時は手書きが主流。B4用紙びっしりの文字。失礼ながらそんなに丁寧な字ではなかったが、その内容は子どもたちの一日の学習や遊びの様子、そして

担任として日々思うことを、M先生らしい言葉で綴られていた。

M先生の学級通信は、親たちは毎日とても楽しみにしていた。自分の子どもが、日々どのように過ごし成長しているのかがつぶさにわかる通信に、親たちは信頼を増していった。その通信を通して親同士が繋がっていったこともあったと思う。

授業が勝負！

そしてM先生からは、教員は日々学び続けることが大切であることも教わった。

今学校現場は超多忙化しブラック化している。つい20年ほど前までは、まだ教員には余裕があり、長期休みなどに自費でも研修に参加するという空気があった。私も40年近く、人権や性教育といった研究や研修にたくさんの時間とお金をかけてきた。

M先生は休みになると、教員の学び場であるサークル活動に参加し、教材作りや子どもにわかるおもしろい授業の実践と研究に取り組んでいた。いわゆる教科書にない学習の実践でもあり、包括的な学習を目指していたのだ。M先生の授業には、常に「子どもたちにわかる喜びを、学ぶ楽しさを！」がベースにあった。

特に理科の専門でもあったので、実験の準備には惜しまず時間をかけた。学習の流れは、実験を体験させ、観察、なぜそうなるかを探求していく。科学的なことに興味を持てる工夫がいっぱいであったので、多くの子どもたちは理科が大好きになっていった。



実習生にも、自分の持っている教材など、惜しみなくオープンに紹介してくれた。私もM先生が関わる研究会に参加するなど、色々な知識を身につけさせてもらった。長く教員を続けられたのも、その時に伝えてもらったことが大いに活かされていたからだと思う。

そしてM先生は、いつも「一時間一時間の授業が勝負！」つまり、その時間に何をどのようにして伝えるかを工夫し全力を注ぐこと。教師は毎年同じことを教えることを繰り返しているから、ついマンネリ化してしまう。子どもにとって、その1時間の学習は、その時にしかない。子どもの側に立てば、一生に一度しかない学習だ。つまり一期一会の出会いと考えて準備し、実践することを忘れてはいけないと言われた。

さて、私の学級経営は？

教員生活の最初の10年ほどは小学校勤務だった。初めて学級担任になったとき、やはり真っ先に思い出したのがM先生の学級経営だった。現在小学校の学級担任は毎年変わるが、以前は持ち上がりで2年間持つことが多かった。自分に合う担任ならいいが、合わない先生となると子どもも毎日が大変だ。担任も子どもを選べない。手のかかる子どもを2年間持つとなると、ちょっと覚悟がいる。

私にとってM先生は理想であるが、正直子どもたち全員から好かれる先生なんてなれない。よく子どもたちは「優しい先生」が好きと言う。「優しい先生」とは、どんな先生のことだろう。残念ながら私は、「優しい先生」とは言われなかった。かといって嫌われもしない先生でもあった。大切にすることは、M先生のように、子どもには嫌みや脅しの言葉を使わなかったことだろうか。

私は末っ子で家庭状況はややこしく、どちらかというと放置されて育った。小学校に入ったころは、家族は仕事や学校で誰もいなかったから、家に帰れば好きなことが

できた。外で遊ぶことが好きで、危険な目にも遭ったことがあるくらい活発だった。

一方で入学前の小さい妹に、大人たちは学校で困らないようにと、読み書きなど熱心に教えた。だから学校に入っても、知っていることばかりで授業が面白くなかったのを覚えている。先生に当てられても、寡黙になり答えない。教師にとっては、とっても扱いにくい子どもだったにちがいない。だから注意をされることはあっても、褒められることがあったかなと思う。

子どもは敏感である。大人が自分のことをどう思っているかがわかるものだ。教員を目指したときから、子どもの気持ちに少しでも近づくことができると考えていた。



早速、学級通信を毎日書くことを目標にした。通信の名前は、子どもたちに決めさせた。子どもたちを見ていると毎日通信の材料になる場面は事欠かない。泣いたり笑ったり、35人いれば35人の顔があり、35人の性格がある。じっと観察すると、子どもの思わぬ行動と発言の驚きと感動がある。1年間200号を目指し学級通信を書き続けたこと、自分で褒められることは少ないが、このことだけは自慢できる。

今も残る学級通信。懐かしく読み返すことがあるが、毎日丁寧に綴じていてくれた親がいたのを思い出す。

「先生、〇号が届いていないのでお願いします」などの連絡もあった。子どもたちは何をするかわからない。下校途中で道に落として帰る子もいて、落とし物として届けられたときは、恥ずかしい思いをしたことも…。

最近よく中学校への訪問に行くが、教室に学級通信が掲示されていると、今も変わらぬ風景に懐かしさを感じる。

つづく

『父が自分の身を呈して教えてくれたことⅤ -最期の時-』

高名祐美

父が亡くなって二度目のお盆を迎えた。お墓への納骨のことで、妹と話し合う。わたしのお寺で、永代供養をしてその後に納骨しようと決めた。そのあと、妹家族と私たち夫婦で会食する。家族が集まって、お酒を飲むのが大好きだった父。そんな父の思い出を妹家族と話し合おうと思う。

23日は父の月命日。朝仕事前に実家へ行き、夫と一緒に参りする。父の遺影が私達を見つめてくれている。「みんななかよく。家を守ってほしい」という父の言葉を思い出し、妹家族と談笑する。忙しい毎日のなかで、なんだかほっこりするひととき。父の姿はないけれど、そこで私達を見守っていてくれるように思う。

Ⅳ 最期 そのとき

令和5年5月23日（火）午前9時。仕事前に父の様子をうかがいに実家へ行く。昨晩はとても苦しんでいたのが気になっていた。父のそばには、すでに訪問看護師が来てくれていた。朝、苦しそうにしていたので、訪問看護ステーションへ電話を入れて早めにきてもらったと甥から聴く。父の状態をひととおり観察したあと、ナースがわたしと妹を廊下へ促した。「血圧がはかれません。もうすぐお別れがくると思います」と硬い表情で私達に告げる。いよいよ父が最期のときを迎えようとしているのだとわかった。妹も覚悟はできてきていたのか、その言葉にひどく動揺した様子はみられなかった。ナースの言葉を聴き、自分がどうしたらよいか考えた。

「そばについていたほうがいいですね」とナースに問いかけると「そのほうが良いと思います」と。そうだ、父のそばにしよう、いなければ。そう思ったわたしは、一度職場へ行き管理者に事情を説明し、仕事は休ませてもらうことにした。仕事の段取りをすませて再び実家へ。妹と甥が父のそばに座っている。妹の夫も知らせを聞いて、会社を早退してきた。いよいよなのだそれぞれが覚悟をする。昨晩のような苦しみはないが、だんだんと呼吸が弱くなってきた。声を出すこともない。昨日は娘の名前を何度も呼んでいたのに。脈は頸動脈しか測れない。何度も何度もはかってきた酸素濃度はもう測れない・・・

16時。訪問看護師が訪問。よりいっそう呼吸が弱くなってきて、脈も弱いことを確認する。「変化があったり、不安になったら、いつでも電話連絡してくだ

さいね」との言葉に、勇気づけられる。

ナースが帰ったあと、17時すぎから顔で呼吸をするようになった。「努力用呼吸」の状態である。17時15分には下顎呼吸となった。妹に「多分もうすぐ」と伝える。妹は夕食の準備をしていたが、すぐに父の部屋へ来て様子を確認。そして夕食を早くすませようと夫・息子にも伝えた。わたしの長女（孫）が仕事帰りに来てくれたので、そばに居てもらい、みんなで急いで夕食をすませる。だんだんと呼吸の間隔があいてきた。手足が紫色になり、冷たくなってきた。弱くなる呼吸と脈。わたしは首に手をあて脈を聴き、妹は右手、妹の夫は左手を、わたしの娘は足をさすって、みんなが父を囲んで父の身体に触れていた。息が止まりそうだったそのとき、お風呂から急いで出てきた甥が「じいちゃん！」と声をかけた。その瞬間、小さく頷き最期の呼吸をしたようだった。そうわたしには見えた。そしてそのあと顎は動かなくなった。脈もふれなくなった。18時27分だった。

不思議と冷静だった。誰もとりみだすこともなかった。

私　　：看護師さんに連絡するね。

妹　　：うん。お願い。

私　　：（訪問看護ステーションに電話）三輪吉雄の家族です。たった今呼吸が止まりました。

ナース：わかりました。すぐに伺います。先生にも連絡します。

私　　：よろしくお願いします。

（妹に）すぐに来てくれるって。

妹　　：わかった。

19時15分。訪問看護師2名と担当ケアマネさんが来てくれた。少しあとに担当医の先生。死亡確認の時刻は19時22分だった。旅立ちの衣装は、妹と相談して燕尾服を選んだ。中学校の教諭だった父は、校長として卒業式には燕尾服を着ていた。父の「人間の卒業式」。その衣装は燕尾服しかないと思った。

訪問看護師・ケアマネさんが父に着せてくれた。「よしおさん、お似合いですね」と声かけながら・・・靴下は甥がはかせる。「僕、いつもじいちゃんに靴下はかしてもらったな」と、じいちゃんに声掛けながらはかせてくれた。ネクタイは妹の夫が結ぶ。「お義父さん、これでいいかな」。

自宅で最期を迎えた父。「ACP」（人生会議）を父と話題にすることはなかった。もしものときにどうしたいか、そんな話をする必要があるのかもしれない。しかし、きっと父は満足してくれていると思う。わたしたち家族は、父と

1ヶ月家で過ごすことができたことに後悔はないのだから。「おまえらがそれでいいのなら、よかったぞ」という父の言葉が聞こえてくる。いつも誰かがそばにいた。多くの人に愛情を注いできた父は、最後に沢山の人からあたたかいケアを受けられたのだと思う。

父が教えてくれたこと。

人間は死ぬその瞬間まで生きるということ。「死にゆく」ではなく「生ききる」のだと。

家族を思い、愛すること。

人を人として尊厳すること、そして感謝の言葉を伝えること。

家族を集めて「みんな仲良くして。家を守って欲しい」と必死に伝えた父。その言葉どおりに私はこれから生きていこうと思う。



miho Hatanaka,

数年来、複数の学校で看護師・介護福祉士を目指す学生への心理学の講義を受け持っている。講義では毎回、その日の内容に関連したワークシートを用いて学生に考えてもらう時間をもっているが、好評なワークの一つに「自分が余命（3か月と指定）を宣告されたとして、その期間をどのように生きるか」について考えるワークがある。このワークを始めた当初はテーマが重くはないかということも考えた。他のワーク同様、“しない自由”も認めて個々の負担には配慮するものの、結果的に、学生の言葉で記せば「今までに考えたこともないようなこと」を考える機会となり、「自分にとって大切なものは何か」を問う経験となるようだ。

さて、今年度もこのワークを行った。そのまとめは一先ず置くとして、この準備をしている時に私が大学院生だった頃を書いたレポートの存在を思い出した。老年心理学特論の講義で出された課題。そのレポートに、加除修正を加えて下記に記す。



【第15話 レポート『老いて死にゆくことについて 一身近な者の死からの所感—』より】

初めて人の死を身近に経験したのは同居していた祖父が亡くなった時である。小学1年生の3学期の始業式の朝で、目覚めると母が「おじいちゃんが亡くならはったさかいに、今日は学校には行かへんねん」と言った。当時の感覚で言って“それは学校に（しかも始業式）行かないに値することなんだ”ということと、明るいよく晴れた朝だったことを覚えている。祖父は材木問屋のいわゆる3代目のぼんぼんで、高祖父・曾祖父の築いた財産を一代で費やし、何軒もあった長屋を全て失ったと聞いた。背の高いハイカラな優男で、髪にはいつもきれいに櫛が通っていた。朝には温めたミルクを飲み、新し

い物好きで、高めの声でよく長唄を口ずさんでいた。子ども好きでもあったのだと思う、植物園や動物園に連れて行ってくれたり、当時の大きな 50 円玉が手に入るとまだ自分で買い物すらできない私にくれたりした。祖母の横でお灸のもぐさを祖父の背中に置いたこと、夏にはたくさん飼っている鈴虫の世話を手伝ったこと、レコードプレイヤーを扱わせてくれてソノシートを自由に掛けていたことなど、細かく口うるさい祖母に比べいつも飄々としており、傍に居て好きにさせてくれていたように思う。その祖父の死は、少し前までいっしょに暮らしていた人が「いなくなる」ということがあるのだ」ということを、決定的に私に知らしめた。

祖母は、私が看護学生の時に亡くなった。東本願寺に出入りする餅屋の“お嬢さん”で、肌のきれいな厳しい人であった。「おなごはんがおみやを出してお座りやすな」（女の子が足を投げ出して座ってはいけません）とよく叱られたものである。私が看護師になると決めた時は職業に対する偏見もあり良い顔をしなかったと後に母から聞いたが、案外「まあ、そうかもなあ」と思って落胆もしなかった。それでも亡くなる前は大腿骨の骨折で長く入院し、看護師さんにもずいぶんお世話になったのだろう、母に「美穂ちゃんはええ看護婦さんにならるやろな」と言ったと聞いて、やっと自分が認められた気がして本当にうれしかった。いつもきちんと結っていた長い髪を、入院中は手入れがしやすいようにと短く切ったのは私である。「もうこの長さまで髪が伸びることはないだろう」と思いながらのことであった。祖母は思っていた以上に喜んでくれ、おかっぱになった髪で「すっぱりしてええわ」と言ってくれた。その後、短い退院生活を自宅で過ごし、母が最期のひと呼吸まで傍に居て看取った。死後の処置と化粧を施して、足をさすりながら「おばあちゃん、ようがんばったなあ。足、痛かったやろなあ。もう歩かんでええねんで。ゆっくり休んでや」と心のなかで願った。

もう一人の、母方の祖母が亡くなったのはそれからさらに 10 年ほどしてからである。幼い頃から祖母の家によく一人で泊まりに行き、かわいがってもらって大好きな祖母であった。最期の入院中に私が遠方から訪ねて見舞った折、目覚めて私の顔を見て、夢か現か「あんた、遠いところから来て、お腹空いてへんか？ おうどんでも作ったげよか？」と尋ねてくれた。大所帯を切り盛りした料理の上手な人で、何とも祖母らしいことと思いい「ありがとう。今はかまへんわ」と返した。もう名前を呼んでもらうことはなかったが、「あんたはお母さんによく似てきたなあ」と言われた時、ちゃんと私のことをわかってくれているのだとしみじみうれしかった。

このようにみると、それぞれの死は“老衰”の言葉に感じとれる“枯れていくような”様であり、悲しいには違いないが長く引きずらなくてはならない痛みを伴うものではない。自分が助産師ということもあって生と死については人以上に考える機会があるとは思いますが、身近な者の死がひどくつらいものではなく、むしろよい“終い方”ができたと思えることは恵まれたことだと思う。看取りの周辺の時期、死にゆく人が孤独ではなか

ったこと、できるだけ苦痛が少なかったこと、いよいよ最期の時が自然なプロセスを辿ったことは、本人だけではなく遺された者にも苦痛の少ないことなのだと思う。またその人と生前どのような関係であったかは重要で、ともに過ごした思い出や遺してくれた言葉が救いにもなるのだとつくづく感じる。「私のことを大切にしてくれた」という思いが今の自分を「これでよい」と支え、遺る者の心の整理の過程で重要な役割を果たすだけではなく、これからも生きていく者として力を与えられるのだろう。また単なる延命のための処置では成し得ないものがあり、その選択のなかに「生きる」ことの姿が顕れるということをして幼い頃から自然に身近にしたことは、私の死生観を豊かにしてくれていると思う。

一時期、特別養護老人ホームでの看護に携わった経験から、病院でも家庭でもない場での人の老い方について考えることがあった。胃瘻の創部の痛みのために怒りを露にする人、介助を受け押し込まれるように3度の食事とおやつ(!)を口にしなければならぬ人、寝たきりで体が硬縮し話しかけても何の反応も示さない人。ほとんどが親しい人に見舞いに来ることはない。歳を取り自然のしくみの中で死は近づいてくるのに簡単には“死ねない”人がおり、「この延命は何のためなのだろう」と考えた。“死ぬというのは大変なことなんだなあ”という何とも言えない思い。ああそうなんだ、古来、人は“自分の意思で”、“口で”食べる生き物であり、それが叶わなくなったら自然に枯れるように命を終える“ことができる”のに——。そしてその生を、ともにいて支える人の存在が必要なのだとつくづく思った。

私自身、自分の死についてもよく考える。それはいわゆる“終活”という言葉でくくるものではない。例えば何かができなくなって諦めたなら、その空間にはまた新しいものを容れることができるスペースができ、その時どきに合った自分で居られるような気がしている。そのような自分を思い描くことができるのは、すでに亡くなった者も含めて私にそのように信じさせてくれる者たちの存在があるからだと思う。大切な人たちがひとつ、ひとつ、そのいのちの営みを終えていく。その死によって、自分の「生きること」に向かい合いなおし、新たに歩もうとする。死は、身近な者たちからの最後の“Lesson”なのかもしれない。よく、生き、よく往きたいと思う。



吹き寄せとそば饅頭

タイトル名「対人援助実践をレポートするこの一冊」

第26回：第3章-その11-

The things that are most important can not be seen

著：渡辺修宏
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

よくわからない

前回、Aさんとのかかわりについて、『よくわからない』けど、『よくわからないこと』をして、『よくわからない結果』になった事例」と記した。詳しくは「対人援助学マガジン57号」の213ページから読んでいただければ幸いである。

(<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol57/39.pdf>)

ところで、よくわからない、と、3回も繰り返すのも、実にしつこいものである。

読み手もこれを読んで、さぞ、混乱したことであろう。ここまで繰り返す必要がないと思った方も少なくないかもしれない。ただ、書き手自身も大いなるためらいをもって書いたことも、あわせて指摘したい。対人援助学マガジン以外では、もう用いることのない表現だろう。

そんなことを考えながらこれを読み返していたところ、ふと、「星の王子さま」を思い出した。サン・テグジュペリが世に残したあの名作のことだ。実は私は、これまでに4回、「星の王子様」を読了している。

初めてこの作品を手にとったのは、小学生か中学生の時であった。そのときは、「なぜ、この作品は世界的に有名なのだろう。なぜ名作と呼ばれるのだろう」と疑問に思うほど、ほとんど内容を理解できなかった。

2回目に「星の王子様」を手にとったのは、たぶん、22歳の時だったと思う。その時になってはじめて、「ああ、これはメタファーに富んだ本だったんだ」と気付いた。しかし、まだその内容に合点がいかなかった。

3回目は確か、娘が生まれて、絵本を揃えるようになった時だ。娘に読ませたくて再読し

タイトル名「対人援助実践をレポートするこの一冊」

第25回：第3章-その10-

言葉に依らない援助の可能性

著：渡辺修宏
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

たが、正直、まったくその魅力に気が付かず、そのまま放置してしまった。今は自宅の屋根裏で眠っているはずである。

そして4回目が、つい最近である。「星の王子様」の原文はフランス語*1なのだが英語版が手に入って、英語の勉強のつもりで改めて読んだのであった。ようやくこの時、なぜこの作品が世界中で愛されているかが理解できた。

*1 星の王子様の作者であるアントワーヌ・マリー・ジャン＝バティスト・ロジェ・ド・サン＝テグジュペリ (Antoine Marie Jean-Baptiste Roger, de Saint-Exupéry) はフランス人である。よって、彼の作品の原文はフランス語となる。ただし、フランス (1945) よりアメリカ (1943) での出版のほうが早かったため、世に出たのは英語版のほうが先かもしれない。

彼は小説家の前に飛行家 (郵便郵送等のパイロット) であったため、その経験に基づく作品が多いことにもぜひ注目してほしい。実際、「星の王子様」でもその描写が多い。一説によると、「星の王子様」のストーリーは、彼の「サハラ砂漠での不時着とその後3日間の放浪 (1935年)」といった経験に基づくらしい。生と死の背中合わせの経験によって生まれた作品であることを踏まえながら読むと、この作品の本質が見えてくる気がする…。

出典

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%B3%E3%83%88%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%83%8C%E3%83%BB%E3%83%89%E3%83%BB%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%83%86%E3%82%B0%E3%82%B8%E3%83%A5%E3%83%9A%E3%83%AA>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%98%9F%E3%81%AE%E7%8E%8B%E5%AD%90%E3%81%95%E3%81%BE>

目に見えない世界

Aさんとかかわりを記した前回の原稿を読んで「星の王子様」を思い出した理由は、「よくわからない」という表現が、「星の王子様」の第21章に登場するフレーズ、「一番大切なものは、目に見えないだよ」という表現を連想させたからである。

ちなみに、この英語版*2では以下のように記されている。

Here is my secret. It is very simple: we do not see clearly, except when we look with our heart. The things that are most important cannot be seen with our eyes.

(意訳: ぼくの秘密を教えてあげるよ。とても簡単なことなんだ。ぼくたちは、こころの目で見ない限り、なにもはっきり見えないんだ。一番大切なものは目に見えないんだよ)

(最後の文のフランス語: Le plus important est invisible)

実は私は、この文章を読んで、「なぜ、これまでこの文章の意味に気が付かなかったのだろう」とショックを受けた。思わず手を止めて、しばし、呆然としてしまった。

ここでのショックを正確に語ることはできないが、以下、対人援助実践をリポートするための気付きとして、少しだけ、私の感じたことを記していく。

まず、私は、自身がかかなり思い違いをしていたことに気づいた。それは、誰かを援助するという時に、援助しようとする意図や援助するための目的がそのままに、しかるべき成果をもたらすことがばかりではないことが当たり前であるという気付きであった。つまり、私は思い出したのだ。援助者による援助行為など、時に独りよがり、過信に満ちた行為になりえるということ。

「〇〇が必要だから」、「〇〇になるべきだから」、「〇〇という変化をもたらそう」、というふうに援助者が考えて、そのためになんらかのアクションをその対象者に施しても、実際、援助者の意図通りの変化が、どれほどみられるというのだろうか。もしかしたらそのような恣意的な変化など、ほとんど起こっていないのかもしれない。むしろ、その対象者が援助を受けて、自ら何かに気づいて、何かを学んで、なんらかの変化を自ら起こしているのかもしれない。あるいは、援助者でもその対象者でもない他の何かがきっかけとなり、なんらかの変化を生み出しているのかもしれない。偶発的な変化が起こっているだけかもしれない。よくよく考えれば、それは自然なことである。

もしかして私は、「目にみえない働き」を軽視してしまっているのではないだろうか？

*2 おそらく英語訳にも複数のバリエーションが有ると思われる。私が読んだのは、IBC パブリッシングが 2023 年に発行した「英語で読む星の王子様新版」である。

—つづく—

新・島根の中山間地から Work as Life

第2回

「分けと介入」

野中 浩一



1. 生活の流れ

東京から島根に移住して18年。
家の周りは田んぼと畑と低い山々。

わが家から隣の家までは100m以上離れている。
私はいわゆる里山に住んでいる。

そんな、家もまばらな中山間地域だが、近所に小学校があり、
そしてその向かいに、集落唯一のお店、山田屋がある。

お菓子とおつまみ、そしてジュースとお酒を売っている、
表がお店、奥が民家といった、昔ながらの小さな商店である。

その日は、たまたまお世話になった方にビールを渡す必要があり、
私は夜8時すぎに山田屋を訪ねた。

店内に入ると、明かりがついているものの、人はおらず、
開いているかどうか、判断に迷った。

それでも、今日中にビールを持ってお礼に伺いたかった私は、
お店のガラス張りの縦長冷蔵庫からビール6本組みを取り出した。

すると、そのタイミングで奥から店主のおじいさんが出てきた。

私はそのビールを掲げて、「まだ大丈夫ですか？」と、この遅い時間に買い物してもいいか尋ねた。

「は？」

なにを言っているのか分からないという反応が返ってきた。さて、私の声が小さくて聞き取れなかったのか、私の言葉の意味が分からなかったのか、捉えかねた。

そこで今度は、「買わせてもらってもいいですか？」と、さっきより大きな声で聞いた。

「は？」

さっきと変わらない返事。早くビールを買って届けに行きたいけれど、どうしたらいいものか、少し焦る。そこで、「このビール買いたいんですけど、まだ時間大丈夫ですか？」と、さらに声を張った。

「はぁ？」

やはり伝わっていない様子。次の言葉が思いつかず、どうしていいか戸惑っていると、店主のおじいさんが気づいた様子で、

「あ～～、そんなこと聞く人はおらんよ。この店はおらが起きてる時間が開いてる時間だ。常連さんには夜9時すぎてから閉まったドア叩いて買ってく人もおるよ。カカカカ。」と笑う。

・・・余談

明治維新以降(特に第二次大戦後)、日本もグローバル社会と呼ばれる欧米センタードな土俵の上において、時間、建物、生活と仕事、なんでもキッチリ区切ることが当たり前になっている。

けれど、山田屋さんのような曖昧さ、区切りはあるけれど生活の流れに沿っていて柔らかい、そんな営みが自然なものとして体現されていることに、なんかほっこりする。

※店名は仮名

2. 精神医療と介入

学校（特に特別支援、通級、不登校対応等）において、精神医療やそこでの診断がとても大きな力を持つようになっていると感じている。医療連携という言葉も、学校現場でごく当たり前に耳にする。

こうした医療の供給体制が整った現代だからこそ、医療を妄信しやすい土壌にいることを自覚することが大切ではないかと考えることがある。そうした文脈において「①精神医学と身体医学の違い」「②発達障害にまつわる通説」「③診断（操作的診断基準）」について、2冊の雑誌『こころの科学』と『そだちの科学』の引用から考えたい。

① 精神医学と身体医学の違い

齊尾武郎は、『精神医学には、そもそも精神疾患は、身体疾患と同様の医学的疾患なのか、という根本的な問題がある。平たく言えば、「こころだって、からだです」というのは本当なのかということだ。』と述べている。心と身体は、繋がってはいるが違いもあり、心の医療と身体の医療の違いも大きい。

私がフリースクールで一緒に過ごしている高校生たちは、精神医療にかかり、何かしらの診断をもらい、薬を服用していることが少なくない。“精神”疾患における心の医療と、“身体”疾患における身体の医療は、大きな違いがあるにも関わらず、使う側にとってみれば「医者と薬」という共通イメージで一括りにされている。しかし実際は、『身体疾患の多くは「客観的」な「異常」所見に基づいており、それを裏づける生物医学的な疾患過程がある。しかし、精神疾患は客観的な異常も、はっきりとした生物医学的な疾患過程もまだ判明していない。』しかし医療に携わらない利用者の側からすれば、こうした違いがあるとの考えすら思い当たらないのが通常であろう。

『精神疾患を心理社会的に理解することは、一般社会で起きている種々のトラブルを精神医学の文脈で理解することにつながる。従来であれば精神疾患と考えられていなかった精神・行動の「問題」、「異常」を精神疾患と見なし、精神医学的な治療対象にするようになる。』このような動きが、良くも悪くも精神科や心療内科を身近にし、なにかしらの診断をもつ人を急増させている。

例えば、学校で不適応を起こすと聞き取った状態像をもとに診断名が付き、それが適応できない理由として語られる。こうして不適応など種々の「問題」を精神医療の領域の範疇^{はんちゆう}の「異常」であると“決め”ることによって、その人の状態としての共通認識を生じさせている。

② 発達障害にまつわる通説

北村俊則は、『広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害が（他の疾患とは異なった）一つの大カテゴリーに含まれるという「仮説」が支持できるかどうか』『そうだったとして、それらが脳の機能障害だと断定してよいのか』と述べている。

「発達」に「障害」という考え方が用いられるようになって、種々のうまくいかなさに理由がついて安心できた人がある。それは本人に限らず、家族や、先生や上司などである場合も多い。一方で、理由がついたことで、可能性が停滞してしまったり、自分が普通じゃない(※1)という実感をもってしまうこともある。

北村は、発達 (development) とは『感じ方、考え方、行動の仕方の特徴あるいはその能力を指しているのではないか。』として、『障害の程度は個体とそれが置かれた環境の齟齬の程度である。』と述べている。

発達障害=脳の機能障害というどの本でも書いてあるような通説すらも、あくまで今の時点で有力とされている仮説である。脳の神経ネットワークについての研究は日々進化しており、今も新しい発見が行われている途上である。当事者以上に、当事者支援の制度設計をする国や地方自治体が、こうした道半ばの考え方をどこまで制度に織り込むのか、その塩梅は、良くも悪くも多くの人生を変えるだけの力を持っていることを忘れてはならないと、私は感じている。

北村は言う。『八人に一人から三人に一人の割合で起きうる「障害」があるのだろうか』と。

③精神医学の診断（操作的診断基準）

武井明は、『思春期外来での精神科医の仕事は、受診した子どもたちに「こころの病気」の診断をつけるところから始まる。』と述べている。『しかしながら、そのような操作的診断基準は PTSD の項目を除いては、「こころの病気」の原因を扱ってはならず、受診した時点で診断基準に当てはまる症状がいくつあるのか、あるいはどれくらいの間、症状が持続したのかによって診断がなされる』

医療法人社団五稜会病院のホームページでは「操作的診断基準」について、『精神疾患は、原因が不明で生物学的な検査方法がなく、臨床症状によって診断せざるを得ないため、信頼性の高い診断を行うために設けられた診断基準』であり『原因や病態から症状を説明出来るような身体の病気の診断とは全く異なる』と表記している。

この文言からも分かる通り、医師や医療関係者は、「操作的診断基準 (DSM や ICD 等)」の「不確かさや限界や課題」を知っている。このことは診断のみではなく、精神医療そのものや、精神疾患において用いられる薬についても同様のことが言えるだろう。

一方で、受診する側の子どもや家族、連携している学校や先生は、「診断結果」の読み取り方や、「疾患や症状や障害」の特徴と対応の仕方を学ぶことはあっても、精神医療が抱える、こうした不確かさや限界、発展途上の分野であるがゆえに問題視されている課題に触れる機会は少ないのではないかと感じている。

医療的に見ることは、その子の「部分」に着目することである。医師も、できる限りその子の全体像に迫りながら理解を深めて診断や投薬をしようとするが、その試みが完全ではないことを (多くの場合) 自覚している。一方で、学校や家庭でその子を見ている先生や家族は、時間的・空間的に、その子の生活の「広

域」を見渡すことができるという強みがある。先生や家族も、医療による診断はあくまで病院に行った一刻の診察やアセスメントによる、その子の“ごく一部”から判断されたものだと理解し、寄りかかりすぎないことも、ときに必要であろう。

3. 安全の感覚

私はフリースクール運営を始めた17年前から、不登校や発達障害のレッテルを貼られた思春期の子の中に、既存の理論だけでは説明がつきにくい、乳幼児期における「安全感」の積み重ねの不全を感じるものがあつた。

つまり、心身や脳の発達が著しい乳幼児期に、(自分でコントロールできない)不安感や緊張感を蓄積することで、将来にわたるホルモン分泌や自律神経の調整に支障をきたしているのではないかと感じていたのである。

そんな中、『そだちの科学』の中に、『近年、諸処の精神疾患や発達障害、養育環境的な悪影響等を広く包含して、その共通背景が神経レベルでシステマチックな調整不全であるという枠組み』で説明されることが増えており、『神経調整不全の主な要因の一つとして考えられているのが、乳幼児期の“協働調整”体験の欠如・欠乏である。』との記述を見つけ、今まで私が不登校の子ども達と接する中で体験的に感じていた、その子が根底に抱える不安や緊張に根差した「気力の湧きにくさ」「落ち込みやすさ」の仕組みが理論化されていることを知り、興味を持った。それが、迷走神経を鍵として、自律神経の働きを生理学の視点から解説した『ポリヴェーガル理論』(※2)である。つまり、急増している心の問題等について、神経レベルでの協働調整の不足が共通しているというのである。

乳幼児期の子どもは、自分で自分の状態を言葉で表すことが難しい。また、眠いのにぐずる、お腹がすいているのに匙や食べ物を投げるなど、一見すると矛盾するような行動も多い。このように機嫌の揺らぎが大きく、自分の機嫌をうまく調整できない乳幼児期に、身近な大人が(分からないながらも)機嫌をとり、だっこしたりあやしたりお世話を工夫しながら、一緒になってどうしたらいいかを模索する「協働調整」の時間は、子どもの情緒を形成するうえで大切な時間である。日々の暮らしの中で、乳幼児の協働調整について、心からの関心をもって小まめに(量)、そして深い共感をもって丁寧に(質)行えるのは、やはり生活を共にする親(生みの親、育ての親や乳母)であり、そうした子どもの育ちの重要な事柄を、アウトソーシング(預けること)で補うことは難しいように思われる。

特に、特性が強い子、繊細な子、考え方や行動に独自色が強い子は、安易に大集団の中に入れると、周囲とのズレ感が生じ、不安や緊張を溜め込みやすい。その前の準備運動として、身近な大人と一緒に、家庭で十分な協働調整の時間を過ごすことが良いと経験的に感じている(この準備運動期間は人にもよるが、体感的には生後5年程度だと思われる)。それが、思春期における持続的な不安や緊張状態、気力薄弱状態による不登校やひきこもりを引き起こさないための、安定したホルモン分泌や自律神経の調整機能を

育むと私は考えている。ただし、こうした考え方は、古くは三歳児神話や母の愛情不足論など、親の側を傷つける材料として使われていた歴史があり、十分な配慮が必要であろう。

ポリヴェーガル理論が、胡乱（うろん）な考え方として一蹴されるのか、不登校や発達障害が急増している裏付けやトラウマの理解として歓迎されるのかは、まだわからない。和訳された入門書を読むと、同じことが繰り返し書かれているが、数値やデータがなく、ひたすらに文章で説得されている感は否めない（心の分野では、数値やデータをこじつける疑似科学が指摘されており、数値があればいいというものでもないが）。動向を見守りたい。

4. いじめのジャッジは誰のもの

いじめ防止対策推進法の第二条では、「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係にある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」をいじめと定義している。やや飛躍して、「受け手がつらいと思ったら、それはいじめである」という解釈を目にすることもある（※3）。

まず、「いじめを防止すべき」という考え方、および「いじめを受けた側を守るべき」という考え方は、誰からも異論が出ないであろう。しかし私が知る限りでは、いじめの事案が起きたとき、関係する子どもたち誰もが不満や不安を感じていることが多く、明らかにどちらかが加害者でどちらかが被害者であるというケースは、それほど多くない（※4）。

ではその場合に、いったい誰が加害者と被害者を分けるジャッジをするのだろうか。先に訴えたかどうか、普段の行い、先生との関係性、個人の繊細さや精神疾患の有無など、何を判断基準とするのだろうか。

ふと思い出すのが、私が小学校3年頃の出来事である。「キョンシーごっこ」（※5）という遊びが流行り、鬼ごっこように、ジャンプしながら逃げるキョンシー役の子どもたち数人の額に、道士役の子ども1人がお札を貼っていく（貼るマネをする）といった遊びである。あるとき、キョンシー役の子がおでこにお札を貼られた勢いで、壁に頭をぶつけて（ぶつけられて）泣いたことがあった。もちろん故意ではなかったが、やられた子はショックからか、「あいつにやられた」と先生に訴えた。やった側の子は、遊びでやっていたのに突然告げ口されたことに戸惑いを見せ、腹を立てていた。

この件での先生の判断は難しい。やられた側の子（Aくん）は、普段は粗野なふるまいが度々問題になる子で、どちらかというところまで訴えられる側の子であった。一方でやった側の子（Bくん）は、確かに遊びの中で勢いがつきすぎていたことや、普段から乱暴な言動があるAくんに対してやり返しの気持ちもあったようである。今回の件だけで見るなら、Aくんはやられた側であり、たんこぶもでき、涙を流しながら訴えている。

話は変わるが、女子同士の関係はより複雑である。陰口や仲間外れにするなど、部外者の目に見えにくいやりとりが多い。そのうえ、そうした陰口や仲間外れは、本人や仲間内で自覚されていなかったり、やった側と目される当事者からは、「自分もやられていた」や「(別の) あの子もやっている」という、自分だけじゃないという主張がなされることも多い。これまではリーダー格で仲間外れを主導していた子が、クラスが変わってから逆に復讐されて、仲間外れにあって孤立するといった因果応報も少なくない。このような複雑な状況の中で、子どもより権力が強い先生や家族などの大人が、「被害者・加害者」などとジャッジをして、絡まった糸をさらに絡めてしまうことは、よく見る光景である。

こうしたいじめの対応について、気を付けるべき点がいくつかある。今回はその中でも「①ストリートレベル官僚」「②犯人捜しバイアス」の2点について考えたい。

① ストリートレベル官僚

いじめの訴えがあった場合、以前は学校の先生やその家族など、その子に関係する大人が必要に応じて関与するといった、良くも悪くもゆるやかな（そして多分に主観的な）見守りや指導である場合が多かったように思う。一方で、今は教育委員会が積極的に関与する例も多く、場合によっては児童相談所や警察など外部の組織が介入することもある。また、本人や家族など当事者不在の中で、学校の管理職や教育委員会が教員と共に対策会議を開いて方針を決めるケースも見られる。

そうした、本来子どもを支える側である大人の動機は、すべての子どもたちの成長を見守る姿勢や、子どもと家族1人1人の日常の安息よりも、子どもの安全を守るという名目のもとで、組織としてどう介入・対処するかといった「社会的道義」や「組織として決められた役割を果たす道理」が先に立っているように思われる。突如持ち上がったいじめという事態に、日常の授業や活動ではない緊急対応を迫られ、決められた対処をしないと自分たちが責められる側になるという強い緊張感もあり、大人自信が防衛的になってしまうことは、ある意味当然である。まして対策や対応をしてもなお、世間（という名の他人事の正義）からの批判に晒されやすい情報社会であれば、尚更である。

さて、行政学や社会学において「ストリートレベル官僚」という言葉がある。これは、官僚制の末端の職業、（私もその一員と思われるが）教員や警官や福祉職など、クライアントと直に接する立場にある官僚のことである。その態度や行動は微細な裁量に満ちており、裁量をとおして実質的な生殺与奪の権利を行使する抑圧機構に転化しうる危うさを持っているとの指摘がある。同様のことは、専門職による「専門家支配」という言葉にも表れている。

教員や教育に関わる様々な専門職（私も含まれる）は、クライアントに対して強い立場にもなりうる。そのことに無自覚なままに、道義を楯に、相手1人1人への理解や配慮が希薄になったとき、問題は大きくなる。そこには、いじめをジャッジする側だったはずが、容易にいじめる側に変化する怖さがある。「福祉に生命や生活を支える力が一定程度あるからこそ、逆に生命や生活を苦境に陥れる可能性も有しているのである。その最前線にストリートレベル官僚たちはいる。」という言葉忘れてはならない。

②犯人捜しバイアス

いじめという言葉は、とても強烈である。社会的な影響力が際立っていて、多くの人を防衛的にしてしまっているように思う。この点は、『失敗の科学』の中で、「魔女狩り症候群」として書かれているエピソードを紹介したい。

ある海外の事件で、母（およびその恋人）の虐待と育児放棄により幼児が亡くなった。その際、報道によって怒りの矛先が、関与していたソーシャルワーカーの女性および地区児童安全保障委員会の女性に向けられた。そのバッシングはさらに高まり、解雇を求める160万件もの署名嘆願や、家族への殺害予告にまで発展した。さながら魔女狩りのように、子どもを保護できなかった責任を問い、強い非難をもって反省させ、今後職責がしっかり果たされるよう要求が高まった。

その結果なにが起きただろうか。社会的な非難を恐れて、ソーシャルワーカーの辞職が急増し、辞めずに残ったソーシャルワーカーの負担増とそれに伴う仕事の質の低下が生じ、ソーシャルワーカーによる家庭への強引な介入が行われ、その結果、家族から引き離される子どもが急増（および里親に預けられる子どもが増加）した。加えて、報告文書が弁明と自己防衛のために長文化し、余分な事務の時間が増えた。つまり、肝心な子どもや家族にとって良いことは何一つなく、さらに期待されていたこととは反対に、福祉職の質が著しく低下したのである。

筆者は言う。「非難が人の心理にもたらす影響は大きい。（中略）問題は、避難したり訴えたり裁判にかけたりすれば、相手は責任感を強く持つようになると思い込んだままでいいのか、ということだ。今のところそれで説明責任が強化されたという証拠はひとつも出ていない」と。提供された一面的な事情しか知らない中で、安全な場所から人を非難し反省を求める身勝手こそ、いじめ、ハラスメント、虐待と定義していいのではないだろうか。その集団心理の影響は、社会全体に暗い影を落とす。

ここでアンパンマンの作者、やなせたかしの言葉を2つ引用したい。「正義のための戦いなんてどこにもないのだ。正義はとても不安定なもので、ある日、突然逆転する。」正義を笠に着ることは簡単である。「悪人を倒すことよりも、弱い人を助ける。」これらの言葉のように、スケープゴートを探したり魔女狩りをするよりも、目の前の身近な人のためにできることをするのが建設的であろう。しかし、そうとばかりはならず、単純な解釈で感情を暴走させてしまうのが人であり、集団心理であると言えるのかもしれない。

5. 区分けと介入

「いじめ」「ハラスメント」「虐待」「性暴力」といった、社会的な道義に反する事柄についての言葉のイメージは強い。ゆえに、一度そのレッテルが貼られた場合には、事の大小に関わらず社会的なダメージは大きい。「いじめ」「ハラスメント」「虐待」「性暴力」は、かなり幅広の事柄を含んでいる人的な災害と言

えるであろう。災害であると考えたら、地震や豪雨のように、誰もが分かる（震度や避難警戒レベルのような）「災害レベル」を設ける必要があるのではないだろうか（※6）。こうした強烈な言葉が使われないこと、使われないような社会になることが良いように思うが、それが難しいのであれば、もう少し詳細に物事を捉えられるようにした方がいいと私は感じている。

さて、今回の文章全体を通底するテーマとして、日常生活を歪めかねない、「無関係の他人事」による介入の有害性を論じてきた。そしてその対極には「身近で親身」な関わりがある。（※7）

時代も内容も飛躍するが、「無関係の他人事」が、「身近で親身」な日々の営みを奪う例を挙げたい。帝国主義の時代に列強が介入した国々は、100年以上経った今でも混乱の最中にある。とりわけ、①紛争解決の名目のもとで、自国の軍隊を勝手に他国に侵入させる、②産品や人（奴隷）などその土地の資源を一方的に搾取したり、貿易と称して自国のものを押し付ける、③勝手に国境線を設けたり利用したいように他国を割譲する、などといった、自己都合による無理な介入を行ったときに相手国の生活は破壊され、混乱する。私は歴史や政治の専門家ではないため、歴史認識については教えを乞いたいところであり、私自身も顧みる必要がある点も多い。とにかく、日常的な関わりがない中で、社会道義的な大義名分を唱えながら区分け・介入することは、そこに暮らす生活者の平素の営みを破壊する危険を常にはらんでいる。

以上から、ミクロな物事・マクロな物事どちらについても、暮らしの流れに逆行するような他人事の区分けや介入は、それ自体が人の安全を脅かすこと、権力による弱者の抑圧という側面があることを、私も含め、子どもの教育に携わるすべての人が折に触れて思い出すことが大切ではないだろうか。そして、そうした感覚は、「身近」に関わる人間としての「親身」な誠意の中から生じてくるように感じている。

注釈

※1 普通：人の状態で普通という状態を定義することは難しい。しかし一方で、個人的な感覚として「普通である（他者と同等である）」「普通でない（他者と同等でない）」という思いに駆られることは往々にしてあるのではないだろうか。

※2 このポリヴェーガル理論は、「安全である感覚」「聴覚（視覚）過敏」「内臓状態の調整」を重要視するとともに、安全な人間関係が神経系のバランスを促し、社会的交流の中で健康・成長・回復を促進するという考え方もつ。これは、私がこれまでフリースクールの運営やカウンセリングにおいて拠りどころの1つとしている、カール・ロジャーズの「パーソン・センタード・アプローチ」とも一部共通するものを感じている。

※3 法律：既存の法律や制度に基づいて業務を遂行したり、法律や制度を人のために利活用することは大切なことである。一方で、その法律や制度が、人のためになっているのか、功と罪のバランスはどうなっているか、考え、検証し、改善していくことはもっと大切なことであろうと考えている。立教大学法学部のホームページに、『「人のために法はある」という古いことわざがあります。法は人がつくるものであり、人がより良く生きるために、そして、人々が暮らす社会をより

良いものにするためにこそ、その存在価値があるという意味です。』との言葉がある。この「存在価値」を問う姿勢を忘れないでいたい。反対に『悪法も法なり』という言葉もある。最近では校則への世間の目が厳しくなり見直しが進んでいる。見直されたルールや法律すべてが悪法だったとは思わないが、やはり「無条件に従う」よりは、「定期的に人の手が入る」くらいが健全なように思う。

※4 いじめ：これまでには「いじめ」というカテゴリに入れていいか憚られるほどの、残忍な事件や陰湿な事件もある（私は、これらを単に「犯罪」と呼ぶべきだと考えている）。身近にいる大人が、そのような陰惨な事件が生じないようにすることは当然のことである。一方で、子どもは宝である。誰もが陰と陽を持っているが、それも含めて宝である。大人の側が、自分の存在をかけて、（宝のうちの）どちらが正義と勝手にジャッジせず、あたたかく対話すること、間違っていると思うことは違うと言うこと、それを自分の言葉として、大切な子どもたちに届けることが大切なのではないだろうか。

※5 キョンシー・道士：本文において、キョンシーは死体が動き出し人を襲う、中国版のゾンビ妖怪。道士は、僧侶や陰陽師のように、邪を祓う役職。

※6 人的な災害レベル：ネット検索すると、いくつかのレベル設定がされている事例を見かけるが、それが自然災害と同様に周知され認識されているかといえば、否である。

※7 他人事の介入：親身な関与になるか、他人事の介入になるかは、「受け手」の感覚が目安になる。AとBとが対立している場合、どちらか片方が介入を求め、片方は介入を求めている場合、その介入は単に力関係を逆転させて「いじめる側」と「いじめられる側」を逆転させるための加担にならないか、AとB双方に対してニュートラルな立場でいられるか、介入する側が注意深くあることが求められる。

引用・参考文献

こころの科学 234 (2024年3月1日発行) 日本評論社

pp.23-28 武井明「思春期外来での臨床から」

そだちの科学 no.42 (2024年4月20日発行) 日本評論社

pp.9-13 北村俊則「発達障害は疾患概念ではない」

pp.14-20 涌澤圭介「発達障害の診断と治療」

pp.60-65 齊尾武郎「子どものこころを薬で治す—診断の膨張と製薬業界・精神科医」

医療法人社団五稜会病院ホームページ「精神科ならでは?の操作的診断とは」

<https://goryokai.com/files/libs/2821/202403030809365963.pdf>

ステファン・W・ポージェス著 花岡ちぐさ訳 (2018)『ポリヴェーガル理論入門 心身に変革をおこす「安全」と「絆」』

春秋社

マシュー・サイド著 有枝春訳 (2016)『失敗の科学 失敗から学習する組織、学習できない組織』ディスカヴァー・ト

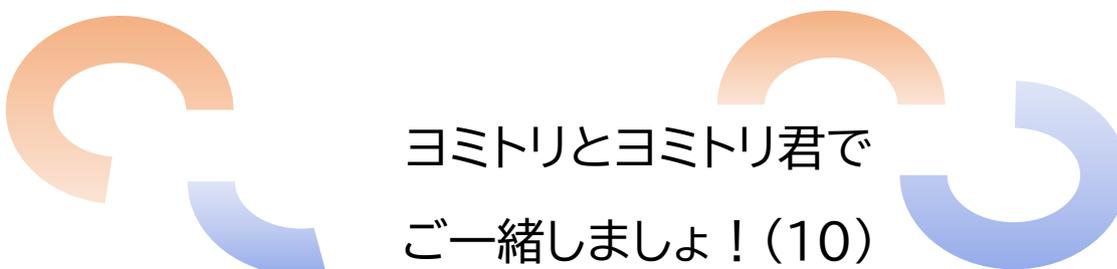
ウエンティワン

長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志著 (2007)「社会学 (新版)」有斐閣

PHP研究所編 (2024)「新装版 やなせたかし明日をひらく言葉」PHP研究所

立教大学法学部・大学院法学研究科ホームページ「はじめに」

<https://lp.rikkyo.ac.jp/introduction/index.html>



ヨミトリとヨミトリ君で 一緒にしましょ！(10)

高木久美子

意識があるのに、わかっているのに、言葉を発しているのにそれが伝わらないことについて、どう向き合い、取り組んでいくかということは、人の尊厳に関わる大切なことです。技術と技能を心で繋ぎ、障害のある方のコミュニケーション支援・レクリエーションの楽しい機会の提供を目指して非営利で活動しています。活動を通して学んだこと、感じたことなどを書いていきます。

「軽く、軽く、とにかく軽く」

ヨミトリ君活動の危機？ピンチはチャンス？！いろいろなことがあった直近3か月でした。指筆談ヨミトリとヨミトリ君の活動について、閉じ込め状態にある障害当事者の方の言葉を交え、ご紹介します。

■2024年6月●日

國學院大學の柴田保之先生・奈苗さんご夫妻が主宰するコミュニケーション研究会でヨミトリ君プロジェクトの活動を紹介する機会を得ました。初めて介助付きコミュニケーションの指筆談に出会った2013年9月、続けて参加した2014年1月の重度障害の方の思いを聞く会「きんこんの会」以来、10年ぶりに訪れた國學院大學たまプラーザキャンパス。建物がものすごく綺麗におしゃれになっているのにまず驚く。

発表はヨミトリ君開発者の岡田さんが主講師を務め、ヨミトリ君開発の経緯やメカニズムについて説明。その前後に私が指筆談の技能とヨミトリ君の技術の両軸での支援活動の意義と指筆談による対話支援の広がりについてアピールしました。ヨミトリ君体験コーナー大盛況。指筆談のデバイス化に多くの方が関心を持ってくださっていることを実感。うれしかったです。先天性の障害のある方と初めて指筆談で対話し、大きな学びの時となりました。お話しできてとても楽しかった。

Aさんは初めてお会いしたにも関わらず、お母さんとの対話に私に指筆談での介助を依頼してくださいました。光栄なことでした。またお会いしたい。

それにしても岡田さん、疲労困憊の度合いがすごすぎて心配。ヨミトリ君を何機種もそれぞれ衝撃を緩衝するケースに入れて、PCとタブレットと荷物もすごい。思わずスタッフ打ち上げ会場までキャリーを運ぶ申し出をしましたがほとんど役に立たず、ヨミトリ君支援には筋トレも必要なことを学ぶ。

■2024年6月●日

リハビリテーションの専門雑誌に執筆を依頼されて以来ずっと書くことが頭を巡っている。依頼は遷延性意識障害当事者ご家族の推薦による。指筆談・ヨミトリ君への関心や評価を様々な繋がりの中で広めていってくださることが本当に有難く、がんばらなくちゃと思う。しかし、ヨミトリ君はともかく、技能として証明されたもののいまだに魔法とか超能力とかといわれる指筆談ヨミトリ。権威のある専門誌に書

いて大丈夫かな…。などと私が臆してどうする。しっかりしろ。貴重な機会、当事者の方々の言葉を書く。

■2024年6月●日

諸般の事情で急きょヨミトリ君支援訪問をしばらくお休みすることになり、慌ただしくキャンセルの連絡や、指筆談対話支援への切り替えや、しかしピンチはチャンス。それぞれのご興味に応じて新しい企画を練る。

ヨミトリ君のキャンセルで思いがけなく時間ができて、ここのところのご支援でお聞きした話をいろいろ思い返しています。言葉で思いを表出することの大切さ。「こうしてかいているときは じぶんらしくいられます。」自分自身になれるとも。また「すぐくはやくかける」「はなすようにかける」と言われることが増えました。早く読み取ればよいというものではないけれど、でもその人が言いたい速度で伝えられているなら、きつともどかさも軽減されるのでは。言うのをやめておこうと思っていたこともやっぱりたまには言いたいし、結果、ご家族やケア従事者の方々への感謝の言葉だけでなく、いろいろ不満や文句もたまには出ます。人間だから。でも、時折りご家族が困惑される場面も。

■2024年6月●日

前の続き。柴田先生のコミュニケーション研究会終了後の交流タイムに、Aさんはなぜ初対面の私に読み取りを頼まれたのか。お母さんとの話し合いは、Aさんの自立に関する大切な内容でした。私と少し話をしてみても、この指筆談のレベルなら介助を依頼できると一応の合格点をくださったのだと勝手に解釈しつつ、ふと「その時に合った距離感」と「指筆談での家族以外の介入」ということが浮かびました。地元の東海地方で継続して訪問しているご支援対象の方々は、当事者の方はもちろんご家族も、交流を続けているうちによく知り合い、親しさも増してきます。ご家族の日々の介護のたいへんさも目の当たりにする中で、指筆談で読み上げている際に当事者の方からから時に強い言葉や、批判的な言葉が出てくると、私の中に「ご家族が聞いている中でこれをそのまま読み上げてしまってよいのだろうか」という迷いが生まれます。当事者の指となり、口となって書かれたままと読み上げるのが私の務め。伝えるのに忖度をしたり、ましてや「それは言わない方がいいのでは？」とか「他の言い方にしませんか」などと相談したりした時点で私の役目そのものが変わる気がします。でも、親しくなったご家族がその言葉に驚いたり、動揺したり、時に涙をこらえたりされるのが目に入れば、やっぱり一瞬躊躇します。

Cさんは日頃お母さんと指談でコミュニケーションを取っておられるそうだし、関東は熟練の指筆談実践者の方も多いので思いを表出する定期的な機会を持っておられると思います。でも私が東海地方でそうになっていっているように、介助者をご家族とも絆や共感が深まっていくと、当事者の人は、いつも指筆談介助をしてくれる人に強い言葉を伝えてもらいにくくなるのでは。そんなことを思ったのです。会ったばかり、言葉を交わしたばかり。でもこの者は指筆談で伝えられるレベルはありそう。初対面だからこそ、情の部分抜きでこの人になら言いにくい言葉も読み上げ依頼できる。違ったかな…。「あの時をふりかえってこんなことを思ったのですが」と、もしAさんに会えたら言ってみたいけど、「なにをごちゃごちゃいってるんですか」と言われてしまうかな。すぐくしっかりした考えのある青年だった。お母さんとの真剣勝負のその後は？今度はコミュニケーターとしてではなく対個人でお話ししてみたい。お会いできただけでもうれしかったけれど、更に、考える良い機会を作ってください、ありがとうございます

ました！

■2024年7月●日

などと考えていた時に、ちょうど継続支援の B さんのところで、関連する事を B さんが言ってくださった。クレームを出さなければいけない事があったようなのだが、といっても私にはすごく建設的な批判に思えたけど、指筆談のできるご家族にそれを言わせるのは可哀そうだ、忍びないと、そう言われた。高木さんから伝えてもらえるといいと。言いにくいことは高木から伝えてもらおう。すごく名誉な任務に思えて来ました。でも、ということは別の場面では、「できれば高木さんじゃなくて他の人に読み取ってもらいたいな」と思われることもあるということだろう。指筆談介助者の圧倒的な不足。理想は、実践者が十分にいて、閉じ込め状態にある方の様々なニーズに柔軟に応えられる環境があることだけど現状ではそれはとても難しい。というわけで、やっぱりヨミトリ君なんですよ！スイッチは使えないけれどもひずみゲージのヨミトリ君ならその微小圧を認識できる当事者の方がたくさんおられるのです。操作の練習はもちろん必要だけど、とにかく軽く押せるので、練習して操作に慣れたら文字入力アプリを活用して、自分の言葉を自分で入力できます。きっとできるから、一緒にやっていくから。希望を持って、取り組みを続けていきましょう！

■2024年7月●日

このところたいへん多くのヨミトリ君体験のご依頼をいただき、本当にありがたく嬉しい。すぐにご訪問対応できないのが申し訳ないですが、同じエリアで複数のご依頼があった場合は、同時期に回らせていただくことでご負担いただく支援交通費を調整できたりします。ご家族が指筆談ができて日常のコミュニケーションが可能な場合は、岡田さん単独でヨミトリ君支援に。また対話支援でじっくりお話しを希望される場合は高木が単独で。もちろん基本の技能と技術両軸での支援も引き続きお受けしています。運動機能の障害の状況によってはヨミトリ君が向かない場合もありますが、ICTボランティアの仲間からアドバイスや意見ももらえますので、お悩みやご要望はお気軽にご相談ください。

■2024年7月●日

昨年 12 月の東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」(以下、ひまわり)主催の柴田先生講演会に参加され、指筆談練習中の C さんからのご依頼で対話支援に。お話が弾み、C さんご兄妹と 3 人で楽しい午後の時間を過ごしました。ご兄妹の何気ない会話。途切れることなくお互いが言葉を紡ぎ合わせ、他のご家族のことも話題に。仲の良いご家族であることがよくわかります。「指筆談練習しているのですが、全然読み取れなくて…」C さんが言われました。コツはちょっとした力の抜き方なのですが、一人で練習している時は読み取りが合っているのかどうかの確認も難しいので、ご苦心されていると思います。ポジショニング等をもう一度確認して、C さんにトライしていただきました。あ、書けますね。読み取れていますね。「え?! 今、わかりました。え一つ、全然できなかったのに。わかった！」C さんうれしそうです。「お兄さんに聞いてみましょう。どうでしたか」「すごくかるくかけました。おまえどうしたんだ。きょうはすごくうまいじゃないか」「できたよ、お兄ちゃん。」成功の要因として一つ考えられるのは、お訪ねしてからずっと指筆談でお兄さんが書き続けておられたこと。実際に、ヨミトリ君のパネルを押す荷重も、指筆談でお話しする前と後では後の方が力が出る事

例が数多くあります。目には見えないとても小さな力。でも確かに体を動かしているのです。そして相手の言葉を聞いて、いろいろ考えながらそれに応えるために書字想起を続ける。運動機能に良い働きかけがあるのだと信じたいです。そしてもう一つの大きな要因は、Cさんがあれこれ迷わず、自然体でポジションに入ったこと。実はこれが成功の大きな鍵なのです。

もう一度やってみましょうと、再度挑戦すると、Cさん「あれ、今度は全然取れない。さっきは取れたのにー」。「おい、いまはすごくつよくおさえていたぞ。さっきはすごくかるくかけたのに」とお兄さん。そうなのです。出力がわずか数グラムの荷重圧のレベルなので、要はそのわずか数グラムを上回る力を当事者の人の手にかけてしまうともう動かせない、そういう極めて繊細なレベルなのです。よし、さっきは上手くとれたからもう一度と思った瞬間に介助者の手には無意識に力みが入り、当事者の方の力を上回る力で介助者が自分で当事者の出力の部分を消してしまいます。指筆談の練習に立ち会うとよく起こる事象です。お兄さんのコメントはズバリ的を射ていました。Cさんも気をすぐ取り直して、「でも今日は最初びっくりするぐらい取れたので、よかったです。あの感覚を忘れないように練習を続けます」と言ってくださいました。

ヨミトリ君 4 号も持って行ったので、パネルに手を載せて操作の基本のところをやってみていただきました。パネルの左右の押し分けで荷重の数値変化がちゃんと出ていました。表示でも確認できたので、今度は岡田さんに来ていただいて、ゲームや音楽アプリをやってみましょうね。

■2024年7月●日

ヨミトリ君体験の 2 回目をご予約いただいていた D さんは、遷延性意識障害となられる前はピアノがご趣味と伺っていたので、ヨミトリ君キャンセルの代わりとして、D さんには指筆談対話支援と新企画「音楽訪問プログラム(仮)」のモニターをお願いすることにしました。長くピアノ講師として活躍中のサトちゃん先生は遷延性意識障害の生徒さん他、ダウン症や自閉症のお子さん等、生徒さんの 3 分の1が障害をお持ちの方で、それぞれの人の障害の特性や困難さに寄り添って、その人が音楽を楽しめるさまざまな工夫をされています。D さんのベッドサイドにキーボードを設置して、サトちゃん先生がクラシックや J-POP の名曲を披露。D さんは「このきょくひいたことがあります。やっぱりなまのえんそうはいいなあ」と大喜び。大胆なコード進行で曲が盛り上がったところでは「きたね すごくいい」と、演奏を聴きながら指筆談で感想が。リアルタイムでサトちゃん先生にお伝えし、サトちゃん先生もうれしそうです。音楽を一緒に楽しむ、共鳴、呼応といった言葉が音楽に乗って弾んでいるような気がしました。楽しかったです。

寝たきりの全介助で生活している遷延性意識障害の方々には気軽に外出することも難しく、意思疎通できない日々の中で、「たいくつなときがあります」「かぞくいがいのひととこうりゅうしたい」と言われることがあります。この新しい企画で、みんなの元に楽しい音楽の訪問があつたら、きっと喜んでいただけそう。サトちゃん先生はひまわり会報 34 号のインタビュー記事でもご紹介しましたが 10 年来の生徒さんで遷延性意識障害のヨーコさんと指筆談の練習を続けています。とにかくいろいろな人と練習すると指筆談は上達が早いので、演奏の後に D さんと少し読み取る練習をしていただきました。その指筆談がまた興味深かったです。何度かのトライの後、ずっとサトちゃん先生の手が動いた時があり、その動きを見て、今、読み取れた！と私は確信したので、「サトちゃん、今取れたましたよね！○か×か D さんはどちらを書きましたか。さあ答えをどうぞ！」ともう完全おめでとうムードで、回答を待ったら、なんとサトちゃんは逆の方の答えを言った…。え、どうして。書いてたのに。私はちょっと困惑して、D さん

にコメントをお願いしたところ、Dさんも「さとちゃんせんせい なんでまちがえたんだろう。かきやすかったし ちゃんとよみとれたとおもったんだけど ふしぎだな」と怪訝そう。力が上手く抜けて明らかにDさんの書いた通りの動きをサトちゃんはなぞっていた。でも、サトちゃん自身が読みとったと思ったのは逆の方向の答えだった…。うーん、不思議。指筆談の取り組みで初めてのケースです。検証課題がまた一つ。

■2024年7月●日

5月に「じつはみえていないんです。ほとんどみえなくて、どうしようと思って、いえなくてこまっています」と話してくださったEさん。対話支援でご訪問して、「今日はヨミトリ君はお休みですが、見えなくても左右の押し分けが体感でしっかりわかるように岡田さんが準備してくださっているので、楽しみにしてくださいね」とお伝えすると、「たのしみです。とてもうれしい」と言ってくださいました。ヨミトリ君はできないけど、その分今日はたくさんお話しをしましょうね。なにげない雑談、おしゃべりタイムとなりましたが、ご家族からの質問にもしっかりと答えられ、特にショートステイの利用を、ご家族は「Eは行くのは負担に思っているのではないかと」と気にされていましたが、Eさんは「だいじょうぶ。むしろたのしみ。びょういんはとてがかいてきて、かんごしさんもしんせつだし、もっとかいうすをふやしてもいいくらいです」と。「家にいたい」とショートステイが気が進まない当事者の方もおられるので、「本当ですか。我慢していませんか」とEさんに聞いてみたけれど、「ほんとうです。すごくきにしています」と言っていたら、ご家族も気がかりを全面的にはぬぐい切れないものの、前向きな回答にほっとしておられる様子だった。「ほかの(遷延性意識障害の)ひとはまいにちどうしているのかなとおもっています。あえたらうれしいです。たかぎさん、そういうきかいをつくってもらえませんか。」うれしい。当事者の方からの提案やリクエストは大歓迎です！企画を立ち上げたら、Eさん準備委員になってくださいね。

■2024年8月●日

体調不良で活動をお休みされた岡田さんが完全復活を遂げてヨミトリ君と共に戻って来ました！どうもコミュニケーション研究会の時の疲労困憊は、その不調の予兆だった模様。すっかり元気になっただけでなく、この間にヨミトリ君の様々な改善・改良を試みられたとのことで、ヨミトリ君バージョンアップしての復帰はうれしい限りです。

そして驚くべきことが起きました。8月に入りヨミトリ君支援を本格的に再開したのですが、ブランクがあったので、せっかく上達途上だった岡田さんの指筆談の技能がどうなったかが少し気がかりでした。早くフィーリングを取り戻せるといいと思っていたところ、なんと、岡田さんの指筆談は復帰後に驚異的な上達を遂げていた。まず読み取るのが早くなり。そして前よりも格段に長い時間読み取れるようになりました。そして正確。岡田さんが読み取った後に当事者の方に感想を聞いてみると、皆さん一様に、「すごくかるくかけてびっくりしました」「とてもじょうずになりました」「どんなれんしゅうをしたんですか」と驚いておられました。岡田さんは「何もしていません。休んでいただけ」と。ミステリーです。

上達の理由をいろいろ考えたのですが、結局のところ今回の体調不良と入院がよかった、というのは言い方が悪いですが、最近ただでさえ運動不足で体力・筋力が落ちていたところ入院と退院後の静養で、さらに筋力が落ちた。力が出せなくなったことで、当事者の方の手を柔らかく持って押さえなくなりました。そして当事者の手は解放され、軽く動かせるようになった。これしかない、という結論に達しました。

まさに指筆談の要諦です。当事者の方の手をできるだけ軽く支え、動きを拘束しない負荷のかからない環境を作る。軽く、軽く、とにかく軽く。ところがこれが難しい。指筆談の技能は本当に奥が深いです。指筆談を勉強されている方は簡単にあきらめしないで、辛抱強く練習を続けてください。岡田さんはただ体力と筋力が落ちただけではなく、本当に一所懸命指筆談に取り組んでいました。一緒にがんばりましょう！

■2024年8月●日

パーキンソン病の進行で四肢全廃となられ目を開けるのも難しくなられた F さん。7 月に E さんに予告をした、見えなくてもヨミトリ君の左右の押し分けが実感できる方法が完成し、ちょうど訪問日となった F さんに試していただきました。一つ目の改良は PC に接続しなくてもヨミトリ君と中継器のみで、光と音で左右どちら側を押しているかがわかりやすく表示されるようになったこと。そしてもう一つは、左右の手に小さな振動発生器を取り付けることで、力を入れている左右の側を、振動によってまさに体で感じられるようになったことです。F さんには振動方式が特に好評で、「これはすごくわかりやすいです。とてもいい」と絶賛していただきました。岡田さんもうれしそう。2021 年のヨミトリ君 1 号の記念すべき初お試しも F さんがしてくださったことを思い出しました。ヨミトリ君の訪問支援は、地元の東海エリアの場合はだいたい月に 1 回のペースでの定期訪問を目指しています。そういえば改良や節目の時、最初に試していただくのが F さんのタイミングになることが多いな。横で見ている奥様が「今、すごく集中しています」「関心のある時は表情が全然違います」と教えてください。うーん、F さんすごいけど、奥様が本当にすごい。ご家族の気づきから学ぶことがたくさんあります。F さん、いつも鋭いコメントと温かい励ましをありがとうございます。奥様、フォローをありがとうございます。E さん、今日のテストで確認した効果と課題から振動装置を更に使いやすくして次のご訪問の時に持参しますね。楽しみに待っていてくださいね！

以上、2024 年 6 月～8 月のヨミトリ君と指筆談の活動の一部をご紹介します。

岡田さんの指筆談が上達し、ヨミトリ君体験時の当事者の方の操作感のヒアリングを岡田さん自身で聞けるようになったので、今、徐々にヨミトリ君支援の単独訪問の回数が増えています。対人援助学会の年次大会、ヨミトリ君は今年も参加申込みをしました。また、春に参加してご好評を得たメーカーフェアの岐阜県大垣市での開催にもエントリーが決まりました。きっかけは春に参加した刈谷マイクロメーカーフェアで、ブースに来られた方が「大垣は福祉関係の出展が比較的多いので参考になるのでは」と教えてくださったこと。大垣で会えてお礼が言えたらいいな。E さんやヨーコさん他、多くの当事者の方が要望されている当事者同士の交流や発信もいろいろな形で定期的に機会を作っていきたいです。

6 月のコミュニケーション研究会の配信動画を観られた G さんが指筆談で書いてくださった感想が届きました。指筆談の魅力と必要性。そして「言葉を伝えられる事は人として生きている証だと思う」と。大切なメッセージ。ありがとうございます！

No Promises. Just Possibilities.

確約はないです。でも可能性を信じましょう！

あなたがわかっていること伝えたい。

情報を必要としている方、表出しているのにまだ伝わっていないあなたの大切な方に、指筆談とヨミトリ君が届きますように。

ご一緒にしましょ！

ヨミトリ君HP

<http://www.aizyoushien.com/index.php/yomitokun-project/>

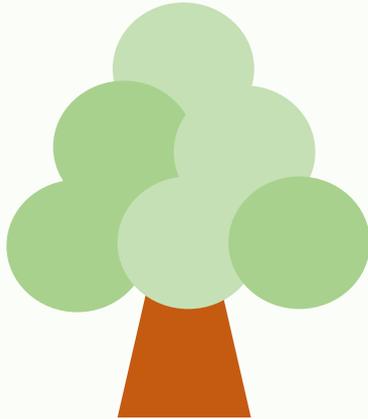
[東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」](#)

<http://site.wepage.com/himawari>

<筆者プロフィール>

インドネシア語・英語通訳・翻訳を経て、介助付きコミュニケーション「指筆談ヨミトリ」による意思疎通支援をライフワークとする。「ご一緒にしましょ」代表。脳卒中障害者のいきがづくり「NPO 法人ドリーム」理事。「東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」役員。第 52 回 NHK 障害福祉賞優秀賞。ヨミトリ君共同考案者。

ご一緒にしましょHP <https://www.goishshimasho.com/>



こかげのにちじょう⑨

～他の人に迷惑をかける～

鳴海 明敏

8月某日

<エピソード>

高校1年生のしのぶさんが、女子トイレ個室のペーパーホルダーを壁から叩き落としてしまいました。そのことについての職員とのやりとりです。

職員:どうやって壊したの?

しの:イライラして壊した。ドンドンして(手で叩く真似)5回くらいやったら外れた。

風呂に入るか入らないかで、悩んでた。

しのぶさんは、自分が壊したことをすんなりと認めています。そこで、職員は次の段取りとして、謝罪をさせる方向に話を持っていこうとします。

職員:トイレトペーパーホルダーを破壊したことについて、どう思ってるの?

しの:悪いと思っている。

職員:何が?

しの:壊したこと。

職員:何で破壊すると悪い?

しの:修理しないとダメ。修理代、お金かかる。

しのぶさんは、自分が破壊したことを認めていて、自分がしたことについては「悪いことをした」という意識があり、修理にお金がかかるという認識もあり、その点については謝る必要があると思っているようです。入所した当時のしのぶさんは、なかなか自分がやっちゃったことを認めることができませんでした。だから、私は、自分が壊したことをすんなり認めているしのぶさんに成長を感じるのですが、職員の方は、「何について、どう謝罪をする

のか」ということに関心があるようです。

職員:それだけ?あとは?

しの:わかんない。

職員:いつもそこにあるものが無いて、困らない? 不便じゃない?

しの:わかんない…不便ってわかんない。それを不便って言うの? なくても普通に使えるじゃん。家にだってトイレトーパー入れるのないし。無くても使えるよ。

職員:他の人に迷惑かかっているとは思わないの?

しの:かかっているかなあ～って感じ。ウチはべつに…使えるから…。壊したことは、悪いと思ってる。でも、ウチはべつに困ってない。

しのぶさんは、特別支援学校高等部の一年生です。学園の設備を壊してしまったことは認めており、そのことについては謝罪する意志もあるようです。

しかし、職員としては、皆が使うものを壊した、そのことで他の人に迷惑をかけた、だから、「他の人に迷惑をかけたこと」について謝罪しなければならないと思っているのですが、しのぶさんには「他の人に迷惑かけた」という意識が全くありません。

一方、職員の方は、しのぶさんが「他の人に迷惑をかけた」ということを理解できていない、ということに気づいていないのです。

しのぶさんは、特別支援学校に通っているので軽度の知的発達遅れがあります。それに加えて少し発達障害の傾向もあるようです。「心の理論」を持ち出すまでもないのですが、「他の人のが、どう思っているのか」ということを理解するまで、こころが育っていないようです。

職員の方は、高校生にもなって、「人に迷惑を掛けたことを謝れないのはダメ」という意識があるのでしょうか。

職員にしのぶさんとのすれ違いに気づいて貰い、そのうえで、「他の人に迷惑をかける」ということについて、どうしたらしのぶさんに解ってもらえるか、一緒に工夫してみようと思います。

(了)

8

現象学としての書道 ～あそぶこと・生きること～

生涯発達支援塾TANE 櫻井育子

はじめに

個展を開くことになった。自分の発達というものをここまで感じた「期間」がこれまであっただろうか、と思う。思えば勢いを増してきたのは、ここ数年が顕著だ。そう思うとあらためて、この出会いと、つながりに感謝するとともに、そのさまざまな機会を逃さずにしぶとく生きてこれたわたし自身に、なにかしら強みのようなものがあるのだ、と少しはそのあたりについて調子に乗ってもいいと思えるようになった。そこで今回は、少し自分のことについて振り返る。

感覚を育てる

「違和感」という言葉があるが、なにかしっくりこない、納得がいかない、引っかかる感じ、である。もちろん誰もがそれらを感じてはいるものの、そこで我慢をしたり、納得できることを覚えながら、人間は成長する。さまざまなことにつまづくわたしは、①違和感を感じやすい、②違和感を無視できない、の両方を持っている子どもだった。ところが、この①と②があったからこそ自分自身を助けてきたと言っても過言ではない。幼稚園をやめたのもそうだった。違和感があってもそれらを気にせず無視することで、いつしか自分自身を蝕んでしまい、我慢に疲弊し、他者を許せず、不機嫌になってしまう。だから多くの人が「我慢」を強いられている状況の中で、「我慢しない」を選択すると、責められ、「我慢しなさい」と叱られる。これでは全ての人が不機嫌になるしかないのだ。根本的に解決しようと思うならば、ひとりずつがちょっとずつ「我慢」を手放すことの方がいい。

そもそも感じてしまう違和感を、感受性を、蓋してはいけない。高校時代、いちいちいろんなことにつまづくわたしが、茨木のりこの「自分の感受性くらい、自分で守ればかものよ」の言葉に出会ったとき、感受性が高いことを生かして生きるほかないのだと思った。

夢中！を育てる

ありの行列に夢中になり、ベビーカーに乗ったとき足元に見える道路の石の粒が線になっていく様子を面白がり、土に線を引き、道路にジョウロで絵を描き、暇さえあればひたすら絵か文字のようなものを書いていく。祖父は自分で工作をするのが好きだったので、本を買うたびに名前を書いたり、カバーを作ったりする。そのとき書くのが筆だったので、硯で墨を擦るのを手伝ったり、小刀やハサミもだいぶ早くに使えるようになった。夢中になったら、一人でずっとやり続けるので、誰かに遊んでもらわなくても永遠に自分の時間を謳歌できていた。夢中になって何か

をしているとき、人間の脳はフロー状態と言って最も発達しているという。外的なストレスのない環境で夢中になって遊び続けたことは、その後のわたしの「独学力」のようなものに役立っていると自分で思う。知りたいという好奇心、自分で調べるといふ本を読む力、教えられたことをその通りにやることや、みんなに合わせて動くのはやや苦手だったが、自分で思いついたことを一人で遂行していく力はあった子どもだった。だから書道は続いた。工夫し、思った通りの線を出すために、淡々と書き続け、追求するのが好きだった。

ワタシを育てる

メタ認知ができるようになり、他者と自分の違いに気づくことも発達段階では必ずあって、わたし自身も他者との違いや感覚のズレ、それに伴う劣等感と優越感の醜い感情状態に翻弄された思春期を過ごす。青年期になって強さを得たあとは自分の正義を出してまるで敵との戦いのように理想を分かってくれないと力み、疲弊し、最終的に「適応障害」という状態に陥った。この時期の自分に、「遊び」という感覚があまりなかったなと思う。「理想」を掲げ、仕事に向き合ってきたが、現実に見えるものは理不尽さしかないと悲しむことが多かった。あんなに一人で勝手に楽しみ、遊び、幸せだった頃の感覚を知っているにも関わらず、組織の中では独りよがりな思考になっていた。

実は今でも「理想」は変わらない。言っていることは変わっていないのだが、今わたしは「分かってくれない」と思っていない。表現し続け、言い続けてきたことによって他分野に「感覚」として理想を共有し、つながっている仲間がいるのだと知ったからでもある。変容した、という表現も実はしっかりいっているわけではなく、わたしという存在のあり方は変わっていないし、むしろ理想はそのまま持ち続けている（しつこい）。

書くことは生きること

書くことが好きだった、とにかくあれは遊びだった、と思う。そう思った延長線上に、流れるように「個展を開く」というイメージができた。ここで重要だったのは、「鍛錬し自信がついてか有名になってから個展を開く」という思考がどこかにあったという気付きだ。「書く」ということはもはや自分にとっての遊びであり、生きることであり、その一部を切り取って「こんな感じで生きてますよ」と示すことなのだと思ったとき、純粹に、「観にきて欲しい」と思った。どれだけの人の応援をこれまで受けていたのかという気付きもあった。「うまくなってから発表する」は、教育現場で培われた感覚かもしれない。「やってみよう」「やってみた」と表現することの重要性、それこそが自分の「今」を生きることでもある。大人がこの遊び感覚、表現しやすさの心地良さを知らないと、教育関係、支援する立場、だからこそ逆に自分自身を「表現する」ことを恐れたり、評価を恐れたり、他者に不必要なプレッシャーを与えすぎる可能性は大いにあると思う。また、場を開く人そのものがまだ恐れの中にいるということはよくある。

「すみあそび」そのものの活動普及と、「表現する場をもっと自由に」というテーマは、VUCAの時代の教育のあり方にヒントを与えると感じている。これからさらに一緒に感じ、味わい、遊び、語らい、ともに生きる方と出会うために、実践研究を続けていきたい。

櫻井育子（生涯発達支援塾TANE 代表）

宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。書家、書道ファシリテーター、生涯発達コーディネーター。

「違いは魅力」をテーマに発達・心理・文化芸術・教育・福祉のつなぎめをコーディネート。

「全国すみあそびproject」、「書と生き方研究所」、実施中。<http://ikuko-sakurai.com>

コソダテノシンリ (8)

中谷陽輔

連載第 8 回目です。前回から、コソダテにおける「スマホ・タブレット」という、かなりの大テーマに挑んでいます。スマホ・タブレットについて、子どもの心身への影響として、①学業面、②対人面、③生活面と大きく分けつつ、今回は①学業面に絞って述べました。具体的には、そもそもスマホ・タブレットによる学習への良い効果を示すデータがないどころか、むしろ悪影響であるということがかなり確固としていることを論じました。

今回は、②対人面への影響について述べます。先に言っておくと、前回も述べたように、コソダテにおけるスマホ・タブレットの使用について、メリットを打ち消してしまうほどの大きなデメリットがある、といえそうです。

スマホ・タブレットが近くにあるだけで、学業面だけでなく対人面も・

「子どもの幸せを願わない親はいない」なんて言います。実際にすべての親がそうかどうかはともかく、人間が社会的動物である以上、子どもたちは、いずれ社会に出ていきますし、それぞれな居場所を持てるようになってほしい、みたいに願う親は少なくないと想像します。

もちろん、大人になるまでの間にも、子どもたちは、多かれ少なかれ、人と関わりながら生きていきます。その過程で、子どもたちは、いろんな友人たちと遊んだり、喧嘩したり、我慢したり、相手の気持ちを察して譲ったり、時に言いすぎてしまったり、相手に配慮した言い方を言えるようになったり、と様々な体験をしていながら他者との関係を築いていくでしょう。

しかしながら、初めて人と人が関わる時、その隣に、スマホ・タブレットなどいわゆる「モバイル端末が近くにある」だけで、対人関係の質が奪われてしまう、という研究結果があります。

具体的には、初めて出会った人と会話するときに、モバイル端末の有無がその関係性の評価に及ぼす影響を調べる実験が行われています(Przybylski & Weinstein, 2012)。会話する二人の横にあるテーブルに、モバイル端末が置かれた条件と、メモ帳が置かれた条件を比較すると、モバイル端末が置かれた条件の方が、相手との関係性の質や親密度の評価が低くなったことが示されました。

目の前にいる相手がスマホ・タブレットを触っていると、関わっている感じが大きく低減することは想像に難くないでしょう。ただスマホ・タブレットが「近くにあるだけ」でも、相手と話していたとしても、仲良くなれた感じがあまりなくなってしまう、ということです。

[前回](#)、「Brain Drain(脳からの資源流出)」とよばれる現象として、スマホが「近くにあるだけ」でも脳の認知資源が消費され、課題成績が落ちてしまうことを紹介しました。今回紹介した実験結果も、ある意味でその延長で理解可能かもしれません。

スマホ・タブレットが身近に、多くの人のそばにあるようになっていくほどに、人と人との心の距離は離れていく…という、なんだか示唆的な結果のように思えてきたりします。

スマホ・タブレットでコミュニケーションをとっているとどうなる？

言うまでもなく、インターネットの出現と広がり、世界の常識を変えました。さらに、スマホやタブレットという、個人が常に所有可能なモバイル端末の一般化により、あらゆる個人が、インターネットを通じて世界各地の人や情報とアクセスできるようになりました。

そういった世界的な流れの中で、従来の対面的(Face-to-Face: FTF)コミュニケーションとは異なる新たなコミュニケーション方法として、コンピューターを介したコミュニケーション(Computer-Mediated Communication: CMC)を行うことが、かなり一般的になってきています。

そのような中で、CMC によって、個人の世界は広がらず、むしろより狭くなる傾向にある、ということ、違和感を持たれるでしょうか。

[前回](#)紹介した、日本医師会と日本小児科医会の連名で作成された啓発ポスター『[スマホの時間、わたしは何を失うか](#)』には、対人面への言及として、「人と話す時間が減ります」とのみ書かれています。ただ正直なところ、スマホを見てばかりだと、会話する時間が減る、という以上のデメリットがありそうなのですが、どういったことがありそうでしょうか。

…CMC には、インターネット上で行われるコミュニケーション全般が含まれ、いわゆるメール・チャットの他、ソーシャル・ネットワーキング・サービス(Social Networking Service, SNS)と呼ばれるものも含まれます。

総務省(2024)が行った調査によると、SNS の利用率は、思春期・青年期世代では90%超と、他の年代に比べて特に高くなっています(13-19歳:90.3%、20-29歳:93.0%)。ただ同調査において、SNS の利用目的として最も多く挙げられるのは、「従来からの知人とのコミュニケーションのため」(87.2%)となっています。「知りたいことについて情報を探すため」(63.4%)というのが次点となっていますが、その次に多く挙げられるは「ひまつぶしのため」(33.4%)です。インターネット上で社会的なネットワークを構築可能なサービスが SNS なのに、そこで構築されているのは、特に新たなネットワークではない、ということが往々にしてありえるのです。

ちなみに、スマホが普及する前の、携帯電話が徐々に浸透しだした頃から、携帯によって人間関係を拡張することはできず、むしろ関係性をますます狭くする方向へと機能する(小林・池田, 2005)ことが指摘されてきました。さらに、携帯メール利用頻度の高い青年は、メールの相手が自分と異なる意見・価値観をもつことに不寛容になる傾向があることが示されています(小林・池田, 2007)。換言すれば、CMCを行うほど、対人関係は偏重・固定化する傾向にあり、自分の思考が相手と異なることに耐えにくくなるのです。

また、CMC と FTF を比較して検討した実験(佐藤ら, 2010)から、CMC のほうが攻撃性は増加すると明確に示されました。具体的には、行動指標や他者評定において FTF よりも CMC のほうが高い攻撃性を示しており、つまりは客観的に見て、明らかに攻撃的な言動が増えていた、ということになります。なお、この研究では、CMC のほうが匿名的かつ文字で自分の意見を言いながらやりとりが進んでいくため、より攻撃性が高まる結果になったと考察されています。

子どもたちがゲーム中にひどく攻撃的な言動をしているという様子を見たことあるという方は一定数いらっしゃるのではないかと想像しますが、腑に落ちる点もあるのではないのでしょうか。

これらの結果は、脳機能の観点からも説明可能です。[前回](#)も紹介したように、スマホ・タブレットによる学習を行っているとき、脳の中でも思考・判断や感情制御などを司る前頭前野は不活性状態になります(川島, 2018a; 産業能率大学総合研究所, 2020)。そして、“Use it, or lose it”という言葉で示されるように、スマホやタブレット使用により、脳を使うことを止めてしまえばその機能も止まってしまいます(川島, 2018b)。さらに、縦断研究の結果(Takeuchi et al., 2018)から、インターネットの使用頻度(週当たりの使用日数)が増すほど、言語性知能及び脳の成長量が減少します。

スマホ・タブレットを使い続けていくと、脳機能が成長せず、いわば「劣化」します。

結果として、合理的に考えがたくなり、より拙い言葉しか使えず、感情コントロールが行いにくく、感情的な行動ばかり示すようになる…というのは当然の帰結です。ちなみに、インターネット依存症となった人においては、コカイン依存症と同様の脳繊維の損傷がみられることが明確になっています(Lin., et al., 2012)。

スマホ・タブレットを使うほどに、対人コミュニケーションの熟達とは程遠い経過を進むことになるのです。

依存症という病が、個人の意志力や自己制御とは無関係に、依存的行動を起こす媒体(薬物やギャンブル、スマホ・オンラインゲームなど)によって誰にでも起こりうることは以前よりも随分知られるようになってきました。なお、縦断研究の結果から、問題のある携帯電話の使用は、もともとの不安や自己制御力によって予測されないことが明確になっています(Coyne, et

al., 2019)。

何より、『スマホは私たちの最新のドラッグ』(Hansen, 2020)であり、『スマホは最強(最凶)の依存物』(中山, 2020)なのです。

…ただでさえ脳の発達途上にあり、社会が広がっていくはずの子ども時代。

そんな時に、スマホ・タブレットなどを介して行われる CMC により、脳が発達せず、劣化し、個人の社会的ネットワークはより閉鎖的になり、感情的な言動が生じやすくなり、対人コミュニケーションは拙くなっていく。

本来、対人関係力を磨く絶好のチャンスの時期に、CMC により対人関係力が低下していき、いわば、スマホでしか人とのコミュニケーションが取れなくなっていく…。

…どうでしょう。「人と話す時間が減ります」とのみ書かれた前掲の啓発ポスター『[スマホの時間、わたしは何を失うか](#)』について、それどころではない、子どもの将来にとって、大いなるデメリットがある、と考えるのは不自然なことでしょうか。

さらにもう一つ、これまでお伝えしたことから考えられることとして。

スマホやタブレットを使っていると、身近な人ばかりと関わるようになるとともに、攻撃性が高まります。そして、スマホやタブレットは、残念ながら、多くの子どもたちに普及してしまっている現状があります。

そんな中で、あってはならないことですが、ご自身の子どもが、いじめにあってしまったらどうなるでしょう？ それが昨今話題の SNS によるいじめだったら…？

一昔前のいじめなら、ある意味で家庭内に入ってしまうえば、いじめから離れられました。ただ SNS でいつでも繋がれてしまう状況では、家に帰ってもいじめは続きます。むしろ学校が終わってからのほうがより活発に始まる、とすらいえます。

そして、より攻撃的で乱暴な言葉で、より深刻に、より強烈に…より悪化したいじめに、お子さんが苦しめられることになります。

どのようなことにでもポジティブな面とネガティブな面がある、と言われます。

ただ、ここまでネガティブの度合いが大きいスマホ・タブレットに、子どもにとって重要極まりない対人コミュニケーションを託していいのかということ、私としては甚だ疑問です。

スマホ・タブレットを介さないコミュニケーションの回復に向けて

脳の発達過程として、前頭前野が発達を終えるのは20代半ばごろとされています。そして

ごく当然のこととして、子どもよりも親である大人のほうが、理性は働かせやすい状態にあります。つまり、子どもが、スマホ・タブレット漬けにならないよう、工夫できるとすれば、より理性的な判断が可能な、親御さんです。

日本小児科学会は、『スマホに子守りをさせないで』と[ポスター](#)や[リーフレット](#)を作成して啓発を行っています。

子どもにとっての対人関係の始まりであり、その後の対人関係の基盤になるともされるのが、親子の「アタッチメント(愛着)」です。子どもが泣いたり不快に感じた時に、親との関わりの中で、落ち着いたり、気分転換がなされるという繰り返しによって、アタッチメントは形成されます。

スマホに子守りをさせていると、親子のアタッチメントなど様々な面で悪影響であることは、想像に難くありません。

もちろん、スマホ子守りをしたくてやっている親御さんばかりではないと思います。

子どもが公共の場で騒がないように、子どもにつきスマホを渡して、動画を見せたりゲームを見せて落ち着かせておく。そうしたくなる気持ちはわからないでもありません。

ただ、これまで書いてきたように、スマホを渡すほどに、より子どもが落ち着かなくなっていて、騒がしくなりやすく育ってしまうとしたら、どうでしょうか。

もっと世の中が、赤ちゃんの泣き声を微笑ましく見守れるような余裕のある社会、万が一にも「うるさい、母親なんだから何とかしろ！」みたいな心無い言葉が決して投げられないような社会であってほしいと、心から願っています。

さらには、親御さんがもう少し子育てに余裕をもって取り組めるような風潮や制度がより広まり、スマホやタブレットに頼らず子育てができるようになる。そのようにして、子どもとのコミュニケーションがより促され、脳も健全に成長・発達していく。

そんな良循環を、夢物語にしないために、工夫し始められるところから工夫していきたいと私自身は、考えています。

・・・そのために、自戒を込めて、一つ提案したいと思います。

自分の好きな時間・タイミングに、短時間でも気分転換ができる。そう考えて、ついコソダテにおいて、気づけばスマホばかり見ているという親御さんは、少なからずいらっしやるかと思えます。

『ママのスマホになりたい』という絵本をご存知でしょうか。ママがスマホばかり見て、自分のことを見てくれないと困っている主人公・カンタロウ君のお話です。

私自身、「スマホばかり見てないでこっち来てよ～」といったことを子どもに言われたことは一度ではありません。絵本を読んでいて、痛々しいばかりに身につまされました。

子どもが親のところばかりに来るのは大変です。親だって人間。子どもから離れて一人落ち着きたいときもあります。今パツと終わらせたいこともいろいろあつたりします。いくら子どもたちが親の方ばかりに寄ってくるのが、今だけしかない貴重な時間だとわかっているけども。

ただ、そのための方法は、スマホでしかなしえないものなのでしょうか？

親自身が、いろんなものを楽しむ力を、スマホやタブレットで奪われているとしたら・・・？

とっても大切なものも、一緒に失くしてしまっているとしたら・・・？

スマホとの距離の取り方について、大人側が、成熟した前頭前野をしっかりと機能させて、改めて、しっかり判断していったほうがいいように思えてきます。

さて、みなさんはどのように考えたいでしょうか。

【引用・参考文献】

Anders Hansen (著)・久山葉子(翻訳) (2020). スマホ脳 新潮社

Coyne, S. M., Stockdale, L., & Summers, K. (2019). Problematic cell phone use, depression, anxiety, and self-regulation: Evidence from a three year longitudinal study from adolescence to emerging adulthood. *Computers in Human Behavior*, 96, 78-84. (<https://www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/S0747563219300664>)

笠木 理史・大坊 郁夫 (2003). CMC と対面場面におけるコミュニケーション特徴に関する研究 対人社会心理学研究, 3, 93-101. (https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/5602/jjisp03_093.pdf)

Lin, F., Zhou, Y., Du, Y., Qin, L., Zhao, Z., Xu, J., & Lei, H. (2012). Abnormal White Matter Integrity in Adolescents with Internet Addiction Disorder: A Tract-Based Spatial Statistics Study. *PLoS One*, 7(1), e30253. (<https://journals.plos.org/plosone/article?id=10.1371/journal.pone.0030253>)

川島隆太 (2018a). スマホが脳の発達に与える無視できない影響:脳トレの川島教授が2つの実験結果から分析(東洋経済 2018年5月20日付記事) Retrieved August 25, 2024 from <http://toyokeizai.net/articles/-/220685>

川島隆太 (2018b). スマホが学力を破壊する 集英社

小林哲郎・池田謙一 (2005). 携帯コミュニケーションがつなぐもの・引き離すもの 池田謙一(編著)インターネット・コミュニティと日常世界 誠信書房, pp.67-84.

小林哲郎・池田謙一 (2007). 若年層の社会化過程における携帯メール利用の効果: パーソナル・ネットワークの同質性・異質性と寛容性に注目して 社会心理学研究, 23(1), 82-94. (https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssp/23/1/23_KJ00004663342/pdf/-char/ja)

中山秀紀 (2020). 「スマホ依存から脳を守る」朝日新聞出版

日本小児科医会 (2024). 子どもとスマホ・メディア(一般の皆様へ) Retrieved August 25, 2024 from <https://www.jpa-web.org/information/sumaho.html>

のびみ (2016). ママのスマホになりたい WAVE 出版

Przybylski, A. K. & Weinstein, N. (2012). Can you connect with me now? How the presence of mobile communication technology influences face-to-face conversation quality. *Journal of Social and Personal Relationships*, 30(3), 237-246. (<https://journals.sagepub.com/doi/full/10.1177/0265407512453827>)

産業能率大学総合研究所 (2020). [特別インタビュー]東北大学 川島隆太教授「読む&書く」からこそ学びは深くなる』通信研修総合ガイド 2020 特集「いま、なぜ通信研修なのか」 Retrieved August 25, 2024 from <https://www.hj.sanno.ac.jp/cp/feature/201911/08-02.html>

佐藤 広英・日比野 桂・吉田 富二雄 (2010). CMC (Computer-Mediated Communication) が攻撃性に及ぼす効果 筑波大学心理学研究, 39, 35-43. (<https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/record/19159/files/5.pdf>)

総務省(2024).『令和4年通信利用動向調査ポイント』(https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/240607_1.pdf)

Takeuchi, H., Taki, Y., Asano, K., Asano, M., Sassa, Y., Yokota, S., Kotozaki, Y., Nouchi, R., & Kawashima, R. (2018). Impact of frequency of internet use on development of brain structures and verbal intelligence: Longitudinal analyses. *Human Brain Mapping* 39(11), 4471-4479. (<https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC6866412/pdf/HBM-39-4471.pdf>)

<プロフィール>

児童福祉施設の相談員。資格は、公認心理師、社会福祉士、臨床発達心理士など。大学院に進学後、研究者の道から方針転換して子ども福祉臨床の現場に飛び込み、早10年強。現在、仕事でもプライベートでも、子育て&子育て支援まみれの日々を送っている。プライベートでの子育てやらをめぐる由無し事を、ブログに月数回、不定期投稿中。 (<https://childcare-support.hatenablog.jp/>)

教室の窓から

令和 6年
(2024年) 8月
來須 真紀

夏休みが終わる

夏休みが終わろうとしています。保護者にとっては、「早く学校が始まらないかな?これでお昼ご飯の心配なくて済むわ。」教職員にとっては「あー始まってしまふ。うれしいような、もっと休みたいような。」という感じでしょうか?ちなみにケースワーカーとして出向してから4か月。ケースワーカーとしては、「早く学校始まらないかな。」と思っています。

運動会がはじまるよー。

9月、10月は運動会というところもたくさんあると思います(最近では、6月という学校も多いのですが)今回は、運動会について少し書きたいと思います。

運動会のプログラムあれこれ

運動会のプログラムと言えば、定番のかけっこ(徒競走)、綱引きなどの団体競技、リレー、ダンスや組体操などの団体演技。の3つで構成されているところが多いと思います。しかし、すべての学年が3種類の競技演技をすると時間的な問題(当日だけではなく、練習時間の問題も)があるので、1・3・5年は個人競技と団体競技。2・4・6年は個人競技と団体演技とか、どの学年も団体競技はなしで、個人競技と団体演技にする。などの工夫をしています。

実は、夏休み前には、自分の学年がどの種目をするかは大体決まっています。(毎年の慣例となっていることも多いので)ですから、教員が次にすることは、他の学年との細かい調整を行っていきます。ダンスをするなら、他の学年と曲が被らないようにするとか、団体競技なら玉入れにするのか綱引きにするのか騎馬戦にするのかみたいな相談をしていきます。

ちなみに、最近では組体操がプログラムからなくなってきています。私が勤めていた学校でも6年生がとりをする組体操は、いつの間にかダンスに代わりました。わが子の学校も6年前は組体操をしていましたが、なくなってしまいました。理由は、覚えていらっしゃる方も多いかとは思いますが、組体操の練習で亡くなった子どもがいるという事件が起こり、安全を確保することが難かしさとコロナ禍にあって3密を避ける運動会を求められたことみたいなのですが。。。地域や保護者からは組体操が

見たいという声もまだまだ多いのも確かです。皆さんは、どう思われますか？

運動会の練習あれこれ

夏休みが明けたらいよいよ運動会の練習が始まります。これがなかなか大変。お学年全体で練習することになるので、まず子ども人数がいつもより多い。これだけで、すべてのことに時間がかかる。そして、暑い。ほこり。コロナ禍。なかなかハードルの高さです。

教員は、その時その時に合わせて、対策を講じながら、練習をしていきます。暑さ対策としては、ミストの設置、こまめな水分補給。人数の多さに対しては、練習内容を事前に打ち合わせする、マイクを使う、指示の出し方の明確化、コロナ対策としては子どもたちの並びの間隔をあける、競技演技中以外はマスクをするなどなど。しかし、完全策というものはなかなかないので、悩むとことです。

運動会当日あれこれ

練習も乗り切り、迎える当日。教員はいつもより早くの出勤です。出勤したらグラウンドを整備したり、用具をグラウンドに出して並べたり。子どもたちの登校もいつもよりは少し早めで、特に係(役目)がある5・6年生は、早めに来て準備したりします。子どもたちが登校したら担任の先生は、学級につきます。それ以外の教員は、引き続きグラウンド整備をしたり、受付をしたり、保護者の誘導をしたりとそれぞれが役割持っています。

コロナ禍の運動会

私が経験した運動会の中で、難しかった運動会ナンバー1は、やはりコロナ禍の運動会だったと思います。時間短縮や入れ替え制。暑い中のマスク着用などなど本当に考えることがたくさんありました。しかし、私が感じる一番心苦しく、辛かったことは子どもたちに対する「おしゃべり禁止、声出し禁止」です。もちろん、人が話をしている際に自分勝手しゃべるのは良くないですが、応援や歓声、友だちとのちょっとした会話を制限しなければならなかったことが、本当に辛かったです。

それでもやる運動会

それでも、運動会をやるの？とコロナ禍の時はよく聞かれました。やめてしまえばいいのにとよく言われました。しかし、運動会をやり遂げたという充実感を得たときの子どもの笑顔や運動会の活動で「この子、こんないいところがあるんだ」とか「あ、前より成長したんだな」と思えるところがあると「いろいろあるけど、運動会ってやっぱりいいね」となってしまいます。皆さんは、運動会について、どう思われますか？

ある看護科教員のアタマの中

5

～教員に転職してみた～

山岸 若菜

はじめに

この4月から10年以上勤めた訪問看護の仕事を辞めて、大学の看護科教員に転職しました。

「なんで？」とよく聞かれますが「やってみたかったから」です。

やってみたいことは何でもやってみる。それで失敗したと思えば辞めればいだけと思っています。

働こうと思えばどこでもいつでも求人があるのが看護師の強みです。

我ながら考えが軽い！

今回は転職ホヤホヤの現状を書いていきたいと思います。

異文化に飛び込んだ

教員として働き始めて4ヶ月が過ぎましたが、まだ全然慣れません。

看護の教員の働き方はブラックだと聞いていましたが、確かにそうかも。

特に看護科には実習が不可欠なので、それが働き方をしんどくさせているのかなと感じています。

看護は母性、小児、成人、老年、精神とざっくり領域が分かれています。

私は精神の領域を担当しているので、実習も精神科の実習についていくという感じです。

精神科の実習は学生も4年間の中で一度行くぐらいですが、成人は基礎だの急性期だの慢性期だのとその中でも分野が色々あるので、その担当の先生方は大変そうです。

だいぶ実習の量は減ったとのことですが、いつでもどこかの学年が実習に行っている状態なので、いったい自分は今年生の何の実習に行ってるのかわからなくなると話していました。

実習先に行って実習指導をして学校で授業をして学校運営の仕事もあって、そのうえ研究もつて。

そんな無理やん？と思います。

あと、お偉い人のしゃべり方や服装が独特。

割とレトロで昭和テイストの服装の方が多く、属性によって服装って固まるよな～としみじみ感じています。

でもちょっと楽しいと思えてきた

そんな感じで4月に入職してわけのわからないまま5月から実習が始まり、先生らしい服装も抵抗があり早速辞めたくなくて居ましたが、少し面白いと感じることも見つかってきました。

学校ではパッチリした目の大きな子やな～と思っていた学生が実習用のナチュラルメイクになるとつぶらな瞳だったり。

盛りすぎやん。

血圧測定の演習では血管が見つけれず「上腕動脈が行方不明で～す。」という学生がいたり。

死んでるやん。

学生が実習に行く前は「精神科ってめっちゃ怖そう」と言っていたのが「患者さんみんな普通の人やし、何なら優しいかも」に変わったり。

素直で最高やん。

この学生さんたちがどんな風に看護師っぽくなっていくのか見届けたいなと思えてきました。

いまだに続いていた悪しき習慣

そんな学生さんたちと実習に行っていると「まだやってんのかいな。」と思う看護界の悪しき習慣の話を知ることがあります。

それが実習先の指導者である先輩看護師からの理不尽な対応です。

この看護学生のあるあるは動画配信でも人気で、看護学生といえば『実習が怖い』と認識されつつあるようです。

どんな対応かというと、まず、無駄に怖い。

忙しいオーラを全開にして、話しかけずらくし、話しかけてもニコリともせず不愛想に返事をします。

そして学生は挨拶しても無視されるのが当たり前なところもあります。

確かに病棟はめちゃくちゃ忙しいし、愛想良くしてほしいとまでは思いませんけど、せめて挨拶ぐらいは返そうよと思います。

そういう対応でこの病院に勤めるのはイヤだってなったら、結局自分たちの首を締めることになるのね。

精神科の実習ではそんな対応をされることはないのですが、いつも学生さんたちは感激しています。

「挨拶したら返してくれはったんですよ。」

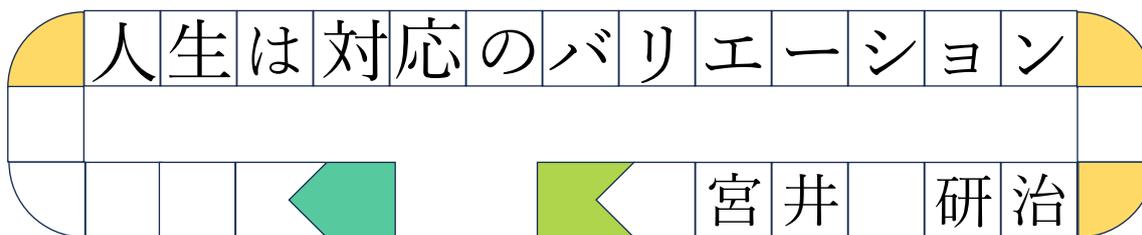
「自分がしゃべってるとき手を止めて聞いてくれました。」

当たり前なんやけどな～。

とりあえず一緒に実習に行った学生たちには、「自分がやられて嫌だったことは、働き出したらやめよう。やってもらって嬉しかったことだけ自分より後の人にやっていこ」と話しています。

「絶対そうする！」と今は返事してくれますが、そのままの気持ちでいてくれよと願っています。

こんな感じでまだまだツッコめることは少ないですが、これからいっぱい見つけていきます！



— 第6話 続・私説「岡田隆介」論 —

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんな楽しんでながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。（「そだちと臨床」研究会主催 対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

前号からの、私説「岡田隆介」論の続きです。前号に岡田さんの治療スタイルや、それを構成してきたであろう個性的な源泉みたいなものを書いてみました。個人的な岡田さんとの関わりから膨らませた私の思い込みとされるような言説と言われればそれまででしょう。しかしながら、書けば書くだけ私の中では、リアリティを帯びてくるのはなぜでしょう。そして、とにかく、岡田さんのメタファーは、「予想外の言葉による予期せぬ展開」を起こしうる何かを持っていると思います。今回は、その予想外のメタファーの持つチカラの解説から入ってまいりましょう。

1. 珠玉のメタファー

「カシオペア」、単に星座の名前ですが、これを岡田さんは巧妙にさりげなく、ある臨床事例検討の展開の中で使っていきます。時は2007年11月、場所は岡田さんの第二の故郷とも言える大阪、正確には事例検討会ではなく、当連載でも何度も紹介して

いる「そだちと臨床」誌の企画による座談会の中での発言です。

座談会に先立つこと、2007年5月に京都で開催された第24回日本家族研究・家族療法学会で一つの症例発表がされました。大内雅子さんの「母と子の6年間を振り返る」という症例発表に岡田さんが助言者として参加されてました。大内さんから、心理職として6年間に渡り、女兒(心理療法開始時期は、女兒は小学校一年生)との心理治療記録と児童養護施設での生活記録が、語られました。当時としては児童養護施設に心理職を常勤採用するのは先進的なことだったでしょう。また、その施設は伝統と格式のある養護施設であり、そこに新米心理士として着任すること、その女兒の事例は、困難事例でありながらも、施設で育たざるを得ない子どもたちが抱えるであろう共通項も多く抱えている事例であること、しかも舞台は、港ヨコハマ。こんなナラティブ、我らが岡田さんが燃えないわけではないと、今思い返してもそう思います。この大内さんの

事例発表、岡田さんのコメント、それを受けての企画座談会の一連について詳しく知りたい方は、「そだちと臨床 Vol.4」の特集記事「社会的養護と心理職の役割」(※1)をご覧ください。

さて、岡田さんのメタファーは、この特集記事の随所から拾い上げられます。学会の事例発表でのディスカッションが時間的な制約等で深まりを欠いたことから、その補完作業の意味も含めて企画された特集です。その深まりを欠いた不全感に対して、岡田さんは以下のようにコメントします。“大内さんは、(学会発表において)何かを持ち帰ることができただろうか」という胃もたれ+残尿感的な思いを広島まで持ち帰ったものですから、今回の企画はとてもうれしかったです”。このメタファーは、前菜でありメインではありませんが、実に巧妙です。岡田さんには、生理現象に訴えるメタファーは多いです。人間ですから、自分に引き寄せやすい。それも、広島という具体的な場所を引き合いに出し、距離と時間を、生理現象と対提示する。聞いた人は、「広島までは無理じゃけ、岡山あたりでもどすか、漏らすか」と思うでしょう(思わないか)。この事例に対するコメントや、大内さんや他の参加者を含んだ座談会のなかで、岡田さんが終始やろうとしていることは、児童養護施設の中に普通にある「哀しい過去・しんどい日常・楽観的になれない未来」から当事者や周囲にとって「好都合な現実」を紡ぎだそうとする作業だと思います。こうした意味の再構築には、臨床家としての若干の心意気と戦略を加味した上でのクライアントの語りへの重ね合わせが必要だと記述されています。私は、そのための戦略の大きな要素が岡田

さんの秀逸なメタファーにあると考えています。

さて、珠玉のメタファーの続きです。この座談会での事例理解のために岡田さんが投げた大きな仕掛けは、『絵』で例えることです。同じ語りであっても描き方で、絵は違ってくるというものです。しかし、ここまでなら想定内、誰でもが語りそうですね。この事例もそうですが、われわれが接する心理面接では、クライアントは(心理的に)重い絵を見せに来る、見せたがると岡田さんは言います。たしかに、悩みの相談ですから楽しい絵を見せる目的で来る人はいませんよね。で、一般論での心理面接で描かれる悲しい『絵』は、大内さんの事例になぞらえられると、「カシオペア座」という具象を与えられます。形容は「寒い冬の」です。事例の女兒と母親のヒストリーは、まさに「寒い冬のカシオペアを眺めるがごとき」でしょう。ここでセラピストが「先生にも見えるよ」と言ってしまうとストーリーは完成する。さらにセラピストとクライアントでカシオペア座の中にある未来の話を広げていくことで、絵を完璧なものとする、岡田さんは発言しています(例えば「一人で強く生きていこうね」的な方向性もその一つです)。私は、この辺りは、心理面接の常套でもあり、よくある運び方で、全く否定する必要はないと思います。しかし、この「カシオペア座制作」ばかりに留まって、もう味がしなくなったガムを噛み続けるような共同作業のなんと多いことか。岡田さんは、はっきりと「こういうのは(こういう運び)はイヤだから」と座談会の中で発言しています)。では、どうするのか?周りの小さくて目立たない星に注意を向けるようクライアントに働きか

けることだと言います。この小さくて目立たない星というのは、女兒の中で理想化された母親像ではなく、手紙とか面会とか一時帰宅を経る中での母親に対する別の形容です。それは、「あの人」、「ババア」、「お母さん」といった表現です。そして、母親以外の人、施設の先生に対して「たまにお母さん」という形容を指摘しています。相対化することができる言葉を巧みに岡田さんはマッピング（星を拾い上げる行為）していません。ここでの大事なところは、女兒本人から出た言葉であること、あるいは女兒のセラピストである大内さんが、女兒がそう言ったと認識している言葉でなければ意味がありません。岡田さんの語りを続けるならば、このマッピングから得られる星座は、定番のカシオペア座のW形の外側にある星々から生起してくると考えられます。母親を「母は永遠に母」としてWの中の星として位置付けるのではなく、Wの外にある星を拾い上げることで、母親に「完全でなくても母親」、「離れていて思い出だけでも母親」、「そして他人でも母親以上になれる」という新しい意味付けが生まれてきているのだと座談のなかで大内さんに伝えています。この一連のメタファーが、女兒のセラピストである大内さんの中に、落とし込まれるというところまでを持って、岡田さんの胃もたれ+残尿感からの解放ということになっています。たぶん、このメタファーは、その後の大内さんの女兒とのセラピーや、それ以外の女兒との関係の場において、有形無形に、意識無意識下に、影響を与えたことだろうと推測されます。

こうした「珠玉のメタファー」の処方、私に、かのミルトン・エリクソンの一連のメ

タファーを思い出させます（岡田さんの“やめろや”と恥ずかしがる声が聞こえそうですが）。というのも、エリクソンという人は、患者一人一人に合った理論や治療法を探し続けた人だとよく評伝なんかには書かれています（※2）岡田さんも自分の治療スタイルを、「料理人」や「服の仕立て屋」になぞらえることは前回の5話で取り上げました。今回のこの「カシオペア座」に繋がるメタファーは、単なる例えや言葉の言い換えではなく、「母と子のヒストリー」の組み換えを孕んだ大きな枠組みのもので、同時にそれを眺める治療・支援する側の人たち（我々）の眺め方の枠組み換えにも挑戦しているようにも思います。夜空という大きなキャンパスに、予定調和の「カシオペア座」だけを見るべくして見るのではなく、星（差異）のマッピングによっては、もっと自由にもっと多様に、脱「カシオペア座」が可能なることを我々に教えようとしてくれているようにも思えるのです。このような脱「カシオペア座」のメタファーは、もとはと言えば、学会で岡田さんがコメンテーター役をしたことに端を発し、「そだちと臨床」という雑誌の座談会企画の場を借りて、広げられたものです。そういう意味では、最初は大内さんに向けて、同時に座談会参加者に、さらに関係者（私はこのフェーズの人でしょう）、さらには雑誌の読者諸氏にまで伝わっていったと思っています。岡田さんには一切そうした意図はないとは思いますが、私自身がそう感じているという事実は確固としています。「カシオペア座」しか見えなかったものが、別の星座が浮かび上がってくる、そんな臨場感を追体験させてもらった感じがします。それは、私の読み取り方の例

を挙げるまでもないでしょう。迷いながらも、少しでもマシな心理面接をしたいと願うセラピストにとって、いつもの「カシオペア座」とは違う星座を探す助けに繋がる事例の読み取りであると思います。岡田さんのメタファーには常にそうした輝きがあるように感じます。不思議なことにミルトン・エリクソンで連想するのは、また違った意味合いですが、岡田さんの盟友、団士郎さんの中にも強く感じられるところです。このくだりは、長くなりますので、また別の先の機会に譲らせていただきます。

2. 岡田流メタファーに魅せられて

魅せられながら、何十年も心理士業を営んできましたが、たまにヒットは打つけど、強打者にはなれんなというのが、現時点の私です。前述の「珠玉のメタファー」の文章をまとめていると特にそういった感慨に至ってしまいます。ヒットはそうそう打てないけれど、今回、自分勝手な切り口でも解説できる機会が与えられたことはほんとうにうれしい限りです。岡田流メタファーの作り方は、ユーモア(お笑いとも言い換えられる)＋意外性＋美的センス＋語り＋実は知識＋失敗体験＋熱量。今思い起こせるのはこんな要因かと考えます。

今回、結局、前回からの続きで「岡田隆介によるメタファー生起過程に関する一考察」的な文章となってしまいました。岡田さんと会っていても、ほんと学術的な欠片もない、ここには載せられないような馬鹿話しかしてきてはいないので。しかし、その裏にある理系的な側面(なんといってもお医者さまなので)、普段は語られない面

接における理論的な背景(もっと語れや)、人となり、趣味などについて、次号回ししたいと思います。よって、今回は人間・岡田に激しく迫っていこうと考えております。乞うご期待!



※1

「私は、一人一人のために新しい理論と新しい治療法を開発します」

Milton H. Erickson (Lankton and Lankton, 1983:v)

『ミルトン・エリクソン その生涯と治療技法』(2003、金剛出版) ※2

けふばあちゃんからの手紙

—その3— ひろこちゃんへ

(じゃりんこ文庫 乾 京子)



残暑お見舞い申し上げます。

毎日毎日暑い日が続いていますね。お元気ですか？今日も忙しい毎日をお過ごしではないでしょうか？大学も医学部に編入。卒業後、緊急医療の現場で活躍中と聞きました。なるほどなあと、小さい頃のひろこちゃんを思い出しながら、けふばあちゃんは妙に納得しています。

ひろこちゃんが初めて文庫にやってきたのは、1996年初秋だったかな？幼稚園の年中さんの時でした。常連さんの春木さんに手を引かれてやってきました。ひろこちゃんは覚えていないかもしれませんね。ひろこちゃんは、ここに引っ越してきてから、そんなに経ってなくて、しかも、お母さんがちょっと難しいご病気で入退院を繰り返していらっしやる頃でした。

おかつぱの小さな女の子、だけど、いろんな敵から自分と妹を守らなきゃという責任感と訳の分からない不安からでしょう、触れると切れそうな小さなナイフで身を守っている…そんな印象のひろこちゃんでした。その頃のこと、けふばあちゃんは滋賀県子ども文庫連絡会の会報誌に書いていました。

「……………9か月程前から、Aちゃん姉妹が来るようになった。最初は同じ幼稚園に通うお友達のお母さんと一緒に来て、以来、おばあちゃんのお家に行っていた春休みを除いてほとんど毎回来ている。彼女たちのお母さんは、ちょっと難しいご病気で入退院を繰り返していらした。

Aちゃんは、文庫の看板がでるとすぐにやってきた。絵本もすらすらと読み、漢字も読める。頭の良い、しっかりしたおねえちゃん。でも、どこかしら鋭いナイフのようなところがあって、危なっかしくて目が離せない、トラブルも多い。出足の遅い他の子に比べて一番に来ては、私との二人だけの時間を楽しむようになった。絵本を読む

私に体重を預けてもたれかかってくるのを感じて、時には膝に抱えて絵本を読んでみたりした。

そのうち次々と、他の子どもたちが来たり、他のお母さんたちと私が話し出したりすると、イライラと話の中に割って入ってきたりする。保育園から妹が帰ってくると、たちまち、ちいママに変身して、指しゃぶりする妹を膝に抱えてまるでお乳をあげるお母さんのようにかいがいしく世話を焼く。

ちいさな体で必死になって自分と妹のちいさな世界を守ろうとしている。時にはちいさな嘘(ファンタジー)と、他の子にとってはきつい言葉で。ひと月、ふた月、み月……。クリスマス、お正月……。クリスマスのためにすてきなサンタクロースを作ってくれたAちゃん。でも、みんなの前でご挨拶はできなかった。やっぱり、恥ずかしかったから。お正月を過ぎるころ、トランプ、双六、福笑い、かるた、肉弾、…遊びを通して友達の輪が広がっていた。いつしか彼女の存在が気にならなくなってきた。お天気がいいと公園に行ってさんざん遊んだ後、暗くなる頃にまたやって来て、『おばちゃん、エルマーもう一回借りるよ。折り紙の本、もつとないの？ 今度図書館から借りていてね。』と、あれこれ選んだり、注文をつけたり、そして、『ああ、重い！』と絵本袋を抱えて帰っていく。

おはなしおばちゃんのお話の時も以前の必死さがなくなって、お話を心から楽しんでいる。

『この頃、ずいぶん落ち着きましたねえ』と、おはなしおばちゃん。

『おかあさんもこの頃お元気そうだし、よかったですねえ』

子どもたちに対しても一人の人格者として、決して甘やかさず、見下さず対等に接するおはなしおばちゃん。お化けの話の好きな4年生。かいじゅうの好きな1年生。ノリノリの元気な女の子たち。さっさと本を選んで帰る6年生。よくしゃべるおばちゃん。にこにこおばちゃん。ネコの好きな子。嫌いな子。お話しよりモノづくりの好きな男の子。いろんな子がいて、いろんな大人がいて、いろんな人と人の間に、いろんなちいさな風が吹いて、そして、こどもたちは、おとなたちは、育っていく。』(1997. 6. 12文庫連だより)

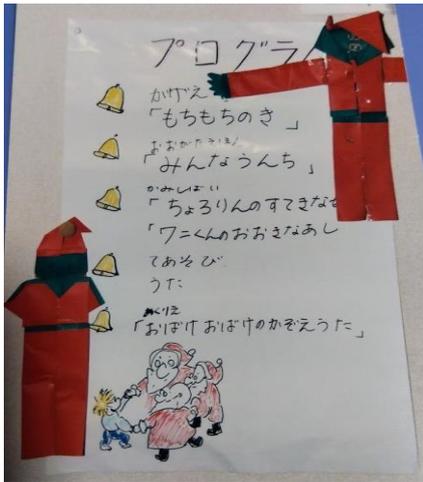
あの頃のままのひろこちゃんが目に浮かびます。こんなこともありました。バス通りから下りてくる階段で、けふばあちゃんは、階段を踏み外して肉離れを起こしたことがありました。ちょうどお家の前で遊んでいたひろこちゃんが走ってきて、「おばちゃん、だいじょうぶ？ 歩ける？ 私につかまって！」と、本当にそろそろ私の手を取って家まで送り届けてくれたこともありました。そして、またすぐ引返してきて、「おばちゃん、これっ」差し出してくれたのは、スマレとたんぽぽ。うれしかったなあ。足の痛さを忘れてしまうくらいうれしかった。



かがくあそびや男の子たちとビー玉パチンコゲームやビー玉万華鏡、なにかしら考えてモノづくりに集中する。そんな一面もありましたね。そんなひろこちゃんだったので、お医者様になった、それも緊急医療。なるほど、そうもありなと思ったのです。あれから30年近く経ちました。もう立派な大人のひろこちゃんなのに、けふばあちゃんにとっては、いつまでも幼い頃のあなたです。



← 「かがくあそび」で、牛乳パックカメラを作っているところ。



←クリスマスに作ってくれたサンタさん、
これを持ってオープニングの
ご挨拶をお願いしてみました、……
プログラムにちょうどよかったね。



みんな真剣に聞いているね。
何のお話だったかなあ？リビングがいっぱいで
次の次の年から、自治会館をお借りするようになった
ね。



出し物終わって、元気になられたお母さんも一緒
にお茶会。これもたのしかったね。

みんなどうしているかなあ？
昔がなつかしいって、けふばあちゃんもおばあさん
になったってことかな？そういえば、あの頃は、「いぬい
さんのおばちゃん」とか「えほんのおばちゃん」だったね。

長くなりました。お元気でね。またね。

編集後記

編集長(ダン シロウ)

連載執筆者の何人もの方から、「三ヶ月に一度くらいならと思っていましたが、あっという間に締め切りが来ますネ」の声が届く。編集人の立場から言うと、締め切りが済んだら直ぐ、次号の準備にかかるのは週刊誌も月刊誌も季刊誌も、基本的には同じだと思うので、そうしていただけたらと思う。仕事は一つ片付けたら、次の仕事が現れるだけなのだから。

Web マガジンを長々と発行し続けているが、15年前の創刊当時と今では、世の中はずいぶん変化している。出版業界周辺でも、この間に休刊になった雑誌、閉店になった書店は驚くほど多い。

どんどん変化する(廃れる)モノと、変わらずあり続けるモノ、この両者で世界は成り立っている。そしてあり続けるモノは変化しないのではなく、持続するための「仕組みと変化」が上手に組み込まれている。それが発行継続の知恵である。

そこを見つけたす力、理解する能力がないと、何事も結果は成り行き、運でしかないことになる。絶対に継続が正しいなどとも言えないが、次々泡のように消えるモノが良いとは言えない。マガジンの読者にも、たまにはそのあたりのことに思いを巡らしてもらえればと願う。

編集員(チバ アキオ)

対人援助学会京都大会では、梁陽日さん、大谷多加志さん、坂口伊都さんと一緒に大会事務局として、準備を進めています。いつも皆さんには感謝です。月に1回のオンライン会議を春から始め、他にもメッセージツールで連絡を取りながら進めています。最初はライングループを使っていたのですがラインで時々ある謎症状、これまでのやり取りが消えるということが起こりました。これは焦りました。ということで過去の履歴が消えたことがないメッセージャーにチェンジ。前回の広島大会事務局の時もこちらを使っていて、いまでも振り返ってみることができるので助かっています。

この58号の編集会議の前には、ポスターセッションと団士郎先生の漫画展の掲示について、予約している教室を大谷さんと下見。大谷さんはメジャーをさりげなく持参。「木陰の物語」は最大10作品ぐらい展示できそうと目途も立ちました。1日目終わった後の情報交流会の会場も下見。京都ならではのおいしい秋の食材を使ったメニューも当日は用意して、皆さんを迎えられるよう、打ち合わせ済み。その「ごはん日和」さん(京都のお弁当とお惣菜 ごはん日和(gohanbiyori.com))は体に優しい、季節に合わせた旬の食材を使っておられます。私もいつもおいしくいただいています。ということで、参加人数に合わせて、会場をどう使うかも思案。

会場の京都光華女子大学は、京都駅から地下鉄で「四条駅」にいき、阪急京都線に乗り換え、「烏丸駅」から「西京極駅」で来ることができます。阪急電車は阪神タイガースも系列ですし、阪急ブランドは関西私鉄の中でもとても評価が高い電鉄です。車体の阪急マルーンと呼ばれる独自の配色、緑のモケット生地の椅子、木目調の車内は一目で阪急とわかる特徴です。また、京都市バスで京都駅から乗り換えなく来ることができます。大阪国際空港(伊丹空港)からも大阪モノレール「大阪空港駅」から「南茨木駅」、そこからは阪急電車京都線で京都光華女子大学最寄りの「西京極駅」まで来ることができます。お会いできることを楽しみにしています。

夏休みに編集長の「家族理解ワークショップ」に行きました。会場は東京の戸越。知っているのは「戸越銀座」という言葉のみ。行くなら、ひとり街ブラ。戸越銀座も歩いて、魅力があるのも納得。カフェでも仕事。カフェの客層も地元京都とは違って、こぼれ聞こえる話も、話し方も新鮮。歩いて暑すぎるので銭湯を検索すると営業しているところ発見。電気風呂が腰痛にきくので、京都で銭湯巡りは時々していて、こないだは姫路でも。銭湯は下町にあることも多くて、暮らしぶりも感じられてリフレッシュ。

やっていることはいつもと同じでも場を変えたり、背景が変わったりするだけでも気分は違うし、何かしら新たに感じることも多い。皆さんも、京都大会にきて、いつもと違う特別な時間を過ごし、新たな発見を楽しんでくださいね。

編集員(オオタニ タカシ)

8月に久しぶりに仕事以外で東京に出かけました。息子の夏休み中の予定に付き添いで行った形だったのですが、日中は別行動の時間もあったので、本当に珍しく東京でフリーに使える時間があるという機会になりました。国立美術館や岡本太郎記念館などを巡りましたが、美術館やさまざまな展示会の企画の数が関西とは圧倒的に違うことや、街中を歩いても若者の姿がとても多いことに気づきました。京都市内では、日中に街中を歩くと高齢者の方が圧倒的多数で、現役世代の40代がウロウロしていると何となく目立つ気さえしていたのですが、東京では逆に高齢者の姿をあまり見かけません。おそらく東京の姿はこの10年でそんなに様変わりはしていないのでしょうが、その時々で自分が受け取れる情報や得られる気づきが違います。タイミングによって人が受け取れるものが違うのは当然だと考えると、様々な現場の今や知見がマガジンという形でアーカイブされることの意義が改めて感じられます。

2年位前に、大阪府私立幼稚園連盟のお仕事で、子どもの発達についてオンデマンドの研修動画を作らせてもらったのですが、昨年それが連盟の全国の組織でも使われることになり、巡り巡って、マガジン執筆者である鶴谷さんがおられる原町幼稚園の先生方に見て頂く機会があったとお聞きしました。巡り合わせの面白さを感じるとともに、自分の仕事をいつ、だれがどんな形で見ることになるかわからないから、やっぱり気の抜けた仕事はできないと思わされる出来事でした。

対人援助学マガジン

通巻58号

第15巻 第2号

2024年09月15日発行

<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第59号は2024年12月15日

発刊の予定です。

原稿締切2024年11月25日！

執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。**執筆資格は学会員であること。**現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

40年以上も前のことだ。「公園の生き字引」と題したB全版パネル作品を「ぼむ」展のために描いた。有吉佐和子著『恍惚の人』がベストセラーになった後だった。

年寄りが知恵袋と言われていた時代はスマホにとって代われ、物知りだと自認していた高齢者も物忘れのポンコツと化した。だが手作業のような生活技術の実感や SNS にはなかなか伝わらないから、健在なものも少なくない気がする。

高齢者通所施設利用者ですっかりぼけている理容師をしていた女性がいた。しかし昔取った杵柄、ハサミを持って利用者の散髪をしてあげる機会にはスッと立ち姿まで違うのだと聞いたことがある。

三十代の後半頃に自分が老人になることなど想像もせずに描いたこのコマ漫画を、77歳になって今、あらためて見る。

それは通りすがりに目にする風景を描いていた所から、描かれている一人としてベンチに座ったの側から視線への転換のような心地のするモノだった。

2024/9/15

〔PBLの風と土 第30回〕

学びと成長につながる活動のピーク設定

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授・立命館大学サービスラーニングセンター長）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でのPBL（Problem-Based Learning）の導入で知られており、現地から本連載を始めました。

連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにAAU以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、5年目からは米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題し、8年目となる2024年度は再び筆者の教育実践を紹介中です。

1. 受け身としての消費者主義の回避へ

「高校と大学の一番大きな違いは、時間割を組むことだった。」これは筆者の博士論文を指導いただいた恩師、渥美公秀先生の言葉である。正確にいつの発言かを記録していないものの、コロナ禍が一定の収束を見せる中で、新潟県小千谷市の塩谷集落でのアクションリサーチに同行した際、レンタカーの車内で伺ったことは明瞭な記憶にある。背景にあるのは「シラバス」によって授業内容を示すことで、学生には授業の内容が伝わるのか、という点である。

渥美先生は2022年度と2023年度に大阪大学大学院人間科学研究科の研究科長を務めたこともあり、その2年間は筆者が「共生行動論特講」という授業を非常勤講師として担わせていただく機会を得た。この授業は公認心理師の資格取得に関わる科目として、「家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践」という長い副題が付いていた。加えて、渥美先生が2年間の研究科長を終えた後には再び担当に戻れることが前提であったため、渥美先生が担ってきた時代、筆者が担当していた時代、再び渥美先生が担当する時代、それぞれに内容に差が出ないよう、少なくとも筆者が担当する2年間は、従前のシラバスで授業内容を組み立て、しかし運営については筆者の知識や経験をもとに展開することにした。ちなみにこの授業はクォーター制での授業で、8週間の出講のうち7回を2コマ連続で行い、2コマ目は受講生どうしの対話で1コマ目の内容を深めるとい



写真1：雪深い小千谷市塩谷集落への道中の風景
（筆者撮影、2023年3月3日）

う形式だったこともあり、15回の授業を15週間で展開するセメスター制に筆者には新たな経験を得る機会となった。

そうして、大阪大学と立命館大学の学生気質や、昨今の大学生の文化などについて意見交換をする中で出てきたのが、冒頭の「時間割を組む」という観点である。高校までは学校側によって編成された時間割が提供されるのに対し、大学では自らが学びの環境を設計していかなければならない。英語では同じstudentという単語ではあるものの、学校教育法第88条にも記されているように、大学で学ぶ者は生徒ではなく学生と呼ばれ、高校までの教師—生徒という関係からの解き放たれた上で、自立した学生として自らの学びの環境をデザインしていく必要がある。ただし、現在の学生らはどこまで自らの学びと成長に向けて「時間割を組む」ことができているか、同一科目を同一シラバスで担当した筆者らは共通の関心事として抱いた。

本連載では前回および第14回において、災害復興支援活動を組み込んだ授業「シチズンシップ・スタディーズI」（旧科目名称「地域活性化ボランティア」）の取り組みを紹介した。教室での学習と教室以外の現場での活動を組み込んだサービスラーニング科目ということもあって、シラバスを見ただけでは授業の本質を理解するのは困難であることに加えて、そもそも時間割に設定されている時間内だけでは学習が完結しないものである。そこで前回の予告のとおり、災害復興という非日常の現場ではなく、地域の日常生活の現場での活動を組み込んだ取り組みから、京都の三大祭の一つである「時代祭」を事例に取り上げる。結論を先取りすれば、時代祭でのサービス・ラーニングは、かつてデイヴィット・リースマンが警鐘を鳴らした「学生消費者主義」¹⁾に対し、むしろ学習者が中心の学びのコミュニティの形成を通じた学びと成長の環境づくりへの挑戦として、立命館大学としての現代的な回答の一つである。

2. 京都の大学ならではの地域参加を

立命館大学サービスラーニングセンターが時代祭をテーマとした正課科目を開設したのは2006年度である。きっかけは2005年度に文部科学省による現代的教育ニーズ取組支援プログラム（いわゆる現代GP）に立命館大学が応募した「地域活性化ボランティア教育の進化と発展」の採択であった。採択された内容と一連の取組の概要は桜井（2007）や桜井・津止（2009）にまとめられている。簡潔に整理すれば、私立総合大学として全学機関として設置

したボランティアセンターにより、正課科目と課外活動の有機的な関連づけのもと、入門から応用に向けたプログラム展開と講義・演習・フィールドスタディを体系的に配置した教育プログラムを展開するというものである。

時代祭をテーマとした正課科目は「地域活性化ボランティア教育の進化と発展」の核として、「地域活性化ボランティア」という名称の授業として開講されることになった。その特徴は山口ら（2015）でも整理したように、1回生から受講可能な科目な活動型の科目であり、演習系の授業という位置づけのもと、42時間の現場での活動が成績評価の上での必須要件としたことが挙げられる。そして1回生から受講可能な講義型の授業「地域参加活動入門」の履修も促すことで、講義型の座学で基礎知識を習得しつつ、活動型での体験学習を通じて地域社会の一員としての市民性の向上が期待された。開講初年度の2006年度は、平安講社第八社を受入団体とした時代祭応援プロジェクトの他、里山保全と農山村からの情報発信（里山ねっと・あやべ/綾部市）、笹葺き古民家再生（美しいふるさとを創る会/宮津市）、百人一首のふるさと小倉山復活（NPO法人教育文化芸術振興協会/京都市）、「こどものまち」サポート（チャキッズタウン）（京都市下京青少年活動センター/京都市）、障害のある子ども達の放課後活動支援（京都市西京区川岡小学校/京都市）の5つのプロジェクトが設定された。

そもそも時代祭とは何かについて簡潔に説明しておこう。時代祭とは、5月の葵祭（上賀茂神社）と7月の祇園祭（八坂神社）に並ぶ京都の三大祭の一つであり、平安神宮の例大祭として開催されているものである。そもそも平安神宮は、明治政府の成立による首都機能の東京への移転（いわゆる東京奠都）による京都の衰退が叫ばれる中、1895年（明治28年）に平安遷都1100年を記念して京都で開催された内国勸業博覧会の際、平安京遷都当時の大内裏の一部を復元する計画のもと、平安遷都を行った天皇である第50代桓武天皇を祀る神社として創建され、その後1940年（昭和15年）には平安京で崩御した最後の天皇である第121代孝明天皇孝明天皇が祭神に加えられたという歴史がある。

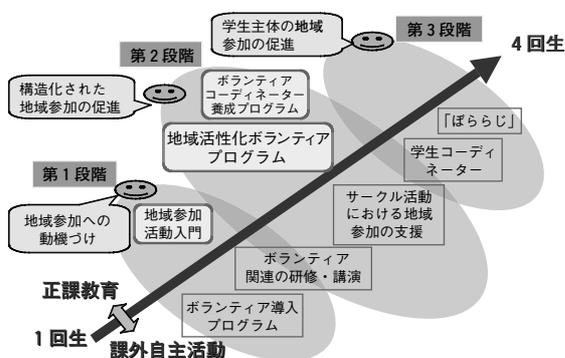


図1：地域活性化ボランティア教育の深化と発展」の体系（桜井, 2007, p.29）

このような歴史的背景を持つ神社を維持・管理する組織として京都の市民によって設立されたのが「平安講社」であり、この市民組織の設立記念事業として始められたのが時代祭である。

平安神宮内に置かれた平安講社本部が編集・発行、時代祭当日に販売されるパンフレット（平安講社本部，2014）には、時代祭の要点が平明に解説されている。少し長くなるが、引用して紹介したい。

時代祭は、平安神宮の創建を奉祝して京都市民あげて始められた祭で、毎年京都の誕生日にあたる平安遷都の日、10月22日に行われている。この時代祭は、当初から、京都が日本の首都として千有余年にわたって培ってきた伝統工芸技術の粋を動く歴史風俗絵巻として内外に披露することを主眼としている。この

ため各時代行列に使用する衣裳や祭具の一つ一つが、厳密な時代考証をもとに作製された本物であるところにその特徴がある。

（平安講社本部，2014，p.1）

このように、時代祭は10月22日という京都の誕生日に、市民組織である平安講社によって「動く歴史風俗絵巻」として、平安京が置かれていた1200年の歴史と文化を「時代行列」を通じて理解すると共に、今後また平安な暮らしを送ることができることを祈念する機会である。そして約2,000名・約2キロにわたる「時代行列」は、明治維新時代から平安京の造営された延暦時代へと遡る構成となっており、立命館大学は隊列先頭の維新勤王隊列（担当：平安講社第八社）運営を約半年かけてサポートする役目をいただいている（写真2参照）。



写真2-1：平安神宮オリエンテーション
(2018年5月20日)



写真2-2：衣装の虫干し [通常は8月]
(2020年10月11日、コロナ禍で祭礼中止)



写真2-3：入隊式準備・参列（神事）
(2013年9月20日)



写真2-4：隊列行進練習・受付補助
(2019年9月20日)



写真2-5：衣装渡し
(2023年10月14日)



写真2-6：宣状式参列（神事）
(2022年10月15日)



写真2-7：集合場所の設営・進行路案内
(2016年10月22日)



写真2-8：時代祭・参列
(2019年10月26日)



写真2-9：衣装戻し
(2022年10月30日)

写真2：時代祭応援プロジェクトにおける時代祭の祭礼終了までの流れ（全て筆者撮影）

3. 立命館大学と平安講社第八社との縁

こうして約半年かけて地域に関わる時代祭が、地域活性化をテーマとした地域参加活動を組み込んだ授業に適するものであることは、ボランティアやアクティブ・ラーニングについての素養のある方にとっては想像に難くないだろう。実際、京都の大学で学ぶ学生にとっては、現在の地域社会の有り様に触れるだけでなく、京都というまちの歴史的・文化的な魅力に触れることができる恰好の機会である。もちろん、相手がある以上、大学側の事情や希望を前面に出すだけでは、こうした一定の期間にわたり活動の現場で学生らを受け入れていただく教育プログラムは成立しない。送り出す／受け入れるという二者関係のもと、双方に短期的・功利的な観点が際立れば、すなわちメリット・デメリットという互いの価値基準で相対的な判断が行われれば、本連載第23回・第24回などで取り上げてきたパートナーシップの構築のもとでの新たな価値の創造は困難となる。

2006年、立命館大学ボランティアセンターがサービスラーニング科目の開始初年度に時代祭を活動先に取り上げるにあたっては、当時の専門職員（足立陽子さん）が平安神宮に打診したことから始まっている。図2に示したように、2006年10月6日の京都新聞に掲載された記事「ボランティアがやってきた」に、一連の経過がまとめられている²⁾。そもそも、時代祭は葵祭や祇園祭に比べれば歴史が浅いと言われるものに、学区1200年の歴史を遡る祭礼であることに加え、土日や祝日などの曜日ではなく10月22日（雨天の場合は翌23日に順延）に日付が固定されて催行されることもあって、各時代行列を担当する全11社の平安講社と各種団体等（京都青年会議所、京都市地域女性連合会、大原観光保勝会、桂・桂東婦人会、京都花街組合連合、京都料理組合、白川女風俗保存会、その他有志の方々）に重責がかかっている。前掲の京都新聞の記事では、平安講社本部の事務を取り扱う平安神宮の神職（赤木尊文禰宜）の言葉として「当日限定のアルバイトは既に珍しくない」ことと「長期にわたって学生が地域に入り込み、住民と一緒にになって行事に取り組むというケースは、時代祭百年余の歴史を通じ、かつ



図2：時代祭「ボランティアがやってきた」
(2006年10月6日の京都新聞掲載分の転載記事)

てなかった」こと、その上で「鼓笛の練習など長い準備をする八社だったら対応できないか」との判断がなされたことが記されている。

平安神宮を通じて受入可能性が示された後、平安講社第八社において立命館大学側との受入窓口として担当いただいたのが太田興さんであり、現在まで引き続き受け入れ担当者となっていて。太田さんご自身が立命館大学の卒業生ということもあり、第八社内の役員等からの期待と信頼のもと、第八社に「立命班」という枠組みが設けられ、太田さんがその担当として学生らの指導に就く、という構図が取られている。ちなみに筆者は2013年度から現在まで（ただし、学外研究期間中の2017年度を除く）の担当のため、既に150人ほどがお世話になってきた中、全ての受講生との関係構築を図ってきたのは、実質的に太田さんのみ、とい

う状況である。現在は平安講社第八社の総務担当の理事として平安神宮との調整役でもあり、例えば「維新勤王隊の鼓笛隊の中には女性がいなかった」という当時の世情を重視しなければならない件には、女子学生が時代祭全体の隊列の中で役割が得られるように差配（具体的には白装束で隊列内での案内旗を掲げて練り歩く役割）をいただいている。

太田さんによる丁寧で誠実な対応のもと、時代祭に、また地域での活動に惹かれた受講生は「立命班」の立場を越えて、授業期間終了後にも継続的に太田さんのもとに足を運ぶようになる。それもあって、時代祭では、受講後に有志の学生が時代祭応援プロジェクトの「サポーター」となり、スーパーバイザーである太田さんと現役学生とのあいだのつなぎ役となっている。図3に示した京都市の中京区役所のウェブサイト上で2022年1月28日に公開となった太田さんに関する記事も、サポーターとなった学生らが3人で取材し、執筆したものである。そこにはご近所の方からのお誘いで時代祭の役員になって20年になること、阪神・淡路大震災の際に兵庫県西宮市で被災されたこと、災害時に何もできないと悔しさを抱かないように京都での防災活動に取り組んでいること、これらが要領

よくまとめられているが、一連の物語は太田さんの語りだけでなくサポーターたち自身が受講生の時代に実際の現場で共に活動しながら浸ってきたものでもある。

4. 過活動がもたらす現場からの反動

この時代祭応援プロジェクトは立命館大学におけるサービスラーニング科目の開講初年度である2006年に始まり、2014年度に1年の休止期間を挟んだものの、2024年度まで継続的に実施されている。2014年度に休止となったのは、学生らの関わりが平安講社の第八社において本来の市民組織という根本を揺るがせてしまうのではないかと、という懸念が浮上したためである。そのため、2013年の時代祭の終了後、12月に行われた役員会の議論を経て、一旦、従来の形に戻すという「中止」ではなく「休止」の扱いとして、漫然と継続しないという方針が採られた。当時、太田さんは「活発な立命班の活動」に対する「反作用」として捉えられていたものの、大学側の担当者としては学生らの過活動による地域の不活性化をもたらししてしまったと内省し、その後の授業設計の在り方についての示唆を得ることとなった。

以前、本連載第4回において「立命館大学におけるサービス・ラーニングの展開パターンと型との対応」という図解（山口と河井，2016，p.49）を紹介した。この中で時代祭での学生らの動きは「拘泥的進行」と示したパターンに相当する。これは、本来到達すべき目標に対して、その目標に近づけようと学生らが果敢な努力を重ねる傾向を示したものである。もともとこの図解は、そうした努力が重ねられることが問題ではなく、地域社会の一員としての振る舞いが求められるはずが、学生らの自己完結した活動によって活動の成果（時には自己満足の水準にさえ達していない成果物）を地域に押しつけることになる可能性を危惧したものである。しかしながら、受入の「中止」に至った2013年度の状況は、平安講社第八社の一員としての「立命班」内の一体感や連帯感が高く、むしろ活動先が求める水準を超越した活動がなされたことにより、平安講社第八社の組織構造を不安定にさせてしまったという見方ができる。



図3：「区民ライターがゆく! 頑張る中京人・魅力再発見」より（2022年1月28日、中京区応援サイト「なかなか中京」）

時代祭応援プロジェクトは1年間の休止を経て、2015年度に再開されるにあたり、学習の一環として実践に携わるという趣旨が現場で貫かれるよう、自治の担い手が時代祭を担ってきた歴史的・文化的背景を関係当事者が今後も大事に扱われるように、と、時代祭以外の地域活動も織り込む形とした。時代祭では10月22日という時代行列の当日が活動のピークである。しかし、そのピークでサービスラーニング科目としての活動は終了ではなく、ましてや活動を通じて学習するというサービス・ラーニングという手法においては現場での活動が終了してから学びを深めていく必要がある。そのため、例えば消防団による夜回りの活動への参加、中京区役所による対話の場への参加、中京区民の交流機会である「ふれあいまつり」のお手伝いなど、学生の自主企画による自己完結型の活動の余地が減る方向への舵取りがなされているが、「時代祭応援プロジェクト」という名称で募集

した活動で、なぜ複数の地域活動に携わる必要があるのかの理解を促し、非日常の経験として時代行列の一員を担ったという高揚感から来る自主活動の企画・実施への発露をどう抑えるか、授業設計と運営を担う筆者の課題である。

2024年9月7日、2023年度に卒業した学生で、本連載では第15回・第17回そして前回の第29回にて取り上げた福島県楢葉町に、時代祭応援プロジェクトを2022年度に受講した学生が訪れたため、改めて地域で学ぶ授業を受講したことの意義について感想を尋ねたところ「授業を取らないと、時代祭について知ろうと思わなかった」と反ってきた。ちなみに彼女は楢葉町で活動する「[平和人権フィールドスタディ](#)」の受講生でもあり、その他、各種の課外活動にも取り組んでいる。そこで今回はあえて授業として地域社会でのボランティア活動を組み込む意義について、京都府立堂本印象美術館の事例から取り上げる。(gucci@fc.ritsume.ac.jp)

【引用文献】

- 上沼克徳. 2015. [学生消費者主義の論理と意義](#). 商経論叢 50(3・4), 35-55.
- 平安講社本部 (編). 2014. 時代祭: The Jidai Matsuri Festival. 平安講社本部
- 喜多村和之. 1996. [新版 学生消費者の時代: パークレイの丘から](#). 玉川大学出版部.
- 松下佳代. 2002. [学生消費者主義と大学授業研究: 学習活動の分析を通して](#). 京都大学高等教育研究 8, 19-38.
- Riesman, D. 1980. On Higher Education: The Academic Enterprise in an Era of Rising Student Consumerism, Jossey-Boss Inc. (喜多村和之ら(訳) 1986 高等教育論, 玉川大学出版部.)
- 桜井政成. 2007. [地域活性化ボランティア教育の深化と発展: サービス・ラーニングの全学的展開を目指して](#). 立命館大学高等教育研究 7, 21-40.
- 桜井政成・津止正敏(編). 2009. [ボランティア教育の新天地: サービスラーニングの原理と実践](#). ミネルヴァ書房.
- 山口洋典・河井亨・桑名恵・川中大輔. 2015. [地域参加を促す系統的な履修プログラムの体系化の方途](#). 立命館大学高等教育研究 15, 131-144.
- 山口洋典・河井亨.(2016) [サービス・ラーニングによる集団的な教育実践における学習評価と実践評価のあり方](#). 京都大学高等教育研究, 22, 43-54.

【注】

1 「学生消費者主義」は1970年代から1980年代にかけての大学受験易化から難化への流れの中で、教員集団による大学自治が受験生を取り巻く市場の影響を受け、学生が「お客様」として位置づけられる時代の到来を指摘したものである。リースマンの『高等教育論』(Riesman, 1980)の筆頭訳者である喜多村和之が複数の著書により、そうした影響を日本で紹介している(例えば、喜多村, 1990, 1996)。ただし、リースマンによる「学生消費者主義」は、学生に対する市場の影響を否定的・悲観的に扱うだけでなく、むしろ肯定的・積極的な意味で捉えようとする提案でもある。例えば、松下(2002)は「消費者としての利益を守りその力を賢明に活用することによって、真の大学教育を獲得できるようにする」ことが論点であり、「学生の力が教育水準の低下につながらないように大学教授団と学生の間に力のバランスをもたせる」ために「学生を単なる受動的な消費者から能動的な生産者に変えていくことが、これからの大学教育の課題となる」(p.20)とリースマンの主張を端的に整理している。その他、マーケティング論を専門とする研究者により、米国の消費者主義運動と市民的な権利意識との関連づけのもと、日本における学生消費者主義について授業評価制度を事例として取り上げた論考(上沼, 2015)もあるが、本稿ではこれ以上は立ち入らない。

2 この記事は長らく京都新聞の「観光・京都おもしろ宣言」の特集記事の1つとして一般に公開されていた。少なくとも2016年3月までは公開されていたことが確認できている。

講演会 & ライブ な日々 ④⑩

古川 秀明

『修学旅行』

中学の思い出

みなさん、中学の時の修学旅行の思い出って何がありますか？

私の思い出は、とにかく嬉しすぎて眠れなかったことです。

前日と旅行中の2日間の合計3日間、ほとんど寝ていません。

修学旅行は私の楽しみが、まるでおもちゃの缶詰みたいに詰まっていた。

行き先は、確か山口県に行った記憶があります。

「おいでませ～山口へ～」というキャッチコピーが大流行していました。

カルスト台地という、なんだか広い平原に白い岩だか石だかがボコボコとありました。

あと秋芳洞という洞窟にも行きました。

カラオケなどはなかったので、歌のしおりみたいなのを作って、それをバスの中で歌っていました。

内容は忘れましたが、バスガイドさんが面白い話をしてくれました。

お土産もたくさん買いました。

母にブローチを買ってあげたら、想像以上に喜んでくれたのを覚えています。

このように私の中学の時の修学旅行は「楽しい、嬉しい、眠れない」の3拍子揃ったおもちゃの缶詰でした。

なので、私の頭の中では「修学旅行」＝「楽しい」という図式が成立します。

ところが、スクールカウンセリングをしていると修学旅行に行きたくない中学生にたくさん会います。

特に不登校の生徒さんは修学旅行に行くのをためらいます。

(逆に学校には行かないけれど、修学旅行や校外学習などの行事には喜んで参加する生徒さんもいます)

しかし、教師はなんとかクラス全員で修学旅行に行きたいと思います。

親御さんも、中学の修学旅行は一生に一度しかないから是非行って欲しいと願います。

そんな教師や親御さんの多くは、修学旅行は楽しかった！という思い出をお持ちです。

だからきっとあなたも修学旅行に行けば楽しいはずよ！という仮説を立て、そ

れを押し付けます。

本当は行きたくない子どもは、教師や親に何度も説得され、自分のためではなく、教師や親を喜ばせる為に泣く泣く参加します。

時は流れ・・・

中学の時に、修学旅行に嫌々行かされ、良い思い出を持っていない子ども達が今、中学生の子を持つ親になっています。

その親の子ども達も、なぜか修学旅行に行きたくないと言ったりします。

そうなる親の決断は早く、早期に修学旅行の不参加を表明します。

自分がされて嫌だったことを、子どもにさせたくないという思いからだと思えます。

それはそれで子どもの心を守る愛情だと思えます。

しかしながら、行く前は嫌だったけれど、行ったら楽しかったという生徒さんがいることも事実です。

嫌がる子供を無理にでも行かせた方がいいのか、それともその子の気持ちを優先して行かせない方がいいのか。

先生も親御さんも難しい選択を迫られます・・・。

(続く)

シンガーソングライター
ふるかわひであき

対人援助学会京都大会『やりがい、生きがいのある対人援助を次代につなぐ』プレ企画
対人援助学会 研究会 第32回（通算56回）

精神医療現場における対話文化の取り組みから 対人援助の可能性を考える

日時：2024年9月27日(金)20～22時（オンライン）

講師：館澤謙蔵さん(精神保健福祉士・同志社大学嘱託講師)

講演内容

京都大会のプレ企画として、精神医療現場のワーカーとして精神障害当事者の回復や退院促進をはじめ地域移行など、安心できる社会生活の支援に携わってこられた館澤さんをお迎えしてご講演頂きます。

近年、精神医療現場では脱施設化を進め地域生活での支援への転換を図ることが進んだとはいえ、いまだに長期社会的入院者と高齢化した死亡退院者が生み出される構造が改善されない現状があり、閉ざされた病棟中での人権侵害も後を絶ちません。

国連の勧告においても、私たちの社会や精神科病院体制がもたらす組織風土の変革が求められるなど、対人援助分野の課題として医学モデルに基づくバタナリズムから脱却すること、優生思想から脱却して人権モデルへの転換が必要となっています。

今回の学習会ではその問題解決のヒントを学ぶ機会として、館澤さんが病院や地域において進めている当事者と支援者をつなぐ営みや、価値が異なる支援者同士の多職種連等との働きを通して、すべての人をエンパワメントに導く「未来語りのダイアログ」の実践についてお話しいたします。

本学習会では、館澤さんのお話する精神医療現場の支援や協働、さまざまな対話で得たものの内実を通して、私たち援助職のあり方や生きがいを考える機会としたいと思います。

申込方法

yangyangil21@hotmail.com までメールでお名前、ご所属、電話番号を添えて参加希望と申し込みください。Zoomの案内を送ります。

主催

対人援助学会研究委員会 対人援助学会研修・交流員会